

# 朝鮮三国時代における 横穴式石室墳の出現と展開

東 潮

---

はじめに	3 加耶における横穴式石室墳の出現と展開
1 高句麗における横穴式石室墳の出現と展開	4 新羅における横穴式石室墳の出現と展開
2 百済における横穴式石室墳の出現と展開	おわりに

---

## 論文要旨

高句麗・百済・新羅・加耶における横穴式石室墳の出現とその発展過程を時間的・地域的に通観するなかで、諸国間の政治的領域関係などの問題の一端を解明した。その基礎的作業として、朝鮮半島全域に分布する横穴式石室の型式学的編年をおこない、高句麗では平壤型石室、百済では宋山里型・陵山里型、新羅では忠孝里型石室を設定した。そして、これらの石室が石室構造・分布関係などの把握を通じて政治的性格をもっていることを明らかにした。

平壤型石室は、その構造・規模に規格性があり、その被葬者層に身分差・階層差を想定しえ、平壤型石室の分布地域は、高句麗の王畿と設定され、その階層は支配者層（王族・官人層）と推定した。また古墳の編年を通じて、墳丘構造・規模、葬地のあり方、諡などを加味したうえで、同一時期における石室墳を比較し、王陵の比定をおこなった。とくに長寿王を漢王墓、陽原王の陵を湖南里四神塚に比定した。

百済においても、宋山里型・陵山里型石室の構造的特質と分布状況は百済の政治的領域関係を示唆するとともに、支配制度である五部五方制にかかわることを論証した。

加耶における横穴式石室については、伝播・系統問題に焦点をあわせ、熊津・泗泚城時代の百済から受容したことを推察した。そして近年の発掘成果によって、洛東江流域での横穴式石室の初現は6世紀初頭で、同地域では加耶滅亡後の6世紀後半以降に横穴式石室の発達することを明らかにした。

新羅における横穴式石室の成立は、積石木槨墳という伝統的な墓制の終焉であり、その背景に新羅の国家体制の変容がみられた。6世紀中葉の真興王以後の新羅の支配領域内で、忠孝里型のような新羅的横穴式石室墳が発達することを示唆した。統一新羅時代の王陵の石室構造は、穹窿状天井式であったことを推定した。また新羅とのかかわりのなかで、小白山脈一帯や東海岸の横穴式石室についても概観した。

## はじめに

本稿の主題は、三国・加耶の横穴式石室墳の成立とその発展過程を追究するなかで、諸国間における諸関係、とくに政治的領域関係などを明らかにすることにある。そのための基礎的作業として、石室墳の型式学的編年をおこない、その変遷過程を追求する。

朝鮮三国時代の研究は、1916・1917年にかけておこなわれた古蹟調査を嚆矢とする。三国・加耶時代の考古学的研究においては、その境域が現在の中華人民共和国・朝鮮民主主義人民共和国・大韓民国にまたがるため、政治的な諸制約がみられた。高句麗の研究は中国・北朝鮮、新羅・百済・加耶の研究は韓国というように、フィールドワークが不可欠な考古学的研究において致命的であったといえる。本稿では朝鮮半島全域に分布する横穴式石室の型式学的分類をおこなうことを意図した。高句麗・百済・新羅・加耶の横穴式石室の変遷の意義をとらえ、帰納しえるいくつかの問題について論じてゆきたいとおもう<sup>(1)</sup>。

従来の横穴式石室墳およびその編年に関する主要な研究論文は次のとおりである。<sup>(2)</sup>

高句麗；金元龍1960，朱栄憲1961，鄭燦永1973，岡崎敬1964，田村晃一1982・1984，緒方泉1985，魏存成1987，李殿福1980，方起東1985，松井忠春1983，東1988 a・1988 b  
百済・加耶・新羅；軽部慈恩1933・1936，伊藤秋男1973，金元龍1974・1976，尹武炳1974，安承周1975，金基雄1976，姜仁求1977，有光教一1979，永島暉臣慎1979，尹武炳1980，小田富士雄1980，西谷正1980，岡内三眞1980，武末純一1980，安承周・全栄来1981，全栄来1974，柳沢一男1982，全栄来1985・1987，東1987，崔秉鉉1988，東・田中俊明1989，尹煥1989，曹永鉉1990，李栄文1990，林永珍1990，崔完奎1991，吉井秀夫1991，洪潛植1992

## 1 高句麗における横穴式石室墳の出現と展開

高句麗は、紀元前1世紀ごろ桓仁の地域（遼寧省）で建国したと伝える。その後集安（吉林省）の国内城に遷都し、427年には平壤に遷都する。したがって高句麗の墓制は、桓仁・集安・平壤の3地域を中心とする。高句麗初期の墓制である積石塚は、鴨緑江およびその支流の地域に分布している（図1）。

積石塚や石室墳については、朱栄憲1961，鄭燦永1973・李殿福1980・田村晃一1983などの論考で考察されているが、高句麗古墳に関する報告・論考がきわめて少なくしかも入手しえる文献も限られている。したがってまず、古墳群の実態や、分布状況を把握したい。さらに主として石室編年に関連することや立地条件、墳丘規模などについて略述する。各地における、あるいは各古墳群における石室墳の変遷をたどるなかで、三国・加耶の歴史的展開過程の一端をとらえたい。

## (1) 高句麗における横穴式石室墳とその地域性

高句麗の古墳群は、一定の地域に集中して分布する。鴨緑江流域と大同江流域に大別されるが、それらの流域や周辺をふくめ、小地域に細別しうる。古墳群が存在する地域は、そうした地域を権力基盤とした政治的集団の占有地・領域であったにちがいない。そうした仮定のもとで、古墳群の動態をみてゆく。

1 鴨緑江流域 古墳群は下記のような河川の流域に分布する。

(1)集安地域 (2)桓仁地域 (3)渭原地域 (4)楚山地域 (5)慈城地域

2 遼河流域

3 秃魯江流域

4 清川江流域

5 大同江流域

(1)大同江中流 (2)大同江下流(1)—大城山麓地域— (3)大同江下流(2)—中和地域—

(4)大同江下流(3)—大安地域— (5)大同江下流(4)—大同地域— (6)江西地域 (7)龍崗地域

(8)江東地域

6 載寧江流域

### 1 鴨緑江流域

(1) 集安地域 (李殿福1980, 林至徳・耿鉄華・傅佳欣・張雪岩・孫仁杰1984)

集安では、1958年に文物保護機構がつくられ、1962年以来、分布調査や発掘が実施され、1984年段階で1071基が発掘されている。以下では、李殿福1980『集安高句麗墓研究』や、林至徳・耿鉄華・傅佳欣・張雪岩・孫仁杰らの執筆になる『集安県文物志』など一連の研究や各報告によることにしたい。

集安一帯には、洞溝古墳群・長川古墳群・大高麗墓子溝古墳群・太平溝古墳群・高地古墳群・横路九隊古墳群・古馬嶺高麗溝古墳群・良民古墳群・上下活龍古墳群・潘家街古墳群・母背嶺古墳群が分布する(図1)。以下、横穴式石室を埋葬施設とする石室封土墳・積石塚を中心としてそれらの概要についてふれる。壁画墳については、東1988を参照されたい。

① 横路九隊古墳群・洞溝古墳群 (李殿福1980) (図版2・3)

李殿福1980によれば、集安洞溝には11300基以上の古墳が分布し、「土墳」は55%の6227基が存在するという。つまり方壇封土墳2基・方壇階梯土墳4基・土石混封石室墓2000基・封土石室墓4321基である。壁画墳については、ほぼ報告されているが、龐大な古墳・古墳群が未調査のまま残されている。

現在、洞溝古墳群には、7160基が現存するという。積石墓は1700基、方壇積石墓1200余基、方壇階梯積石墓400基、方壇階梯石室墓、封土石室墓からなる。壁画墳は封土石室墓で20基が確認されている(李殿福1980)。

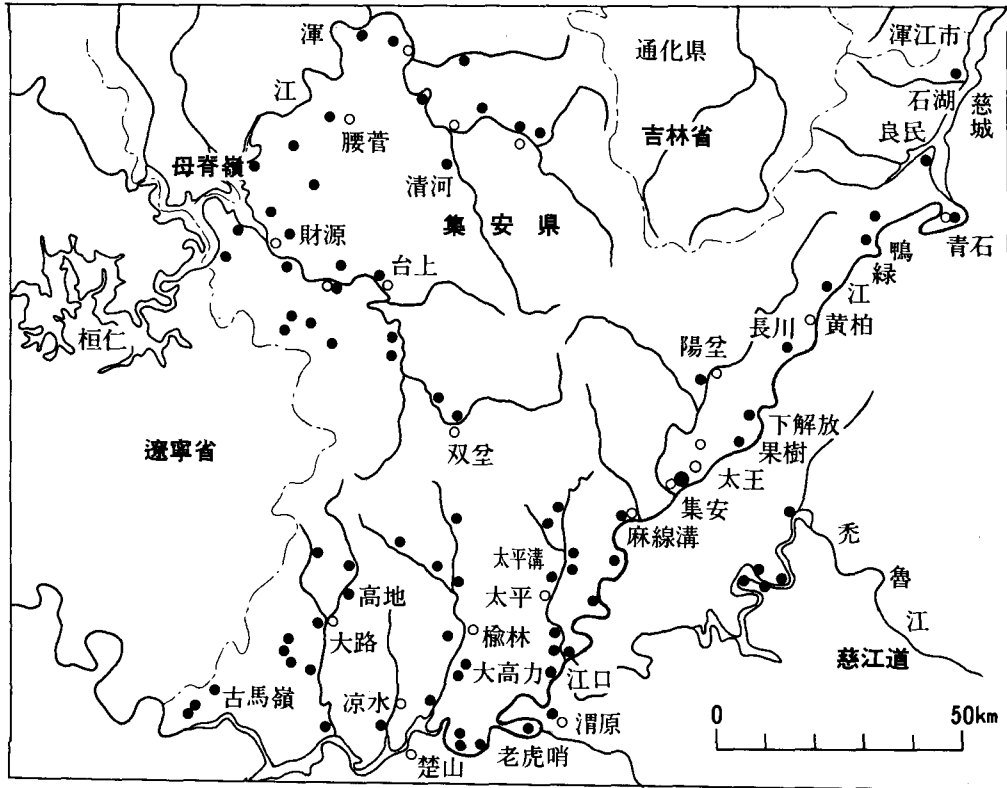


図1 古墳分布図(『集安県文物志』による)

1976年には集安一帯で188基の古墳が発掘された(図版2—15~25)。禹山墓区(56基)・山城下墓区(37基)・七星山墓区(26基)・麻線溝墓区(69基)と、集安周辺の広範な地域におよぶ。92基はすでに破壊消滅したもので、実際には96基の古墳が発掘された。単室墓は73基、同一墳丘内に単室墓が2基並列した「双室墓」が18基、「三室墓」が2基である。石室の構造は、玄室と羨道からなる単室墓が基本となっている。片袖式石室は、両袖式と無袖式のいわば中間形態で、無袖式石室の出現が、片袖式や両袖式に比べ、先行するととらえられている。また持送り式天井は平天井の出現時期と近接し、抹角藻井(三角持送り式天井)は後出するという。三角持送り式天井は片袖式・両袖式石室のいずれにもみられる。これらの古墳群の年代は、「兩晋」から「南北朝」時代の併行期に位置づけられている(柳・張1984)。出土遺物は概して少なく、20基の積石塚・封土墳で132点(鉄器127点)が出土したにすぎない。ただし5世紀中葉頃の帯金具(873号墳)、5世紀後半に比定される帯金具(山城下330号墳)のように高句麗文物の編年の指標になる遺物をふくむ(東1988)。両古墳の石室構造は不明である。麻線溝1445号墳では、鉄鎚(鍛冶具か)と環座金具が出土しており、6世紀代にくだるであろう。積石塚をのぞく石室墓の年代は、4~6世紀代に築造されたものである。これら各型式の石室の序列を推定すると、図版12のようになる。

禹山1897号墳は、1977年に発掘されたもので、通溝12号墳の北76mに所在する。「同墳異穴」

封土墳で、いずれも両袖式横穴式石室である。天井構造は、南室が平行持送り式天井、北室が三角・平行持送り天井である。黄釉陶器・灰陶罐・鍍金花形飾り金具などが出土している（張雪岩1988）。土器からみると、1897号墳の年代は5世紀中葉頃に編年される（東1987）。石室構造は通溝12号墳に類似しており、築造年代は、12号墳に後続する時期ととらえられよう。

山城下1368号墳は、集安の壁画墳のなかで、年代的にもっともさかのぼる。片袖式穹窿状天井構造の石室で、建物の壁画が描かれる。その築造年代は、4世紀前半頃に位置づけられる。

次に集安における大形積石塚の横穴式石室をみることにする（図2，図版3）。

將軍塚は、一辺の長さが約31m・高さ約13mの基壇積石塚である（図2—5）。玄室・羨道からなる両袖式横穴式石室で、玄室は長大な切石を7段に構築し、最上段を平行持送りする。石室主軸に平行して二つの棺台が配されている（池内宏・梅原末治1940）（図版3—14）。

將軍塚陪塚は、將軍塚の東北方に位置する。四壁を巨大な板石で構築する。將軍塚とは石室構造を異にするが、陪塚であることはうたがいがなく、同時期に構築されたのであろう。

禹山下41号墳は、天井が屋根形を呈する石室である。將軍塚陪塚と類似するが、時期的には後出する。出土遺物から、5世紀後半に位置づけられる（東1987）（図版3—13）。

西崗229号墳は、舞踊塚の北方360mの平坦な台地上にあり、谷を隔て將軍塚が立地する。1辺13m余・高さ3mの基壇積石塚で、玄室の四壁・羨門は切石積みである。注目すべきは、古墳の周囲に幅約4mの「川石敷の陵域」があり、背面に3基の陪塚らしい小古墳が存在するということである（藤田亮策1940）（図2—1）。

西崗110号墳は、「有龕塚」（関野貞1914）、「五塊墳龕持塚」（関野貞・谷井濟一・栗山俊一1915）とよばれる。南北15m・東西16m・高さ5.5m、5段ないしは6段の基壇積石塚である（図2—2）。四壁は偏平石灰岩を横積みし、穹窿状天井をなす。三角持送りの痕跡があり、石壁面に漆喰が塗られている。羨門の左右に龕が設けられている（藤田1958）。羨道の両側に龕をもつもので、玄室プランは長方形である。長形状の割石の長側を面として積み上げる。石室形態は、山城下332号墳と類似し、積石塚と封土墳における石室構造を比較する際の一つの接点となる。110号墳は、通溝12号墳（西崗5122号墳）の西側に位置する。

四阿天井塚は、両袖式の穹窿状天井構造の横穴式石室で、壁体には長方形に整形された割石が使用されている（関野・谷井・栗山1915A）（図版3—15）。

折天井塚は基底約21m、2段の階段式積石塚である。両袖式横穴式石室で、長大な割石を持ち送って構築するが、天井最上部で2枚の長大な板石を斜方向に架構し、天井石を覆った構造である（関野・谷井・栗山1915A）（図版3—16）。

太王陵は、一辺約200尺（約60m）、地盤から石室天井部まで約55尺（約17m）の巨大古墳である。7段以上の壇をもつ基壇積石塚で、両袖式の横穴式石室を内部施設とする（関野・谷井・栗山1915A）（図2—6）。壁体の石材は、切石状を呈するが、將軍塚よりは粗加工しているようである。將軍塚に先行する石室構造といえる。石堆中で瓦片・埴が出土している。埴には、「願大

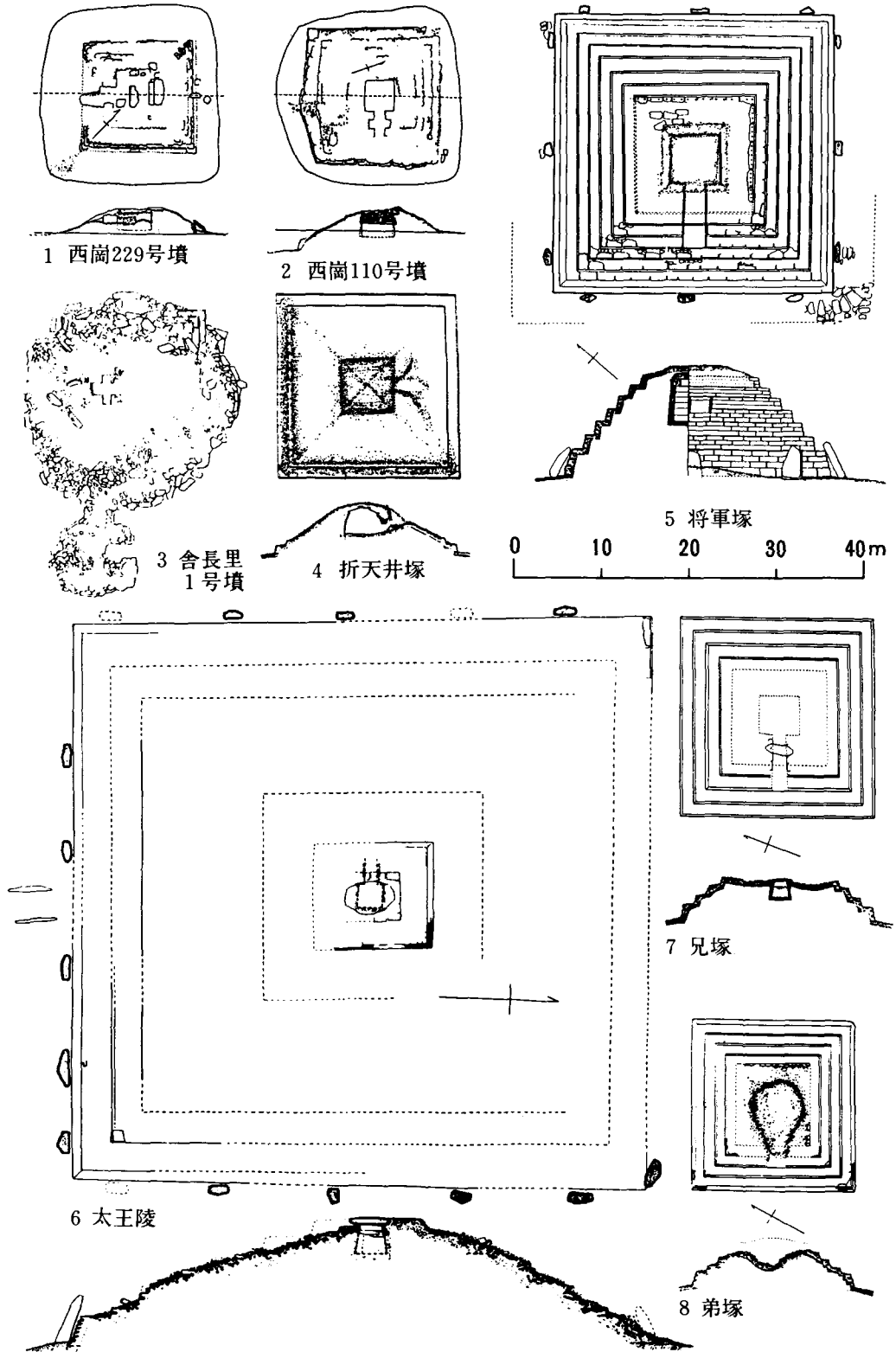


図2 高句麗古墳墳丘図1 (積石塚) の規模

王陵安如山固如岳」という銘文がみえる（図版3—17）。

臨江塚は、東西60m・南北65m・高さ40mと伝えている（藤田1940）。石堆中で多くの瓦片が採集されている。太王陵に匹敵する巨大積石塚で、王陵級の古墳といえよう。

溫和堡西大塚（西崗南大石陵）は、五塊墳の「西崗51号墳」の北北東80mに立地する。南北60m・東西37mの長方形を呈する。「本来は方三五米前後の石陵二基が間隔五米を以て並立して居た」と推定されている（藤田1940）。多量の瓦片が出土したという。

溫和堡中大塚（西崗北大石陵）は、一辺37～38mの積石塚である。古墳の東側に、それと15m隔てて、長さ32m・幅約10mにわたって細長く連なる陪塚群が立地する。

千秋塚は、麻線溝に所在する。崩壊しているが、一辺「二百余尺」（約60m）とされる（『図譜』2）。古墳の周囲は川原石を敷きつめた痕跡がみられたという。墳頂部で「千秋萬歳永固」・「保固乾坤相畢」の銘文磚が出土し、古墳名称の由来となっている。陪塚群の前面に赫色の高句麗瓦が散布していたという（藤田1940）。

麻線溝西大塚は、千秋塚の西北西の山麓にある巨大墳であると伝える（藤田1940）。

#### ② 長川古墳群（吉林文1982・陳相偉1983・博物館1988）

古墳群は、集安県の東北、鴨緑江の上流25kmに位置する。1983年の調査では、105基の古墳が確認されている。積石墓・方壇積石墓・方壇階梯積石墓・封土石室墓が分布し、長川1・2・4号墓の3基の壁画墳が発掘されている。2号墳で、高句麗古墳では稀な多量の遺物が出土している（図版4—4）。

#### ③ 榆林大高麗墓子溝古墳群（関野ほか1929、曹正榕・朱涵康1962）（図版3—6・7）

集安県の西南4kmの榆林河の左岸の台地上に立地する。「大高力墓子」とよばれた古墳群である。1917年と1962年に発掘がおこなわれ、「二室塚」・「無蓋塚」・「高塚」・「石槨露出塚」・「大塚」・「三室塚」の測量調査がなされた（関野ほか1929）。1962年の調査では113基の古墳が確認されている（曹・朱1962）。

大高力墓子二室塚では、長壁を共有して二室を並列築造されている。封石墓で、内部施設は、横穴式石室の段階にある。高塚・大塚・三室塚はいずれも階段状の基壇積石塚である。鴨緑江の下流、集安の南に位置する積石塚群で、単室並列の双室・三室墳であることから、5・6世紀の墳墓であろう。積石塚は、地域によって5世紀後半以降にも存続する。

1962年に吉林省博物館による分布調査によって、四道溝口に9基、向陽で19基、朱仙溝で9基、小高力墓子で20基、迎水（江口）で1基の古墳が確認され、大高力墓子古墳群では3基が発掘された（曹・朱1962）。

大高力墓子21号墳は積石塚で、長壁を共有して3室が接続する多室墓である。墓室の左右壁・間壁は3段積みの平天井で、奥壁に板石を使用している。31号墳も積石塚で、2室が接続して構築されている。その西石室は右片袖、東石室は左片袖式である。玄室の天井構造はいずれも三角持送り式である（図版3—7）。43号墳は、石室封土墳で、三角持送り式天井の小石室で、長さ・

幅・高さ約60cmの羨道がつくという(図版3-6)。以上の3基は、三角持送り式天井構造の特徴から、高句麗時代の中・晩期に推定されている。石室の年代を決定する遺物はみられない。

1983年の集安県による調査では、大高力墓子において保存良好な古墳は59基に減少している。積石墓16基、方壇積石墓4基、方壇階梯積石墓3基、方壇石室墓3基、封土洞室墓10基、封土洞室墓23基などである(『集安県文物志』)。分布調査は継続しておこなわれているようであるが、鴨緑江流域における開発、とくに開墾によって破壊される古墳は多いようである。

#### ④ 太平溝古墳群(『集安県文物志』)

集安県の西南27kmに位置する。1962年の調査によって、60余基、1983年の調査によって74基が確認されている。積石墓11基、方壇積石墓40基、方壇階梯積石墓4基、封土洞室墓19基が分布する。いずれも未発掘である。

#### ⑤ 高地古墳群(『集安県文物志』)

高地村(高麗墓子)は、集安県の西南75kmに位置する。高地村から約5kmに、集安から桓仁に至る道路が通る。1962年の調査では145基が存在したが、1983年にはわずかに21余基が確認されたにすぎなかったという。積石墓や方壇積石墓が大半で、封土洞室墓が分布する。周辺に古墳群が立地し、旧都の乙升骨城(桓仁五女山城)から新都の国内城(集安)に至る交通の要衝地にあることが指摘されている。

#### ⑥ 横路九隊古墳群(『集安県文物志』, 孫仁杰・遅勇1984)

県の西北85kmに所在する。1983年の集安県文物調査隊によって、121基が分布し、そのうち残存する古墳は67基であることが確認された。積石墓が絶対多数を占め、方壇積石墓が少量で、封土石室墓は1基である。大形の積石墓は16基で、特異な分布状況を呈しているようである。封土洞室墓である51号墳の墓室四壁は切石で積築されている。東壁の残長は140cm、羨道80cmであるという。墓群の年代は、高句麗早期・中期と推定されている。

#### ⑦ 古馬嶺高麗墓溝古墳群(『集安県文物志』)

集安県の西南90kmの高麗墓溝門に位置する。1962年の調査では、70余基の古墳の存在が確認されているが、その後の耕地開発などで破壊され、1983年当時では約50基に減少していたという。保存の良好なものは36基で、積石墓6基、方壇石室墓9基、方壇階梯積石墓7基・封土洞室墓13基からなる。

#### ⑧ 良民古墳群(李殿福1980)

県の東北45kmの青石鎮に所在する。古墳群は、積石墓・方壇石室墓155基・封土墓15基の170基からなる。1964年に雲峰ダム建設にともない、積石墓・方壇積石墓・階段積石墓・封土石室墓・封土洞室墓など30基の古墳が発掘されたという。良民168号墓(積石墓)・73号墓(方壇積石墓)・74号墓(方壇階梯積石墓)の墳丘実測図が報告されている(李殿福1980)。

#### ⑨ 上下活龍古墳群(『集安県文物志』, 孫仁杰1984)

通溝河口から約8km、鴨緑江をくだると麻線郷上活龍村に至る。さらに約8kmくだると下活



龍村である。1977年と1982年に発掘された。上活龍古墳群は積石墓3基、方壇積石墓5基、封土洞室墓6基の14基からなる。封土洞室墓は、片袖式（13・14号墓）と両袖式石室（4・6・8・9号墓）の2種に分類される。

⑩ 家街古墳群（『集安県文物志』）

県城の西北80kmの平原上に立地する。1965年に集安県博物館によって調査され、1983年に再調査がなされている。方壇積石墓4基・積石墓14基分布・封土洞室墓26基の44基が存在している。積石塚と封土墳がほぼ同数分布する。

⑪ 母背嶺古墳群（『集安県文物志』）

母背嶺は老嶺の支脈で、渾江左岸に延びる丘陵上に立地する。1962年の分布調査では50基の古墳が確認された。1983年の調査では方壇積石墓6基・封土洞室墓14基・その他18基が残存し、十数基が破壊されていたという。

⑫ 老虎哨古墳群（趙書勤1984）（図版3—8～11・13）

集安県城の西南約50kmに位置する。平安北道の渭原郡が対岸にあたる。17基の古墳群が確認されたが、5基は破壊されていた。12基は封土墳で、石室墳と洞室墓の2種に分けられる。石室は、比較的小規模である。双室墓（同墳異墓墳の多室墓）や連接する双室墓などが含まれる。銀環・鉄鏃・土器が出土している。平根鏃は高句麗特有のものであるが、年代幅がある。石室構造からみて、6世紀以降であろう。

(2) 桓仁地城（陳大為1960、朱榮憲1966）（図版3—1～5）

1956・1958年の調査によると鴨緑江の支流である渾江・富爾江流域に、24カ所、750基の墓葬が分布する。750基のなかで、封石墓が多数で、積石大墓が少数、封土墳は34基であるという。1958・59年には、桓仁県連江郷連江、高力墓子村において44基の墓葬が発掘された。封土墓10基、封石墓10基、小石墓3基、大形積石墓21基からなる。封土（洞室）墓は、扁平な石材を用いて積築し、天井を三角持送りする。構造的には封石墓と区別がなく、墳頂部に封土する点が異なる。単室墓・双室墓・三室墓がある。その典型は高力墓子村8号墓である。長方形の玄室に、両袖式の羨道がとりつく。封石（洞室）墓は、方形ないしは方形にちかい基壇積石塚である。横穴式石室で、四壁に板石を用い、扁平な石で天井を架構する。高力墓子村1号墓はその例で、両袖式横穴式石室で、平天井というべきものである。大形積石墓がほぼ半数を占める。他の種類の墓に比べて、洞室のない点が特徴である。高力墓子村11号墓は方形階段式積石墓である。15号墓は長方形の階段式積石墓である。いわば石槨積石塚である。これらの積石塚は、高句麗初期、おそらく3～4世紀代の築造と推定される。桓仁、撫順・本溪・安東・鳳城などの高句麗墓の形態が単一で、小規模であるのに対して、高力墓子村の古墳群は大規模で、構造も複雑であるという（陳1960）。渾江・富爾江流域の墳墓、とくに横穴式石室墳に関しては、渤海時代のものを含む可能性がある。なお1963年、朱榮憲らによって、中国東北地区における高句麗・渤海の都城・墓制・建築址などの遺跡踏査がなされたが、高麗墓子村には240基の積石塚と封土墳が分布していたと

いう。これらの封土墳の実態は不明である。

連江郷古墳群では、積石塚と封土墳が44基分布し、7基が発掘された。19号墳では鉄製帯金具・金銅製帯金具が出土している(朱栄憲1966)。金銅帯金具は、形態的にみて3～4世紀の魏晋のものと考えられる。高句麗初期に流入した文物である。集安152-159号墳などの帯金具に先行するもので、桓仁時代の資料として貴重である。古墳群の具体的な構造については未報告である。

桓仁地域の墓制において、石室封土墳の分布状況が明らかでなかったが、1992年になって新資料が発表された(辛占山1992「桓仁米倉溝高句麗“將軍墓”」遼寧省文物考古研究所)(図版12)。古墳群は、雅河郷米倉溝の北500mの小丘陵上に立地する。丘陵下には渾江が流れ、対岸は董船宮で、北9kmに桓仁鎮が所在するという。丘陵の頂部に高大な封土墳があり、「將軍墓」とよばれていたという。東西方向の丘陵の南辺に10余基の小形墳が分布する。米倉溝・將軍墓は、方形(周長さ150m)、高さ8mで、側(耳)室をもつ単室墓である。石室は大形の切石を用いて積築し、表面に漆喰を塗っている。玄室天井は4段の平行持送りで、1枚の天井石で覆う。南・北・東壁に各6カ所の釘穴、西壁上部の左右に2カ所の釘穴が穿たれている。東壁南面の2個目の釘穴に半裁した銅釘がのこり、幔幕をかけるための鉤と推定されている。玄室には2基の棺台が並置されている。玄室の四壁、天井、両側室、石門上に蓮華文と「王」字流雲文が全面に描かれている。盗掘を受けていたが、黄釉四耳壺・黄釉陶製竈・銅器・鍍金飾金具・鉄器片が出土している。出土遺物や石室の型式(東1988)からみて、4世紀末から5世紀初めに位置づけられる。

桓仁において、米倉溝古墳のように国内城遷都後の石室墳が初めて発掘されたが、集安の將軍塚と同時代の築造と推定される。しかも蓮華文・王子文など壁画は集安の長川2号墳・龕神塚などに関連する。国内城の時代にあつて、桓仁地域に有力な政治勢力が存在したことはうたがいない。後述のように、卒本に造営されたと伝える「始祖廟」がはたして桓仁の地に存在するか否かの問題ものこされている。

### (3) 渭原地域

#### ① 舎長里古墳群(慈江道<旧平安北道>渭原郡密山面)(関野1920, 関野ほか1929)

渭原の北、鴨緑江に面する台地上に位置する。3基の積石塚が確認されている。1号墳は、7段に復原される長さ18.0・幅17.0・高さ3.4mの基壇積石塚で、長大な割石を用いて積築されている(図2-3)。石室は羨道・副室(耳室)・玄室の一部のみが確認された(図版3-18)。山城下332・983号墳の石室と類似する。2号墳は1号墳の北約17mに隣接する。東西7.7m・南北6.7mの方台形積石塚である。3号墳は、1号墳の東方約145mに立地する封土墳である。5.5×7.3mの扁平な天井石が露出する。

#### ② 新川洞古墳群(慈江道<旧平安北道>渭原郡西秦面)(関野ほか1929)

37基の古墳が分布する。調査された3・6号墳はいずれも基壇積石塚である。

### (4) 楚山地域

#### ① 雲海川洞古墳群(関野ほか1929)

鴨緑江の南岸の河岸段丘上に、百数十基の古墳が立地する。積石塚・石室封土墳が混在する。

## ② 雲坪里古墳群 (図鑑 4)

鴨緑江左岸、南北2000m、東西350mの平野に200基以上の高句麗古墳が分布する。大半が積石塚であるが、石室墳も存在する。石室墳は、古墳群の北方の2・3地区とよばれるところに20余基が分布する。発掘された石室墳は5・10号墳の2基である。5号墳は方形の墳丘の中央に接続して2室がつくられている。左片袖式・右片袖式の割石積みで、天井石までの高さは約1mの小形石室である。10号墳は方形墳と推定され、中央に2室が接続する。各壁とも長大な1枚石を用いて構築する。第2室で金製の耳環が出土している。この10号墳については、石室構造からみて、渤海時代の可能性もあろう。

## (5) 慈城地域

鴨緑江の上流、集安から数10kmの鴨緑江および支流の慈城江流域に分布する古墳群である。1959年に雲峰水力発電所建設にともない、貯水池内の遺跡の発掘調査がなされた(考資3)。

### ① 照牙里古墳群

鴨緑江の東岸の小平野(幅約500m)に積石塚が2～4基ずつ群在し、約18基が確認されている。1号墳の1基(積石塚)の報告がなされている。石室封土墳は未確認である。

### ② 西海里古墳群

鴨緑江の河岸段丘上に積石塚群が2群にわかれて分布する。第1群は江に沿って立地し、約15基が分布する。いずれも河原石で覆った積石塚であるという。第2群は山側に立地する。山石を用いた積石塚である。2群の1号墳では金銅透彫金具・步揺付飾金具・轡などが出土している。

### ③ 法洞里古墳群

鴨緑江の左(東)岸に流れ込む慈城江の左岸に立地する。2群にわたって分布し、法洞里ハグビ古墳群と法洞里新風洞古墳群に分かれる。

ハグビ古墳群は、慈城江の河口から鴨緑江に沿って2km遡るとハグビ邑に至る。古墳群はその邑の川辺に立地する。封土石室墳3基が、1960年に発掘された。鴨緑江のもっとも上流域に位置する横穴式石室墳といえる。いずれも小形の割石積み、両袖式石室である。

新風洞古墳群は、法洞里所在地から慈城江に沿って2km上流に分布する。古墳群は2群からなり、第1群は10数基、第2群では15基が分布する。両群とも積石塚である。

### ④ 松岩里古墳群

慈城郡所在地から、慈城江を約10km遡ったところに位置する。いずれも積石塚群である。

## 2 遼河流域

本溪墓は、遼寧省本溪市の東約50kmに位置する(遼寧省博物館1984)。玄室・羨道部(両耳室)がT字形の石室(全長3.6m)である。玄室長2.5m、幅1.75m、高さ1.5m、羨道(耳室)部の高さ0.75mの規模である。石室構造は、遼陽地域の板石で構築した魏晋の多室墓の系統上にある。たとえば遼陽上王家村晋墓(李慶堃1959)の石室構造が簡略化し、板石積築が割石積化したもの

ととらえられる。ところが馬具・鉄鏃など高句麗系統の遺物と装身具・土器など在地的なものが共存している。時期は4世紀後葉に比定される(東1988)。4世紀後葉以後の高句麗勢力の西への領域拡大の背景のもとで存在した墓制といえる。報告者の藩白文は、晋墓と推定するが、高句麗墓である可能性も考えている。

撫順市東方の渾河北岸の前屯と注渾木に高句麗古墳が分布する。1956・1957年に遼寧省文物工作隊によって発掘された。前屯古墳群では17基、注渾木では2基が調査された。玄室は長方形ないしは方形で、長さ2.05~2.55m、幅1.0~1.95m、羨道は長さ0.85~1.75m、幅0.6~1.0mであるという。石室は平天井式天井(6基)と持送り式天井(9基)の2種がある。古墳群の時期については、高句麗中期から後期、南北朝から隋唐の間と推定されている。出土遺物のなかで銅製鈔帯や土器も7世紀以降に下るものとみられる。石室の形態から、高句麗墓と考えられているが、桓仁地域や吉林省一帯の渤海時代との墓制との関連でとらえる必要もあろう。

### 3 禿魯江流域

鴨緑江の支流である禿魯江下流域には、上流から深貴里古墳群、間坪古墳群、魯南里南坡洞古墳群が分布する。1980年から調査がおこなわれ、1983年に『鴨緑江、禿魯江流域の高句麗遺跡発掘報告』が刊行されている。

#### ① 深貴里古墳群(慈江道時中郡)(鄭燦永1983, 図鑑4)

禿魯江下流域には、上流から深貴里古墳群、間坪古墳群、魯南里南坡洞古墳群が分布する。深貴里古墳群は、157基の積石塚と石室封土墳からなる。発掘調査された古墳は40基で、そのうち積石塚は16基、石室墳24基である。

横穴式石室24基は、いずれも割石積み持送り式平天井石室である。平面形は片袖式(81号墳:玄室指数=玄室幅/玄室長63)、両袖式(150号墳:玄室指数94)、無袖式(154号墳)に分けられる(図3)。石室規模は、玄室長さ1.45~2.8m、幅0.8~2.0mの比較的小形墳である。石室の構造には、無袖化・小形化傾向がみられ、時間差を示しているようである。115号墳は、一墳丘双室墳(同一墳異土壙)であるが、片袖式・無袖式の石室が同時に築造されている。両袖式は3基にすぎないが、玄室は方形にちかい。片袖式石室に階層差が存在するかもしれない。遺物は、8号墳で蓋付碗が出土している。宝珠形つまみの付くもので銅鈔を模倣したとみられる。この土器については、「乙卯年」(415年)の銘をもつ壺杆塚出土のものに類似し、5世紀前半代に想定しえる。81号墳は積石塚、片袖式石室である。初期の石室とは考えがたく、積石塚という墳丘も伝統的に存続すると考えられる。古墳群は5世紀後半から6世紀代に築造されたのであろう。

#### ② 魯南里南坡洞古墳群(慈江道時中郡)(鄭1983, 図鑑4)(図版2)

横穴式石室は約30基発掘された。割石積み持送り式平天井石室が大半であるが、玄室よりも羨道の高い有段羨道式石室が2基存在する。それには両袖式(30号墳:玄室指数54)、片袖式(31号墳:玄室指数62)がある。玄室・羨道のレベルが水平の横穴式石室には、両袖式(140号墳:玄室指数88)、片袖式(114号墳:玄室指数48)、無袖式(175号墳)がある。また二室墳(127号

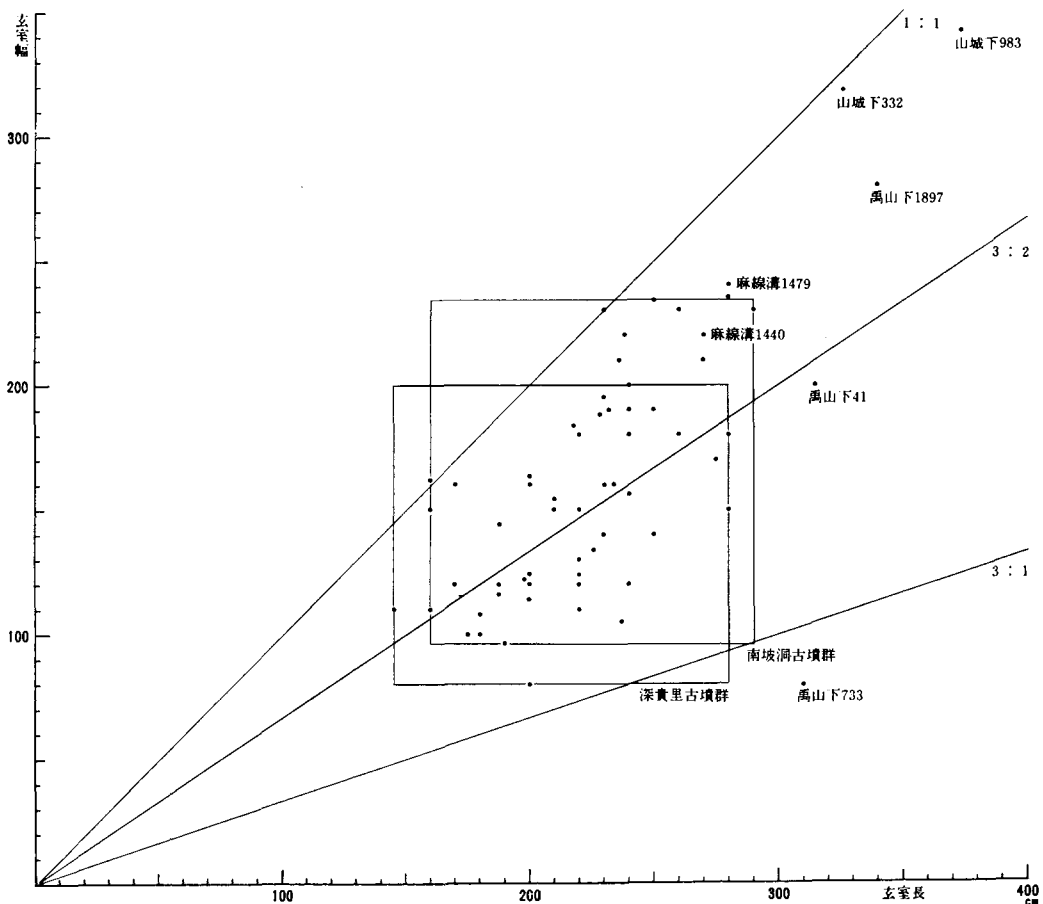
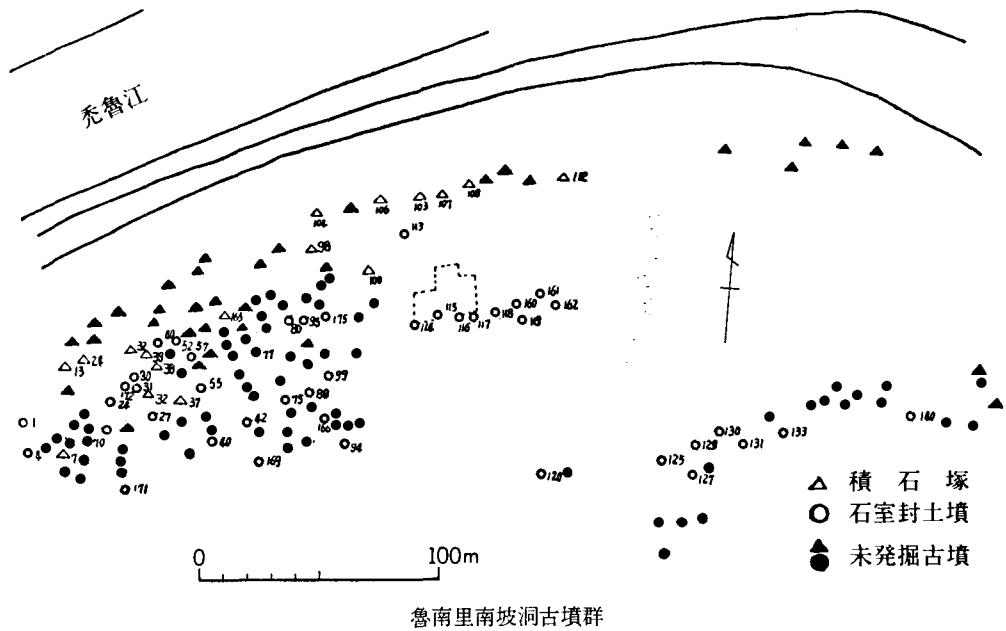


図3 鴨緑江・禿魯江流域の古墳群と横穴式石室の玄室長と玄室幅

墳・99号墳)・三室墳(80号墳)がある。石室は、割石積み持送り式平天井石室である。また96号墳のように、三角持送り式天井石室が存在する。長方形プランの支室で、長大な割石を積築する。131号墳は腰石に板石を使用する。石室の構築上、新しい要素である。南坡洞140号墳は、集安の折天井塚のような持送り式天井の割石積石室の系統にあらう。この類の単室墓は継続して築造される。石室の形態や石材の使用法などから推測すると、南坡洞140号墳から125号墳のように発展するのであらう。その過程で、30号墳のような有段羨道式石室が出現する。140号墳と30号墳の石室構造は、有段構造の有無をのぞくと類似する。

③ 魯南里内坪古墳群(慈江道時中郡)(鄭1983)

積石塚のみが分布する。

④ 魯南里間坪古墳群(慈江道時中郡)(鄭1983)(図版2-12)

70余基の古墳が分布する。18基の石室墳が確認されたが、そのなかで3基のみが発掘されている。間坪10号墳は割石積み三角持送り式天井石室である。両袖式。羨道は有段式で、40~50cm高く、若干傾斜しながら高くなる。三角持送り式天井と「有段羨道」の組合わさった特異な石室といえる。間坪27号墳は双室墳で、長壁を共有し、それぞれ片袖式の石室をつくる。

有段羨道の割石積石室が鴨緑江流域に存在し、しかも三角持送り式天井構造であることが注目される。集安の禹山下41号墳や、咸鏡南道や江原道の東海岸一帯の石室墳との関係が問題となる。

⑤ 豊清里古墳群(慈江道時中郡)(鄭燦永1983)

禿魯江の支流である豊龍川流域に立地する。16基の積石塚と石室墳とからなる。2基の石室墳が発掘された。豊清里19号墳は、墳丘を石で覆った「封石墳」であるが、割石積の片袖式持送り式平天井石室である。羨道内部で閉塞されている(図版2-1)。

以上の禿魯江下流域の古墳群を、各古墳群ごとに、石室構造の変化過程を想定した(図版12)。これらの割石積石室を大規模な壁画墳や三角・平行持送り式天井石室などとの支室規模を比較したのが図3である。

#### 4 清川江流域

① 龍湖洞古墳群(平安北道雲山郡龍湖里)(関野ほか1920)(図版4-12)

清川江の支流に位置する雲山邑の東約6kmの台地上に立地する。3基の古墳が発掘された。龍湖洞1号墳は基壇積石塚で、基底が一辺20.0m・高さ2.7~4.5mである。埋葬施設の構造は不明。鉄製竈・金銅鳳凰文飾金具・鉄鏃・鉄釘が出土している。鉄製竈は高句麗に特徴的な竈であるが、三室塚など陶製竈と比べ若干形態が異なる。鑄造技術が発達していたことを示す。2号墳は、1号墳の北約23mに位置する。方台形の封土墳で、西面して両袖式の横穴式石室を構築している。壁面は長大な割石を積み上げる。天井構造は、三角・平行持送り式である。石室は、湖南里四神塚と同形態で、6世紀後半ごろと推定される。3号墳は1号墳の東側約200m、谷を隔てて立地する。東西約30.0m、南北約21.0m、高さ2.6mの長方形の積石塚で、3基の石室が並列していた可能性があるという。この清川江流域での古墳群の分布状況は未だ明らかでない。集安と平壤

を結ぶ交通の要所にあり、今後の調査に期待される。

## 5 大同江流域

### (1) 大同江中流

大同江中流域の順川郡を中心とした地域である。南に位置する平原郡の古墳群もふくめる。これより上流域では壁面墳は確認されていない。

#### ① 天王地神塚（平安南道順川郡北倉里）（関野ほか1930・図鑑6）（図4—4，図版4—7）

1916年の調査において「北倉面松溪面古墳」と称されたもので、その後「八角天井塚」とよばれたこともあった（関野1916・1925）。方台形の墳丘の中央に石室を築く。玄室の天井は八角形で、梁・斗拱を表現し、その頂部は三角持送り天井である。また四隅に墓股をつくりだしている。四壁の全面に亀甲繫文を描き、そのなかに蓮華文を配している。前室の構造も特異である。長方形をなすが、梁で6区に画し、中央の4区は持送り式天井をなす。両端の区画の天井が異なる。その一方は平行持送り式天井の側室的空間で、他は三角持送り式天井で側室を形成しない。

#### ② 遼東城塚（平安南道順川市龍鳳里，旧順川郡）（考資1）（図版4—5）

古墳は、大同江の右岸、川辺に立地する。そこから北側に江を渡って2kmの地点に天王地神塚が位置している。接続した四つの後室（棺室）に、直行して前室がつき、二つの羨道がとりつく。前室の平面は長方形で、中央と東西の側室にわかれる。東側室と中央の室のあいだに八角形の柱1本が配され、墓室の系統関係を示唆する。中央天井は4層の平行持送り、東西の天井は中央より低い。東側天井は3層の平行持送り、西側は4層の平行持送り式天井である。前室の南壁羨門の間に城郭図、西側室に四神図が描かれている。

#### ③ 北倉里1号墳（順川郡）（関野1920）

封土墳で、「石槨」の構造は木造建築を模したものであるといわれる。

#### ④ 龍岩里古墳群（順川郡仙沼面）（関野1920，関野ほか1930）

2基の古墳が存在することが報告されている。そのうちの1基は、一辺11～12m・高さ4mの方台形の墳丘をもつ。内部施設については不明であるが、相当規模の石室が構築されているとみられる。

#### ⑤ 東岩里古墳（旧検山洞古墳）（平安南道順川市）（朝考1988—2，図鑑5）（図版4—8）

東岩里の所在地から1.5km隔てた西北側には大同江が流れ、その北東に検山という低い山が存在する。東岩里壁画墳はその山麓に立地する。その周辺には古墳群が分布する。また北方約10kmの順天市龍鳳里には遼東城塚が位置し、その北側約2kmの北倉里に天王地神塚が存在する。複室墳（後室・前室）で、耳室が発達し、前室となった段階で、集安の舞踊塚・角抵塚・散蓮花塚などに後続するものである。前室・後室・羨道の全面に壁画が描かれていたと推定されている。さまざまな情景の人物・風俗図が描かれているが、その描写・表現法は舞踊塚・角抵塚に類似する。石室構造と壁画内容と対応する。その築造年代は、5世紀の中葉頃であろう。この壁画墳は、1916年に関野貞によって調査された「検山古墳」であり、玄室は「廣十一尺七寸長十二尺一寸下

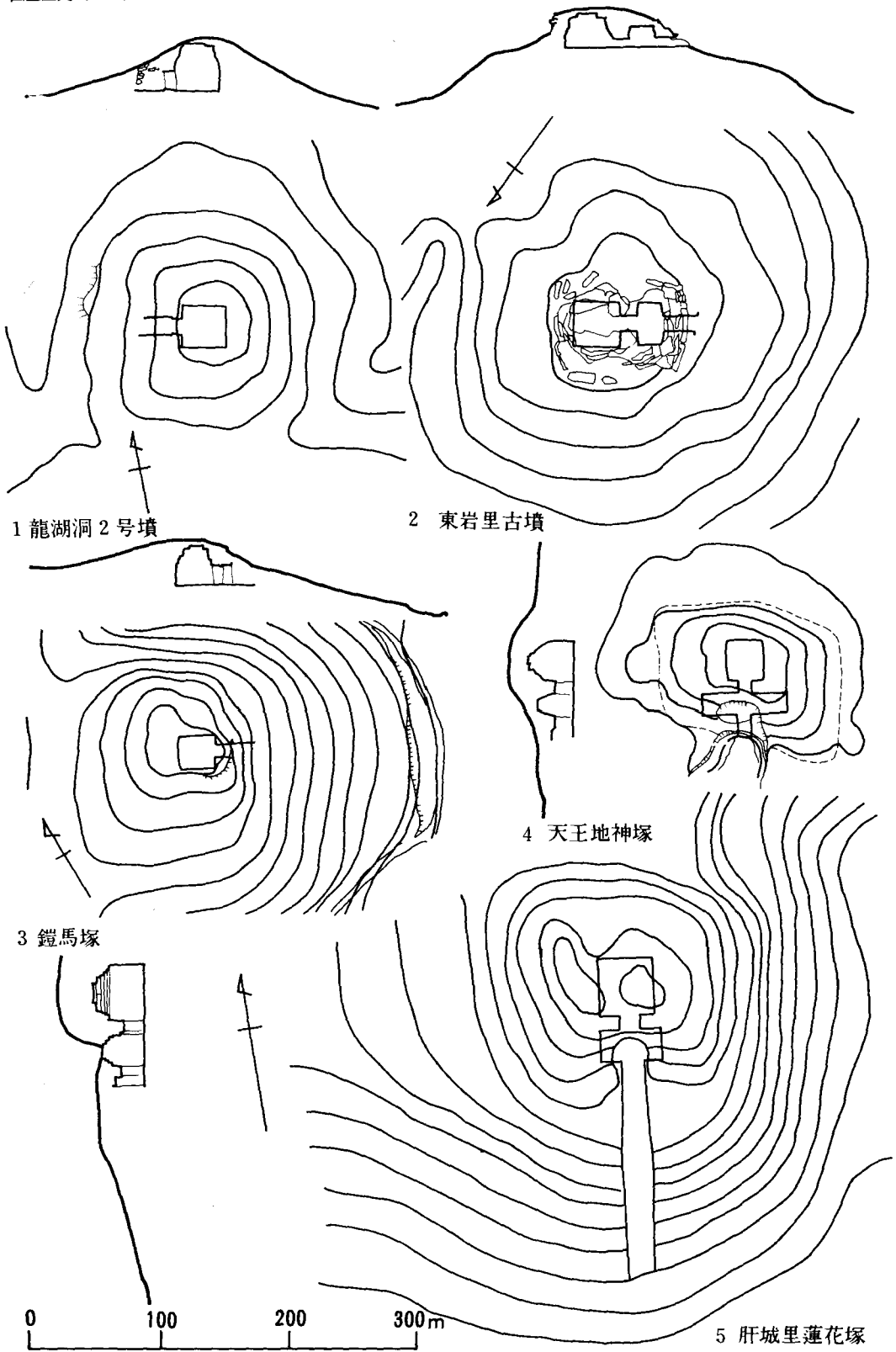


圖4 高句麗古墳墳丘図2



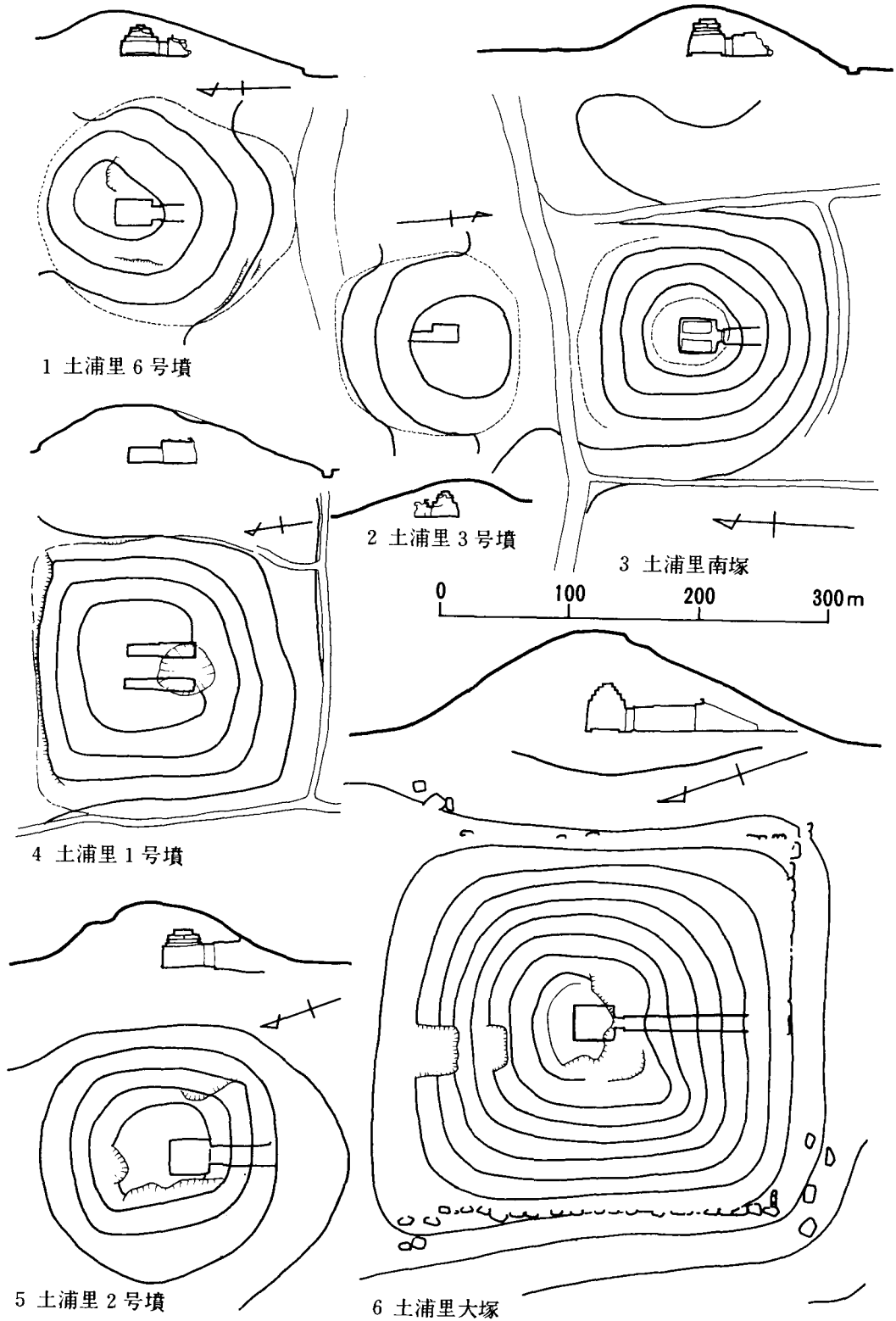


図5 高句麗古墳墳丘図3

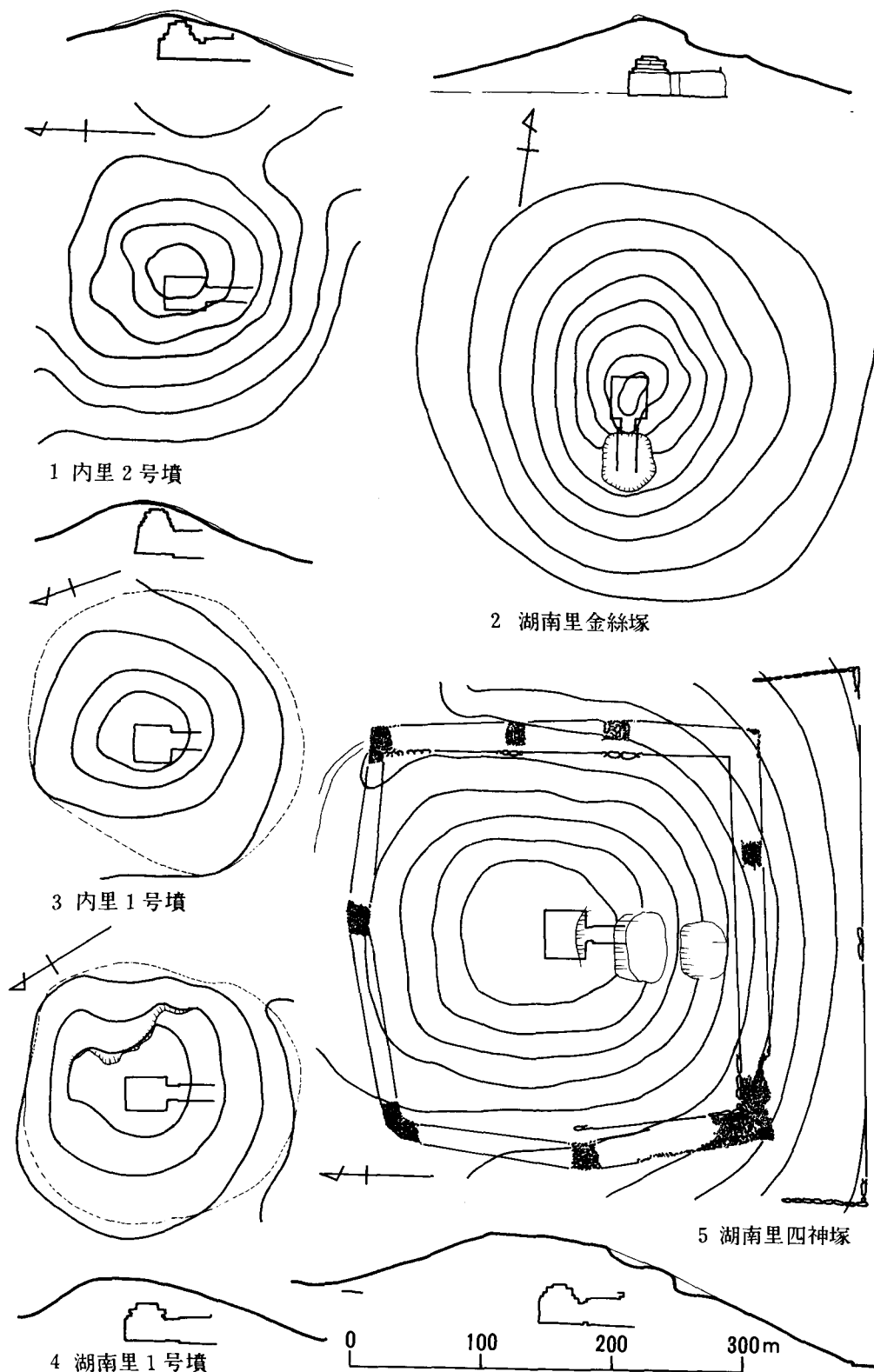


図6 高句麗古墳墳丘図4

方ハ土ノ為メニ埋メラル……玄室、前室及ヒ羨道ノ壁天井ハ昔石灰ヲ以テ塗リシ等ナレトモ今殆悉ク剝落セリ」とある（関野1917）。また『高句麗時代の遺蹟（図版下）』では「檢山洞古墳」として実測図が掲載されている（関野ほか1930）（図4—2）。

#### ⑥ 雲龍里古墳群（平安南道平原郡）（朝考1986—2）（図版4—9）

平壤の北方、平原郡に所在する。古墳は、1983年に発掘された。郡庁の所在地から西南約13kmの距離にある。プルタン山脈の南麓に立地する。雲龍里古墳から5.8km南に青宝里壁画墳、東南約13.8kmに大同郡徳花里1・2号壁画墳が存在する。古墳は、両袖式であるが、一方の袖幅が90cmの偏羨道の形態である。天井は八角状に持ち送りされている。玄室前壁天井部に朱雀（鳳凰）や雲文の壁画がみられる。なお周辺には数多くの古墳群が分布しているという。徳花里古墳の一群とは別の古墳群を形成している。

以上の大同江の中流域に分布する古墳群は、地理的にみても安岳郡とともに高句麗壁画墳の成立をとらえるうえで重要である。遼東城塚は、中国東北部の遼東地域で発達した墓制の伝統を踏襲したものであることはうたがいが無い。安岳3号墳石室の系統とは異なっているが、柱の表現や天井構造に一定程度の関連性もみとめられる。青龍・白虎は、かなり発達した図像であるが、墓室の構造からみて、その時期は4世紀後葉にさかのぼるであろう。遼東城塚の墓室が発達して、天王地神塚の石室に変化し、さらに東岩里古墳のように前室が発達するようになったのであろう。つまり安岳3号墳や遼東城塚などの前室の両側室が発達して、前室一室が形成されるという発展過程が想定される。

#### (2) 大同江下流(1)—大城山麓地域—（有光教—1937，金日成大1973，朝考1988—4）

1970年以来、ピョンヤンの大城山一帯の高句麗遺跡の調査がおこなわれ、大城山城・安鶴宮などの山城・宮殿址とともに古墳が発掘された。高山里・内里・魯山里・南京里一帯に分布する古墳群である。かつて「大同郡林原面古墳」として総称、報告された数百基の古墳群がそれらに該当する。「大城山麓安鶴宮址を挟みて附近に今約千二百餘の古墳」があったという（関野1941）。その後大城山一帯では七百余基の古墳が確認されている（金日成大1973）。

#### ① 大城山一帯古墳群（平壤特別市大聖区域）（金日成大1973）

大城山城内5基・植物園区域17基・安鶴宮址3基、あわせて25基が発掘された。無基壇積石塚1・基壇積石塚1基・石室封土墳23基である。なお植物園区域は、高山洞（里）古墳群と一部で重なる（図7・8）。

大城山から南方向に派生する尾根上に分布する。古墳群は、1～2基が孤立的に分布する場合があるが、大部分は、4～5基、5～6基が一行ないしは2列並ぶ。同一古墳群では規模が同一であるという。分布状況からみて、安鶴宮の所在する丘陵に相当数の古墳群が存在するが、安鶴宮造営にともない破壊・削平された古墳群も確認されている。安鶴宮造営の上限時期の一端を定める重要な事実である。また大城山城内で、山城築造以前の古墳の存在が確認されたが、積石塚および割石積みの小規模な石室墳であったという。壁画墳もあらたに3基（植物園9・10・15号

墳)が発見された。

1988年には、大城区域安鶴洞で、石室封土墳10基・基壇積石塚4基、三石区域魯山洞で石室封土墳6基が発掘された。そのうち安鶴洞7・9号墳と魯山洞1号墳が壁画墳である。

- 積石塚(大城山1・2号墳)
- 石室封土墳
  - 単室墳・片袖式(大城山3・4・5号墳, 植物園6・11・12号墳・安鶴洞1号墳)
  - 双室墳(安鶴洞3号墳・植物園5号墳)
  - 単室墓・両袖式(植物園3・7・8・9号墳・安鶴洞2号墳)
    - 持送り式平天井(植物園14号墳)
    - 甬道付羨道(植物園16号墳)
  - 複室(前室・両耳室)(植物園9・10・15号墳)

安鶴洞9号墳(カムサボン・チェウンソン1988)は、安鶴洞のバス停留所終点から北に約600mの大城山の牛文峰と乙支峰の間の南傾斜面に立地するという。周辺に数基の古墳が分布し、9号墳に4mほど接して2基の古墳が立地する。玄室長2.85~2.87m、幅2.05m、現高2.12mの小形の石室であるが、壁画墳で、四神図が確認されている(図版6-11)。安鶴洞7号墳(カム・チェ1988)は、安鶴洞キムチ工場の背後、大城山麓に位置する。両袖式で、四壁は高さ0.8mほど遺存するのみである(図版6-14・15)。短頸壺3個と棺釘が出土している。出土土器から6世紀前半に位置づけられよう。

## ② 高山洞古墳群(平壤特別市大聖区域)(小場1937・1938, 金日成大1973, 図鑑6)

大城山の西南麓に立地する。高山里一帯には、3基の積石塚と30基以上の封土墳が分布する。1936年には3基が発掘された(図版6・図7-2)。

高山洞1号墳(小場1937)は、古墳群のなかでも最大級で、一辺20m・高さ3.5mの方台形を呈する。四神図を主体とした壁面墳である。両袖式石室で、コノ字(台形)状に開く墓道が付設されている。集安の四神塚や五塊墳4号墳に近似し、同地域における石室構造の発展段階と軌を一にしている。2号墳(小場1937)は、南北約19m・東西約15m・高さ1.4mの積石塚である。中央がくぼむことから石室の存在が推定されている。年代も3~4世紀代、楽浪郡滅亡前後の時期に、積石塚が大同江流域に及んでいたことを示す資料といえる。3号墳も積石塚であるが、発掘されたところ、「石槨」などの埋葬施設の痕跡は確認されていない(小場1937, 1938)。4号墳(小場1938)は、東西4.8m・南北6.1mの方台形の墳丘をもつ。埋葬施設は半壊しているが、石槨(竪穴式石室)とみられる。5号墳(小場1938)は、東西9.1m・南北8.5m・高さ約1.8mの方台形の古墳である。片袖式の石室で、四壁は割石積みである。6号墳(小場1938)は、径14.5m・高さ2.6mの方台形をなす。両袖式石室で、割石積みの壁面に漆喰が塗られている。7号墳(小場1938)は、東西17.6m・南北18.5m・高さ3.6mの大形の方台形墳である。高山里古墳群では、近接する1・8号墳とともに大規模な古墳の1つである。かつて植物園9号墳として報告されたことがあるが、『図鑑』などでは高山洞7号墳とされている。ほぼ正方形の玄室に、両側室をもつ。左側室は三角・平行持送り式天井、右側室は平行持送り式天井で、前室は平天井であ

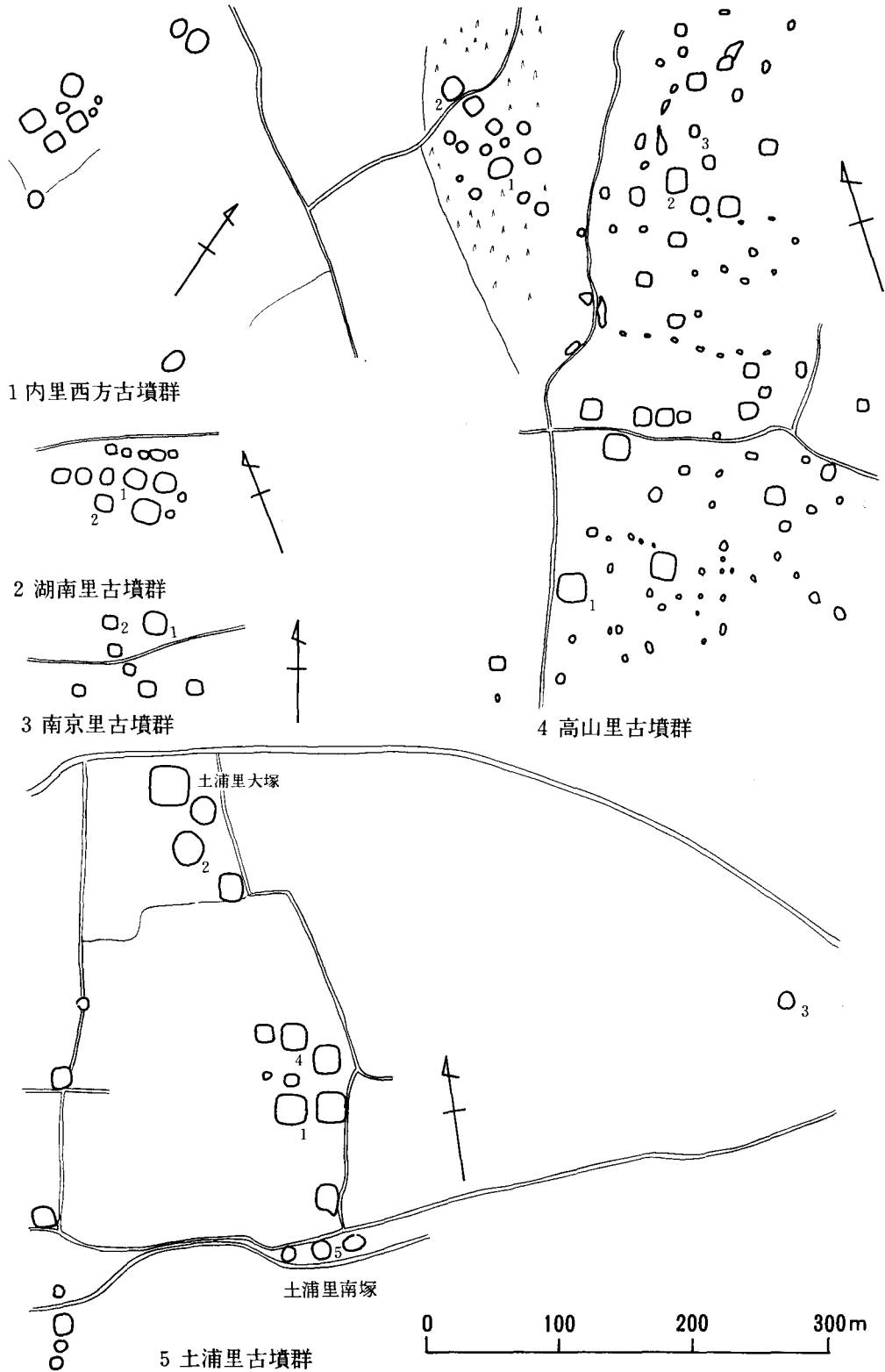


図7 古墳群の群構成

る。両側室の天井の高さは前室と同じまでに発達している。この種の「前室を有する槨室には壁画を有するを常とせる」と推測し、調査されたが、「逐に何等の彩色をも見出さず」（小場1938）であった。ところが再調査において、前室で牽馬人物像・牛車・天蓋などの壁画が確認された（金日成大1973）。石室構造や壁画の内容からみて、通溝12号墳・長川2号墳の段階、つまり5世紀前半代の壁画墳に相当する。8号墳（小場1938）は、方台形の墳丘をもつ。東西19.7m・南北23.3m・高さ3.6mをはかる。東西に並んで2室が構築されている。東石室の玄室は三角持送り、西石室は5層の平行持送り構造である。9号墳（小場1938）は、東西・南北径25.8m、高さ4.5mで、高山里古墳群では最大である。羨道部の左右に「翼室」と称される側室がつくられている。東側翼室は、西壁長1.3m・南壁幅1.1mで、片袖式の小羨道の長さは120cm・幅110cmをはかる。こうした構造の側室は特異で、あたかも龕のようである。玄室に四神図が描かれている。10号墳（植物園10号墳）の石室構造は、両耳室（側室）が独立した天井構造をもつ段階のもの。麻線溝1号墳の石室構造より後出し、長川2号墳の石室に類似する。壁画は、舞踊塚と類似することが報告書でも指摘されている。10号墳で、鍍金された龍文透彫り銅製帯金具が出土しているが、これは5世紀中葉の基準資料である（東1988）。植物園15号墳の石室構造は、10号墳の相似形といえる。壁画は確認されていない。高山洞20号壁画墳（金サボン1986）の東側に安鶴宮址があり、西北側1kmほどに高山洞1・7・9・10・15号壁画墳が分布する。20号墳の壁画構成は、玄室内に建物（柱）が表現された初期の段階のもので、4世紀前半、楽浪・帯方郡滅亡の313年に降に平壤付近で築造されたのであろう。集安山城下1368号墳と時期的に近似することが指摘されている。

以上の古墳群のなかで、石室の形態からみると、高山洞20号墳—植物園17号墳—高山洞10号墳—植物園15号墳—高山洞7号墳—植物園16号墳のような変遷過程が想定される。

③ 内里古墳群（平壤特別市三石区域魯山里，旧平安南道大同郡紫足面内里）（関野1917，関野ほか1930・有光教—1937）

内里は大城山の東，土浦里の西北方，魯山里の北に隣接する。山麓・丘陵上に約30基が存在する。古墳群は北方（14基）・南方（11基）の二群に別れて分布し，内里1・2号墳はその北方の古墳群に属する（図版7—1）。

1号墳（有光1937）は両袖式石室で，天井は切石を用いて平行持送りをおこない，最上段を三角持送りする。「羨道・玄室壁は，通じて割石を以て積み，一旦漆喰を以て目張りを施し，更に其上を平均1櫃の厚さに上塗りせるものなり」。天井・四壁に壁画が描かれている。2号墳（関野ほか1937）は，両袖式で，玄室は切石を用いて築く。平行・三角持送り式天井をもつ（天井3段目平行，4段目三角持送り式）。羨道部で，割石積み閉塞がなされている（図8—1）。

内里西北塚は，円錐形の墳丘をもつ，切石積の石室墳である（関野1917・1930）。台地上に立地する約20基の古墳群中の1基である。玄室は，長さ3.1～3.3m・幅2.5m，羨道長3.5mである。玄門は板石を置き，割石で補強したのち，さらに2枚の板石で閉塞する。羨道内は割石で充填さ

れている。

④ 土浦里古墳群（平壤特別市三石区域長寿院洞）（関野1916，関野ほか1930，有光1937，図鑑4）（図版5—8～12）

古墳群は、大城山東方、東西にのびる山塊（標高100m）の南麓に立地する。南方の平野に延びる低い台地上に約20基が群在する。分布上6群に分かれる。土浦里仏堂洞には、土浦里大塚・2号墳を中心とするⅠ群、その東南の1・4号墳のⅡ群、さらに土浦里南塚を中心とするⅢ群、Ⅰ群の西南のⅣ群、その南のⅤ群、Ⅱ群の東側300mの3号墳（Ⅵ群）である。各群とも方台形墳4～5基からなる。

土浦里大塚（関野1916，関野ほか1930）は、古墳群のなかでもっとも大規模な墳丘をもつ。一辺約30m（約100尺）・高さ約8mの方台形である。墳丘の基底には方形の列石がめぐらされている（図5—6）。石室の形態で特徴的なのは、長大な羨道を有する両袖式石室ということである。長方形の玄室で、2段の平行持送り、1段の三角持送りをおこない、天井石をおおう。羨道閉塞石は偏平な扉石を据え、割石で充填される。玄室内で石枕・棺釘・弓形鉄鉤が出土している。この弓形鉄鉤は、円形の座金具の付くもので、禹山下41号墳でも同様のものがみられる。旗竿などの用途が推定される（東1984）。また出土した四耳壺は、集安三室塚のものより新しく、5世紀末から6世紀前半代のものであろう。古墳の時期の一端を示す。

土浦里1号墳（有光1937）は、一辺21～22m・高さ5mの方台形墳丘に2室が築かれている（図5—4）。奥壁・両壁・天井石とも1枚の板石で構築され、羨道部両壁は割石積みで漆喰が塗布されている。この特異な構造の石室について、近接する匡大山湖南里3号墳や集安四ツ塚第四塚に類例があり、玄室が細長い櫃形をなすこと、平天井で、花崗岩の切石状の板石を使用し、羨道が玄室よりも高大であることが指摘されている。高句麗石室墳の一型式である。土浦里2号墳（有光1937）は方台形の封土墳に、両袖・三角平行持送り式・切石積みの石室が築かれている。壁面の全面に漆喰が塗られている。土浦里3号墳（小場1937）は古墳群の東端で1基のみが存在するが、もともと群在していたものと推定される。両袖式で、4段の三角・平行持送り式天井である。土浦里6号墳とよばれる古墳（小場1937）は、土浦里古墳群の西方、丘陵を隔てた低台地上にある。数基からなる古墳群である。「斗武洞の一小部落」にあるというので、土浦里斗武洞古墳群と称することにする。土浦里（斗武洞）6号墳は片袖式、4段の平行・三角持送り式天井構造をもつ。壁体は割石積みで、全面に漆喰が塗布されている。土浦里（斗武洞）7号墳も平行（2段）三角（2段）持送り式天井式構造であるという（小場1937）。土浦里南塚（関野1917）は、土浦里大塚の南に、東西に並ぶ4基の古墳群があるが、その西から2番目がこの南塚にあたる。持送り式天井で、石室の全面に漆喰が塗られている（図5—3）。

土浦里古墳群では、石室の平面形や石材の使用法などを基準として、前後関係を想定しえる。1号墳の石室は7世紀代の高句麗末期のものであろう。土浦里大塚は5世紀末から6世紀初めに推定されるので、土浦里古墳群では、5世紀末から7世紀にかけての古墳が継続して築造されて

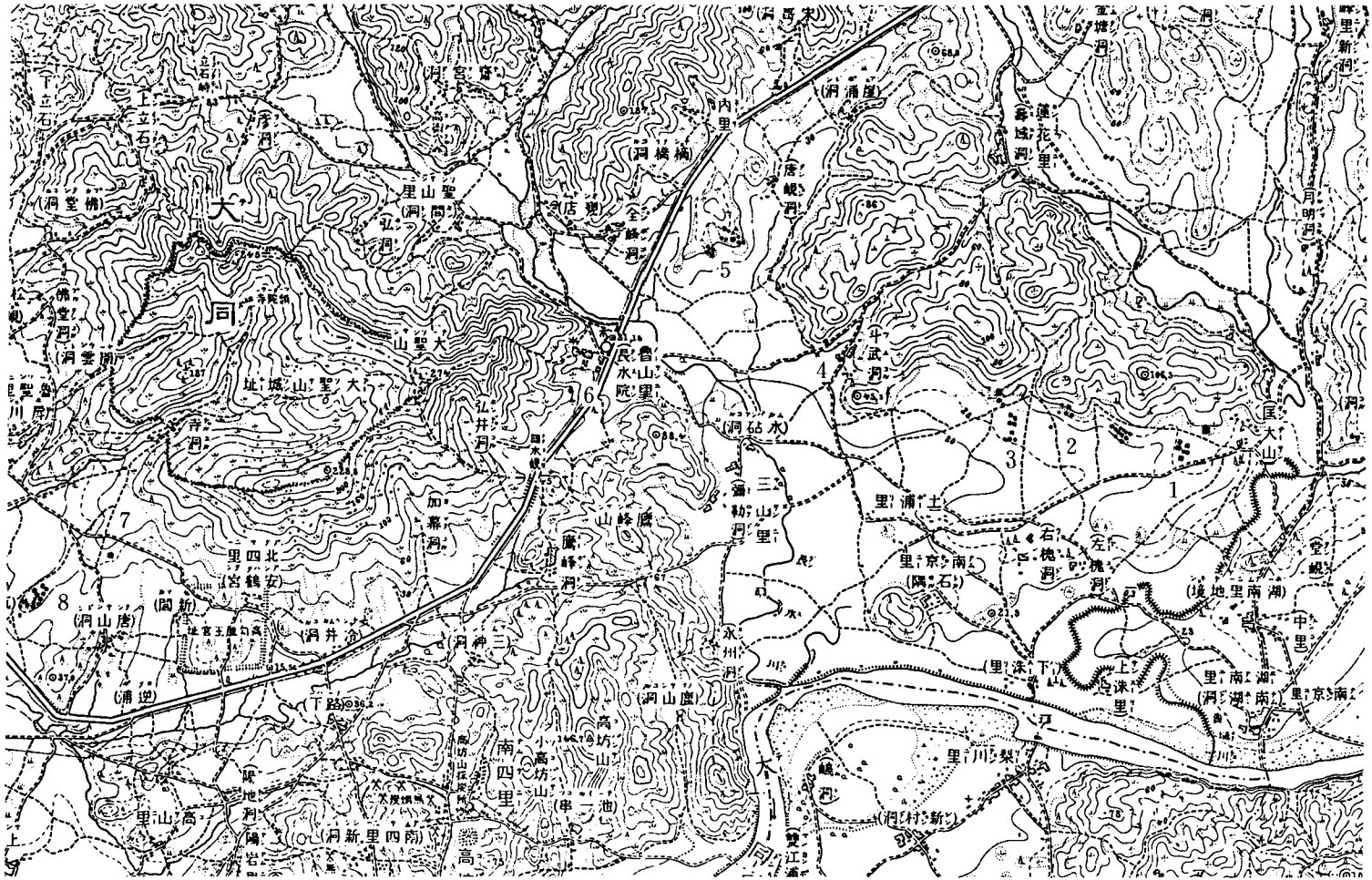


図8 大城山・匡大山一帯の古墳群

1. 湖南里四神塚と古墳群 2. 南京里古墳群 3. 土浦里大塚と古墳群 4. 土浦里6号墳 5. 内里古墳群 6. 鑑馬塚 7. 高山里1号墳 8. 上五里古墳群



いたことになる。調査された各石室とも、平行・三角持送り式天井の格式化したもので、古墳群が支配階層の墓地であることをものがたる。土浦里大塚を核とした古墳群が形成されている。

⑤ 魯山里古墳群（平壤特別市三石区域、旧大同郡紫足面）（関野1917、関野ほか1930）

魯山里鎧馬塚は、大城山の東麓に立地する。方台形の墳丘で、両袖式横穴式石室が東南方向に開口する（図8-17）。現在は遺存していないようである。魯山里1号墳（カム・チェ1988）は1988年に発掘された。古墳は、安鶴洞から東側約2kmほどの距離に位置し、その周辺に鎧馬塚など数十基の古墳が分布する。玄室の壁面に漆喰を塗られ、壁面が描かれている（図版6-10）。

⑥ 南京里古墳群（平壤特別市三石区域）（小場1937）

土浦里古墳群の東方約500mに数基の古墳群があり、2基の石室墳が発掘された。南京里は、湖南里と土浦里古墳群の中間に位置する。これらの古墳群はいずれも東西方向にのびる匡大山の南麓一帯に立地する。1・2号墳が発掘された。1号墳では「唐草の曲線とみらるゝ細き墨線の一端と朱痕」が確認されたが、詳細は不明である（図7-3）。

⑦ 寺洞古墳群（平壤特別市寺洞区域・旧平安南道大同郡林原面）（図譜1）（図版9-18）

安鶴宮址の西北約1000mの大城山麓に所在する。石室天井は平行（3層）・三角（2層）持送り式で、玄室内に2基の棺台がある。

⑧ 湖南里古墳群（平壤特別市三石区域聖文里）（関野1917、関野ほか1930、小場1937）（図6-2・4・5）

匡大山（標高106m）の南麓に17基の古墳が分布する。湖南里四神塚は、丘陵南側の緩傾斜面を掘削し、方台形の墳丘を築く。その東西には匡大山を背にして、幅広い台地が延び、その前方に大同江が流れる。まさに風水思想にもとづいた造営といえる。四神塚の西南に舌状に広がる微高地があり、そこに列状に数基の方形墳が築造されている。東西に列をなして立地し、南端の1基は比較的大形である。さらに四神塚の西側約500mに14基の古墳群が群在する（小場1937）。東西方向に列（3列）をなして分布する。そのなかの2基（湖南里1・2号墳）が発掘されている。図8は、現地踏査をふまえて、古墳群の分布状態を図示したものである。

湖南里四神塚（関野1930）は、一辺20m・高さ約4mの方台形の封土墳で、基底部に直方体の列石がめぐらされ、その周囲に幅約3mの敷石帯がめぐらされている。伝東明王陵の墳丘構造と関連する。石室は甬道をつく両袖式で、羨道の平面はやや開く。玄室天井は、各2層の平行・三角持送りである（図6-5）。また出土した金銅製帯金具は6世紀中葉に比定される（東1988）。

湖南里1号墳（小場1937）は、西方の一群では最大規模の古墳である。天井構造は、2段の平行持送りし、その上層は2段の三角持送りをおこなう。壁体には巨石の切石を用いる。湖南里四神塚にくらべて、玄室の形態・閉塞施設などから、先行する可能性が大きい。2号墳（小場1937）は1号墳に近接する。東西約2.5m、南北2.8mで、3段の平行・3段の三角持送り式天井構造のものである（図6-4）。

湖南里金絲塚（関野1917）は、四神塚の南南東に位置する石室墳である。金製の糸が出土した

ことから、命名された(図6-2)。

湖南里四神塚と墳丘外護施設の点で類似性で注目される、礫裾塚とよばれる古墳が報告されている(関野1917)。詳細は不明である。

⑨ 上五里古墳群(平壤特別市)(小場1937)

高山里古墳群から東南に延びる低い台地(標高30m)の先端に立地する。20基以上の古墳が群在する(図8-8)。3基の古墳(1~3号墳)の調査に着手されたが、玄室の崩壊などのために中止されたという。

⑩ 長山洞古墳群(平壤特別市西城区域)(文遺196-6, 図鑑6)(図版9-6・7)

長山と称される山の南の丘陵傾斜面に、南北線上に2基の壁画古墳が立地する。長山洞1・2号墳である。両石室とは両袖式で玄室内に一对の石柱が立てられている。石室内に立柱のある古墳の類例として注目される。

⑪ 和盛里古墳(平壤特別市龍城区域和盛洞, 旧平安南道大同郡奇岩里)(考資1)

一墳丘内に二室が構築された双室墳である。いずれも片袖式で、壁体は長方形の割石が横積みされる。板石で閉塞する。東石室で、透彫り装飾金具、両石室で鉄製環金具が出土している。

⑫ 佟利墓(平壤特別市)(樞本亀次郎・野守健1933)

1932年に、平壤駅構内で発見された塼室墳である。1905年の平壤駅建設の際には、封土などの痕跡はなかったという。平壤遷都の造営にともない削平されたのか定かでない。玄室壁体に用いられた「永和九年三月十日遼東韓玄菟太守領佟利造」という銘文があった。永和9年は、東晋353年にあたり、佟利墓であることが確実となった。墓は、漢魏いらいの塼室墳で、楽浪・帯方郡滅亡後も、平壤の地で塼室墳が築かれていたことになる。出土した太環耳飾は高句麗に特徴的なもので、4世紀後葉頃に推定される集安麻線溝1号墳に類例がみられる。

⑬ 平壤駅前壁画墳(平壤駅前二室墳)(考資3)(図版9-8)

1954年、平壤駅の北東にある「箕子井」の東側約60mの地点で、下水道付設の工事中に発見された。佟利墓とは、500m隔てて東西に並んでいる。古墳は、前室に龕のある複室墳である。壁体・天井部に扁平な変質花崗岩を用いて積築し、壁面に漆喰を塗り、壁画が描かれる。

大城山一帯において、壁画墳は、平壤市街で1基、高山里・植物園古墳群で7基、魯南里古墳群2基、長山洞古墳群で2基、安鶴宮古墳群2基、内里古墳群で1基、湖南里古墳群で各1基が知られている。壁画墳の規模・壁画内容・時期が異なるが、平壤城(長安城)に近接する古墳群である。今日周知の高句麗壁画墳約80基のなかで、約20%にあたる16基が集中して分布する。平壤市街であり、分布調査や開発にともなう発掘調査が進展していることも一因であるが、発見される確率が高い。もちろん16基の壁画墳も時間的長さを考えれば、同時期に何基も築造されるものではなかったであろう。427年に集安国内城から平壤城に遷都したのであるが、王都周辺に支配階層・貴族層が居住し、とくに壁画墳を造営したことも一要因であろう。大同江流域では、近接する徳興里古墳にみられるように、5世紀前葉には壁画墳が築かれ、高山里1号墳・内里1号

墳・湖南里四神塚のように6世紀後半から7世紀代の巨大壁画墳も存在する。

⑭ 楽浪洞古墳群（平壤市楽浪区域）（朝考1990—4）。

近年楽浪区域では、330基の墳墓が発掘され、そのうち13基の高句麗時代石室墳がふくまれていた。楽浪洞19・24・25・30・31・34・51・53・54号墳は右片袖式石室である。貞栢洞101号墳も片袖式で、楽浪洞36号墳・南寺洞37号墳は両袖式である。天井構造は3類に分けられている。第1類は羨道のない平天井石室、第2類は羨道・玄室からなる平天井石室、第3類は羨道・玄室からなる平行三角持送り式天井石室である。年代については2～3世紀と推定されているが、その検討は詳細な報告をまちたい。いずれにしても楽浪滅亡後、あるいは楽浪末期における石室墳の実態を知るうえで貴重な資料となろう。

⑮ ソグチュル古墳群（平壤市祥原郡）（朝考1986—3）（図版9—14）

祥原郡祥原邑所在地から黄海北道延山・遂安に行く街道沿いに立地する。道から212m隔てた谷筋で数十基の古墳が確認されたという。そのうち3基が発掘された。

1号墳は片袖式石室で、人骨とともに金製耳飾（耳環）1対が出土した。2号墳も片袖式石室で、鉄製犁先・鉄矛などが玄室床面の中心部から出土している。犁は、出土状況に問題がなければ、高句麗時代の確実な資料といえる。3号墳は割石積みの両袖式石室で、金銅製太環耳飾が出土している。この形態の耳飾は5世紀代のものである。

(3) 大同江下流(2)—中和地域—

① 真坡里古墳群（東明王陵古墳群）（平壤特別市力浦区域，旧中和郡）（考資3，金日成大1976，小泉顕夫1986）（図9・図版8）

平壤から東南に約20km、戊辰川上流域の真坡里・雪梅里一帯に分布する古墳群である。その戊辰川は、平壤城の南で大同江に流れ込み、真坡里から戊辰里をへて、約3kmで大同江支流の昆陽江に至る。

伝東明王陵は、丘陵端部に立地し、その同一丘陵の北方約200mに10基、西200mに1基（10号墳）が分布する。さらに東南約800mの、小谷を隔てた丘陵上に雪梅洞古墳群が存在する。

伝東明王陵は、後室・前室・羨道からなる複室墳である（図版8—14）。玄室は長さ4.21m・幅4.18mのはほぼ正方形で、6段の平行持送り式天井構造をもつ。前室は主軸に平行する長方形石室で、両側に小規模な龕（長さ60～70cm、高さ20～25cm、奥行30～35cm）が付設されている。前室より幅広い羨道が開く。後室・前室は切石積み、羨道は割石積みである。後室の天井は穹窿状に持ち送られている点の特徴的である。將軍塚の平面形態や徳興里古墳のような前室の発達したものであろう。のちの江西三墓石室の全段階のものといえよう。龕は初期の石室にみられるものと性格を異にしている。4.12×4.25mという玄室の規模は、高句麗石室墳としては大形である。方台形墳丘の外護列石、周囲の敷石は特異である。被葬者については、「東明王陵」移葬説・「美川王」説がある。

雪梅里の古墳群（11～15，17～19号墳）をふくめ、片袖式横穴式石室（10・14・15・17・18・

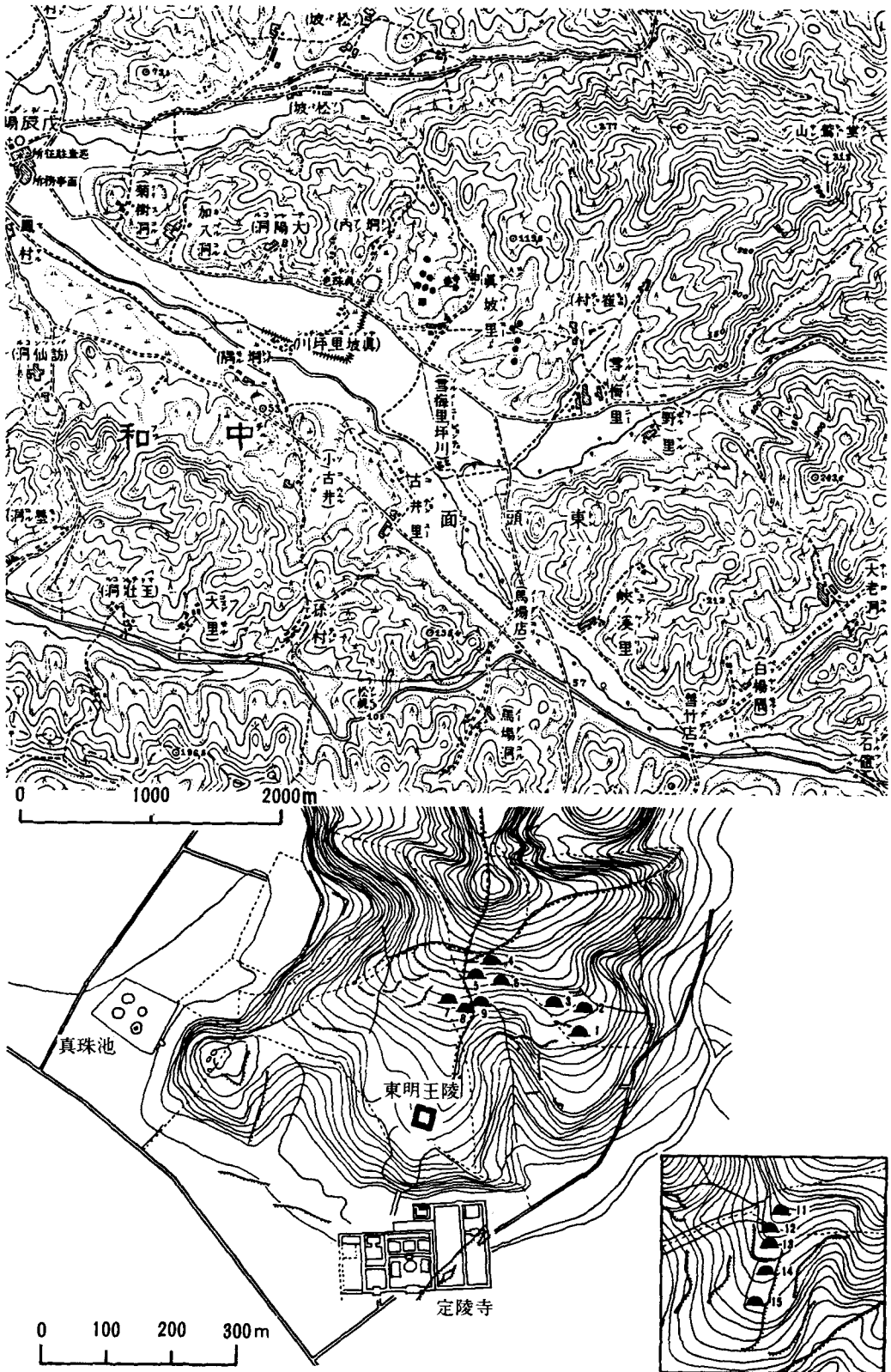


図9 伝東明王陵と真坡里古墳群

19号墳)と両袖式石室(2・3・4・5・6・7・8・11・12・13号墳),多室墓(16号墳),壁画墳(1・9号墳)に大別される。伝東明王陵とかかわる古墳群は1～9号墳の9基であろう。

1・4・5・6・7・9号墳は,平面形態や規模で若干の差異がみられるが,同一型式といえる。玄室は,いずれも平行・三角持送り式天井である。10号墳は,真坡里古墳群では唯一の片袖式石室で,雪梅里14・15号墳の石室に類似する。16号墳は割石積みで,長壁を共有して築く双室墳である。金銅透彫装飾品と金銅花形文装飾品が出土している。前者は従来「冠帽」とされてきたものであるが,枕の装飾品とされる(小泉1986)。

雪梅里では11～15号墳の5基が丘陵尾根上に立地する。11・12・13号墳は,真坡里4～7号墳と同様,両袖式で,平行・三角持送り式天井構造の石室である(図版8-2・5・9)。それに対し14・15号墳は,切石積みの片袖式横穴式石室である(図版8-7・8)。17・19号墳は同じ片袖式であるが,割石積み石室である(図版9)。

伝東明王陵北方の古墳群の石室は同類型であるが,石室構造の発展段階に時間差・構築順序を想定するとつぎのようになろう。東明王陵の平行持送り式天井は,4号墳へ継承され,三角持送り架構が併用されている。さらに天井も各2層の平行・三角持送り式に定式化する傾向がある。玄室の天井部高/高さの指数は小さくなるにつれて新しくなる。指数30前後は6世紀末から7世紀代のものと推定される(○内の数値は,1尺35cmでの換算値)

#### 真坡里古墳群

(66) (46) (43) (34) (33)  
 伝東明王陵⑫……6号墳⑨……5号墳⑨……………2号墳⑧……1号墳⑨  
 4号墳⑩ 9号墳⑩ 3号墳⑩  
 7号墳⑨

(50) (45) (42) (40)  
 雪梅里15号墳⑩……12号墳⑨—11号墳⑧—13号墳⑨……

田疇農1963は,1号墳(旧4号墳)—集安四神塚—9号墳(旧1号墳)の順序で築造されたと推定する。玄室高指数からみると上記のようになるが,9号墳は,壁画内容から類推すると若干くんだり,7世紀前葉頃に比定される。

#### (4) 大同江下流(3)—大安地域—

##### ① 大安里古墳(平安南道南浦市大安区域恩徳洞)(考資2,図鑑6)(図版4-6)

古墳は,前室の発達した複室墳である。玄室天井は,10層以上の八角形の持送り式で,稜角部に石の突起をはめ込む特殊な構造である。前室の中央は合掌天井,両側は三角持送り天井である。玄室四壁に四神と人物風俗図が描かれている。短頸壺が出土しているが,前述のように漢王墓の墳丘内で出土したものと類似する。

#### (5) 大同江下流(4)—大同地域—

##### ① 八清里古墳(平安南道大同郡八清里)(考資3,図鑑6)(図版9-9)

古墳は,八清里邑に沿って,江西舞鶴山方向に長く延びた山塊があり,その南北に広がる平野

に細く突きだした三筋の低丘陵の中央丘陵上に立地する。ここから西南12kmに江西三墓が立地し、南8kmに西綺里(大宝面)古墳群が位置する。八清里古墳は大同江の西側一帯ではピョニヤンにもっとも近い壁画墳である。墳丘は直径11m、高さ2mほど遺存する。後室・前室間の甬道の中央に石製の立柱がある。

② 徳花里古墳群(平安南道大同郡徳花里)(図鑑4・6)(図版4—10・11)

徳花里から西に1km隔てた山麓に2基の壁画墳が並列して立地する。1号墳の玄室は長方形で、その天井は、1段の平行持送りをおこない、さらに6層の八角形状に持ち送りする。2号墳も1号墳と同様の構造であるが、若干の差異がみられる。玄室の形態が正方形で、八角天井(5層)もおのずと正八角形を形づくる。近接する2基の古墳の天井構造が八角形持送り式であることは、地域ごとに特色ある古墳を築く風習のあったことを示す。1・2号墳の西方に3号墳が立地する(『図鑑』4)(図版9—10)。3号墳は、1墳丘2室の連接墳で、板石・割石を用いて積築される。無袖、平天井式である。金製耳飾・銀製帯金具などが出土している。

(6) 江西地域

大同江下流域から旧江西郡一帯の平野・丘陵地帯に分布する古墳群である。舞鶴山(標高347m)から烏石山(黄龍山)(標高565m)、石泉山(標高302m)一帯の地域である。台城貯水池をめぐる地域といえる。

① 薬水里古墳(平安南道南浦市江西区域)(考資3, 図鑑6)(図版11—3)

徳興里古墳の東南約1.5kmに、「薬水」という地名があるが、その西南方にあたる。北4kmに江西三墓があり、1958年に台城貯水池建設工事に関連して発掘されたということから小河川流域の多必里付近に立地するのであろう。その南の石泉山を中心とし四周の山麓には数多くの壁画墳が分布する。石泉山の東方に台城里1・2号墳、安城大塚・肝城里蓮花塚、その南の真池里に双楹塚、北西に秋洞(後山里)古墳群、そしてその北に薬水里古墳が立地する。薬水里古墳の北方に江西三墓と徳興里古墳が所在する。古墳は前室・後室からなり、後室は4層、前室は3層の三角持送り式天井である。前室の両側壁に龕が設けられている点は特異である。前室・後室とも全面に漆喰が塗られ、壁面が描かれている。近接する徳興里古墳と同一の複室構造であるが、時期的には後出する。

② 大同古墳群(平安南道南浦直轄市)(考資3)(図版10)

台城貯水池建設にともなって発掘された。普林里大同・牛洞、後山里秋洞・内洞の古墳群である。石泉山の西麓に位置する。大同古墳群は、普林里のトングンメ山麓に分布する。大同地域の古墳群は、3～4基、6～7基ずつ群を構成して分布する。1墳2室墓(6・7・18・19・21号墳)と双室連接墓(2・3号墳)がある。封土のある古墳は4～5基で、最大の7号墳は径11m・高さ2.8m、最小の4号墳は径7m・高さ1.25mである。天井構造は、持送り式・平行持送り式・平行三角持送り式天井がある。4号墳は片袖式で、平行(2層)・三角(3層)持送り式天井で、8号墳は両袖式の平行・三角持送り式天井である。7・13号墳のように長方形の玄室に、

片袖の羨道がつき、平行持送り式天井の石室は後出するのであろう。6号墳から太環式耳飾り、19号墳から細環耳飾りが出土しているが、いずれも5～6世紀のものである(東1988)。玄室天井の低平化現象などから判断すると、4・8号墳→19号墳→6・21号墳といった変遷が想定されよう。

普林里牛洞古墳群は、大同古墳群から西に約1kmにあり、平地と山の傾斜地に立地する。古墳群は2群に分けられ、第1群は17基、第2群は6基からなる(図版10—6, 8～10, 14)。

第1群の古墳群は、長方形玄室が大半で、方形石室は4基である。3・4・5号墳は長大な石を数段積み上げている。1・8号墳は板石造りである。6号墳は板石と割石、11号墳は2壁のみ大きな割石を用いる。また7・8号墳は2墳が接続した双墳である。天井架構法は、2層ほどの平行持ち送り式(2・3・4・5・6号墳)、1段の三角持ち送り天井(1号墳)、平行(1～2層)・三角(1段)持ち送り式(12・13・14号墳)の3種である。

牛洞古墳群では、四壁が板石一枚造りの石室が出現している。新しい段階の石室であらう。他は、大同古墳群と同形態の石室が存在する。

#### ③ 秋洞古墳群(平安南道南浦直轄市龍岡郡後山里)(考資3)

江西の大同古墳群などとともに貯水池建設にともない発掘された。古墳群は、その貯水池に面する石村山の傾斜地に分布する。1号墳が最大で、4号墳をのぞき、いずれも1号墳の前方に一列の状態で立地する。12基からなる古墳のうち、双墳を4基ふくむ。5号墳は2室並列の多室墓で、いずれも片袖式石室で、四壁を垂直に積築したのち、持ち送る。このほか玄室の形態は、1・9号墳が正方形で、その他は長方形である。天井はいずれも持送り式天井である。江西の大同古墳群の1群と類似する。

#### ④ 内洞古墳群(平安南道龍岡郡後山里)(考資3)(図版10—13)

山麓傾斜面に33基の古墳群が分布する。墳丘の残存するのは6基で、そのなかで南北に直列する1～4号墳と、6・7号墳が発掘された。第1群第3号墳は片袖式石室(長方形玄室)で、割石で四壁を垂直に約1m積み上げ、持ち送る。

#### ⑤ 水山里古墳(平安南道南浦市江西区域)(図鑑5)(図版7—6)

水山里から西南4kmにコジョン山があり、その南麓の丘陵上に立地する。その東方、数kmに江西三墓が位置する。石室は、玄室・甬道・羨道からなり、玄室天井は平行三角持送り式である。前室が単室化しはじめる段階の石室で、5世紀末葉頃と推定される。

#### ⑥ 台城里1号墳(平安南道南浦市江西区域)(図鑑5)(図版9—16)

長方形の玄室に左右二室の側室がつく。未発達な段階の前室といえる。玄門に八角形の石柱が立てられる。石室構造・築造技術・壁画内容などは安岳3号墳に類似することが指摘されている。

台城里2号墳は片袖式石室で、玄室内に二つの龕が設けられている。龕などの構造から1号墳より先行するであらう(図版9—17)。

#### ⑦ 肝城里蓮花塚(平安南道江西郡普林面)(図譜1)(図版7—9)

江西の東南東約10kmの地点に、「園山」という小丘があり、古墳はその頂部南端に立地する。墳丘は方台形で、前室・後室からなり、前室に龕が付設されている。玄室の天井は、平行（3層）・三角（2層）持送り式で、前室は2層の平行持送り式天井で、梁によって3区に画されている。

⑧ 安城大塚（平安南道南浦市龍崗郡龍崗邑，旧龍崗郡池雲面）（図譜1）（図版7—8）

古墳は丘陵上に立地する。後室と前室からなる。前室が発達し、幅は玄室よりも広くなっている。天井は3区画で、各天井は三角持送り式である。

⑨ 双楹塚（平安南道南浦市龍崗郡龍崗邑，旧龍崗郡池雲面）（図譜1，図鑑6）

安城大塚の東南約400mに位置する。石室は後室・甬道・前室・羨道からなる。前・後室間の甬道に巨大な八角形柱が立てられている。後室の天井は、平行（3層）・三角（2層）持送り式である。前室は後室の相似形をなす。

⑩ 徳興里壁画墳（平安南道江西郡）（朱榮憲ほか1981）（図版11—1）

平壤の西、約20kmに位置する。後室・前室からなる複室墳で、各室とも穹窿状に持ち送り、天井石を架構する。石室構造は、若干の差異はあるが、牟頭婁塚に類似する。石室の全面に壁画が描かれる。墨書に永樂8年（409）とみえる。寿陵の問題などもあり、墨書銘の年次が築造時期を示すとは限らないが、409年に埋葬が完了したことは確かである。壁画の構成内容は、墓主画像など安岳3号墳（冬寿墓）の系統にある。また地理的位置関係が、楽浪郡の故地に近接する。被葬者である鎮は、「□小大兄」の高句麗官位が授与されており、中国系渡来人であることはうたがない。楽浪・帯方郡の滅亡は313年であるが、427年の平壤城遷都以前の4世紀後葉～5世紀初の広開土王の時期には、この大同江流域は領有化されていたのであろう。

⑪ 江西三墓（平安南道南浦市江西区域三墓里）（図譜2，図鑑5・6）（図版11—9～11）

江西の西方約4km、「曠濶なる平野の中央にありて烏石山を右にし、舞鶴山を左にし、南井林山に當り、印徳山を北にし、地勢最景勝を占む」（関野1917）という立地条件である。大墓を中央にして、その西北95mに中墓、東北85mに小墓が並立している。

大墓は、墳径約52m・高さ約9mの円墳である。玄室・羨道からなる両袖式の単室墓である。花崗岩に切石を用いて積築する。玄室天井は平行・三角持送り式である。玄室に2基の棺床を配置する。羨道床面は、玄室床面より高い。玄室内は段となり、棺床の表面と羨道床面と同一レベルとなっている（図版11—10）。

中墓は、墳径約45.5m・高さ約8mの円墳である。玄室天井は2層の平行持送り式である。甬道・羨道の床面は約15cmほど低い。甬道・羨道の上に段差がみられるが、石扉のような閉塞施設のためのものであろう（図版11—11）。

小墓は、その墳径が約41m・高さ約7mの円墳である。両袖式石室である。玄室の長壁には2段の長大な石を積み上げている。天井は平行持送り式の変形で、交互に積み重ね、1層の三角持送りの後に切石で頂部を覆う（図版11—9）。



これらの三墓の石室構造を比較すると、大墓の平行持送り式天井がさらに小墓・中墓のように平行化が進むこと、中墓にいたっては低平化し、2層の平行持送り式天井となること、そして中墓のような甬道・羨道が肥大化・長大化することなどから、大墓→小墓→中墓に想定される。大墓が南に位置するから、その東側後方の小墓、さらに西側の中墓というように逆時計回りの築造順序が推定されるのである。

#### ⑫ 大宝面古墳群（平安南道大同郡安静里・西綺里）（小場恒吉1937）

平壤から西約20kmの山麓に位置する。大宝山（標高372m）から西の玉珂峯（標高192m）の南麓一帯は山塊にかこまれた小平野を形成している。その平野を単位とする政治的集団の葬地が大宝面古墳群といえる。江西三墓まで約8kmの距離にある。8基の古墳が分布する。調査の段階で、「各個の墳丘の雄大なる点」が注目され、発掘された。墳丘規模は2・7号墳が最大級で、4・5号墳、さらに1・3号墳となる。

大宝面2号墳は、東西28.1m・南北31.8m・高さ7.3mの方台形墳丘をもつ。両袖式石室で、玄室は東西1.8m・南北3.1mの規模である。その三壁は高さ約1.5m・厚さ0.11mの偏平な花崗岩板石が用いられている。天井構造は、2層の平行持送り、2層の三角持送り式である。のちにふれるように7号墳以外実測図は未報告である。4号墳は、東西22.7m・南北21.8mの方台形で、石室の天井は3層の平行持送り式、2層の三角持送り式である。5号墳は、東西22.7m・南北24.2m・高さ5.8mの方台形墳丘をもつ。石室は2層の平行持送り、2層の三角持送り式天井を形成し、玄室内に2つの棺台が設置されている。2枚の板石による閉塞がなされている。7号墳は、東西27.3m・南北33.3mの方台形である。1墳丘内に2室のある多室墓である（図版11-7・8）。東石室は1層の持送り、2層の三角持送り式天井である。棺台は1基で、花崗岩の板石である。西石室は2層の平行持送り式天井で、長形状の天井石を被覆する。棺床は1台である。他の石室のような、玄室内2体埋葬が、2石室1体埋葬に変化している。玄室天井の偏平化、平天井への移行などとともに新しい要素といえる。墳丘規模がいずれも一辺20mをこえ、平行三角持送り式天井の石室であり、古墳群が支配階層の墓域であることを示している。

#### ⑬ 保山里1号墳（平安南道南浦市江西区域）（朝考1987-2）

平壤市街の西南、棲鶴山（269m）の南麓、大同江右岸に位置し、江に面する丘陵上に立地する。玄室は長さ2.5m・幅2.2mで、壁面は高さ2.0mが遺存する。墓主画像などの人物風俗図・四神図が描かれている。石室の構造や壁画の構成は高山里1号墳と類似するという。高山里古墳群とともに平壤城に近接する地域にある壁画墳である。

#### (7) 龍崗（南浦市直轄市）地域

大同江の西方、江西区域の南に接する。旧龍崗郡の一部が南浦市として分離している。

#### ① 梅山里古墳群（平安南道南浦市臥牛島区域火島里、旧龍崗郡大代面）（図譜1、図鑑6）

鎮南浦の西北西の約10kmの丘陵上に位置する。周辺に20基以上の古墳が分布する。

梅山里四神塚（狩獵塚）は円墳である。片袖式石室で、平行（3層）・三角（2層）持送り式

天井である。この四神塚の墳丘規模に相当する古墳が3基ほど近接して存在する。なお東北方、約500mに星塚と龕神塚が位置する。

② 花上里古墳群（平安南道南浦市臥牛島区域新寧里，旧龍崗郡新寧面）（図譜1，図鑑5）

梅山里古墳群の西北約1500mの丘陵上に「十数基」の古墳群が分布する。

龕神塚は、その花上里古墳群中に存在する。正方形の玄室（後室）と長方形の前室からなる。玄室の四壁は持ち送られ、頂部のみを三角（2層）持ち送りする。前室の両側に龕が設けられている。北約20mに星塚が位置する（図版11-5）。

③ 星塚（平安南道南浦市臥牛島区域新寧里，旧龍崗郡新寧面）（図譜1，図鑑6）

花上里古墳群の北端に位置する円墳である。片袖式石室で、玄室は奥壁が長い矩形である。天井は、玄室四壁を持ち送り、3層の平行・2層の三角持送りをおこなう（図版11-6）。

④ 黄山南麓古墳群（平安南道龍崗郡海雲面）（関野1917・1930）（図版10-17~19）

龍崗郡邑の西北西約8kmに所在する。その黄山南麓には「数百基」の古墳が群在するという。黄山南麓三室塚は、方台形の墳丘に三室が東西方向に並列して構築されている。いずれも両袖式の石室で、玄室の平面形は奥壁の短い台形状を呈する。西室の玄室四壁は1枚の板石で、天井は長大な割石を用いて平行持ち送りする。中央室・東室も同様な構造である。

黄山南麓二室塚は、一長壁を共有して2室つくられたもので、四壁・扉石などすべて板石が使用されている。床面は割石敷である。黄山南麓七室塚は、楕円状の墳丘に3室・2室・2室が2~3mの間隔をおいて並列している。7室とも片袖式石室である。板石の使用や構築方法などは二室塚と類似する。第3室から短頸壺が出土しているが、7世紀代とみられる。板石材で構築する石室は高句麗末期のものといえよう。

⑤ 桂明洞古墳群（平安南道龍崗郡龍月面）（図譜2）

黄山の北約8kmの平野中に数基の古墳が確認されている。その1基である桂明洞古墳は、「玄室には漆喰を塗り、四隅に柱及び斗拱を赤色を以て描けるのみにて」とある。壁画古墳にほかならないが、朱栄憲1961などの壁画古墳地名表には掲載されていない。

⑥ 牛山里古墳群（平安南道南浦市江西区域）（歴科1987-2）（図版9-11~13）

1号墳は、玄室・甬道・羨道からなる両袖式石室で、玄室の形態は長方形である。天井は3層の平行、2層の三角持送りの平行・三角持送り式天井である。2号墳は、玄室が正方形をなす。天井は1層の平行持送り、2層の三角持送り式天井であるが、全体的に1号墳の石室と類似する。3号墳の場合は、細長の長方形玄室にやはり細長の羨道がとりつく。片袖式である。3基はいずれも壁画墳で、遺存状態は良好でないが、人物風俗画と四神図が主体である。3基の古墳の構造や壁画を検討して、牛山里1号墳は5世紀末、2号墳は5世紀後半、3号墳は5世紀中葉から後半に比定されている（安ピョンチャン1987）。

(8) 江東地域

大同江の東側、平城市から江東郡一帯の地域をふくめる。

① 漢王墓（慶新里1号墳）古墳群（平安南道平城市慶新里，旧江東郡馬山面）（図譜2，図鑑4）（図版5—7）

平壤市から東北に約11km，大同江の右岸の小丘陵上に立地する。「皇帝墓」と称されていたともいう。付近に18基の古墳群が分布する。「方形二層の基壇上」に築かれた，径約54m・高さ約12mの方台形の封土墳である。墳丘の表土から「一尺掘れば全部平瓦丸瓦巴瓦の破片を並べ葺きたるを発見すべし」（関野1914）状況であり，瓦片を「並べ葺き，以て雨水の内部に浸透するを防ぎたり」と推定されている（『図譜2』）。両袖式石室で，切石で構築され，天井は2層の平行持送り，さらに2層の三角持送りをおこなっている。羨道は7.4mの長大なもので，玄門および前室状空間に閉塞施設（扉）がある。羨道天井は1段高くなり，羨門が板石で閉塞されている。玄室には3基の棺台が配されている。玄室の上部に漆喰を塗り，壁・天井石材の目地に「石灰」を充填する（関野1914・1941）。墳丘規模は，大同江流域で最大である。しかも基底部に基壇積石塚の伝統が継承され，石室天井上部の裏込めに切石状の石材を使用する点など將軍塚積石塚を想起させる。墳丘上で出土した瓦は，平壤遷都直後の時期に比定されている（谷豊信1989）。

② 地境洞古墳群（平安南道平城市）（歴科1977—3，図鑑4）（図版9—15）

古墳は，プファン山麓にあり，丘陵上に2基が20mの間隔で立地する。1号墳は，羨道の両壁に龕のある両袖式石室である。玄室は長さ3.81m，幅3.52mで，四壁を割石積みで，いずれも持送り式である。石室規模は，高句麗の石室としては大形である。古墳の年代は，出土した鏡・土器などからみて5世紀中葉頃に想定される（東1988）。集安の万宝汀78号墳を共通する要素がつよい。薬水里古墳とともに，龕が伝統的に残存する石室形態といえる。

③ 晩達面古墳群（平安南道江東郡晩達面勝湖里）（野守健・榎本1938）（図版5—1～6）

古墳群は，晩達山麓に立地する。1917年に1・2号墳の2基，1927年に3号墳の1基，1937年に4～14号墳の11基が発掘されている。4号墳（野守・榎本1938）は円形状の墳丘をもつ。片袖式石室で，長方形の玄室は割石積みで，玄門部は甬道となり，板石で閉塞される。7号墳は2室が並列して築かれた多室墓である。2室とも右片袖で，袖側に割石積みの棺台が設置されている。5・8号墳も2室からなる多室墓である。10・13号墳も片袖式石室である。

## 6 載寧江流域

① 大青里古墳（黄海北道雲波郡大青里）（考資1）（図版10—22）

大青里1号墳は，1954年に発掘された。墳丘の東西が約25m，南北約26mの円墳で，片袖（左）式の横穴式石室である。玄室は，長さ2.5m，幅1.69m，天井までの高さ2.19mのものである。数段の平行持送り天井で，壁面には漆喰が塗られている。羨道の長さは2.25m，幅0.81m，高さ1.03mの規模である。玄室が長方形の単室墳であり，天井構造が平行持送り式であることから，6世紀以降の築造である可能性がつよい。なお『大正6年度古蹟調査報告』では，大青里に，石槨をもつ「長洞古墳群」の存在することが記述されている。

② 安岳1号墳（黄海南道安岳郡大楸里）（遺報4）（図版10—24）

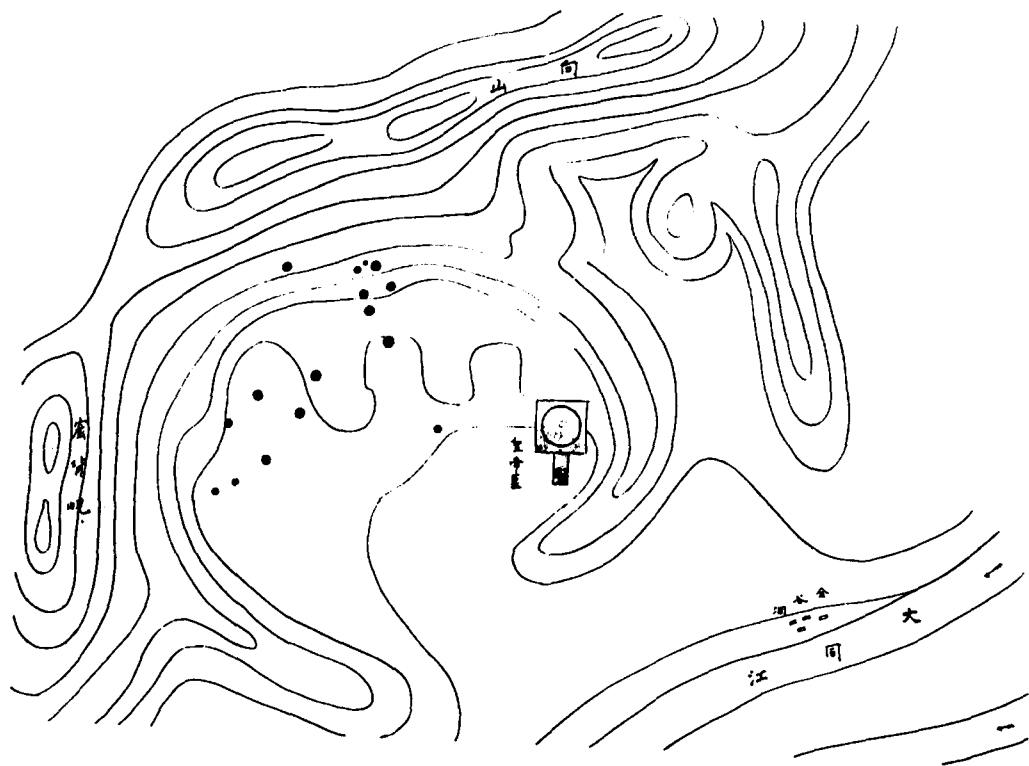
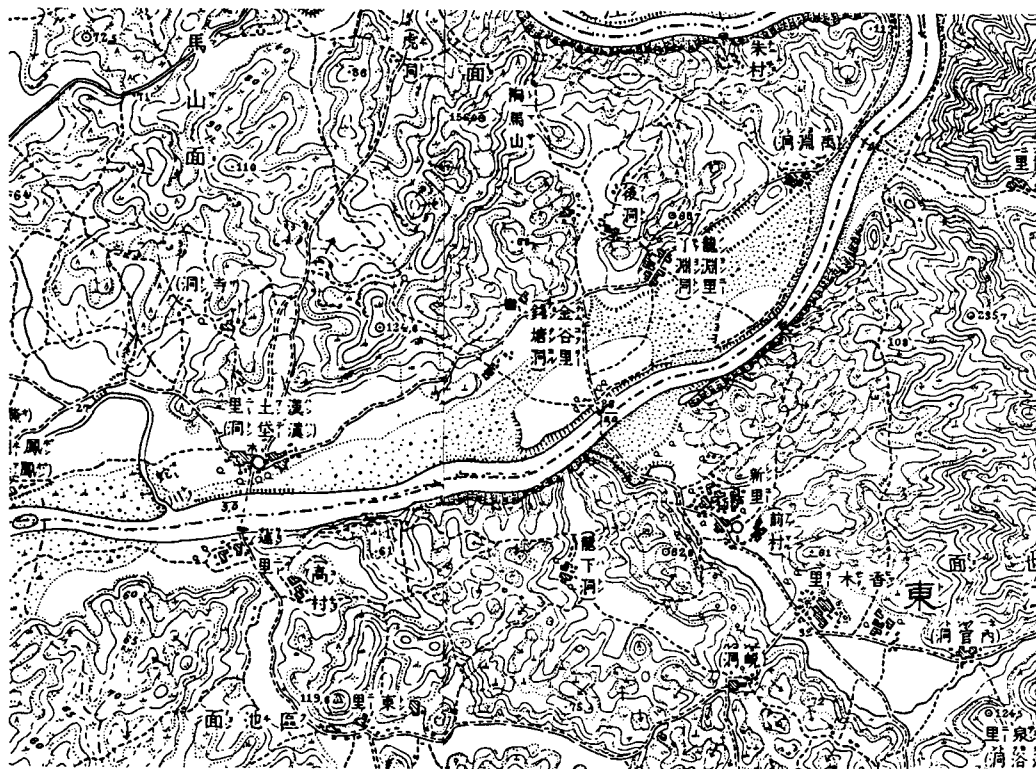


图10 漢王墓と古墳群

安岳1・2・3号墳は、載寧江の西岸、古靈山の東方の平野に所在する。1号墳は河岸段丘上に立地し、その北西約400mに2号墳が位置し、西南約5kmに3号墳が立地する。1号墳は、両袖式の石室で、平行（3層）三角（2層）持送り式天井である。玄門部と羨道部に閉塞施設がみられる。甬道は未発達である。

③ 安岳2号墳（黄海南道安岳郡大楸里）（遺報4，図鑑5）（図版10—26）

1号墳から北西の丘陵上に立地する。両袖式石室で、玄室天井は、2層の平行持送り、3層の三角持送り式である。框石・楣石などの閉塞施設が明瞭になっている。玄室と羨道を連結する甬道の役割をもつ。1号墳より新しい要素である。

④ 安岳3号墳（黄海南道安岳郡柳雪里）（遺報4，図鑑5）（図版10—25）

3号墳は、古靈山から流れる支流に沿う独立丘陵上に立地する。3号墳の墳丘からは、載寧江流域の広大な平野を眺望しえる。1・2号墳もまた遠望しえる位置にある。石室構造は、後室（玄室）を中心とした建築構造が表現され、棺を納める玄室の二面に左廊・後廊がめぐり、その壁面に行列図などの壁画が描かれる。4世紀中葉の段階で、すでに平行・三角持送り式天井の技法が採用され、石室内の柱などの建築手法は双楹塚などの石室に継承される。3号墳の被葬者は「冬壽」で、亡命後の永和13年（357）に築造されたのであろう。帯方郡一帯の故地に築造されたといえる。「楽浪侯」「昌黎玄菟帯方太守郡郷侯」としての冬壽の葬地であった。

⑤ 五局里古墳（黄海南道安岳郡五局里）（朝考1986—1）（図版10—21）

安岳3号墳の墳丘西辺の中央から北に寄る、墳端から数mのところ新たに発見された古墳である。安岳4号墳と命名された。石室の平面形態はT字形で、後室（玄室）は長方形で、天井は平行に持ち送り、さらに中央部のみ三角持送りをおこなう。特異な構造の石室であり、3号墳との近接性などから、その被葬者と密接な関係が想定され、人骨なども出土しないことから、「仮墓」と推定されている。この五局里古墳玄室の天井構造は安岳3号墳に類似し、平面形態は遼東城塚や遼陽付近の魏晋墓の系統にあることが明白である。安岳3号墳と同一時期に築造されたことはいない。

⑥ 月精里古墳（安岳郡月精里）（朝考1989—4）（図版10—23）

安岳郡の西北にそびえる九月山の東北方にある。石室は両袖式であるが、羨道は東側に偏る。玄室は長方形で、四壁は割石積みで、天井は平行・三角持送り式である。玄門には唐居敷の構造が遺存している。羨道・玄室に壁画が残存し、剝離した壁面の漆喰にも壁画痕跡が認められている。月精里古墳の周辺には、5～10基が群をなす古墳群が分布するという。

⑦ 坪井里古墳（安岳郡坪井里）（朝考1989—2）（図版10—20）

古墳の南約400mに安岳1・2号墳が位置する。これらに3基の壁画古墳は、ほぼ南北一直線上に立地するという。1号墳は、一辺21.4m・高さ3.2mの方台形墳で、片袖式石室をもつ。

⑧ 伏獅里古墳（安岳郡伏獅里）（考資3）（図版11—4）

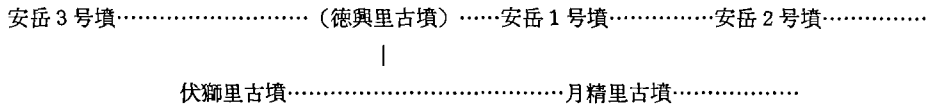
安岳郡の月岩山から北にのびる丘陵の南傾斜面に立地する。両袖式石室で、羨道の左右に龕が

ある。墓道はコ字状に広がる。玄門・羨門で二重閉塞される。玄室天井は穹窿式である。

⑨ 龍鳳里古墳 (安岳郡) (歴科1980-1)

安岳郡の月岩山という山の南方丘陵上に立地する。西南4kmに安岳1・2号墳, 「東南」約8kmに3号墳が位置するという。一辺約15mの方台形墳丘をもつ。

これら安岳郡内に分布する古墳群について, 松井忠春1983による考察があるが, その後発掘された古墳もふくめ, 前後関係は次のように想定される。

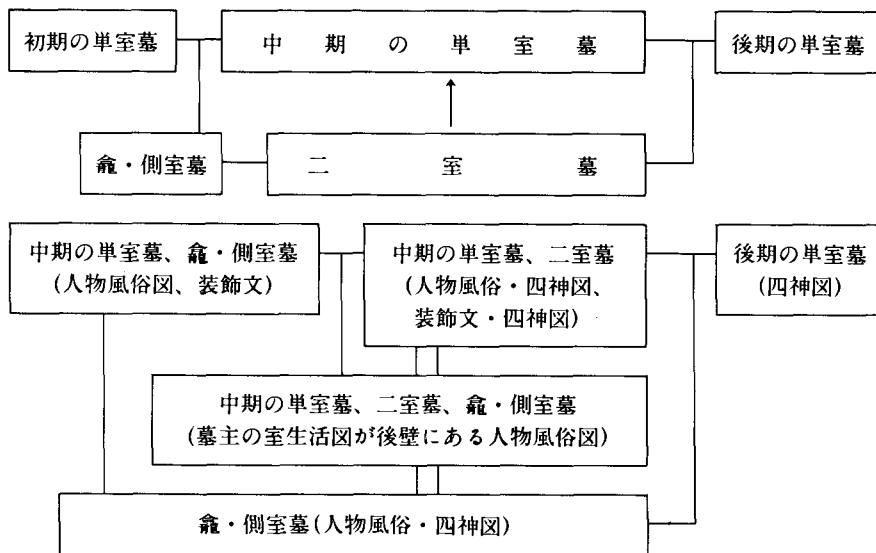


(2) 高句麗石室墳の形式分類と編年

1 高句麗石室墳研究抄史

まず従来の高句麗古墳の編年学的研究についてふれておきたいとおもう。これまでもっとも基本となるのは朱栄憲の一連の研究(1961・1962)である。

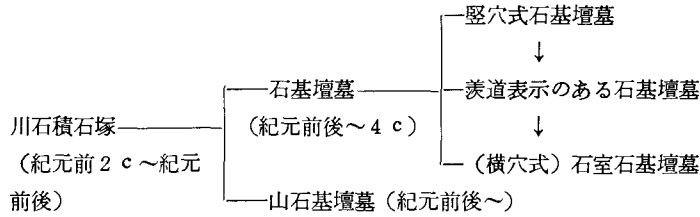
朱栄憲1961は, 石室構造を分析するにあたって, 墳丘・墓域施設, 墓室の築造資料・天井架構および壁面処理・位置・方向・内部施設・数など多岐にわたって検討したうえで, 壁画古墳の編年学的研究をおこなっている。



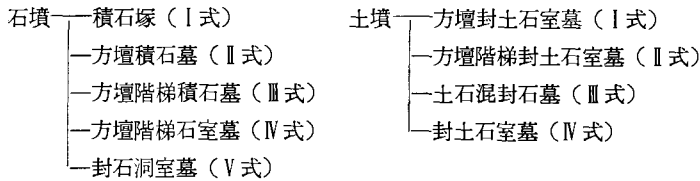
朱栄憲1962は, 積石塚を無基壇積石塚・基壇積石塚・槨室積石塚・墓室積石塚に分類する。これらの分類は, 1975年発刊の『高句麗文化』で継承されている。槨室積石塚は「竪穴式」積石塚に, 墓室積石塚は, 「横穴式」積石塚というように概念が明瞭になっている。無基壇から基壇に, 竪穴式から横穴式への変化である。石室封土墳の分類は, 朱栄憲1961とほぼ同じである。

鄭燦永(1974)は, 高句麗積石塚の型式分類をおこない, 3~4世紀代に埋葬施設が, 竪穴式

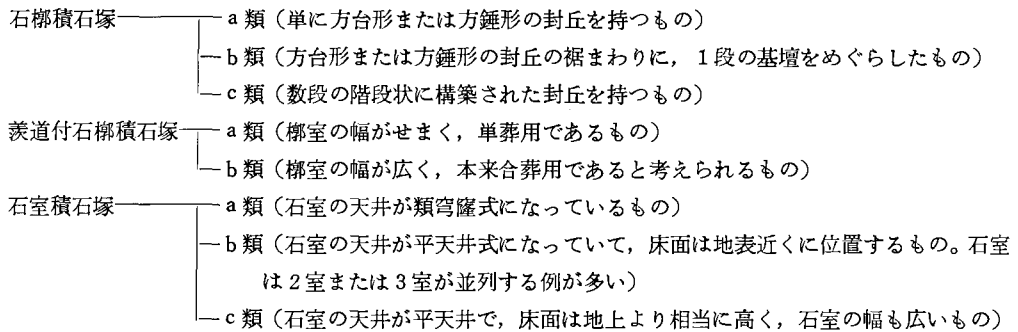
石室から横穴式石室に移行したととらえる。



李殿福1980は、集安の古墳を中心として次のように型式分類し、封土石室墓については、3世紀中葉ごろにすでに出現し、4世紀中葉から5世紀の中葉にかけて発展し、6世紀中葉に高句麗墓制の主流となるととらえる。万宝汀1368号墓・角抵塚・舞踊塚などの壁画墳を「早期」に分類し、壁画内容から西晋時期（3世紀中葉から4世紀中葉）に比定している。中期は4世紀中葉から5世紀中葉、晩期は北朝末年、5世紀中葉から6世紀中葉に想定する。



田村晃一1983は、積石塚の「内部施設の変化に基準を置いて分類」する。



石室積石塚 a 類として、有龕塚・四阿天井塚・折天井塚などが該当し、その築造時期は「おそくとも3世紀末から4世紀前半頃」に推定されている。石室積石塚 b 類は七星山96号墳や大高力墓子43号墳などで、96号墳の年代である5世紀前半～中頃（小田富士雄1979編年による）に位置づけられている。石室積石塚 c 類は將軍塚・太王陵などで、その年代の一端は両古墳のいずれかが広開土王に比定されることから、4世紀末から5世紀初と考えられている。つまり石室墳の成立時期、石槨積石塚から石室積石塚への転換は3世紀末から4世紀初頭に推定されている。

陳大為 1960は、桓仁地域で発掘された高句麗墳墓について報告しているが、その後、陳大為 1981は、あらためて高句麗積石墓の年代とその変遷について論じている。積石塚を3類型にわけ、その年代について論じている。とくに「階台式」という用語は、陳大為分類に限られている。

- 1 円丘式積石墓 (上限は後漢, おそくとも後漢から魏にかけての時期より下らない)
- 2 階台式積石墓 (魏以前の時期)
- 3 階台式石室墓 (魏晋代)

柳嵐・張雪岩1984は、1976年に発掘された集安の古墳188基 (禹山墓区56基・山城下墓区37基・七星山墓区26基・麻線溝墓区69基) を分類している (図2—14~24)。188基のうち、積石塚は3基、その他は封土墳であった。従来、資料的制約などから積石塚や壁画墳の研究に重点がおこなわれてきたが、いわば185基におよぶ非壁画墳の発掘は皆無であった。それらの分析がなされているが、発掘された古墳のすべてにわたる報告ではない。将来の報告をまちたい。

— 単室墓 (73基)	— I 式	玄室平面が片袖式。平天井。玄室 (200cm未満・幅150cm・高さ100cm) 14基 (山城下331号墓など)
	— II 式	片袖式。平行持送り天井14基 (麻線溝1479号墓など)
	— III 式	玄室平面両袖式。切石状の加工割石使用。平行持送り天井 4 基 (234号墓など)
	— IV 式	片袖式。三角持送り天井20基 (325号墓など)
	— V 式	両袖式。三角持送り天井21 (基840号墓など)
— 双室墓	— I 式	無袖式。墓室・墓道に界線なし。平天井 1 基 (禹山墓区678号墓など)
	— II 式	無袖式・平天井, 片袖式・持送り平天井 4 基 (733号墓)
	— III 式	片袖式。割石・板石敷石。持送り天井 3 基 (禹山墓区711墓など)
	— IV 式	両袖式。持送り式天井。加工石材の使用。白灰塗付 1 基 (麻線溝墓区1440号墓など)
	— V 式	片袖式。三角持送り天井 8 基 (麻線溝墓区1437号墓など)
	— VI 式	両袖式。三角持送り天井 8 基 (麻線溝墓区705号墓など)
— 三室墓 (2基)	— I 式	両袖式・片袖・片袖, 持送り天井 1 基 (麻線溝墓区1445墓など)
	— II 式	三室片袖式。持送り天井・三角・三角持送り天井。加工石材・白灰塗付)

緒方泉1985は、四耳壺を中心とした高句麗土器の編年を試み、その共伴関係から古墳の変遷を次のようにとらえている。

- I 期 (4 世紀前半) は、集安地域における横穴式石室の導入時期。片袖式方形プランの平天井玄室と羨道からなる単室墓で、壁画が認められない時期。山城下152・176・195号墓など。
- II 期 (4 世紀中葉から 4 世紀末葉) は、竈、側室を有し、玄室が穹窿天井の内部構造のもの。四神図がなく、主人夫婦図が奥壁に描かれる。万宝汀1368号墓・麻線溝 1 号墓・禹山下41号墓など。
- III 期 (5 世紀初頭) は、持送り天井が登場。竈、側室を有する単室墓で、玄室内に雲文、蓮花文など装飾文のみを描く。長川 2 号墓・山城下332号墓など。
- IV 期 (5 世紀中葉～5 世紀後半) には、初現的な四神図が登場。単室墓と多室墓が併行する。山城下983号墓・三室塚など。
- V 期 (6 世紀前半) は、四神図が玄室四壁に配置され、切石使用。単室墓。五塊墳 4・5 号墳。
- IV 期 (6 世紀後半) は、壁画が描かれなくなる時期。禹山下1080号墓, 山城下1411号墓。

魏存成1987は、積石塚を中心として、墳丘・石室の構造を類型化し、5 段階にわたる墓制の変遷をとらえる。

- 無壇石壇墓 (上限は高句麗政権の建立<紀元前37年>で、下限は 5 世紀)
- 方壇石壇墓 (おそくとも後漢初年をくだらない時期)
- 方壇階梯石壇墓 (上限は方壇石壇墓と基本的に同時期で、下限は 4 世紀以後)



表1 高句麗石室の分類

	石室の平面形態	羨道形態	天井架構
A類	単室墓（玄室+羨道）（Ⅰ類）	右片袖式（R）	持送り天井（A）
	同墳同壙多室墓（単室墓連接型Ⅰ-1亜類）	左片袖式（L）	穹窿天井（B）
	同墳異壙多室墓（単室墓並列型Ⅰ-2亜類）	両袖式（C）	三角持送り天井（C）
	単室墓（玄室+甬道+羨道）（Ⅱ類）	無袖式（N）	平行持送り天井（D）
B類	有龕単室墓（Ⅲ類）		三角・平行持送り天井（CD）
C類	有側（耳）単室墓（Ⅳ類）		折（四阿）天井（四壁持送り天井）（E）
D類	複室墓（前室+甬道+後室+羨道）（Ⅴ類）		平天井（F）
	同墳異壙双室墓（Ⅴ亜類）		

## 方壇石室墓

方壇階梯石室墓（上限は3世紀末～4世紀初，下限は5世紀）

東1988Aは、集安における壁画古墳の石室構造の変遷についてふれたもので、とくに耳室・前室の発達に着目して、それらの変遷過程をとらえた。朱栄憲1961の、龕・側室墓から二室墓への変遷過程を詳細に論じたものになっている。なお古墳の年代に関しては、李殿福・緒方泉前掲論文と若干の差異がある。

- Ⅰ類型……羨道に小規模な龕がとりつくもの。穹窿状天井・平行持送り天井・平天井式（山城下332号墳・同983号墳・通溝12号墳・長川2号墳）
- Ⅱ類型……龕が発達して、側室に変容したもの。側室頂部が羨道天井よりも高くなったもの。側室が独立した天井構造をもつ段階。穹窿状天井式（麻線溝1号墳）
- Ⅲ類型……羨道両壁の龕・側室が前室として一つの室を形成する段階のもの。三角・平行持送り天井（舞踊塚・角抵塚・散蓮花塚）
- Ⅳ類型……天井構造・平面形が後室に匹敵するほどに発達する段階のもの。平行、三角・平行持送り天井（徳興里古墳・長川1号墳・牟頭婁塚・三室塚）
- Ⅴ類型……前室・後室が分離して、各々単独の石室を形成する段階。天井構造においても、多層の持送り式天井にかわって、数層の切石使用の天井が発達し、平行あるいは三角・平行持送り天井が主流になる。

これらは、基本的にⅠ類型からⅤ類型に変遷する。すべてが一元的に変化するのではなく、時期を重複しながら変遷する。東1988Bは、高句麗の遺物の編年を意図したもので、早期（3世紀）・前期（4世紀）・中期（5世紀）・後期（6世紀）・晩期（7世紀）に区分した。帯金具の型式変化から、絶対・相対年代を想定し、編年を試みた。孝民屯墓・袁台子墓の一括遺物の年代観も考察している。

以上のように、高句麗の全土にわたって、横穴式石室墳の実態を概観してきたのであるが、諸先学の研究成果にもとづき、石室の平面形態・羨道の形態・天井架構法を基準として、分類することにする。それらの諸要素が組みあわさりながら、変化発展する。

ここで「甬道」と称したのは、玄室と羨道をつなぐ通路であり、閉塞の空間（楣石・框石・扉石）でもある。その出現の要因は複室化であったと推測される。両袖・片袖式をとわず、羨道の取り付き方に相違がみられる。甬道の有無は石室の発展過程を示唆している。甬道の出現は龕・

側室、前室の形成と不可分の関係にある。それらの前室が縮小・消滅する過程で甬道の痕跡がのこったと解釈されるのである。したがって「単室墓」も初期のものからの継続だけでなく、新しい段階に成立したものもふくむのであろう。その目安が甬道の有無である。

## 2 高句麗における横穴式石室墳の出現

高句麗においては、安岳3号墳にみられるように、4世紀中葉には確実に横穴式石室墳が成立している。その石室構造の系譜は、山東省から遼寧省にかけての環渤海の地域にもとめられ、とくに遼東の地域と密接な関係がみとめられる(岡崎敬1964)。

安岳3号墳は、高句麗石室のすべての祖型ではなく、いくつかの系統がみられるのである。そうした系統関係を、石室構造の面から想定したのが図15~17である。

佟利墓は、「永和九年」銘出土の塼室墳であるが、塼の焼成・墓室の築造時間など考慮すべきであるが、墓はおそらくとも永和9年に築造が開始され、佟利はほぼ同時期に埋葬されたのであろう。この塼室墳は、楽浪・帯方郡以来の伝統的な墓制で、楽浪や帯方郡の故地である平壤や黄海北道鳳山郡一帯で存続した墓制であり、4世紀後半には衰退する。平壤駅前壁画墳は、塼を石材に変えたいわゆる磚室墳である。また龕をもつ。平壤付近では、4世紀中葉の段階まで佟利墓(353年)のような塼室墳が築かれている。

平壤城遷都が長寿王15年(427)であり、その平壤城は大城山城と清岩里土城が想定され、平原王28年(586)遷都の長安城は今日の平壤城に比定される。佟利墓・平壤駅前二室墳もいわゆる都城内に築造されている。長安城遷都は平原王12年(586)である。これらの塼室墳系統の古墳は、平壤城を中心とした大同江流域に存在する。集安地域でそうした構造の墓は未発見である。平壤遷都以前の、大同江流域の政治状況をうかがうことができよう。

高句麗において、横穴式石室は4世紀初頭頃には成立している。積石塚の埋葬施設が竪穴式石

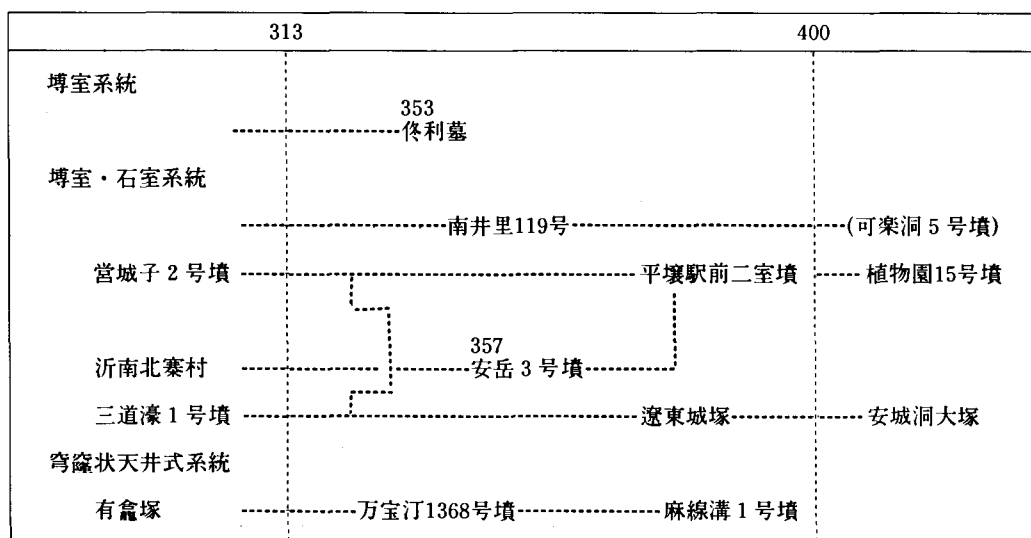


図11 高句麗初期横穴式石室墳の変遷

室から横穴式石室へ移行している。平壤の楽浪地域において、平壤南井里119号墳や貞栢洞101号墳（李淳鎮1990）などの横穴式石室墳が発掘されている。南井里119号墳の石室構造と集安の石室との系統関係は稀薄である。南井里119号墳は4世紀前半、おそらく楽浪・帯方郡滅亡（313年）前後の時期と推定される。

集安一帯において、羨道に龕を有する古墳は、有龕塚・舎長里1号墳・山城下983号墳・山城下332号墳・長川2号墳などがある。集安以外の地では、渭原舎長里1号墳のように、羨道に両側室（龕）についた石室で存在するが、集安の山城下983・332号墳の石室構造に類似し、4世紀後半の時期と推定される。これらの龕を有する古墳は、平壤遷都後にも台城里2号墳などのように大同江流域でも築造されている。

遼東城塚石室の平面形態は、遼陽三道壕1号墓など、遼東地域に分布する魏晋代の墓室を継承している。楽浪・帯方郡の故地には、357年に安岳3号墳（冬壽墓）が築造されているが、それらの墓室の影響を受けたものである（岡崎1964）。

集安では、山城下1368号墳や山城下332号墳が初期の石室墳と考えられる。山城下332号墳は、副葬品から4世紀中葉に位置づけられ、有龕塚は、石室構造からみるとさらに古い様相をもつ。

### 3 鴨緑江流域における横穴式石室墳の変遷と発展

石室編年の基準からみて、高句麗の石室封土墳（石室墳）の出現は4世紀初めごろであろう。

集安の古墳群で、壁画墳における三角持送り式天井の出現は、4世紀後葉から5世紀初めの山城下983号墳であり、その他では単室墓Ⅳ・Ⅴ式に採用されている。三角持送り式天井という構築技法は、すでに4世紀中葉の安岳3号墳にみられる。山城下332号墳（4世紀中葉）・徳興里古墳の年代（409年）・牟頭婁塚の年代（5世紀中葉）を基準として、あらたに作成したのが、図版12の変遷図である。いずれも埋葬年代である。

集安には、膨大な古墳が分布するが、壁画墳は20基にすぎない。いっぽう「方壇階梯石室墓」（李殿福1980）もまた20基ほどであるが、それらの積石塚には壁画墳は未確認である。したがって今日知られる壁画墳は、いずれも石室封土墳といえる。そのほか数千基以上の石室墳が存在する。いずれも4～7世紀にかけて築造されたものである。石室積石塚の伝統が5世紀前半代の將軍塚・太王陵に継承され、そのいっぽうで4世紀中葉以後に壁画墳として発達しているのである。5世紀前半まで両様式の石室が共存する。高句麗の王陵は、427年の平壤遷都を契機に積石塚から石室封土墳に移行したのであろう。

通溝一帯の「大小無数の石塚の内、東崗の太王陵・將軍塚・臨江塚・西崗の北大陵（溫和堡中大塚）・南大陵（西大塚）・麻線溝の千秋塚・西大塚の7基」は、切石積み階段積石塚の巨石墳であり、一定の墓域があり、陪塚群を配置することなどから、王陵級の墓であることが指摘されている（藤田1940）。これらの大形積石塚の規模は、太王陵（一辺約60m）・臨江塚（約60m?）・西崗北大石塚（約38m）・西崗南大石塚（約35m）・將軍塚（約31m）で、千秋塚・西大塚など一部をのぞくと、他は25m以下の規模である。したがって積石塚のばあい、20mをこえるものは大

4 C前葉	4 C中葉	4 C後葉	5 C前葉	5 C後葉
110号墳 (有竈塚)	----- 千秋塚-----	太王陵-----	將軍塚-----	禹山下41号墓
		四阿天井塚		
		折天井塚		
----- 万宝汀-----	山城下-----	麻線溝1号墳-----	舞踊塚・角抵塚---	三室塚
1368号墳	332号墳			
		通溝12号墳-----	長川2号墳	
	麻線溝1440号墳-----	234号墳---	840号墳---	678号墳
	---舎長里1号墳-----			
	-----桓仁高力墓子村古墳群-----			

図12 鴨緑江流域における古墳の変遷

形といえる。ここでは30m以上の積石塚を「巨大積石塚」と称することにする。

また「土築王陵」として、西崗51・62号墳・五塊墳・四神塚とその一群・通溝城東北の山麓(「兵舎背面」)の大塚をあげるが、集安以外でそれらの巨大墳に匹敵するのが、漢王墓・湖南里四神塚・三墓里三墓(江西大墓・中墓・小墓)の5基をあげる。

天井構造においては、藤田亮策 1940 が「四方持送隅重式石室」と命名した石室は、「高句麗の古墳の特有にして最も進歩した構造」である。つまり「四隅に大きな平石を三角に積出して小さい方孔となし、其方孔の四隅に再び平石を三角に重ねて最後に頂上に大石を覆ふたもの」を典型とする。江西三墓・通溝西崗61・62(=五塊墳5号墓)・230号墳、梅山里壁画墳などの古墳である。つまり三角・平行持送り式天井構造の石室である。この構造は、357年築造の安岳3号墳にみられるのであるが、山城下983号・散蓮花塚・三室塚・牟頭婁塚・東明王陵などをへて江西大墓に継承される。まさに高句麗特有の石室構造である。集安一帯では、4世紀代の王陵級古墳、巨大積石塚の石室に壁画が採用されていない。このことは、高句麗における壁画墳の成立の様相をものがたっている。安岳3号墳や徳興里古墳の被葬者の階層・出自と関係があろう。とくに409年に築造された徳興里古墳と將軍塚は同時期の古墳でありながら、異なる系統の墓制である。

ところで高句麗の積石塚は、鴨緑江流域とその支流である渾河・禿魯江、清川江流域から南にくだって漢江流域に分布する。国内城時代の3～4世紀代にかけてその分布が拡大し、大同江流域の大城山一帯に波及する。それは高句麗の領域の広がりを示すのであろう。4世紀後半には基壇積石塚が発達した。4世紀末から5世紀前葉の広開土王の時期には、太王陵・臨江塚などのような巨大積石塚が造営されたが、その築造は王都集安の地にかぎられていた。一辺20mの積石塚となると、桓仁高力墓子村、鴨緑江右岸の楡林大高力墓子、左岸の涓原舎長里古墳、清川江流域の龍湖里古墳群で築造されている。とくに龍湖里1・3号墳は、3段から4段築成の基壇積石塚で、集安の遠隔地における大形積石塚として注目される。高句麗の地方支配、王都からの地方への集団移住といった問題とかかわる可能性があろう。

いっぽう花崗岩切石を積築した將軍塚類型の石室は、5世紀前半において卓越した存在であった。將軍塚は、玄室の長幅が5.34m・高さ4.75mという規模で、3mをこえる石室は大形に属する高句麗石室墳にあってその隔絶性は広開土王陵ならではである。

將軍塚石室は、集安における前段階の墓制である四阿天井塚や折天井塚、直接的には太王陵の系譜上にある。麻線溝1号墳は4世紀後葉に位置づけられる有龕穹窿天井の石室であるが、將軍塚石室の前段階とはいえない。未調査である臨江塚などの埋葬施設の構造が問題になるが、系統上將軍塚石室は長寿王が好太王碑文とともに創出した巨石物であった。碑文の建立は414年であった。將軍塚の築造の開始時期は定かでないが、碑文には守墓人の烟戸（国烟・看烟）330家を諸城から徴発したという。それらの諸城は、征服された高句麗領域内にあった。守墓人は古墳築造の技術者・労働力ではなく、「広開土王の陵墓を守護するために高句麗領域の各地から徴発された烟戸」であった（武田幸男1989）。碑文は広開土王没後の翌年に建立されたのであるが、その碑文には築造過程については記されていない。將軍塚のような巨大積石塚の造営は短期間になしえないことは確かである。ただ寿陵か否かの検討は要するであろう。

4世紀末から5世紀前葉にかけての広開土王代の領域内で、高句麗文化はどのようにのこされているのであろうか。その政治的領域は、北は遼河流域、南は小白山脈をこえ、慶尚南道の加耶・新羅の地に及んだ。遼東の地域には高句麗山城が分布し、高句麗の領域拡大過程と重なりあう。墓制では、遼寧省本溪墓のような在地的な石槨墓に、高句麗と東晋の文物が共存した例がある（東1987）。新羅や加耶の諸地域では、装身具・武器など高句麗の文物が出土し、その影響が直接・間接的におよんだことが知られる（東・田中1988）。とくに5世紀前半代の慶州への軍事的支配の過程で、高句麗文物が贈与・交換されたことは、皇南大塚北墳・天馬塚などの副葬品から明らかである。4～5世紀の高句麗墓制は積石塚から石室封土墳に移行する段階にあり、広開土王代に支配者層は巨大積石塚を築造していた。そうした積石塚や横穴式石室という墓制の伝播は生じなかったが、積石という構造は伝わり、新羅独自の積石木槨墳が出現したのである。

漢江流域に分布する積石塚は3～4世紀に位置づけられる。石村洞4号墳のような基壇積石塚は、高句麗においては中・下層階層の墓制であり、戦争・領域支配における集団移住・墓制の伝播の一端を示す。

#### 4 大同江流域における横穴式石室墳の変遷と発展

平壤城時代の古墳は、主として大同江流域に分布する。集安における石室墳の編年基準を適用して、想定したのが図13である。古墳群の時期的・地域的変遷過程を明らかにすることによって、古墳分布の意義などについて考察したいとおもう。

平壤遷都以後、大同江流域において古墳群の築造が本格化する。高句麗王族の墓制が、巨大積石塚から石室封土墳へ移行し、王・王族墓に壁画が受容されはじめた。長寿王の政治権力と墓制の変革は不可分の関係にあり、遷都はそれらをより促進させたのであろう。

つぎに長寿王の国内城時代（413～427年）における、高句麗の身分制と墓制との関係、墓制の

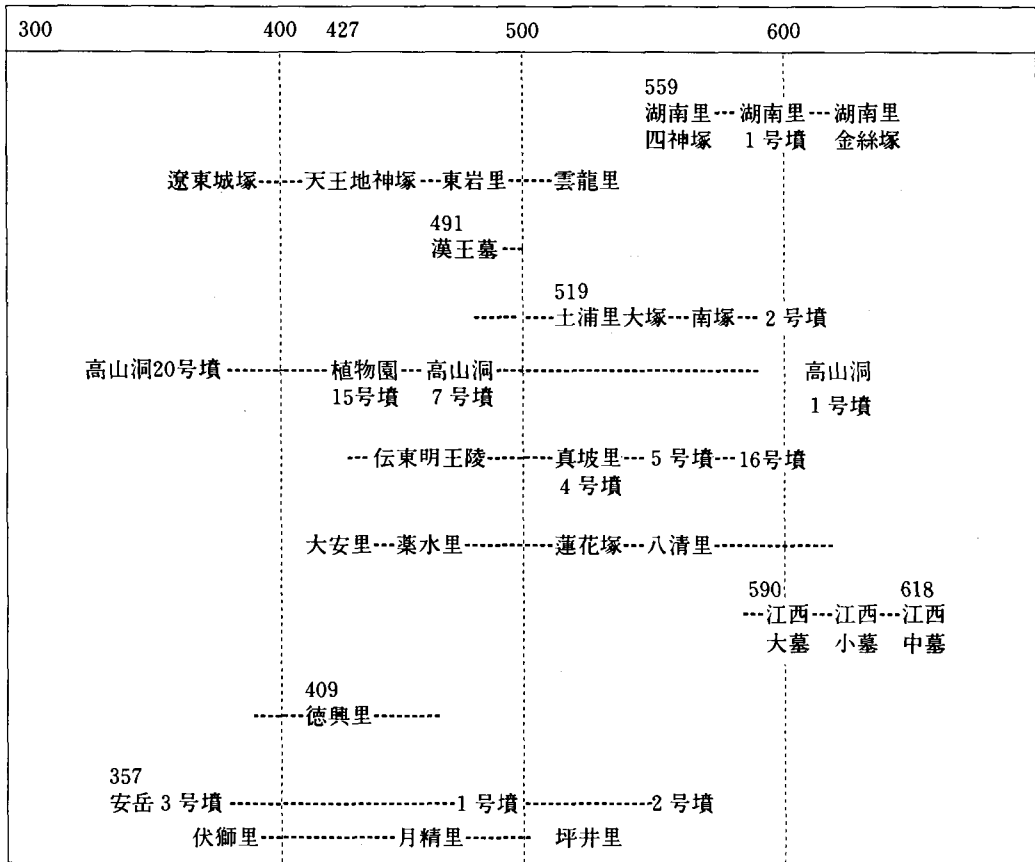


図13 高句麗古墳の地域的変遷

表2 高句麗の官位と古墳

官 位		古 墳	官 位		古 墳
第1位	大対慮	長川2号墳 舞踊塚 角抵塚 天王地神塚 龕神塚 德興里古墳 牟頭婁墓	第7位	大兄	麻線溝1440号墳など
2位	太대兄		8位	褥奢	
3位	烏拙		9位	上位使者	
4位	太대使者		10位	小使者	
5位	位頭대兄		11位	小兄	
6位	대使者		12位	諸兄	
		13位	先人		

階層性的問題についてふれておきたい。

平壤の西方に位置する德興里古墳は、永樂8年(409)に築造された鎮の墓である。鎮は「□小大兄」という高句麗固有の官位をもつ。それは、官位十三等の「第七位の大兄」に該当する(武田1989)。また同一構造の石室の牟頭婁塚の主人公である牟頭婁ないしその一族の官位は「大兄」・「대使者」で、やはり第七位・第六位の官位であることが推定されている(武田1989)。そ

うした階層の墓制が二つの石室にはかならない。5世紀前半代における高句麗墓制と階層との関係を具体的にとらえることができる。

5世紀の前半、長寿王の時世においては、王を頂点とした階層制が形成され、それは高句麗の官位制にうらづけられていた。墓制の面からみると、將軍塚（広開土王陵）を頂点として、第6・7位階層の墓制が徳興里古墳や牟頭婁墓であったのである。5世紀前半における第1位から第5位の上層階層の墓は、集安では長川2古墳、大同江流域では天王地神塚・龕神塚などの平行持送り天井構造のものと推定される。

伝東明王陵の石室は、甬道のつく有龕石室で、四壁にはすでに切石が使用されている。將軍塚や長山洞2号墳などの石室をもとに発達した。5世紀第2四半期に編年される。また漢王墓は、甬道のない両袖式石室で、平面形態など將軍塚に類する。三角持送り式天井も採用されている。

平壤を中心とした地域に、定型化した石室墳が分布する。その特徴は下記のとおりである。

- ・単室墓で、玄室・甬道・羨道からなる。
- ・両袖式石室で、羨道は玄室に対し直交するもの、斜方向のもの（斜道）がある。
- ・石室壁体は切石積みを基本とする。
- ・平行・三角持送り式天井で、2層ないし3層の平行持送り・2層ないし3層の三角持送りを基本とする。

これら諸要素の、とくに平行三角持送り式天井の単室墓が平壤城を中心として分布することから、「平壤型石室」として設定する（図14）。平行・三角持送り式天井で、片袖式の石室を平壤型壺式と称する。平壤型石室は次の諸古墳群に存在する（図15）。

- ・鴨緑江・洞溝古墳群（山城下1411号墳＝壺式）
- ・清川江・龍湖洞古墳群（2号墳）
- ・大同江・大城山一帯古墳群
  - 湖南里古墳群（四神塚・金絲塚・1号墳） 内里古墳群（1・2号墳）
  - 土浦里古墳群（大塚・南塚・1～3号墳） 植物園地域古墳群（14号墳）
  - 大宝面古墳群（2～5号墳）
  - 普林里古墳群（8号墳＝壺式）
- ・中和郡一帯古墳群
  - 真坡里古墳群（1～7・9号墳） 雪梅里古墳群（11・12・13・14・15号墳）
- ・江西一帯古墳群
  - 江西三墓（江西大墓・中墓・小墓）
- ・載寧江・安岳一帯古墳群
  - 安岳古墳群（1・2号墳、月精里古墳）

平壤型石室の上限時期を画定する際、土浦里大塚の築造年代が問題となろう。土浦里大塚の長大な羨道や玄室構造が、將軍塚や伝東明王陵の石室構築の系統にあると推定されるからである。

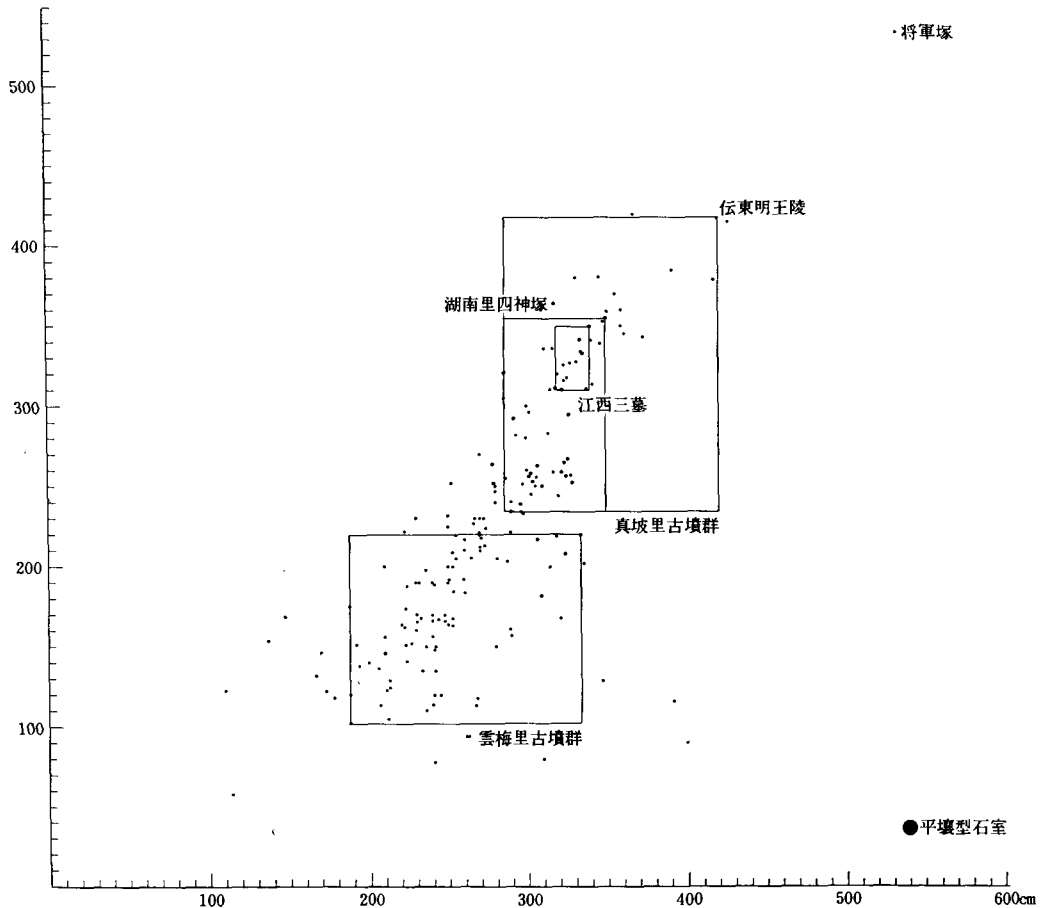


図14 平壊型石室

その土浦里大塚で出土した四耳壺は前述のように5世紀末から6世紀初めごろに推定した。

平壊型石室の玄室規模を検討する。真坡里古墳群では、4号墳が最大規模で、1・5～9号墳の6基、2・3号墳の2基の一群にわけられる。さらに非平壊型の10・16号墳の小規模の石室も存在する。「高麗尺」(1尺=35cm)で換算すると、10尺(10尺)・9尺(8.7~9.4尺)・8尺(8.3~8.4尺)という差異が指摘される。古墳群で時期差が想定されるが、看過できない点である。また近在する雲梅里古墳群では、12・13号墳のみ真坡里古墳群の第2群にふくまれる。11号墳も長幅を逆にすると第2群に属する。そのいっぽう天井構造が平行三角持送り式でありながら、片袖式石室の14・15号墳は玄室長では第2群(9尺)に属する。伝東明王陵のばあいは、南北421cm(12尺)・東西418cm(11.9尺)で、約12尺の玄室規模である。したがって同一古墳群では、4号墳が第2の規模といえる。1尺程度の差が築造技術にどれほど影響をもたらしたか問題となる。持送り天井のばあい、すくなくとも1段分のちがいがあがる。平壊型石室は、平行2層三角2層の持ち送りが基準であるので、それだけ使用する石材の数・量が大きくなることを意味する。

古墳群間で比較すると、真坡里4号墳・江西小墓・湖南里四神塚・龍湖洞2号墳は第1群に含



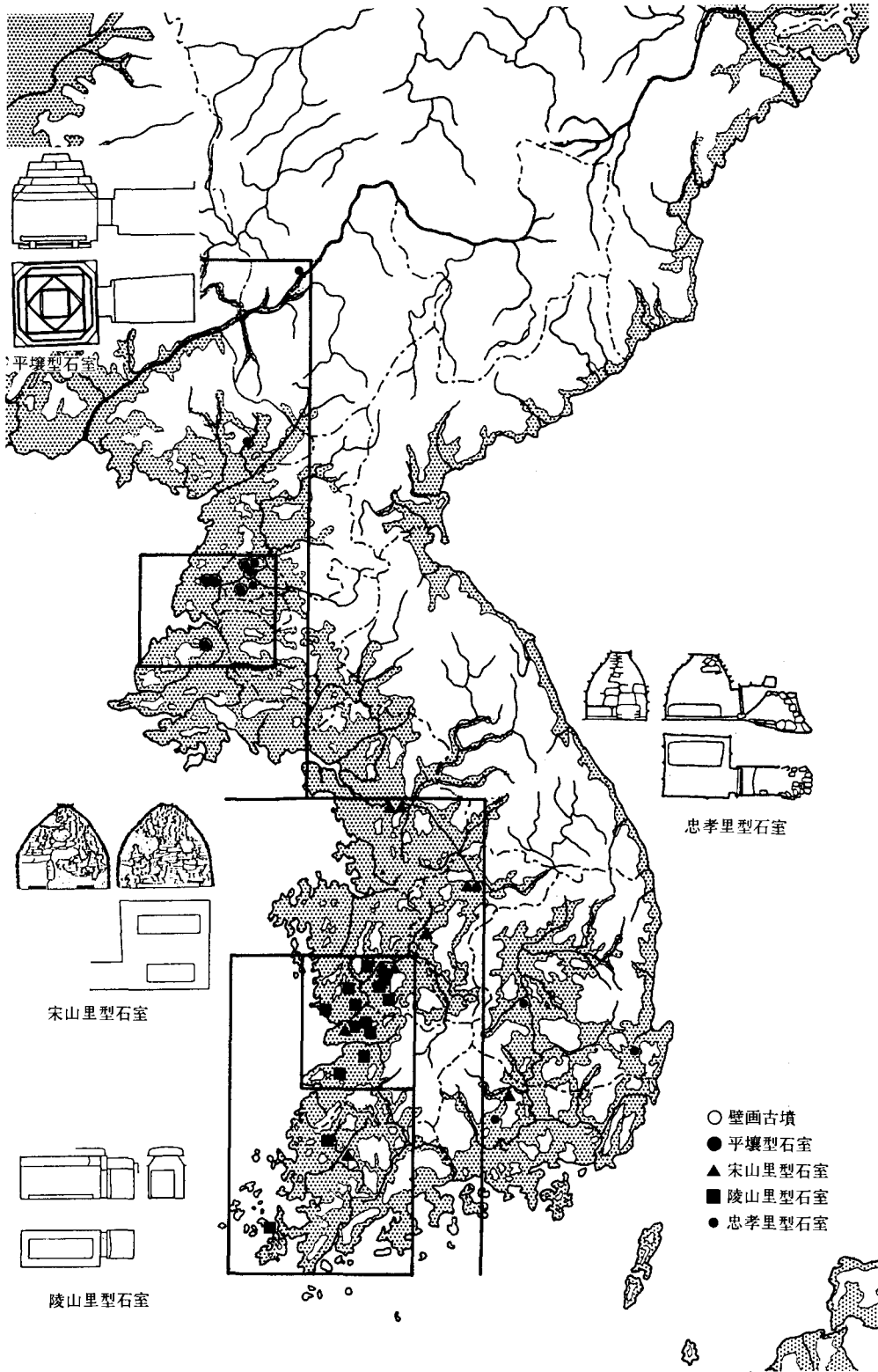


図15 平壤型・宋山里型・陵山里型・忠孝里型石室の分布

まれ、高句麗墓制のなかできわだった存在であったことをものがたる。

平壤型石室は、6世紀代に発達し、各地で構築されるのであるが、分布の中心は、大城山東方の湖南里・内里・土浦里古墳群と、真坡里古墳群である。これらの古墳群は、平壤城・長安城時代の王族・官人層の葬地であったと推定される。平壤型石室のなかで、真坡里1・9号墳のように壁画の描かれた石室は、上位の階層の墓であったのであろう。5世紀末以降の高句麗支配層の墓制の画一性の背景に、官位制に象徴されるような政治機構が確立していたのであり、官位に応じて石室規模が規制されたのであろう。

大城山一帯では、土浦里古墳群・内里古墳群・湖南里古墳群に限定される。土浦里古墳群や内里古墳群では、発掘され、構造の明らかな石室はいずれも平壤型である。真坡里古墳群と同様の性格をもっている。

そのいっぽう高山里古墳群では、平行・三角持送り式天井構造で、墓道が台形状に開く石室が発達する。通溝四神塚・五盃墳4・5号墳・高山里1号墳・湖南里四神塚などである。この類型を「高山里型石室」と類型化することにしたい。これらに共通するのは、四神図・装飾文を主体とした段階の壁画墳であることである。これらの石室は、王族ないしは「大対慮」をはじめとする上位5等の官人層の墓であろう。とくに湖南里古墳群では、同類型の大形石室墳が群在するが、湖南里四神塚は石室規模や壁画内容からみて卓越している。古墳群の数からみても2世代以上の変遷が想定され、支配者層の墓域であることはうたがいない。

平壤型石室は、大同江から清川江流域の限定した地域に分布する。とくに大同江流域に集中する。東方は大同江流域の湖南里古墳群で、その南北線上に真坡里古墳群が位置する。その中間に位置する江東の勝湖里では高句麗後期の7世紀代に古墳群が分布する。西方は江西・龍崗郡一帯に分布する。北方は清川江流域の雲山龍湖洞古墳群におよぶ。南方は大同江以南の地では真坡里古墳群の以南にも相当する中和郡・黄州郡では未確認である。古墳群は、都城を中心として分布する。平壤型石室の分布地域に江東地域を加えた7地域があげられる。これらの平壤型石室の分布地域は山城などの配置状況もふまえて検討しなければならないが、清川江流域をのぞいた分布地域を「王畿」と想定したいとおもう。

平壤城・長安城の時代、王京には、五部の制が施行されていた。桂婁部（内部・黄部）・絶奴部（北部・後部）・順奴部（東部・左部）・涓奴部（西部・右部）・灌奴部（南部・前部）である。この王京の範囲が問題となるが、平壤城を中心とした内外の山城をふくむ地域を王畿ととらえるならば、五部のような有力な支配階層・官人層の墓地は、王畿内の地域に築造されたのであろう。もちろん王畿外、氏族の本貫地へ帰葬されたことは、牟婁婁塚の例がものがたる。

平壤遷都後、五部は「王都の行政的な地域区分に改編」された。各地では、「嫡統大人」という「大加」の世襲的部の長が統率していたという（李丙燾1979）。地方統治制も発達し、領域内の城邑の大小に応じて、「大城には褥薩一可邏達、諸城に処閭近支（道使）、小城に婁肖が派遣されたといい、大系的な地域統治」が行われた（武田1985）。

王畿の「地方五部」制（李丙燾1979）と古墳群の分布はほぼ対応関係にあるとみられる。各部の具体的な行政区域・境域の設定など問題も多いであろうが、各部の中心地に、古墳群が形成されたことはうたがいない。

平壤遷都後の高句麗壁画墳の分布は、鴨緑江流域の集安、大同江中流域から下流域、載寧江流域に限定されている。清川江流域の空白地域をふくめても、大同江から鴨緑江に至る境域である。このように壁画墳の分布地域は、当時の高句麗領域よりはるかに狭い。5～6世紀の壁画墳の分布も王畿（畿内）を中心としていたと推定される。平壤型石室は、清川江の龍湖洞古墳群のあり方からみて、畿外の地方に及んだとみられる。地方の支配層（在地首長層）・地方長官級の墓として構築されたのであろう。6世紀代における平壤型石室墳と壁画墳の分布は、高句麗の支配方式を象徴している。王都に五部制を敷衍したが、王畿といえる地域にも高句麗人が居住し、高句麗独自の墓を築いていたのである。

5世紀後半代の長寿王時世に、その領域が、南は小白山脈に至ったことは、中原高句麗碑で実証されよう。6世紀前半には、丹陽赤城碑にみられるように小白山脈の北辺は新羅領に編入されている。そして6世紀中葉には漢江流域や咸鏡南道一带に新羅の領域が拡大されたのである。

## 5 高句麗王陵の比定問題

従来、高句麗の王陵比定をめぐる、つぎのような諸説がある。

故国原王；安岳3号墳

広開土王；將軍塚（関野貞1914・田村晃一1984）・太王陵（池内宏1938・藤田亮策1940・58・方起東1988）

長寿王；漢王墓（関野貞1941）・伝東明王陵（永島暉臣愼1988）・將軍塚（方起東1988）

平原王；江西大墓（関野貞1941・李丙燾1980）

嬰陽王；江西大墓

栄留王；江西大墓（李丙燾1980）

故国原王以後の高句麗の諡・葬地については、次表のとおりである、王統の系譜については武田幸男1989で考察されているが、その「国内王統」以後についてふれる。

広開土王陵の比定問題については、現在の太王陵か將軍塚のいずれかで意見が一致している。王陵比定のためには、集安における巨大積石塚の序列を明らかにする必要がある。古墳および墓域出土瓦の編年をおこなった谷豊信の研究（1989・1990）によると、それらの相対編年は、太王陵―千秋塚―將軍塚で、「將軍塚は5世紀初頭、千秋塚は4世紀後半から末、太王陵は4世紀中葉から後半中葉の頃」の築造と推定されている。太王陵と將軍塚の先後関係が出土瓦によって明らかにされたのであるが、基壇積石塚や石室の発達段階からみても、將軍塚は太王陵より後出する。臨江塚の瓦は太王陵より古いと指摘する。とすれば広開土王陵として、集安で造営された巨大積石塚のなかでは、將軍塚がもっとも蓋然性がたかいといえよう。將軍塚の墳丘・石室の隔絶性は明らかで、その後も「將軍塚型石室」→漢王墓→土浦里大塚といった「將軍塚系列」の石室

表3 王陵比定

王	在位	諡	諱	葬地	王陵比定
故国原王	331~371	国岡上王	斯由	故国之原	太王陵
小獸林王	371~384		丘夫	小獸林	(臨江塚)
故国壤王	384~392		伊連	故国壤	(千秋塚)
広開土王	392~413	(国岡上広開土境好太王)	談徳		將軍塚
長寿王	413~491		巨連		漢王墓
文咨王	492~519	明治好王	羅雲		土浦里大塚
安臧王	519~531		興安		
安原王	531~545		宝延		
陽原王	545~559	陽崗上好王	平成		湖南里四神塚
平原王	559~590	平崗上好王	陽成		江西大墓
嬰陽王	590~618	平陽王	元		(江西中墓)
建武王	618~642	榮留王	建武		
宝臧王	642~668		臧		

造営の伝統が存続する。

太王陵については、「国岡上王」という諡をもつ故国原王(371年)である可能性が大きい。「願太王陵安山固如岳」という銘文磚は次王によってつくられたものであろう。銘文磚の製作は帯方太守張撫など帯方郡故地での塚室墳との何らかの関係が考えられよう。また太王陵での銘文磚の出土は、碑文を墓に樹立すること自体広開土王にはじまったとすれば、太王陵説に否定的といわねばならないであろう。

千秋塚では、「千秋墓永固」という表現の磚があり、太王陵の「如山固如岳」に近似する。

長寿王については、真坡里古墳群の一画にある伝東明王陵の被葬者の問題と関連する。その東明王陵が長寿王(413~491年)であるとの説が提起されている(永島1981)。没年の時期の石室構造としては、古いタイプの石室であるが、「寿陵」と解釈する。また定陵寺が、長寿王によって創建されたとすれば、「定陵寺」という寺名も自らの「陵を定めた」その地に建立した寺院であったと指摘する。

伝東明王陵は始祖廟であろうか。『三国史記』高句麗本紀における始祖廟関係の記事を抽出すると下記のとおりである。

故国原王2年(332)春二月。如王卒本。祀始祖廟。

三月。至自卒本。

12年(342)發美川王廟。

小獸林王2年(372)秦王符堅遣使及浮屠順道。佛像經文。

4年(374)僧阿道來。

5年(375)始創肖門寺。以置順道。又伊弗蘭寺。以置阿道。此海東佛法之始。

故国壤王 9 年 (392) 命有司立国社修宗廟。

広開土王 2 年 (393) 創九寺於平壤。

長寿王 15 年 (427) 移都平壤。

文咨王 7 年 (497) 創金剛寺。

安臧王 3 年 (521) 夏四月。王幸卒本。祀始祖廟。

五月。王至卒本。

平原王 2 年 (560) 春二月。……王幸卒本。祀始祖廟。

三月。王至卒本。

28 年 (586) 移都長安城。

榮留王 2 年 (619) 夏四月。王幸卒本。祀始祖廟。

五月。王至卒本。

定陵寺が寺院建築であることは、出土した「定陵」・「陵寺」などの銘文瓦で明らかである。「定陵」が長寿王代のことであれば、平壤遷都以後であろう。その以前平壤付近に寺院が建立された可能性がある。国内城時代の將軍塚・臨江塚・太王陵など周辺で瓦・磚が出土している。瓦磚の量など不明な点があるが、広開土王の碑文からみて、守護廟などの建築物が存在したことはうたがいない。「守戸」「烟戸」の集落・居住地などについては、さらに広範囲な墓域・聖域を想定する必要がある。定陵寺のばあい、その周辺、つまり雪梅洞の丘陵下から真坡洞にいたる地域で、瓦が出土し、住居址の存在が推定されるという（鄭1963）。

4 世紀後葉には、仏教が伝来し、寺院も建立され、398 年には平壤に「九寺」が建立されている。この定陵寺を平壤九寺の一寺に推定されている。かりに広開土王代の 4 世紀末に定陵寺が建立されたとすれば、東明王陵築造の意義と矛盾する。

始祖廟祭祀は、故国原王・安臧王・平原王・榮留王の即位儀礼で実修されている。『三国史記』によるかぎり、始祖廟の建立された地は建国の地「卒本」（遼寧省桓仁）と認識されており、安臧王以降の 3 代までは祭祀されている。卒本における始祖廟祭祀は安臧王にはじまった可能性も否定しえない。伝東明王陵の墳丘は、下段が切石積みされ、方台形に封土がおおわれている。石室は、羨道の両壁に小形の龕を付設するのは、4 世紀後半から 5 世紀前半代の石室の型式である。玄室四壁は切石積みで、平行持送り天井をなし、羨道にやや開き気味の墓道がとりつく点も古い要素であるが、羨道・墓道は新しい要素である。基壇部は、將軍塚の石築技法、積石塚の伝統を踏襲している。427 年の平壤遷都後に築造されたのであろう。東明王陵の南面に造営された「定陵寺」では、5 世紀代の瓦が出土し、寺院の時期の一端を知ることができる。前述の文献記録から、始祖廟は、建国の地の卒本とは別に、都城の所在地に建立されたこともありうるであろう。

長寿王は、国内城時代、即位後寿陵をつくりはじめたであろうが、427 年の平壤遷都後にあらためて平壤で寿陵として築造を開始した可能性がある。広開土王碑を建立した長寿王は、碑文にみえるように支配領域内から烟戸を徵発し、王陵の付近に移住させたのであった。聖なる地の

域に接して、瓦葺の廟が建築され、その周辺には守墓人・烟戸の居住地がつくられていたのであろう。広開土王の陵はまさにそれにふさわしいものでなければならない。また広開土王陵と碑文を建立した長寿王の陵も同様であったのであろう。長寿王の墓は集安の地にあったのであろうか。

ところで漢王墓は、大同江の右岸「約二町」にあり、「南面し後に山を負ふ」地にある。後山は向山、東方に窟背峴の山とそこからのびる尾根、西方は丘陵がのびる、緩やかな小谷に立地する。風水の地といえる。また西側後方に、真坡里古墳群と同じく古墳群(18基)が群在する。時期・規模などは不明である。しかし古墳を中心として数十mには墳墓は存在しない。墓は方形の2段築成の方形基壇に円墳がつくられている。基壇積石塚の前面および西面は高さ約30cm前後の石を並べて2段に築き、東面は「地勢稍高き故1段となし、北面は高きを以て段を作らず」といった状態である。漢王墓の石室構造は、將軍塚系列にあり、国内城から平壤城への遷都に対応して発達した。つまり將軍塚から漢王墓・土浦里大塚への変遷が想定されるのである。墳丘上で出土した瓦は、平壤遷都後のものである。関野貞(1941)は「長寿王前後の或王の陵墓に比定すべきなるべし」と述べているが、漢王墓は長寿王陵と考えられる。永島暉臣慎説に啓発され、伝東明王陵を考えたこともあったが、將軍塚系列の石室であることを重要視したいとおもう。

文咨王は、その諡は「明治好王」で、長寿王の次代の王(492~519)である。長寿王の喪葬礼をおこない、前王の寿陵も熟知していたであろう。現在の資料から、6世紀前葉の巨大石墳としては、平壤の土浦里大塚、肝城里蓮花塚・安城洞大塚など江西から龍崗郡にかけて分布する古墳が想起される。いずれも石室規模・壁画内容からみて支配階層(官人層)の墓であることはうたがいがいなし。諡の知られた王のなかで、文咨王の諡に「崗」がみられない。墓域・墓地の立地条件を関連するのであろうか。その候補である土浦里大塚の立地条件、墳丘規模をみておく。

土浦里古墳群は、「長水院の東方約三十町許独立小連山ノ支脈南ニ走レル末端ニ近キ所ニ在リテ頗形勝ノ地ヲ占メ他ノ支脈更ニ其東西ヲ擁シ北ニハ小連山中ノ高峯朔風ヲ遮ルアリ南方ニハ近クハ二十餘基ノ古墳群在シ遠クハ大同江ノ彼方中和ノ平野ヲ望ムヘク此塚ハ其一辺九十八尺餘ヲ有スル方形基壇ノ上ニ立ツ方台形ノ土墳ニシテ高サ基壇上二十六尺餘」であるという。約100尺の墳丘規模は、他を凌駕する。石室形態は漢王墓の系統にあり、伝東明王陵との関連性も指摘しえる。その立地条件や石室規模・構造などの諸要素から、土浦里大塚を文咨王陵に比定したい。

次に陽原王の王陵についてである。陽原王の諡は「陽崗上好王」である。平壤城の東方、江の北の崗に埋葬されたのであろう。王の没年(559)の6世紀中葉ころの石室墳としては、湖南里四神塚があげられる。「此墳は位置の形勝を占めたと、規模の拔群なると、玄室の装飾の見事なるとより、推考する、恐らくは高句麗時代に於ける国王の墳となるべし」というほどの大墓である。湖南里四神塚の墳丘基底部に外護列石、さらにその外側に敷石帯がめぐらされている。四神塚の墓域の隔絶性はみられない。群在する古墳群の1基であるが、石室の形態を土浦里大塚と比較すると、大塚の玄室の長壁に羨道が取り付けいたのが湖南里四神塚といえる。風水の地理的条件に叶う地に築造され、玄室には四神の図が描かれていた。王陵として初めて壁画が採用したとい

えよう。

平原王について、関野貞1941は「平原王とは多分平原に葬りしより来りし追号と思はる」という観点から、立地条件の適わしい江西大墓に比定した。また李丙燾1980は「平崗上好王」といわれる英王で、長安城（平壤）遷都をおこなったことなどから、平原王説を肯定する。葬地の隔絶性という観点からみると、江西三墓はそれに叶っている。江西三墓のその地に立ってはいじめて実感することができる。竹笛山（標高165m）頂部から東に延びる山塊は、さらに南東方向に派生するが、三墓はその端部の微高地上に立地する。その尾根は三墓の北にあって、小高い山にみえる。西方にはやはり竹笛山から南に延び、細長い丘陵となるが、それは三墓の西約1000mにあたる。三墓の東方は水橋川をはさんで、舞鶴山から南北に尾根・丘陵が延びる。三墓を取り囲むような地勢である。その三墓の後方の山を後山（玄武）として、西方の屋根を白虎、東方の丘陵を青龍とする四神相応の地にあるといえる。その南には石泉山（302m）がそびえる。東方の丘陵上に徳興里古墳が立地するが、江西三墓より約200年前の頃である。南方の薬水里古墳も同様である。つまりこの三墓里の地には、三墓以外に同時代の古墳が存在しない。広大な葬地が形成されていたのであろう。

朱栄憲1961は、6世紀代の四神図が主体で、人物風俗図・装飾文様の描かれた壁画墳として、通溝四神塚・五盔墳4・5号墳・真坡里1号墳・鎧馬塚をあげ、玄室壁画に四神図のみ描かれた壁画墳（江西大墓・江西中墓・内里1号墳）で、7世紀代に位置づける。これらは王陵の候補でもあるのだが、内里1号墳のばあい14基の古墳群中に一画を占め、葬地（墓域）を占有していない。有力な支配者層の墓であることはうたがいがたいが、王陵としては認めがたい。

以上のように、仮定した王陵（葬地）と都城との関係をあらためてみておく。平壤城遷都をおこなった長寿王の墓は、平壤城の北東に地の漢王墓（慶新1号墳）と推定された。寿陵として築造したのであるが、その墳丘構造の一端や石室構造は將軍塚を踏襲している。その東南端の真坡里古墳群に営まれた。平原王は、586年に長安城遷都をおこなったのであるが、その西方の江西三墓里に築造された。その地は広大な兆域を占めていたと推測される。また陽原王陵が王畿の東北にあたる匡大山麓の湖南里四神塚に想定されたが、平壤城と一体の大城山城に近接する。王京の概念・範囲が問題となるが、大城山一帯では4世紀代の積石塚から、5・6世紀代の石室墳に至るまで連綿として古墳が造営されている。大城山麓が墓域であったことから、その一帯は京城として意識されなかったことを意味する。高山洞一帯の古墳群は、7世紀以降の安鶴宮の造営によって破壊されたのである。なお平壤市街の佟利墓はもちろんのこと、平壤駅前二室墳も4世紀後半代で、427年の遷都以前に位置づけられる。586年の長安城遷都の段階で削平されたと推定される。

国内城時代では、太王陵・將軍塚が王陵に比定されたが、將軍塚は国内城の中心から北東に5.6km、太王陵は3.3kmにある。麻線構の千秋塚が西南に4.5kmの地点にある。集安における王陵ないし王陵級の積石塚は、国内城を中心として鴨緑江に沿って数kmの範囲に築造されたといえる。

## 2 百済における横穴式石室墳の出現と展開

### (1) 百済横穴式石室墳の成立と分布

百済の墓制として、土壙(木棺)墓・甕棺墓(甕棺墓・甕棺墳)・火葬墓・積石塚・竪穴式石室墳・竪穴系横口式石室墳・横穴式石室墳があり、時期・地域を異にして発展している。

まず百済の諸地域全体を対象として横穴式石室の型式分類をおこなう。従来の百済古墳の研究成果に啓発されながら、若干の問題提起をおこないたいとおもう。

横穴式石室の型式分類に際しては、姜仁求1977の分類案を基本として、安承周1975、姜仁求1977、安承周・全栄来1981、尹煥1989の研究成果をふまえて分類すると、次のようになる。従来の編年と用語は表4のようにまとめられる。

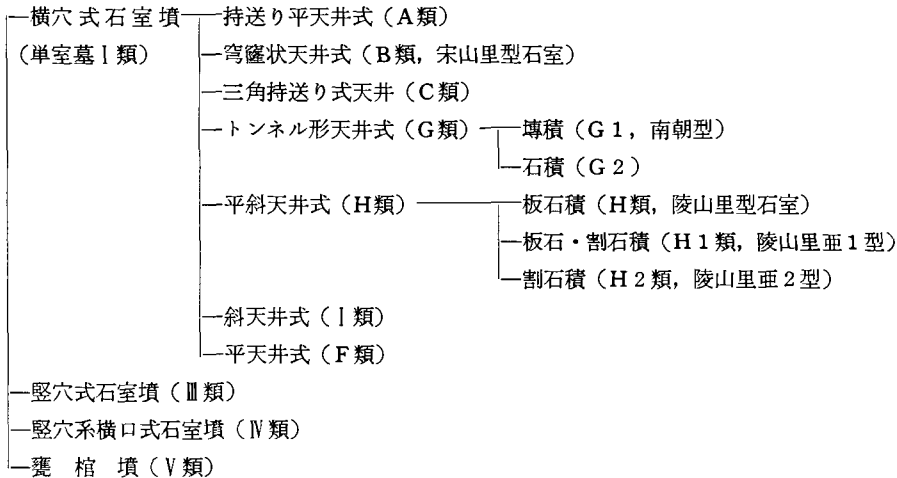


表4 百済石室墳の型式分類比較表

軽部慈恩 1933	第1類型 母衣紋帳形玄室	第2類型 蒲葺形玄室	第3類型 羨道 附長持形石室	第4類型 長持形玄室	第5類型 四柱家形 玄室			第6類型 切妻家形 玄室		
安承周1975 安承周・全 栄来1981	穹窿状天井古墳			四壁垂直 石室	持送り式石室	平 石 天 井 石 室	支 撑 式	トンネル形 天井古墳	合掌天井 古墳	
姜仁求1977	穹窿状天井式			平天井式		平 斜 天 井 式		トンネル形 天井式	斜天井式	
東 潮1989	穹窿状天井式			平天井式	持送り式 平石天井	平 斜 天 井 式 板石積(陵山里型石室)		トンネル形 天井式	斜天井式	
吉井秀夫 1991	穹窿状天井石室				持送り 平天井石室	平 斜 天 井 石 室				
						a類    b類    c類				
東 潮	穹窿状天井式			平天井式	持送り式 平天井	平 斜 天 井 式		トンネル形 天井式	斜天井式	墳築墳
	片袖式 (宋山里 型石室)	兩袖式				板石積 (陵山里 型)	板石・割 石積(陵 山里Ⅱ 1式)	割石積 (陵山里 Ⅱ2式)		竪穴系横 口式石室



百済地域における横穴式石室墳は主として次の各地に分布する。今日、文化財管理局による『文化遺蹟』、百済文化開発研究院による遺跡の調査など、各道郡市で分布調査が鋭意おこなわれ、さらに発掘も進みつつある。そのため横穴式石室墳の分布状況が変動するなど、年々研究の進展がみられる。そうした研究段階にあるが、これまでの成果にもとづき各地における石室墳の展開過程および古墳群の群構造の考察を試みたい。各地域における古墳群を把握すると同時に、古墳群の特性をめぐって若干の問題もふれることにする。なお主要な古墳の概要については、東・田中俊明1988・1989に記しているので、ここでは本論の展開に不可欠な古墳群についてのみ補記することにしたい。

百済諸地域において、古墳群（横穴式石室墳）は大河川の流域を中心に分布する。主要な古墳群を列挙する。

① 漢江流域

北漢江流域（春川芳洞里古墳群・新梅里古墳群）

漢江中流域（ソウル石村洞古墳群・可楽洞古墳群・芳萐洞古墳群・中谷洞古墳群）

南漢江流域（驪州梅龍里古墳群・甫通里古墳群）

② 錦江流域

錦江上流域（忠州樓岩里古墳群・清州新鳳洞古墳群）

錦江中流域（公州・扶餘郡一帯古墳群）

錦江下流域（益山笠店里古墳群・益山双陵・城南古墳群）

③ 論山地域（六谷里古墳群・表井里古墳群）

④ 萬頃江上流域（全州平和洞古墳群）

⑤ 東津江流域（井邑隱仙古墳群）

⑥ 蟾津江上流域（南原草村里古墳群）

⑦ 榮山江流域

榮山江上流域（光州角化洞・雲林洞古墳、長城鈴泉里古墳群）

榮山江中流域（咸平新徳古墳・石溪古墳群）

榮山江下流域（羅州潘南面古墳群・松堤里古墳群）

⑧ 九山川流域（海南月山里造山古墳）

⑨ 南海島嶼（新安長山里古墳・邑洞里古墳群・大里古墳群・大里ペノルリ古墳群）

（2） 漢江流域における墓制の特性

古墳群は、漢江中下流のソウル一帯、北漢江流域の春川一帯、南漢江の驪州郡一帯に分布する。

ソウル付近では、石村洞・可楽洞・芳萐洞古墳群・中谷里古墳群（旧高陽郡羸島面）が知られている。

石村洞古墳群は、1914年に関野貞・谷井濟一・栗山俊一によって調査され、同年の報告書には

表5 宋山里型石室一覽表

番号	古墳名	所在地	類型	石室	女室長	女室幅	女室高	壁高	天井幅	羨道長	羨道幅	羨道高	袖	方向	女室幅/ 女室長	天井幅/ 女室幅	女室幅/ 女室高
1	芳萐洞1号墳	ソウル市	穹窿状	607	310	250			139	297	150	130			81	56	
2	芳萐洞4号墳	〃	穹窿状?	379	234	257				145	100	140			110		
3	可楽洞3号墳	〃 江南区	穹窿状	660	370	365	400	85		290	130				99		
4	新鳳洞1号墳	忠清北道清州市	〃	433	348	352				85	80		左袖		101		
5	宋山里1号墳(旧5)	忠清南道公州市	〃	469	319	250	240			150	95	117			78		
6	宋山里2号墳	〃	〃		333	279	312								84		
7	宋山里3号墳	〃	〃		338	276	258								82		
8	宋山里4号墳(旧1)	〃	〃	660	351	282	278	157	39	209	93	120	片袖		80	14	
9	宋山里5号墳	〃	〃	475	345	336	315			130	100	130			97		
10	宋山里6号墳	〃	トンネル形	496	396	236	333			100	100	165			60		
11	武寧王陵	〃	〃	710	420	272	293			290	104	145			65		
12	宋山里7号墳	〃	竪穴式	250	250	100	105								40		
13	宋山里8号墳	〃	〃	250	250	80	100								32		
14	宋山里9号墳	〃	穹窿状?		300	200									57		
15	宋山里29号墳	〃	穹窿状		340	284									84		
16	甫通洞1号墳	〃	〃	235	180	215								S37°W	119		
17	甫通洞25号墳	〃	〃	235	210	230								S20°W	110		
18	金鶴洞古墳	〃	〃		224	182	164								90		
19	熊津洞古墳	〃	〃		339	211					91	83					
20	熊津洞2号墳	〃	〃		280	195	40								21		
21	熊津洞7号墳	〃	〃		241	205	90							S20°E	44		
22	熊津洞8号墳	〃	〃	511	275	220	110			236	91	80	片袖	S8°E	50		
23	熊津洞11号墳	〃	〃	348	235	180	67			113	85	75	片袖	S N	37		
24	熊津洞12号墳	〃	〃	480	270	194	40			210	70		両袖	S50°E	21		

25	熊津洞19号墳	〃	穹窿状	402	242	205	64			160	84	60片袖	S26°E	31
26	熊津洞20号墳	〃	〃	385	250	190	135			135	80	35片袖	S20°E	71
27	熊津洞21号墳	〃	〃	310	180	144	78			130	63	53片袖	S55°W	54
28	熊津洞23号墳	〃	〃	515	255	202	140			260	95	80片袖	S13°W	69
29	熊津洞24号墳	〃	〃	385	260	210	150			125	75	55片袖	S10°E	71
30	熊津洞25号墳	〃	〃	380	250	190	120			130	85	65片袖	S26°E	63
31	熊津洞27号墳	〃	〃	385	240	190	125			145	90	70片袖	S32°W	66
32	熊津洞28号墳	〃	〃	393	228	180	97			165	72	83片袖	S5°E	54
33	玉龍洞古墳	〃	〃	385	275	216	150			110	85			69
34	新基里古墳	〃	公州郡鷄龍面	469	289	134	217			180	85	100片袖		162
35	表井里6号墳	〃	論山郡	穹窿状?	440	250	170							
36	熊浦里20号墳	全羅北道益山郡	穹窿状	425	275	255	120			150	90	70		47
37	笠店里1号墳	〃	〃	426	268	242	240	100	50	158	85	116片袖		99

21

「廣州」「石村古墳」として記されている。1916年には石村洞の積石塚の略測調査がなされた(今西龍1917)。1920年の『朝鮮古蹟図譜』3では、23基の土塚、66基の石塚の分布図が掲載されている。その後発掘された石村洞4号積石塚の埋葬施設は石室であったが、その他の積石塚ないし封土墳(土塚)のなかに、横穴式石室が存在したか否かは不明といわざるをえない。

可楽洞・芳蕘洞古墳群では、7基の石室墳が発掘されている。漢江北岸、龍馬峰の南麓に立地する中谷里甲・乙号墳(野守健・神田惣1935)をふくめて、わずかに9基の横穴式石室墳が知られているにすぎない。ソウル近郊には数多くの古墳群の存在したことが推定されるが、現在では以上のようなわずかな基数の横穴式石室墳を分析の対象とせざるをえない。

可楽洞古墳群(ソウル大博1975・蚕室1977)は、丘陵の傾斜面に立地する。5基の古墳からなり、いずれも円墳である。可楽洞2号墳は両袖式の横穴式石室である。奥壁は割石を内傾するように持ち送り、前壁袖部はほぼ垂直積みである。石室図面では明瞭でないが、三角持送り壁体の痕跡がみられる。玄室天井の4石、羨道部にあたる1石は下降気味ながら水平を保つ。羨道は一段分高くなり、斜方向にたちあがる。本来、2～3石積築の段があった可能性が強い。3・6号墳は、片袖式横穴式石室で、四壁は割石積みされている。可楽洞4号墳は、長方形の玄室の一隅に羨道がとりつく特異な形態の片袖式横穴式石室である。5号墳は両袖式である。玄室は、割石で四壁を持ち送って積築し、天井石4枚で覆う。側壁上端を、三角持送り手法で構築する。実測図から、4段目まではほぼ垂直に積み上げ、その上面を持ち送っていることがわかる。羨道壁面も玄室と同様、扁平な割石を用いて積み上げる。1枚の天井石が遺存する。

芳蕘洞古墳群(趙由典1975, ソウル大博1976・金秉模1977)は8基からなり、丘陵上から斜面にかけて築かれている。1号墳は穹窿天井構造の片袖式石室である。玄室の4壁は、比較的扁平な石を用いて小口積みされている。4号墳は両袖式石室で、玄室は正方形(234×257cm)にちかい。四壁とも約100cm垂直に積み上げ、その上部を持ち送っている。天井石は1枚である可能性があり、穹窿天井に復元できる。また羨道床面は玄室よりわずかに高くなっている。5号墳は、長さ210cm・幅142cmで、2～4段の割石壁体が遺存するのみである。竪穴式の石槨と推定されている。6号墳は両袖式石室であるが、南北288cm・東西228cmの玄室の中間に隔壁を設けている。

- |                 |                       |
|-----------------|-----------------------|
| 持送り平天井式石室(F類)   | ├ 両袖式・有段羨道：中谷里甲号墳・乙号墳 |
|                 | ├ 両袖式・有段(斜)羨道：可楽里2号墳  |
|                 | └ 両袖式：芳蕘洞6号墳          |
| 穹窿状天井式石室(B類)    | ├ 両袖式：芳蕘洞1号墳・可楽洞3号墳   |
|                 | └ 両袖式：芳蕘洞4号墳          |
| 三角持送り平天井式石室(C類) | └ 両袖式：可楽洞4・5号墳        |

**漢江流域における横穴式石室の出現** 漢江中流域において、横穴式石室はいつ出現したのであろうか。可楽洞・芳蕘洞一帯の古墳群の編年の問題にかかわる。小田富士雄1980は、可楽洞4・6号墳を百濟初期、可楽洞5号墳を4世紀ごろに比定し、可楽洞3・4・5号墳の壁体構築法が永和9年墓(佟利墓)や南井里119号墳に系譜をたどりうるととらえる。石室構造の変遷からみて、可

楽洞5号墳を5世紀代、可楽里2号墳を5世紀末から6世紀初めに位置づけた(東・田中1989)。そのいっぽうで、可楽洞・芳萐洞古墳群の土器は、「百濟前期後半以降」ないしは、6世紀後半から7世紀代に比定する見解がある(定森秀夫1989・尹煥1989)。可楽洞5号墳出土土器については、追葬・再利用の時のものと考え、6世紀前半以前に比定されている(亀田修一1990)。

可楽洞5号墳や旧可楽里2号墳が初期の横穴式石室であることは確かであろう。それらは両袖式の平天井石室で、玄室・羨道天井が同一レベルであることを特徴とする。それらに類する石室は、集安一帯では確認できず、平壤の南井里119号墳が想起される(小田富士雄1980)。

南井里119号墳は、楽浪彩篋塚の西方約22mに位置する(小場・榎本1935)。両袖式の横穴式石室で、玄室の長さ約2.9m、幅(中央)2.2mで、高さ1.3mまで遺存していた。壁体は片麻岩質の板状の割石を用い、四壁とも持ち送っている。2~4枚の天井石で覆われていたと推測される。割石間は漆喰で固定し、さらに壁面全体は漆喰で塗られている。羨道は、長さ1.2m、幅0.9mで、側壁は左右とも板石2板を立て、2枚の板石で天井を覆うという構造である。玄室・羨道床面のレベルは同一である。また羨道に続いて墓道が確認されている。

大同江流域の平壤駅構内で発見された佟利墓は、壁体の一部に石材が用いられ、塋室墳から石室墳への移行期の古墳であると想定される。大同江をはさんで対置する南井里119号墳は、佟利墓より構造的に新しい段階にあり、4世紀後半代であろう。楽浪・帯方郡滅亡以後の構築である。

楽浪・帯方郡の故地では、313年の滅亡後も塋室墓の系統を継承した墓制が、平壤遷都以前まで築造されていたのであろう。

ところで漢江流域には積石塚が分布する。高句麗と関連するのが積石塚と三角持送り式天井石室墳である。つまり高句麗と百濟との関係を二つの墓制がものがたるのである。3~4世紀は積石塚、5~6世紀は三角持送り式天井石室墳である。

積石塚は、漢城時代初期に高句麗の影響のもとで成立した墓制である。ソウルの石村洞積石塚群のほかに、北漢江の上流には汝湖里や中島積石塚、南漢江流域では陽坪里積石塚が知られている。高句麗の積石塚の分布地域からみると、大同江流域の晩達面積石塚などがもっとも近い。大同江から臨津江流域、北漢江流域は、古代遺跡の空白地域といえるので、将来積石塚をふくめ、各時代の諸遺跡の実態が明らかになるであろう。現時点で推測しえるのは、3世紀段階までの、無壇積石塚(山石・河原石積)は、高句麗と馬韓、初期百濟との関係において、高句麗積石塚の伝播が広範であったことをものがたる。

高句麗の積石塚の内部構造の発展段階をみると、4世紀後葉から5世紀前半には、切石積の階段式積石塚が出現している。漢江流域の積石塚はその前段階、つまり4世紀代と想定される。汝湖里や中島積石塚などは、さらに石村洞のような基壇積石塚の前段階のものとみられる。楽浪・帯方郡滅亡以前の高句麗積石塚の伝播を示す。4世紀代、高句麗と百濟は戦争の時代であった。475年の熊津城遷都の段階は、漢江下流域は高句麗の領域(占領地)であった。こうした政治的状況は、墓制の伝播と不可分の関係にある。

漢江流域には三角持送り式天井構造の石室墳が存在する。これまで数基の古墳が知られている。すでにふれたソウル可楽洞5号墳以外に次のような古墳がある。

芳洞里古墳(金元龍1981)は、北漢江上流の江原道・春川地域に所在する。山麓の傾斜地に2基が並列して位置する。現在天井の一部が露出しているだけであるが、壁体が割石積みで、三角持送り天井構造の石室である。架構法は、可楽洞石室墳に類似する。

新梅里古墳(趙由典1987)は江原道春城郡にある。芳洞里の上流にあたる。東南方に開口する片袖式石室で、玄室の北壁長140cm・西壁長188cm・南壁80cmで、羨道長208cm・幅68~98cmである。玄室の奥壁はほぼ垂直であり、側壁は内傾する。2層の三角持送りをおこなう。天井は比較的厚手の板石を用いて架構する。

梅龍里ヨンガンゴル古墳群(金正基ほか1988)は、南漢江上流の京畿道驪州に位置する。漢江に面する丘陵斜面に立地する。三十余基からなる古墳群がいくつもの丘陵にまたがって分布している。そのなかのB1号墳に三角持送り式天井構造がみられる。石室は、長方形玄室の短壁に羨道がとりつく両袖式である。

浦通里古墳(姜仁求1981)は、梅龍里古墳群の約10kmの下流に位置する。古墳は径12m・高さ5.5mの円墳である。玄室は、東西壁270cm・北壁244cm・高さ244cmで、長さ310cm・幅82cmの羨道がとりつく。玄室・羨道とも割石で積築されている。玄室は、高さ110cmまで垂直に積み上げ、さらに約35cm内傾させ、その上部を長大石を用いて三角持ち送りし、天井石を架構する(図版20-19)。

以上のような抹角藻井式石室墳については、漢江流域の発掘調査が進むにつれて、存在がより明確になり、調査研究がおこなわれてきた(金元龍1974・1981, 金秉模1977, 姜仁求1981・趙由典1987)。それらの古墳の時期や被葬者の性格について、姜仁求1981は、「5世紀末葉から6世紀中葉までは驪州が高句麗に属した時期となり、したがって驪州の上里2号墳、南通里古墳はこの時期に築造されたものとなる」と解釈する。また新梅里古墳は「新羅の領域になる以前にあった高句麗系の人の墓」であり、古墳の年代も6世紀中葉以前と推定されている(趙由典1987)。新梅里古墳の天井構造の特色は低平なことであり、高句麗後期の段階に出現する。類似する石室をあげるとすれば、江西郡大同古墳群の13・19号墳などである(図版10-7)。一見特異な石室も高句麗の領域内で類例がみられるのである。やはり高句麗人による築造であろう。芳洞里古墳群のばあい、同一構造の1・2号墳の2基が並存している点は注目される。その周辺地域での古墳群のあり方が問題となるが、漢江に面する可耕地をひかえた立地条件にあり、定住した高句麗人集団の墓地とみてさしつかえないであろう。そのいっぽう梅龍里では、群集する古墳群のなかの一部に三角持送り天井構造が採用されている。おそらく造墓の主体が必ずしも高句麗人でなく、石造技術の伝播によるものであろう。

割石積み三角持送り天井石室墳は、鴨緑江・禿魯江流域(魯南里古墳群など)・漢江流域・東海岸地域に分布する。抹角藻井が高句麗の石室墳に採用されたのは安岳3号墳が最初であり、そ

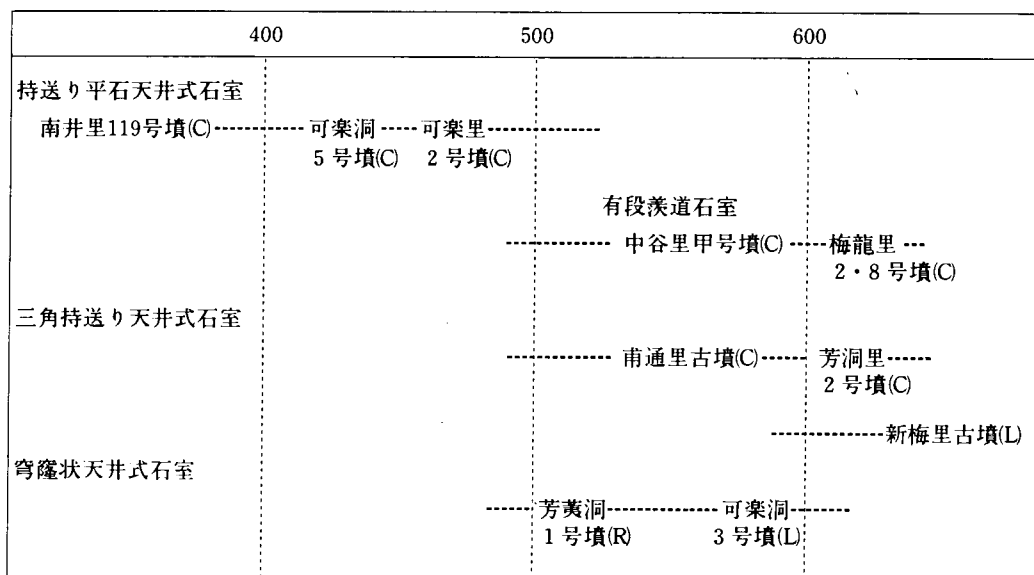


図16 漢江流域における百濟横穴式石室墳の変遷

の後天井架構石材の切石化が進み、平壤型石室として発達する。割石積み石室に導入されたのは5世紀代で、6～7世紀にも継続して構築された。集安では麻線溝の古墳群などで認められる。禿魯江流域の石室群も年代推定の根拠に欠けるが、6世紀代であろうか。東海岸の石室群は6世紀後半以降である。

三角持送り式天井石室には、穹窿状天井のように数層以上持ち送るタイプ（A類）と、平壤型石室のように2層から3層積築するタイプ（B類）などがある。禿魯江や東海岸の石室は前者であり、漢江流域のものは後者である。A類は、国内城や平壤城時代の周辺地域で発達した石室であり、鴨緑江から東海岸一帯に分布する。

### （3） 宋山里型石室墳とその分布

穹窿状天井石室とは片袖式で、四壁を割石で、持ち送り積築し、天井石を架構する型式の石室である。羨道天井石の下面レベルまで垂直傾向にあり、そこから穹窿状に持ち送られている。これらの諸要素をそなえた穹窿状天井式石室は、すでに「宋山里式」（曹永鉉1990）と称されているが、あらためて「宋山里型石室」という一類型を設定することにする。

宋山里型石室は、次の地域に分布する。

#### 漢江流域

- ・ソウル芳萐洞1号墳（趙由典1975）
- ・〃 可楽洞3号墳（蚕室調査団1977）

#### 南漢江流域

- ・清州新鳳洞1号墳（李隆助・車勇杰1982）

## 錦江流域

- ・公州宋山里1～5・29号墳（図版15—1・2・4・5）（野守・神田1935，軽部慈恩1935）
- ・〃 甬通洞1・25号墳（軽部1935）
- ・〃 金鶴洞古墳（安承周1972）
- ・〃 熊津洞古墳（金永培1965）
- ・〃 熊津洞古墳群（安承周1981）
- ・〃 玉龍洞古墳（図版15—6）（金永培1962）
- ・〃 新基里古墳（図版15—12）（洪斌基・安承周1983）

## 錦江下流域

- ・益山熊浦里20号墳（図版15—13）（金三龍・金善基1988）
- ・〃 笠店里1号墳（図版15—16）（尹根一1989）

百済における穹窿状天井式石室の上限は、熊津時代の宋山里型石室で5世紀後葉の時期に推定される。つまり宋山里型石室の出現は遷都の頃と仮定される。宋山里古墳群では、1・2・3号墳が熊津遷都後まもない時期の5世紀末～6世紀初め、5号墳は6世紀前葉に推定される。宋山里古墳群の形成は、宋山里型石室にはじまる。武寧王陵・6号墳のように南朝の影響のもとに塼室墳も築造されたが、熊津時代の穹窿状天井式石室墳は王族・貴族の墓制であった。

従来、宋山里古墳群は、6号壁画墳をふくみ、封土墳の群在性・石室規模の大きさなどの点から、百済墓制のなかで特異な存在であることが指摘されてきたが、1971年に武寧王陵が発見されるにおよんで、王陵群であることが明らかとなった。宋山里6号墳＝東城王、5号墳＝聖王説（斎藤忠1976）などの諸説があるが、5・6号墳を武寧王陵との関係においてどのように位置づけるか、東城王陵をいずれの古墳に比定するかである。石室規模は、5号墳のみが他に比べ幅広で、きわだっている。

ところで宋山里1～4号墳北方の墳丘も東城王陵の有力な候補地であった。しかし1988年に発掘されたところ、一辺15m・高さ1.8～2.7mの基壇状の積石遺構が検出された。埋葬施設がみられないことから「仮墓」「虚墓」と推定された（尹根一1988）が、それは『三国史記』百済本紀巻25にみえる「十一年(489)……冬十月。王設壇祭天地」の祭壇ではないかと類推した（東1990）。したがって、宋山里5号墳→武寧王陵→宋山里6号墳という変遷を想定すると、5号墳はおのずと東城王(479～501)に比定される。3基の古墳の立地条件からみると、その築造順序は逆時計回りとなる。

王都熊津城（公山城）に近接する地で、宋山里型石室が集中して築造されたのが熊津洞古墳群である。1964年に1基、1979年に21基の古墳が発掘された。

熊津洞古墳は、長方形玄室に片袖の羨道がつく。四壁は割石積みで、全面に漆喰を塗る。床面に無文塼を敷きつめる。天井部分が破壊されているため構造は不明であるが、武寧王陵のような



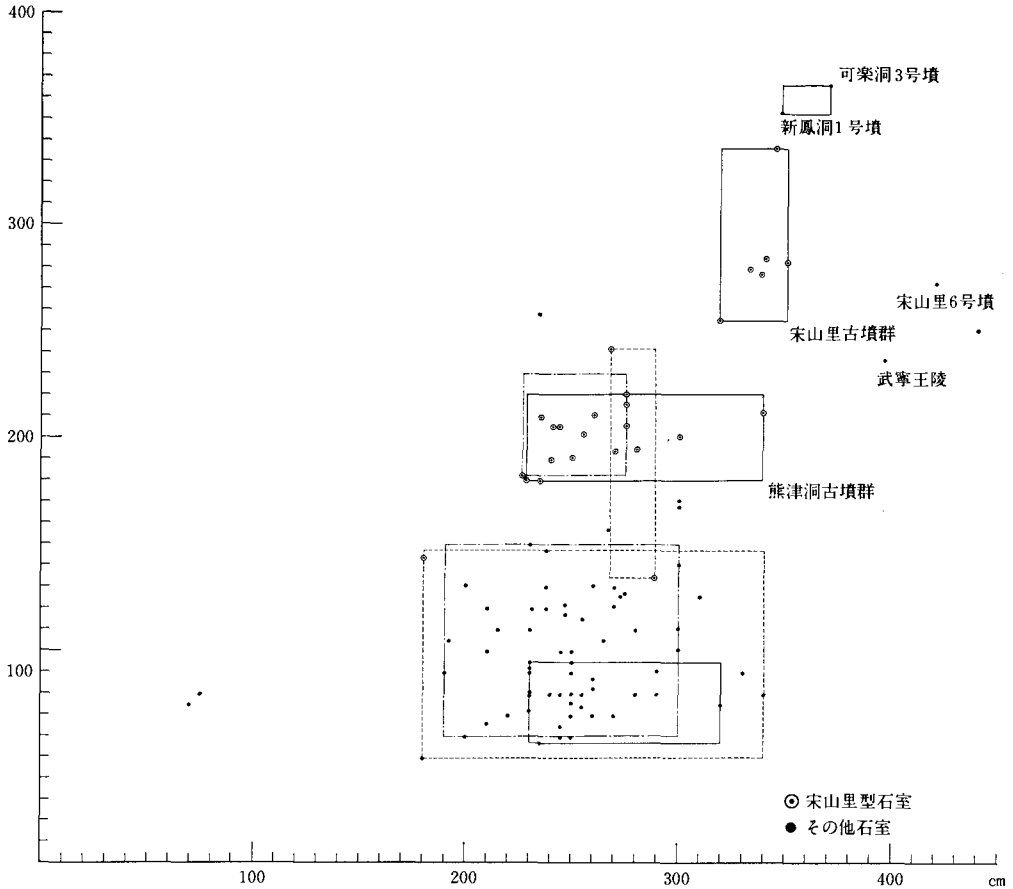


図17 宋山里型石室の規模

トンネル形に復元する考え（曹1990）もある。宋山里1・29号墳のような穹窿状天井式であろう。玄室床面への埴使用は、明らかに武寧王陵・宋山里6号埴室墳の影響による。この熊津洞古墳石室の規模は宋山里古墳群の石室群と遜色はない（図17）。そのいっぽう1979年発掘の石室群は天井部がすべて破壊されているが、片袖式石室や壁体の構造などから穹窿状天井に復元されている。11基の石室墳の玄室規模は、長さ225～275cm、幅180～220cmで40～50cmに集約されるほど規格性のある石室群である。宋山里古墳群とは、玄室形態（長幅比）の相似関係にあり、長幅とも2尺前後の差異がある。

公山城の東南にあたる甬通洞では、数十基の古墳群が分布するという（軽部1933）。2～3基の宋山里型石室をふくむ。持送り式平石天井石室（甬通洞4号墳）など、宋山里型より新しい段階の石室墳が存在する。

新基里古墳は、公州の東南の烽火台（標高314m）の西南500mの山塊中腹に位置する。長方形の玄室で、天井石まで217cmの高さまで穹窿状に持ち送る。

校村里古墳群もまた熊津城に近接して築造された古墳群である。「宋山里古墳地帯と鳳凰山と

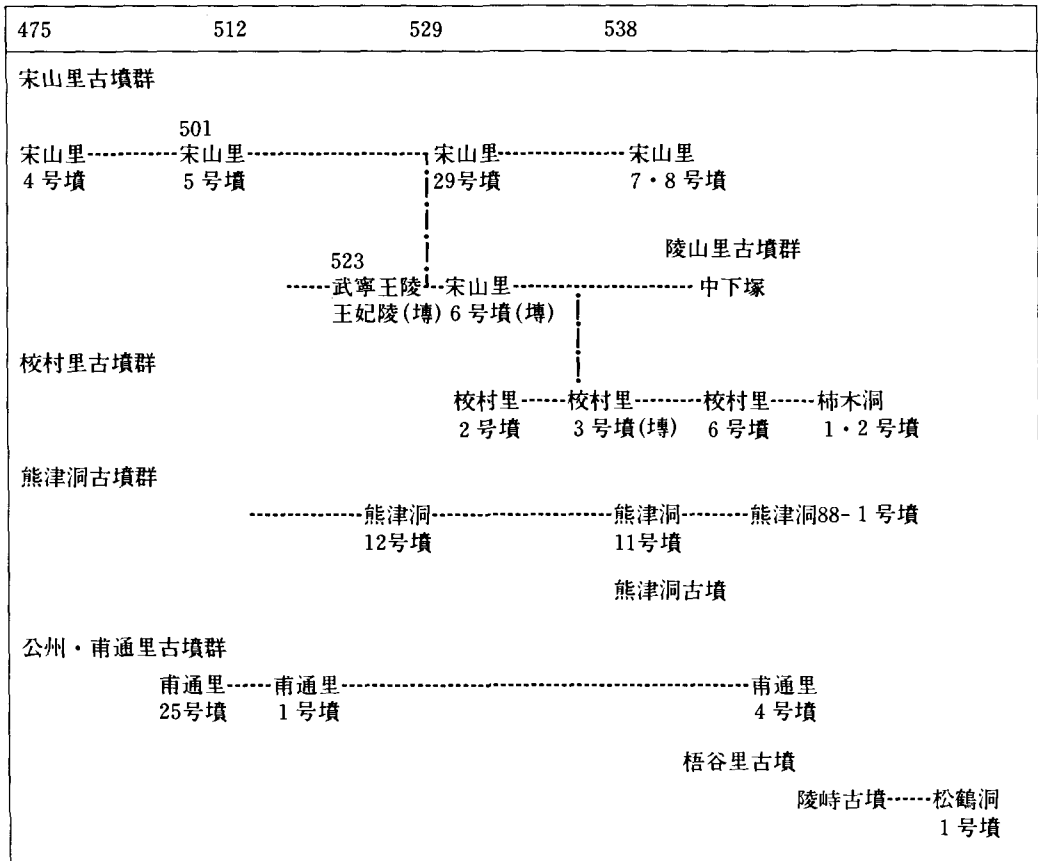


図18 公州における横穴式石室墳の変遷

の中間に位置する丘陵地帯で公州邑錦町の西にあたる「校村峯一帯」の南面する丘陵の中腹に二十余基が分布していたという（軽部1933）。5基の概要が報告されているが、1・4号墳が斜天井（合掌）式石室で、他の2・3号墳の2基は大破して不明であるが、穹窿状天井の埴室墳の可能性があるとす（軽部1933）。王陵群である宋山里古墳群以外では、近接する校村里で埴室墳が築造されていたことになる。東城王・武寧王代の王族・貴族層の墓地であろう。

熊津時代の公州地域において、持送り平天井式石室（A類）・穹窿状天井式石室（B類）・トンネル形天井式石室（G類）・斜天井式石室（I類）・竪穴式石室が併行関係にありながら展開している。そのなかで宋山里型石室はきわめて数少ない。古墳群全体をみると、宋山里古墳群が卓越し、その下位に熊津洞古墳群が存在する。金鶴里古墳や甫通洞古墳群のように、群集する古墳群のなかで、宋山里型石室の占める割合が少ないとみられる。古墳群全体の詳細な発掘調査がなされていない段階で推定せざるをえないが、古墳群間に集団（被葬者）・階層差のような関係が認められよう（図18）。

ところで漢江流域の芳萸洞1号墳・可楽洞3号墳も穹窿状天井石室の系統上にある。両古墳は、出土土器から6世紀中葉以降に位置づけられている（尹煥1989）。年代如何によって、穹窿状天

井石室の系統関係が問題となる。尹煥1989は、芳萐洞・可楽洞古墳群の石室・土器の分析を通じて、百済の新羅帰属以後の墓制ととらえる。とすれば公州地域で発達した穹窿状天井石室が6世紀中葉以降、泗沘城遷都後の段階で漢江流域に影響をあたえたことになる。

高句麗では、集安の山城下1368号墳のように、すでに4世紀前半代には穹窿状天井式石室（片袖）が出現し、その後三角持送りや平行持送り天井石室に変遷する。両袖式穹窿状天井石室（単室）としては環文塚・四阿天井塚がある。集安の古墳群で、片袖式の持送り平天井石室墳は数多いが、穹窿状天井石室（単室）の類例はきわめて少ない（柳・張1984）。現在の資料でみるかぎり山城下1368号墳（右片袖式）のような石室が百済の穹窿状天井石室の祖型である可能性がつよい。具体的には山城下1368号墳から宋山里4号墳・芳萐洞1号墳への変遷が想定される。現在漢江流域において、4世紀末から5世紀前半にかけての穹窿状天井石室の好例は未見といえる。

いっぽう4世紀後半の高句麗・百済との政治的関係のなかで、高句麗墓制である基壇積石塚が伝播した。高句麗において、4世紀代の積石塚は基壇化し、さらに切石使用の基壇積石塚に発展する。5世紀前葉の將軍塚を頂点として衰退し、墓制の主流は石室封土墳に移行する。そこで百済に影響を与えた墓制とはいかなるタイプであったのであろうか。

可楽洞5号墳の玄室に三角持送り構造の「力石」の存在が指摘されている（小田1979）。この抹角藻井技法は、石室構築上の力学的な側面と同時に墓制の伝統的要素もかねそなえている。その意味で持送り平天井と穹窿状天井石室はあくまで峻別する必要がある。そうした技法にもとづく石室が、6世紀代の漢江流域で築造され続けたのである。それらが驪州南甬通里古墳・春川芳洞里古墳であったのであろう。

6世紀代の高句麗墓制としては、王都を中心として平壤型石室が発達し、割石積石室は下位の階層の墓として存続していた。その割石積み石室の実態は未だ明らかでないが、石材の切石化が進み、穹窿状天井架構方式は三角や平行持送り、持送り平天井が大半である。したがって6世紀代に新たに、穹窿状天井構造が百済に伝播したとは考えがたい。つまり漢江流域の穹窿状天井石室は、5世紀後葉から6世紀前葉の熊津時代に盛行する墓制であり、その影響によって築造されたのであろう。そうした観点から穹窿状天井式の芳萐洞一号墳を6世紀前葉ごろに位置づけられる。出土土器は、追葬時のものと解釈される。

では6世紀前半、漢江流域ではどのような政治状況にあり、高句麗の勢力はどの程度漢江流域に及んでいたのであろうか。高句麗が忠清北道忠州の中原碑を建立したのが480年頃で、碑文にみえる「幢主」のように軍事支配が濃厚であった。百済の熊津城遷都後のことである。新羅が小白山脈を越え、忠清北道の地に三年山城（報恩）・屈山山城（青山）を築くのは炤知麻立干（479～500年）代、丹陽に赤城碑を建立するのは545年前後で、漢城に新州を設置するのが真興王14年（553）である。6世紀前半代に、新羅は百済と共同作戦によって、嶺北のその他の要地である西原（清州）、管山（沃川）、母山（鎮川）などの地を獲得するという（李丙燾1979）。清州新鳳洞古墳は穹窿天井石室に復元されるが、この段階に伝播したのであろう。熊津時代の特徴的な穹窿

状天井式石室(官人層の墓制)が漢江流域に分布することは、漢城時代の故地の復興が6世紀初めにはじまっていたのではないかと推定させる。

そして新羅の漢江流域への進出は、芳萐洞・可楽洞古墳群で出土する新羅系の低脚高杯に反映する。つまり6世紀中葉前後の時期に、京畿道・咸鏡道・慶尚道の各地で出現することが明らかになってきている(尹煥1989)。漢江流域以外では、慶尚南道陝川郡苧浦里古墳群のように、大加耶滅亡前後に出現する。また咸鏡道の東海岸一帯の古墳・山城においても同様である。それらの土器の絶対年代を決定しうる根拠が十分でないが、新羅の真興王の巡狩碑の建立年代が適用され、6世紀中葉以降の所産と考えられている。6世紀の中葉、低脚高杯などの新羅土器の出土する地域には、新羅の政治勢力が進出してたと推定される。これらの新羅土器を出土する芳萐洞・可楽洞古墳群の石室構造は非新羅的である。熊津時代の穹窿状天井式石室が存続し、追葬時の新羅土器が副葬された場合も想定される。しかし穹窿状天井式石室墳の伝播は熊津期であり、それは百済の政治勢力が漢江流域を奮還し、領有化したことの反映ととらえられる。そして6世紀中葉の560年前後に新羅によって領域化されたのであろう。そのいっぽう錦江下流域に分布する笠店里古墳群は、5世紀後半から6世紀前半の古墳群であるが、穹窿状天井石室の1号墳は5世紀末から6世紀初めと考えられる(全栄来1987)。

以上のように、宋山里型石室は漢江流域の芳萐洞古墳群・可楽洞古墳群に存在し、南は錦江下流域の益山地域に分布する。王都の熊津城(公山城)に隣接する王陵群である宋山里古墳群を核とし、周辺地域の熊津洞古墳群・金鶴洞古墳群に分布する。これらの公山城を中心とした宋山里型石室の分布地域を、熊津城の王畿と設定しておきたい。東城王・武寧王の治世の領域は全羅南道の光州(武州)に及ぶが、宋山里型石室の南限は益山付近である。この益山地域は百済の有力な貴族が蟠踞し、その奥津城が笠店里古墳群であったのであろう。

百済領域が全羅南道に及ぶのは5世紀末葉と想定される。宋山江流域は「慕韓」の地であり、独立的な地域性を形成していた。つまり横穴式石室墳の出現は、百済による領有化を象徴する。

熊津時代の支配体制は、熊津遷都にともない漢城から王室とともに南来した勢力と、土着の新進地方勢力から構成されていた。熊津遷都から泗泚時代にかけて、「大姓八族」などの姓氏集団が成立した。忠清道・全羅道地方の基盤をもつ土着勢力集団(解氏と眞氏を除く)で、百済の遷都とともに中央政界に進出したという(盧重国1978)。八族のうち、眞氏は錦江上流の忠清北道燕岐地方、燕氏は公州地方、沙氏は扶餘地方を勢力基盤としていた。地方制度としての「二二擔魯制」は熊津時代に制度化され、全国の22ヶ所に重要な城(重要城邑)が配置された。

このような姓氏集団や擔魯を基盤とした勢力は一定の地域を占め、その本貫地に墓地を形成していたと考えられる。王族とともに支配層を形成していた沙氏・燕氏・荔氏などの墓制は宋山里型石室を築造したと推定される。熊津時代特有の塋室墳には武寧王が埋葬されたのであるが、『南齊書』にみえ、「行武威將軍弗中候」に封じられた解禮昆の一族は、同じ塋室墳であったかもしれない。王陵群である宋山里古墳群以外とすれば、校村里古墳群(塋室墳)が該当しよう。

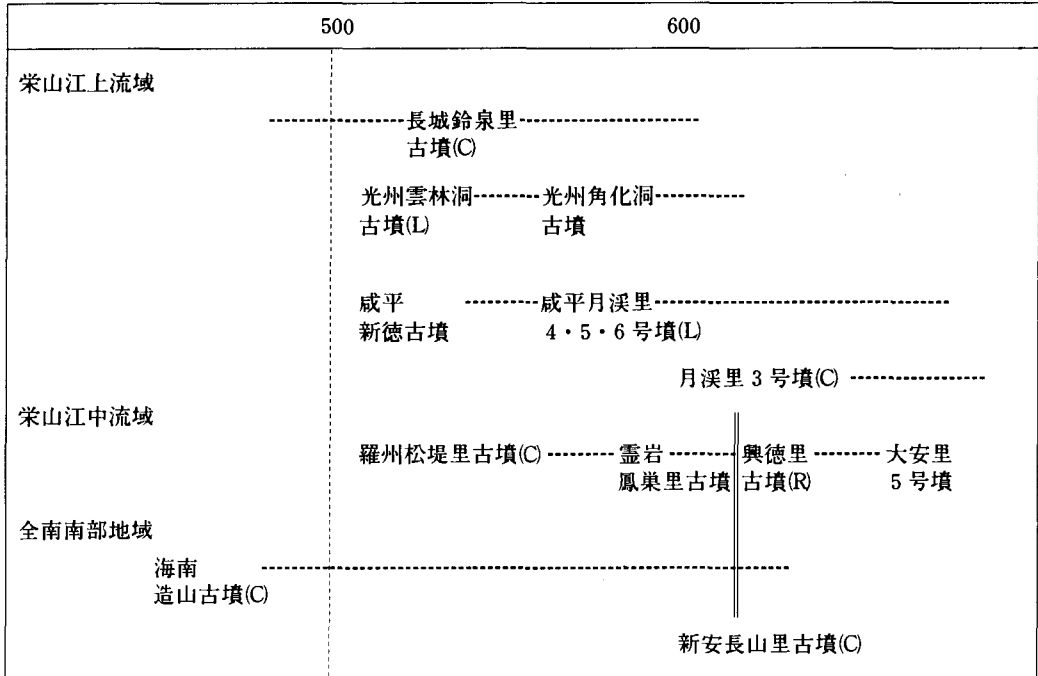


図19 栄山江流域における横穴式石室墳の変遷

また笠店里古墳群が所在する益山地域には、熊津時代初期から有力な氏族のいたことはいない。泗泚時代の武王代には別都が造営されたほどの地域である。

古墳群と山城の立地が不可分の関係にあることが指摘されている（姜仁求 1977）。公州の公山城を核として、城郭が配備されている。山城のすべてにおいて古墳群が発見されていないが、百濟時代の古墳群の分布地域に山城があれば、その築城時期は三国時代にさかのぼりうるであろう。熊津時代の古墳群と山城の研究によって、二二魯營制施行の実態も明らかになるであろうが、ここでは宋山里型石室の分布地域に注目しておきたい。

宋山里型石室は、加耶の地域にも伝播する。慶尚南道陝川郡の古墳群では、苧浦里古墳群（D1-1号墳）をはじめ、穹窿状天井石室が出現する。陝川郡は大加耶国の有力な勢力基盤であるが、その加耶の地で5世紀末から6世紀にかけての時期に、横穴式石室墳が出現している。その石室構造は、熊津時代に発達した穹窿状天井石室であり、百濟と加耶の政治的関係を示唆している。

近年栄山江流域など、全羅南道における考古学的調査はめざましく、横穴式石室墳の発掘も進展しつつある。今日知られる石室墳は表のようである。わずかな資料であるが、膨大な量の石室墳が分布していると推定される。徐聲勲・成洛俊1984・李栄文1990・林永珍1990らの最近の研究成果に依拠して、その変遷を図示すれば図19のようになろう。

栄山江上流域の光州角化洞・雲林洞古墳、支流の黄龍江流域の長城鈴泉里古墳、咸平郡新徳古墳・月溪里古墳群が分布する。光州角化洞古墳（図版15—15）は、持送り平天井式・左片袖式石室である。公州時代に穹窿状天井石室とともに発達した構造の石室である。雲林洞古墳（図版15

—17) の袖の形態は不明であるが、奥壁が垂直化した平天井式である。角化洞古墳より後出する型式である。鈴泉里古墳は、塼状の板石を持ち送りした構造で、袖に門柱石を立て、両袖式とする。古墳の年代は6世紀後半頃に比定されている(李栄文1990)(図版15—18)。

柴山江の支流の威平郡一帯の古墳群である。月溪里石溪古墳群で石室墳が発掘されている(林永珍1990)。片袖式石室にまじって、3号墳のような平斜式天井石室がふくまれる。

柴山江下流域では、羅州の潘南面古墳群の興德里古墳・大安里5号墳と松堤里古墳の3基とその南に霊岩郡鳳巢里古墳が知られている。松堤里古墳は両袖式持送り平天井式で、鈴泉里古墳石室に類似する。興德里古墳は切石加工の石材で構築する。両袖・片袖式の二室が一長壁を共有してつくられたものである。鈴泉里や造山古墳の石室の影響を受けている。大安里5号墳は、板石造りの平天井石室で、平斜式天井石室が変化したものであろう。

海南郡の九月川流域に月山里造山古墳が所在する。両袖に板石を立て、玄室側壁基底部に板石を横積みし、偏平な割石を小口積みする。3枚の天井石を架構した平天井式である。古墳の時期は、副葬品からみて5世紀末から6世紀初め頃である。熊津時代の初期に伝播した石室墳といえる。

新安郡の長山島で道昌里古墳(金元龍・任孝宰1968)、安佐島で邑洞里古墳群・大里古墳群・大里ペノルリ古墳群(崔盛洛1986)が知られている。前者は典型的な平斜式天井石室で、邑洞里1・2号墳は持送り平天井石室である。

全羅南道威平郡新徳古墳は近年(1991年)に発掘された(成洛俊1992)。全長51m・後円部直径30m・前方部幅25mの前方後円墳である。後円部に横穴式石室が構築され、金銅冠・玉類・馬具・棺金具などが出土している。遺物や石室の形態からみて、造山古墳よりも後出する時期で、6世紀初と推定される。

全羅南道の柴山江流域は大型甕棺墳の分布地域として知られるが、この地域での横穴式石室墳の出現は、熊津時代の百済王権の南進・領有化と軌を一による。5世紀代の柴山江流域は、中国の史書(『宋書』・『南齊書』)が認識した「慕韓」であったと推定される。熊津王権は地方支配を進めたが、宋山里型石室の分布はその象徴といえるものであった。全羅南道地域には、穹窿状天井石室ではなく、持送り平天井石室の伝播過程で、造山古墳のような石室が出現した。穹窿状天井石室のように比較的偏平な石材を用いて積築した構造である。笠店里1号墳のような穹窿状天井石室と類する要素もみられる。造山古墳出土の馬具・百済土器などは、笠店里1号墳とともに熊津時代を代表する遺物で、そうした石室構造・文物が、加耶や倭に伝播された。

#### (4) 陵山里型石室墳とその分布

平斜天井の石室を「陵山里型石室」として設定したことがある(東・田中1989)。時を同じくして「扶余型」(尹武炳1989)と呼称された。その後平斜式天井を3分類する説がだされた(吉井1991)。その吉井分類にしたがい、平斜天井石室(断面六角形)は、使用石材によって3類に分けることができる。

陵山里型石室；平斜天井で切石積の石室に限定する。四壁は1～4枚の整形した切石を用いて構築する。奥壁が垂直であり，側壁上部に長大な石を横積みする（吉井分類 a 類）。

陵山里型Ⅱ 1 式；平斜天井で，壁体に切石・割石を使用する（吉井分類 b 類）。

陵山里型Ⅱ 2 式；平斜天井で，四壁および持送り石材に割石を使用する（吉井分類 c 類）。

Ⅱ 1・2 式は構造的に陵山里型石室に規制されたもので，年代差・地域差とともに階層差を反映している。

次に陵山里型石室をふくむ古墳群の性格の一端をとらえることにする。陵山里は，泗泚城の羅城の東方に位置し，次のような古墳群が知られている。

陵山里伝百済王陵群（図版16）

陵山里東古墳群（図版16）（梅原末治1938）

陵山里古墳群（図版16）（埴床塚・割石塚・露出石槨墓・切石石槨墓）（『図譜』3）

陵山里通馬里大塚（図版16—10）（『図譜』3）・通馬所1・2号墳（姜仁求1977）

これらの古墳群は，伝王陵群を中心に鳥石山麓丘陵の南斜面に立地する。陵山里古墳群では8基の古墳が縦横に配列された状態で分布する。その立地条件などは高句麗の湖南里古墳群，百済の宋山里古墳群などの王陵群と共通する。なお陵山里古墳群では，東下塚（平天井）・中下塚（トンネル形天井）をのぞく6基が斜天井石室である。

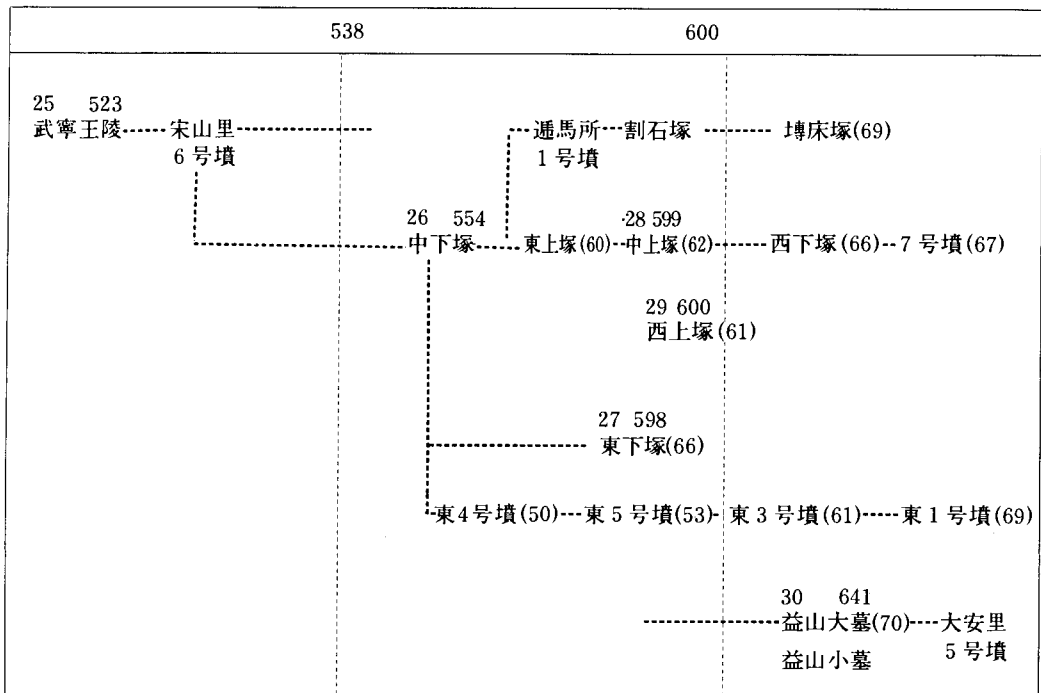


図20 錦江流域の石室墳の変遷

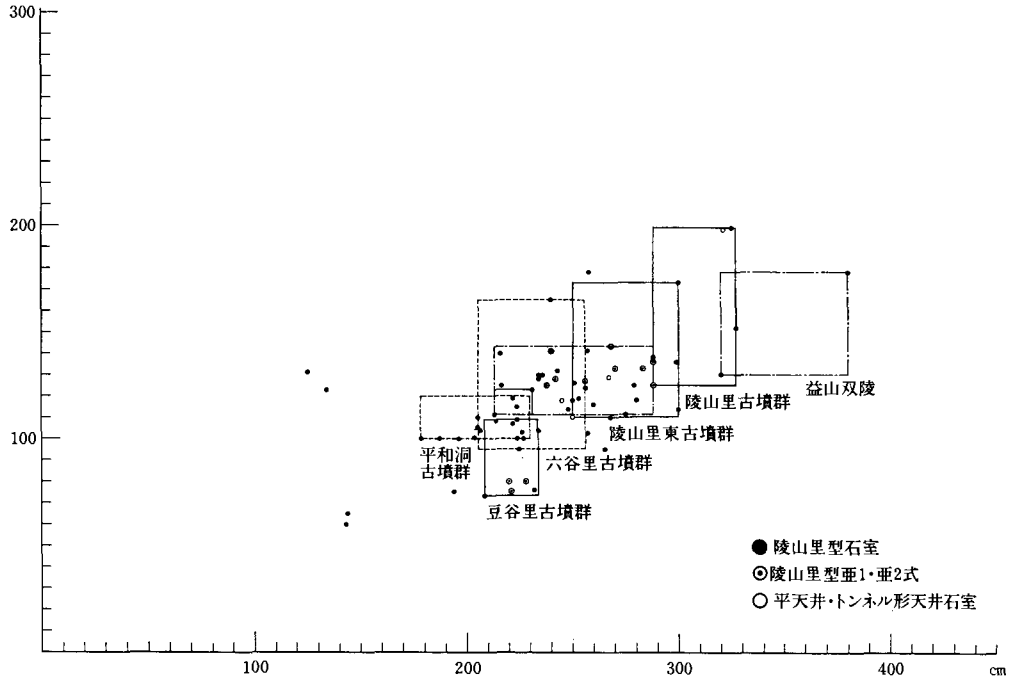


図21 陵山里型石室の規模

割石塚は片袖式，四壁持送りの平天井式である（図版16—12）。陵山里地域の古墳群のなかで，割石積みの石室としては唯一である。周辺に群在するのであろうが，類例は知られていない。壁体に整形した石材や偏平な石を用いたのが，通馬所1号墳である。いずれも熊津時代に発達した穹窿状天井石室の天井構造が偏平化したものと考えられる。陵山里地域において，割石積石室は6世紀前半ごろに位置づけられよう。

中下塚の石室は，武寧王陵や宋山里6号墳のような塼室墳を模倣，材質を花崗岩にかえて出現したものであろう（図版16—1）。壁体の切石化が進むと同時に，硬質の花崗岩を曲線的に成形加工する技術はきわめて高度に発達した。石室規模は東上塚に匹敵し，百濟石室墳として最大級である。型式学的には，武寧王陵が上限時期となるが，扶餘に位置することからみて，泗泚城遷都（538年）後に構築された石室であろう。また壁の全面に漆喰を塗り，羨門は「塼」を積み重ね閉塞する。

陵山里東古墳群は，伝百濟王陵群の東側，小谷を隔てて立地する古墳群がである。各石室は共通して平斜天井であるが，平面形・積築石材に差異がみられる。4号墳のように羨道および玄室の長いタイプは古いものとみられる。玄室も板石3枚を立て，長大石を三段に持ち送り，斜天井をつくる。もっとも新しいのは3号墳であろう。板石の垂直壁面に一段の長大石を斜めに配する。羨道も極端に短くなる。この古墳のばあい長い墓道が確認されている。また1号墳は，直方体の花崗岩切石を積み上げた，平斜式天井構造である。



埴床塚(図版16-9)は中上塚の石室に類し、床面に埴を敷く。埴室墳の遺風であろう。「露出石槨」と称された石室は割石加工であるが、玄室内面のみ平坦に研磨される。「切石石槨」は文字どおり切石加工された石室である。陵山里古墳群や同東古墳群とは別の一群が存在することが知られる。

遙馬所大塚(図版16-11)は、埴床塚などの古墳群の西方に位置するという。片袖式で、2枚の側壁を横積みし、その上部をアーチ状に積築する。中下塚と同種の加工技術が用いられている。熊津時代の埴室墳の伝統を継承し、中下塚と同時期に構築されたのであろう。

陵山里一帯の各古墳群の築造序列を群別に想定したのが図20である。石室の変遷を把握する際は、次の諸要素に留意した。

- ・天井は低平化し、天井幅と玄室幅指数が高くなること。
- ・羨道が短くなり、墓道が発達すること。
- ・使用石材は切石加工し、板石を多用化されること。
- ・玄室が縮小化すること。

扶餘郡を中心とした古墳群は、錦江とその支流沿いの平野・小盆地に分布する(姜仁求1977)。

亭岩里古墳群(洪斌基・徐聲勳1981)は、扶餘邑の真南、錦江を渡った南岸の丘陵地帯に位置する。江に面するメボンサン南麓と鞍装山の南斜面に100余基が分布するという。80基が確認され、15基が発掘された(図版18-1~12)。

トンネル天井・片袖式(20・25号墳)・平斜天井・両袖式(1・49・50号墳)・持送り平石天井・片袖式(22・44号墳)・持送り平石天井・両袖式(45号墳)・持送り平石天井・横口式石室(2・3・4・5・6・8・46号墳)

王京に近接したこの古墳群において、石室規模最大のもので長さ2.7m、幅1.4mであり、構造・築造法などからみて、陵山里古墳群よりは下位の階層の被葬者集団と想定されよう。

豆谷里古墳群(徐聲勳1979)は、聖輿山城の東南の大輿山城の西に位置する(図版18-13~20)。10基が発掘された。6基(1・2・5・6・7・8号墳)が陵山里型の平斜式天井石室である。9・10号墳は平天井式に属し、8号墳は平天井式に還元される余地もある。10号墳は片袖式で、偏平な板石造り石室で、羨道が短くなり、墓道が発達している。陵山里型石室の玄室長幅指数は35~49である。つまり長方形の玄室で、単葬であることを意味する。また天井幅・玄室幅指数は72~92であり、平天井へ傾斜しつつある。羅州大安里5号墳のような石室に移行している。したがって豆谷里古墳群は、7世紀中葉前後に位置づけられる。古墳群の大半が陵山里型石室からなり、被葬者は官人層と推定される。時期的には六谷里古墳群よりくだる。石室規模は小さく、身分的には六谷里古墳群でいえば、下位の階層に相当しよう。

洪城星湖里古墳群(安承周・李南奭1991)は、茅山湾に流れる河川の右岸に張り出す青龍山(標高236m)の南斜面に立地する。約20基が分布し、14基が発掘された(図版17-13~24)。10号墳以外は横穴式石室で、右片袖持送り平天井(1・2号墳)、左片袖持送り平天井(5・9・

12号墳), 両袖持送り平天井(6・7・11号墳), 両袖平斜天井式(3・8号墳), 無袖式(4号墳), 無袖平天井式(13号墳)に分類される。持送り石室のなかでも, 奥壁が垂直である石室は3・4・5・6・7・8・11・13号墳で, その他の石室もその傾斜はゆるやかである。熊津時代から泗泚時代にかけて, 穹窿状天井から持送り平天井への移行期の石室であるととらえられている。3号墳は陵山里Ⅱ2式で, 基底部(腰石)に偏平な板石を据える。古墳群の性格・階層性を想定するうえで示唆的である。

表井里古墳群(徐聲勲・申光燮1984)は, 扶餘の東南方の論山の東側約10kmの連山地方にある。黄山城(官東里山城)・新興里山城が立地する。古墳群は黄山城の西麓の斜面に数百基が分布する。これまで21基の石室墳と1基の甕棺墓が発掘された。堅穴式石室18基で, なかに横口式構造の石室をふくむ横穴式石室は3基である。片袖式横穴式石室2基は片袖式で, 四壁は割石積みで穹窿状に持ち送られている。これまで典型的な陵山里型石室は知られていない。表井里古墳群は, 泗泚時代よりも, 熊津時代の墓群といえる。唯一平天井石室も確認されている。壁面に板石を用いた持送り平石天井で, 亭岩里46号墳などの石室に類似する。年代的にみても泗泚城時代の墓制であろう。

六谷里古墳群(安承周・李南爽1988)は, 忠清南道論山郡可也谷面に位置する。発掘された古墳は13基で, 丘陵上およびその南斜面に立地する。陵山里型石室(3・7・10号墳), 陵山里Ⅰ1型(2号墳), 陵山里Ⅱ2型(9・12・13号墳), 持送り式平天井式(1・4・8・11号墳), 平天井式(6号墳), 堅穴式石室(5号墳)である。古墳群の立地・配置から6群に分れる。これらの古墳群の変遷をとらえてみよう(図版17-1~12)。

陵山里型石室は, 3→10→7号墳という一定の時間差をもった変遷が想定される。7号墳の平斜天井は, 型式学的にみて6号墳の平天井に変容する。各群は2ないし3基で構成されるが, 3~5群には陵山里型とそのⅡ型が含まれる。その関係は時間差ではなく, 被葬者の身分的差異をあらわしているようである。7号墳では, 銀花飾りが出土しているが, 類例が扶餘下黄里・南原尺門里・羅州興德里古墳で出土している。『周書』などの百濟伝にみえる冠飾に比定されることから, 7号墳の被葬者は「百濟の上流支配層, 第六等(奈率)以上の官位を授与されたものと推定されている(安・李1988)。興德里古墳は平天井化した段階の石室で, 百濟末期に想定されるが, 7号墳も7世紀前半代と考えられる。また六谷里2号墳出土の土器は, 「錦江Ⅲb」式で, 6世紀後葉~7世紀中葉の時期と推定されている(吉井1991)。石室構造をみると, 3号墳より若干先行する可能性がつよい。六谷里古墳群では, 13基の石室をみるかぎり, 陵山里型石室の出現は後出する。六谷里古墳群における陵山里型石室の規模は, 図21で明らかのように陵山里東古墳群にくらべて, 玄室長で2尺弱の小形である。あえて推測すると, 「奈率」階層の墓群に相当するといえよう。

扶餘の西南, 西海岸沿辺の忠清南道舒川郡庇仁面に陵山里型石室が存在する。「庇仁面の国民学校の裏山」で発見され, 発掘調査がなされた(斎藤忠1934)。墳丘の上部に城壁が築かれてい

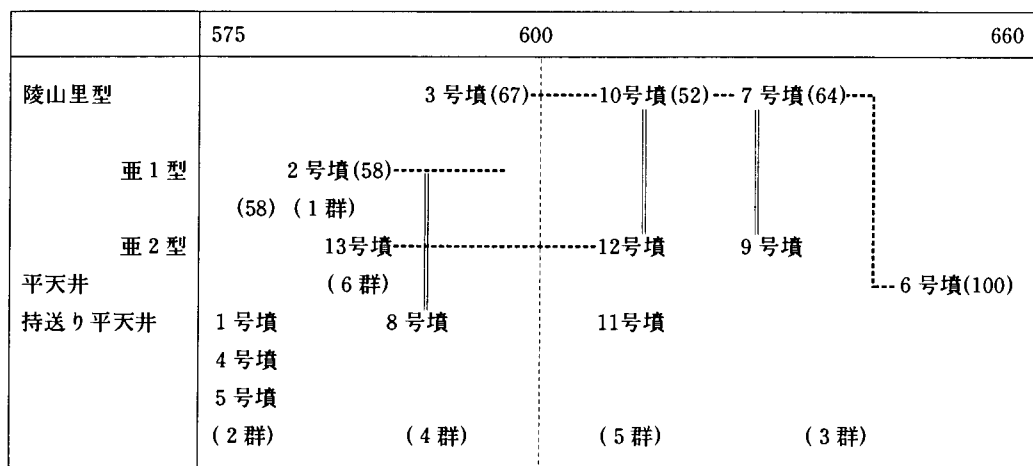


図22 論山六谷里古墳群における石室墳の変遷 (模式図)

ということから、その城壁は庇仁面城内里にある城内里山城であろうか。片袖式石室で、切石状の石材を用いて構築する。天井・玄室幅指数(63)は、扶餘県北里2号墳などに類似する。

また城内里の西北の漆枝里古墳群で16基が発掘された(安承周・李南爽1991)(図版17—25—40)。そのなかに陵山里垂1型の両袖式・平斜式天井石室(3・10号墳)がふくまれる。他は、片袖式・平斜式天井(1・2?・5・6・8・9号墳)、両袖式持送り平天井石室(7・10号墳)、無袖式・持送り平天井石室(11・15・16号墳)である。片袖式であるが、平斜式天井構造の一群は、陵山里型石室の構築技法と関連する。庇仁面における二つの古墳群は、身分・階層差を示すのであろう。

扶餘の北方、旧都の熊津城と泗沘城の中間地帯に陵山里型石室が分布する。公州郡松鶴里古墳群である(図版19—1—5・7・9)。松鶴里1号墳についてはすでに姜仁求1976によって紹介されていたが、1987年に再調査がなされた(百濟開研・公州大博1990)。10基の墳墓が発掘されたが、高麗時代・朝鮮時代の墳墓各1基をふくむ。典型的な陵山里型石室は1・3号墳であり、切石が使用されている。4号墳は陵山里型ともいえるものであるが、垂1式石室に分類される。5・6号墳は「横口式石室」で、平天井化がすすむ。9号墳も平斜天井と平天井の中間形態を示す。7号墳では平天井石室となる。この松鶴里古墳群では、1号墳のような陵山里型石室の築造にはじまり、階層的に低位にあたる陵山里垂1式の石室(4号墳)が存在する。さらに時期的に新しい段階の5・7号墳が出現している。堅穴式石室にちかい横口構造の石室は、追葬のともなわれない、いわゆる単葬墓として発達したものであろう。平斜式天井構造もみられ、陵山里型石室の変形として位置づけられよう。

南山里古墳群は、扶餘の東側約10kmの地点に所在する(図版9—6・8)。8基の百濟時代の墳墓が発掘された。持送り平天井石室1基(1号墳)、堅穴系横口式石室1基(2号墳)、板石造り石室(4号墳)と土壙墓4基である。

全羅北道の錦江下流・萬頃江流域にかけて百濟石室墳が分布する(全榮来1985・1987, 崔完奎1991)。弥勒山城を中心とする四方に散在する。平斜式天井石室は10数基知られ、陵山里型石室は益山大墓・小墓, 屯山里古墳, 平和洞古墳群(1・5・6号墳), 長興里1・2号墳, 孔德里古墳である(図版18・19)。

益山双陵は、弥勒山城の南, 王宮寺址の西北の丘陵上に位置する。今日その周辺では古墳は未確認で、広大な葬地を占めていたと推定される。益山大墓は、陵山里型石室では最大である。小墓も陵山里古墳群に匹敵する。その被葬者は、弥勒寺を造営した武王(641年没)である可能性が大きい。大墓の天井幅・玄室幅指数は70で、平斜式天井石室としては新しい段階に属する。7世紀第2四半期の典型例とすることができよう。

屯山里古墳は、益山双陵に次ぐ規模をもつ。天井・玄室幅指数が62で、600年前後と推定され、双陵より先行して築造されたのであろう。王宮址に近在することから、官人層の墓とみられる。

源水里古墳(74)も、弥勒山一帯に群在する古墳群の一つで、7世紀以降に新たに築造されはじまったと考えられる(図版18—23)。

笠店里古墳群は5世紀後半から6世紀前半代に築造された墓群であるが、直線距離で2km隔てた將相里の古墳群が存在する(崔完奎1991)。ソジ所在古墳は片袖式の持送り平天井石室であるが、トンネル形に持ち送っている。その構築時期は6世紀前半頃とみられる(図版18—24)。また將相里の軍屯の丘陵に7~8基の古墳が分布する。その1基は片袖式で、2枚の巨石を縦積みした奥壁、長方形の切石状板石を腰石として縦列し、その上部を持ち送る。奥壁部分はトンネル形を呈するが、玄門付近は平斜式に持ち送る。つまり磚築墳の影響があるとともに平斜式天井に移行する過度期の石室と考えられる。笠店里古墳群と同様、熊津城から泗沘城遷都の時期にかけて築造されたものであろう。その東方数kmに城南里古墳群が立地する。陵山里型石室で、その規模から平和洞古墳群と同等の階層の墓域と想定される。

金堤の長興里1号墳は陵山里Ⅱ1型であるが、4号墳は陵山里型の範疇に属する(図版18—33・34)。百濟の穀倉地帯である金堤に位置する古墳群としても注目される。金堤地域は、のちにふれる「中方」の古阜に近接する。官人層の墓群というより在地首長層の葬地であったとみられる。

このように、錦江下流から東津江流域、弥勒山城を中心とする地域は、7世紀前半の副都造営にともない、百濟の政治的領域として再編成された地域であろう。そうした史実を反映するかのよう、宮都・弥勒寺の周辺地域に陵山里型石室墳が築造されている。

東津江河口から南15kmほどに古阜があり、その北3kmに隱仙古墳群が位置する。石室群は3類型に分けられている(全榮来1973・1985)。第1類は平斜式天井(A・B・C・D・P号墳)、第2類は片袖式の四壁割石積み、持送り式平天井(E号墳)、第3類は1類と2類の過度形態で、片袖式の持送り平天井(G・H・L・N号墳)である。第1類は陵山里型石室、第3類のなかで、隱仙G・H号墳は割石積みの平斜式天井で、陵山里Ⅱ2型に近似する。陵山里型石室の天井・玄

地域	538	600	641	660
益山郡			-----益山大墓(70)-----益山小墓	
		屯山里古墳(62)-----	源水里(74)	
			城南里1号墳(67)-----13号墳(71)	
沃溝郡	將相里ソジ古墳-----	軍屯古墳(51)		
全州市			平和洞-----平和洞	
			1号墳(63) 5号墳(55)	
金堤郡		長興里---長興里-----	孔德里古墳(67)	
		1号墳 4号墳(71)		
		(67)		

図23 錦江下流域(益山地域一帯)における石室墳

室幅指数をみると、C・P号墳(72)→A号墳(80)・D号墳(83)となる。7世紀前半に出現し、百濟末期まで存続した古墳群であろう(図版18—35・36)。

隱仙古墳群は、天台山(標高195m)の西南傾斜面に立地する。小谷の奥まったところであり、隱仙里三層石塔と西面する。この石塔の年代は高麗時代とされるが、百濟時代にさかのぼる可能性がある。今後百濟における古墳群と寺院(氏寺)との関係などが問題となるであろう。

陵山里型石室墳は、王都の扶餘を中心に分布する。泗泚城時代には、葬地は王都外に築かれる。王都の羅城に近接するのは、東方の陵山里古墳群、南方では錦江の対岸にあたる享岩里古墳群、西方では太陽里古墳、北方では新城里古墳群というように、王都の四方に葬地が存在する。さらに北は旧都の公州地域、東は論山地域に分布する。南方に立地する王都の防備城である聖興山城一帯に点在する。また泗泚城の副都とみられる益山地域では、弥勒山城の周辺地域に散在する。西南は東津江の南、古阜の隱仙に分布が存在する。その南限は全羅南道新安郡の島嶼、長山島道昌里古墳である。今日栄山江流域では未確認である。

陵山里型石室は、陵山里古墳群で成立した百濟特有の墓制である。泗泚城を中心として周辺地域に分布域を拡大したことがうかがえる。百濟王陵ないしは支配階層の墓制として出現・発達した陵山里型石室の分布地域は、よりつよい百濟の政治的領域を反映するものと推定される。それは百濟の地方統治体制との関係である。

百濟の統治制度として、五部・五方制がある。「五方」制は、扶餘遷都後に発達した政治制度で、百濟の領域を五方の行政組織に区分して統治した。その五方については、今西龍・千寛宇1989らの比定がある。

「中方」が古阜古沙城に比定され、隱仙古墳群がその地域・時期の古墳群と推定された(全栄来1983・1985)。古墳群の被葬者は、中央から地方行政責任者として派遣された「貴族層」ととらえられている(安承周・全栄来説)。

「東方」の中心は論山一帯の地域であろう。論山郡可也谷面六谷里付近は、『三国史記』地理

志の「徳殷郡，本百濟徳近郡，景德王改名，今徳恩郡」で，朝鮮時代に「恩津県」となった（今西龍）。その恩津の地に分布するのが六谷里古墳群である。この一帯を「東方」に推定しておきたい。

「南方」については，南原説が有力であろう。南原草村里古墳群では，E10号墳など陵山里亜1型石室が発掘されている。未調査の古墳群のなかに典型的な陵山里型石室が存在しているのであろう。古墳群の一角の「尺門里」で銀花飾りが出土している。出土した石室は，六谷里7号墳のようなものであったと推定されよう。千寛宇説の金堤郡一帯にも，地域勢力のあったことは陵山里型石室墳の分布状況が示すが，「中方」の行政地域に属していた可能性があろう。金堤郡には，王宮，弥勒寺・弥勒山城が近在し，有力な地域であったことは確かである。

「西方」についての定説はない。「北方」の公州のさらに北ないしは西北方の地域にもとめるか，扶餘の泗泚城の西方にもとめるかである。そこで現在知見にのぼる資料であるが，舒川郡庇仁面の陵山里型石室の存在は注目されよう。忠清南道洪城郡一帯の星湖里古墳群なども問題となろう。いずれにしても「西方」の所在地については将来の分布調査や発掘調査で明らかになるであろう。

以上のように，陵山里型石室の分布は，泗泚時代における政治領域をあらわすとともに，百濟の地方支配が確立し，五方制が浸透したことをものがたる。陵山里型石室という中央支配層の墓制が，規範をもって各地域の支配層（在地首長層・官人層）に受容されていったのである。7世紀中葉頃には，平天井式の石室に変化したが，その段階では墓制における身分制は形骸化したのであろう。

陵山里型石室墳の北限は公州付近で，漢江流域にはみられない。それは真興王巡狩碑（北漢山城碑）にみられるように，六世紀後半には新羅の領域下にあったからにはほかならない。

いっぽう全羅南道の柴山江流域，慶尚南道の加耶の地域ではどうであろうか。加耶の地域には五世紀後半以降に百濟の横穴式石室墳が受容されるのであるが，この百濟独自の陵山里型石室が加耶滅亡後の慶尚南道から全羅南道地域にどのような展開をとげるのか興味ある問題である。

ところで，陵山里古墳群の所在地が百濟王室の葬地であることは，壁画古墳の存在や古墳の規

表6 五方と古墳群

	今西龍1921	千寛宇1989	全栄来1985	古 墳 群
中方古沙城	全羅北道井邑郡古阜	古阜	古阜	古阜・隠仙古墳郡 論山・六谷古墳群 金堤・長興里古墳群 南原・草村里古墳群
東方得安城	忠清南道論山郡恩津	恩津		
南方久知下城	全羅北羅南原・淳昌・ 潭陽・長城以北	全羅北金堤郡金溝	南原	
西方刀先城	忠清南道西北端	礼山大興・瑞山・ 唐津		
北方熊津城	忠清南道公州郡			

模などからみてうたがいない。陵山里の古墳群の築造順序を図20のように想定したのであるが、同時に王陵を比定する結果となった。

結論的には、姜仁求1977の説のとおり、聖王は中下塚、威徳王は東下塚に想定される。また石室構造・規模などから、恵王（中上塚）・法王（西上塚）に比定し、その次王の武王は益山大墓と考える。

中下塚は、武寧王陵や宋山里6号墳のような塼室墳を模倣した石室であった。聖王が即位した時点で寿陵として築造しはじめたとすると、その葬地は宋山里であったにちがいない。538年に泗泚城に遷都したのち、新たにその葬地を陵山里に定めたのであろう。聖王の死と無関係に墓がつくられていた。とすると宋山里に築造されたままで、埋葬されなかった墓があったはずである。それはまさしく宋山里6号墳でないであろうか。寿陵の存否については、武寧王陵の場合、壬辰年（512）銘の塼が墓室の閉塞塼として使用されていたのである。こうした視座で宋山里6号墳・中下塚をとらえることができよう。

東下塚の石室構造は特異である。玄室の四壁・天井を巨大な一枚の花崗岩切石で構築されている。そしてその研磨水引きされた花崗岩・片岩に直に四神・蓮華・雲文が描かれている。玄室から羨道の床面には塼が敷かれている。その遺風は塼床塚に継承されている。巨石に直接壁画を描く手法は、高句麗の江西大墓・中墓にみられるのである。高句麗壁画は通常漆喰を塗り、その上に描かれる。蓮華文は真城里四号墳や内里1号墳の壁画・丁巳（597年）銘軒丸瓦の文様と類似する。東下塚の蓮華文は6世紀後葉から7世紀前葉の頃の様式である。

また東下塚の平面形は前代の石室からは生まれえないのである。それは玄門部に「甬道」の要素が認められるのである。つまり複室構造に発達した段階を経てはじめて出現する形態である。羨道・墓道が発達した高句麗石室、とくに平壤型石室の影響が認められるのである。ところで江西大墓は平原王（559～590）の陵に比定されたのであるが、その同時期に築造されたのが東下塚であったのであろう。その被葬者と推定される威徳王の没年（594）と矛盾しない。東下塚壁画墳は、単に壁画のみならず、石室構造とともに高句麗墓制の影響も否定しえない。

### 3 加耶における横穴式石室墳の出現と展開

#### （1）洛東江流域における横穴式石室墳の分布

洛東江流域における竪穴式石室・竪穴系横口式石室・積石木槨墳の分布は、加耶と新羅の地域性、領域関係を示している（東1992）。5世紀後半になると、洛東江の西岸地域は竪穴式石室墳、東岸地域には竪穴系横口式石室墳が分布する。竪穴式石室の出現時期やその地域は明らかでないが、弁辰や加耶の地域で発達したものと推測される。洛東江流域のなかで、金海の地域では3世紀から5世紀前半にかけて大形の木槨墓が発達していたことが、大成洞墳墓群の発掘によって認識されるようになった。

竪穴系横口式石室墳は、洛東江東岸地域の安東・義城・善山・大邱・昌寧地域、西岸にあたる星州の地域を中心に分布する(東1987)。洛東江流域における竪穴系横口式石室墳の構造分析と分布論から、洛東江東岸地域を「江東流域文化領域圏」と呼称し、政治的にも新羅の領域に属した地域を把握される(東1992)。つまり竪穴系横口式石室は、新羅の政治的領域圏内に分布する墓制といえるのである。

そのいっぽう竪穴式石室分布圏であった洛東江西岸の加耶地域に、横穴式石室墳が出現することが明らかになった。その時期、出現の契機など解明すべき問題も多い。これまで洛東江西方の地域で発掘された横穴式石室墳について、伊藤秋男1973の論考があり、筆者らも概観したことがある(東1987, 東・田中1989)が、その後曹永鉉1990や洪潛植1992論文によって精緻な考察がなされている。また各道における分布調査の進展によって相当数の横穴式石室墳が分布することも明らかになっている。結論的に、以下に掲げる古墳群のすべてが、加耶時代のものとはいえないので、とりあえずは洛東江流域に分布する横穴式石室墳としてとらえておく。

- ① 慶尚北道高靈池山洞折上天井塚(梅原末治1947)
- ② “ 古衙洞古墳群(尹容鎮1966, 啓明大博物館1984)
- ③ 慶尚南道晋州玉峯・水精峯古墳群(『凶譜』3, 定森秀夫・吉井秀夫1990)
- ④ “ 昌原加音丁里古墳(洪潛植1992)
- ⑤ “ 金海三山里古墳(梅原末治1947, 神谷正弘ほか1989)
- ⑥ “ 陝川亭浦里古墳群(釜山大博物館1987, 慶北大博物館1987, 暁星女子大博物館1987)
- ⑦ “ 陝川郡三嘉面良田里・三嘉古墳群(東亜大博物館1982)
- ⑧ “ 陝川玉田古墳群
- ⑨ “ 昌寧校洞古墳群(神谷ほか1989)
- ⑩ 全羅北道阿英面斗洛里古墳(全北大博物館1989)

① 慶尚北道高靈池山洞古墳群

高靈の池山洞古墳群には数多く古墳群が分布するが、横穴式石室墳として報告されているのはこの折上天井塚1基にすぎない。右片袖式、持送り式天井式で、両長壁は急激に持送られ、1列、数枚の天井石が架構される。奥壁と前壁は緩やかな持送りがなされている。つまり横断面は1列、縦断面には数枚の天井石を使用する。羨道の間で、天井が一段高くなり、両壁に側柱が立てられている。玄室と羨道をつなぐ甬道の区画がみられる。特異な構造の石室といえる。曹永鉉1990は「池山洞式(斜トンネル複合天井式の縦長方古墳)」と命名している。

② 慶尚北道高靈古衙洞古墳群

古衙洞の山塊からのびた尾根上およびその斜面に10数基の古墳群が分布する。壁画古墳と古衙洞古墳は隣接する。

壁画古墳は、右片袖式で、玄室の奥(後)壁と前壁はやや内傾気味であるが、両長壁は下半部



は垂直に立ち上がり、その上半部は急カーブで持ち送られる。天井石は6枚である。

古衙洞古墳は、両袖式で、玄室の四壁とも垂直に立ち上がり、中位から持ち送られる。天井石は数枚程度であったとみられる。羨道部の中間の羨門側の両壁に立柱がみられる。

高霊の3基の古墳の編年であるが、曹永鉉1990・洪潜植1992とも、壁画古墳→折天井塚→古衙洞古墳という変遷を想定している。玄室・羨道の天井に蓮華文が描かれているが、蓮弁のかたちは、高句麗をふくめ比較すると、百済の陵山里壁画墳（東下塚）のものをもっとも近似する。陵山里壁画墳は、6世紀末頃と推定したのであるが、加耶における仏教的要素の一つである蓮華文の受容という問題もからんでいる。加耶の故地では、7世紀前半に百済の影響があり、仏教寺院が建立されたという説がある。ともかく高霊壁画墳は、穹窿状天井式石室のⅡ型といえよう。百済で発達した穹窿状天井石室（宋山里型）は6世紀中葉を境に変容するが、6世紀後半になっても公州を中心に継続して築造されている。高霊折上天井塚や壁画墳は、トンネル式天井や斜天井石室の複合型（曹永鉉1990）で、さらに穹窿状天井と平天井式の要素も加味して、高霊地域で出現した石室といえる。穹窿状天井式石室の場合、玄室が長方形化すると、縦方向に天井石が増加することは必然的である。その穹窿状天井式要素は斗洛里や芋浦里D-1号墳においてきわめて顕著である。

### ③ 慶尚南道晋州玉峯・水精峯古墳群

晋州の市街地、南江の北岸の玉峯・水精峯とよばれる二つの峯からなる独立丘陵上に7基の古墳が立地する。水精峯2・3号墳と玉峯7号墳の3基が発掘された。いずれも横穴式石室墳で、加耶地域における僅少な横穴式石室の発掘例として知られていた。その後出土遺物の再検討がおこなわれ、土器から水精峯2号墳・玉峯7号墳は高霊Ⅶ段階（6世紀前葉）、3号墳は高霊Ⅷ段階（6世紀中葉）、6世紀前半から中葉に推定されている。石室の序列に関して、3号墳→2号墳と想定したことがあるが、両者は同一構造といえる。両袖式で、玄室の平面形は長方形、直方体で、四壁の積築は持送り、平天井の構造である。縦穴式石室に羨道部がついた形であり、洛東江東岸地域の縦穴系横口式石室の影響、百済の横穴式石室の影響で成立したものであろう。こうした石室タイプは5世紀代にさかのぼる可能性はあろうが、加耶における初期の横穴式石室と位置づけられる。近畿地方の初期横穴式石室にも影響をあたえたものとみられる。今後南江をさかのぼった山清郡をふくめた地域での発見に期待される。

### ④ 慶尚南道昌原加音丁里古墳

本墳は、慶尚南道の地域では特異な構造の石室である。玄室の平面は長方形で、両袖式で、短い羨道がつく。羨道床面は、玄室床面より30～40cm高い有段羨道式である。ソウル中谷里甲号墳と若干の相違はあるが、同一構造といえる（洪潜植1992）。中谷里甲号墳は、6世紀後半から7世紀初頭の石室墳と推定されるが、可音丁里古墳も加耶滅亡後の6世紀後半に構築されたのであろう。またこの類型の石室は、慶州の忠孝里石室墳や西岳里古墳のような両袖式石室に発展する要素をもつ。つまり新羅横穴式石室との関係が問題となる。

⑤ 慶尚南道金海三山里古墳

三山里古墳は、石室の実測図が公表されているのみで、古墳の位置関係などは不明である。石室は左片袖式で、長方形の平面形をなし、四壁は割石積で壁体は持送りされている。天井石は2枚である。L字形の割石積みの棺床が配置されている。

金海市街の東北の盆城山(山城)の西麓、大成洞墳墓群の北の、尾根上および山麓に3基からなる亀山洞古墳群が存在する。その1基は現在一部開口され、わずかにのぞき込むことができる。かつて略測された報告によると、左片袖式で、玄室長3.4m、幅1.87m、2枚の天井石がかぶせられている。三山里1号墳と若干異なる。他の1基は1915年に黒板勝美によって調査された王妃陵付近の1基である(黒板1974)。左片袖式で、壁面の漆喰が塗られ、L字形の棺台に瓦製枕・瓦製床がつくられ、人骨・金環・刀子が出土したという。石室構造は、慶州の忠孝里古墳群の一群と脈絡がありそうであり、532年の加耶滅亡後の金海地域の新羅服属時期ではなく、7世紀代の石室墳といえる。

⑥ 慶尚南道陝川苧浦里古墳群

遺跡群は、陝川郡鳳山面苧浦里の丘陵上に立地する。1986・1987年に陝川ダム建設のため、黄江上流の水没地域で緊急調査がなされた。そのなかでC・D地区(暁星女子大博物館・慶北大博物館調査)、E地区(釜山大学校博物館調査)において、横穴式石室墳が多数発掘された。従来未確認であった横穴式石室の資料であるだけに、加耶の墓制研究のうえで貴重であった。

C地区1号墳は左片袖式石室で、比較的整形した石材を用いて積築している。羨道床面が玄室より50cmほど高くなる点は注目される。6世紀中葉から後半にかけての加耶土器・新羅土器が出土している。外護列石にそって、2基の小石室が築かれている。C2号墳は両袖式で、横長の玄室に羨道がとりつく。コの字形に棺床が配されている。近接するB2・C2の小石室から6世紀後半以降の新羅土器が出土しており、C2号墳の時期の一端が知られる。C6号墳は左片袖式で、忠孝里古墳群石室に類似する。出土土器は6世紀後半の新羅土器であるが、高霊型系統の長頸壺を含む。C7号墳は右片袖式で、C6号墳石室と同一形態である。C10号墳は右片袖式で、6世紀後半から7世紀の新羅土器が出土している(全玉年・禹順姫1987)。

D地区の丘陵斜面から横穴式石室2基、竪穴式石室43基、1甕棺墓3基が発掘された。I群1号墳は直径約20mの封土墳で、約1m幅の溝がめぐらされている。墳丘内には、横穴式石室を中心に、周囲に3基以上の小形竪穴式石室が築かれている。横穴式石室は左片袖式で長方形の玄室をもつ。両長壁は穹窿状に持ち送られる。後壁・前壁も顕著な持送りをしめし、天井石は1～2枚であったと推測される。石室内部および周囲の祭祀遺構から加耶土器が出土している。定森秀夫1987編年によるとⅦ期(6世紀前葉)ないしⅧ期(6世紀中葉)に位置づけられる。周囲の小石室から新羅土器が出土しており、6世紀後半以降に追葬されたことになる。D4号墳(暁星女子大1987)は右片袖式で、6世紀中葉、加耶滅亡直後の新羅土器が出土している。DⅡ-1号墳は、長方形の玄室に短い羨道のつくもので、羨道床面は玄室床面より1段(15cm)高くなる。石

室は、構造的に竪穴系横口式石室に関連する。

E地区の丘陵尾根・斜面には横穴式石室墳が群在する。横穴式石室17基・横口式石室11基・竪穴式石室9基・甕棺1基で、他は朝鮮時代の墳墓が発掘されている。横穴式石室の構造・編年については、報告書における考察によることにしたい。時期的には、出土土器から加耶滅亡の562年に相前後して横穴式石室墳が出現する。大加耶の有力な構成国であった陝川地域に、新羅土器とともに横穴式石室が受容されている事実である。とくにこのE地区の古墳群がそうした性格をもっている。さらに7世紀代にも継続して横穴式石室墳が築造されている。

#### ⑦ 慶尚南道陝川三嘉古墳群

古墳群は丘陵頂部から斜面に分布する。20数基が群集するが、山の尾根稜線部に主として大形の封土墳が一行をなし、その周囲の丘陵に小形墳や封土をもたない墳墓が分布するという。そのなかで丘陵端部に立地する9基が発掘された。横穴式石室は3・7・9号墳で検出されている。

3号墳では、同一墳丘内に竪穴式石室7基と横穴式石室3基が密集して築かれている。一部で先後(切合い)関係がみられる。石室構造(壁材・敷石の使用法、平面形態など)からとらえると、G号(86)―I号(71)―F号石室(88)の変遷が想定される。石室形態は長方形から正方形化し、石材も割石積みから偏平な割石に変化する。敷石も比較的大きな石が用いられるようになる。

7号墳では一墳丘内に1石室が構築されている。玄室(指数85)四壁に直方体の石材が用いられる。出土土器は、禹順姬1989編年によれば、第II期6世紀後半(第3四半期)に比定される。

9号墳は、長楕円形の封土墳で、竪穴式石室2基、横穴式石室4基が築かれている。A号横穴式石室は、長方形の玄室(指数79)に右片袖式の短い羨道が付く。出土土器は6世紀第2四半期と推定される。C号石室は、右片袖式の細長の玄室(玄室指数60)である。F石室は第II期6世紀後半(第2四半期)に比定される(図版23)。

三嘉古墳群の横穴式石室の変遷はつぎのように想定される。

3号墳G号石室……3号墳I号石室…3号墳F号石室……7号墳

9号墳F号石室……9号墳C号石室……………9号墳A号石室

この地域では、洛東江西岸の加耶における竪穴式石室の構築法の伝統を継承し、562年の大加耶の滅亡を契機に横穴式石室が発達することも特徴といえる。

#### ⑧ 慶尚南道陝川玉田古墳群

玉田古墳群は、同一丘陵上に、近接して墳丘をもたない(低墳丘)集団墓群と、墳丘の築かれた一群、さらに離れて横穴式石室墳の一群からなる。横穴式石室墳の11号墳は1989年に発掘された。丘陵の斜面を掘削して、土盛りをおこなう大規模なもので、他の古墳と一定程度の隔絶性をもつ。またその山麓に古墳群が点在するが、そのなかの1基は開口しており、左片袖式の石室であることが確実である。おそらく玉田古墳群の帯にはかなりの横穴式石室墳が分布するのであろう。問題は時期である。横穴式石室の出現問題とも関連するが、6世紀前半から、大加耶が滅亡する562年前後のものであろう。もちろん滅亡後、つまり新羅への帰属後も墳墓が築かれたで

あろうことはうたがない。

⑨ 慶尚南道昌寧校洞古墳群 (神谷ほか1989)

昌寧校洞古墳群は、竪穴系横口式石室を中心として、竪穴式石室墳で構成される。校洞7号墳から北に4基の墳丘が連なるが、その北端の1基が横穴式石室であることが確かめられた(神谷ほか1989)。両袖式で、玄室は一辺2.8mの正方形で、羨道部が長さ1.46m以上、幅1.2m・高さ0.5mと計測されている。天井や平面形から推測すると、前述した金海三山里1号墳のような構造であろうか。6世紀中葉から後半ごろに位置づけられよう。

⑩ 全羅北道阿英面斗洛里古墳

古墳は、智異山の東北、慶尚南道との道境に立地する。西南約20kmには草村里古墳群が立地する。この地域は5世紀末から6世紀初めには百済領域に属したと考えられ、横穴式石室の導入はそのことを示唆する。斗洛里2号墳は、左片袖式で、長方形の玄室に長い羨道がつく。天井石が2枚で、平天井的ではあるが、穹窿状天井式の範疇に含めてさしつかえないであろう。陝川郡苧浦里D-1号墳と同様の構造である。穹窿状天井式石室は、百済の熊津時代に発達し、熊津城遷都から、泗泚城遷都にかけての時期(475~538年)に盛行した石室であった。百済の政治的・社会的影響のもとで、伝播したのであろう。

(2) 加耶における横穴式石室墳の出現

加耶の横穴式石室をめぐる問題点として、(1)苧浦里D-1号墳のような、穹窿状天井石室の伝播・受容の問題、(2)昌原加音丁洞3号墳のような有段羨道石室の伝播問題、(3)苧浦里古墳群や三嘉古墳群における片袖式横穴式石室の成立問題がある。

陝川郡苧浦里D-1号墳や斗洛里古墳は、石室構造や出土遺物からみて、加耶滅亡の562年以前に出現した石室墳をとらえられる。前述のように百済の熊津時代に発達した穹窿状天井石室が伝播したものであろう。百済の泗泚城遷都前後の時期と推定される。斗洛里は全羅北道と慶尚南道の道境に位置するが、5世紀末頃には南原地域は百済によって領域化される。その東方の慶尚南道咸陽地域は大加耶の勢力圏である。近接するとはいえ、斗洛里古墳は百済の政治勢力との関係において把握しえるのである。穹窿状天井式石室も全羅南道地域に伝播し、その2次の伝播として、そうした地域から伝播したことも考えられるが、百済と加耶との政治的関係のあり方の問題である。

晋州玉峯・水精峯古墳群のような玄室構造は竪穴式石室的要素がつよいが、百済おそらく全羅南道地域の横穴式石室墳との関係が想定される。同古墳群では、銅鏡や寄生(蛇行状鉄器)が出土しているが、百済系の遺物といえる。寄生は百済地域での出土例は未確認であるが存在したであろう。玉田古墳群の馬具・大刀などの百済系統の文物の流入とともに横穴式石室墳も受容されたのであろう。その時期は6世紀前半の段階であろう。

苧浦里D-1号墳は、周辺で発掘された横穴式石室墳がいずれも加耶滅亡以後の6世紀後半以

降の築造であるのに対して、6世紀の第2四半期の加耶時代までさかのぼる。D-1号墳はE-11号墳のような石室に発展するのであるが、加耶滅亡後の6世紀後半になると、別系統の横穴式石室が伝えられる。苧浦里E地区古墳群のように、7世紀代にも存続する。石室とともに6世紀後半になると、新羅土器に変容することも政治的従属関係が浸透したことをものがたる。6世紀第3四半期における新羅的な横穴式石室の成立は、慶州における横穴式石室の成立時期などとの問題にかかわる。慶州地域での横穴式石室墳は、普門里夫婦塚のように6世紀後葉が上限であるからである。積石木槨墳の消滅、横穴式石室墳の出現は6世紀中葉、真興王の560年代にさかのぼりうることが想定されるのである。

## 4 新羅における横穴式石室墳の出現と展開

### (1) 慶州盆地の横穴式石室

慶州盆地における横穴式石室墳は、慶州の王京をとりまく山塊の中腹斜面から山麓に立地する。路西洞古墳群（双床塚・馬塚）など王京に近接して築造された古墳が存在するが、新羅王京の条坊が整備された統一新羅成立前後には横穴式石室は王京外に築造される。法興王は540年に「哀公寺の北峯」に葬られたが、王陵の立地条件が平野部（盆地部）から山麓にかわったのである。ただこの段階の墓制は積石木槨墳と推定される。慶州地域で横穴式石室墳が採用された時期は、普門里夫婦塚など6世紀後半といえる（伊藤秋男1972）。

慶州周辺、月城郡一帯に膨大な数の横穴式石室墳が分布することは、文化財管理局の『文化遺跡総覧』などで明らかである。ところが現在開口する石室や発掘・測量調査された古墳はきわめて少ない。これまで忠孝洞里古墳群・西岳洞古墳群・東川洞古墳群・龍江洞古墳群・冷水里古墳群が発掘されているにすぎない（東・田中1988）。

#### ① 西岳洞古墳群

慶州盆地の西縁、仙桃山の中腹から山麓にかけて、相当数の古墳が分布する。西岳洞古墳群である。武烈王陵を中心とする支群中には、積石木槨墳の築造された可能性が大きい。武烈王陵については、まさに武烈王の埋葬されたことが、近接して遺存する亀趺・螭首銘から確実である。墳丘の一部に割石がみられることから、外護列石がめぐらされたと推測される。内部施設は横穴式石室であろう。

さらに獐山の南麓にかけて古墳群が分布する。西岳洞石枕塚や獐山古墳が立地する。西岳洞石枕塚は、横長の玄室に羨道のつく両袖式石室で、棺床の石枕・足座が備えられている。獐山古墳は、ほぼ正方形の玄室に、両袖式の羨道がつく。天井石は大形の1枚石である。羨道内に扉石があり、甬道部をつくる。玄室・羨道壁面は全面にわたって漆喰が塗られている。玄室内に石床があり、3体分の石枕・足座が備えられている。南側の1体は追葬にともなう増築であろう。羨道天井に「大中」という銘文があったと伝え、大中年間（847～859年）の可能性があると。ま

た「中在智在」という銘文もあったと伝聞されている(崔秉鉉1992)。

## ② 龍江洞古墳群

王京の北の、独山とよばれる独立丘の北側に位置する。これまで龍江洞と隍城洞古墳の2基が発掘されている。

隍城洞古墳は、長方形の玄室に、片袖式の羨道がつく。玄室内で石枕・足座、陶俑6・馬形俑・牛形俑、車形土器・碁石が出土している(李蘭暎1989)。女人像のもつ瓶は、石窟庵の十一面観音像や神仙寺弥勒三尊像など盛唐期に平行するものであることが指摘されている(李蘭暎1989)。

龍江洞古墳は、正方形(2.60×2.73m)の玄室に両袖式の羨道がつく穹窿状天井式である。玄室中央に石床があり、石枕・足座1組が検出された。墳丘に2重の外護列石がめぐらされている。人物俑・動物陶俑・土器・青銅十二支像などが出土している。陶俑の胡人像は、興徳王陵(836年葬)や8世紀末と想定される掛陵(元聖王陵798年葬)の石像にくらべ、写実的であり、古い様相を示す。龍江洞の陶俑は、統一新羅の成立時期を上限として8世紀前半代に推定される。有蓋椀は忠孝里6号墳より新しい段階のものである。

## ③ 路西洞古墳群

双床塚・馬塚・牛塚は、慶州の路西洞古墳群の西端に築造されている。3基とも両袖式で穹窿状天井である。玄室の形態は、双床塚が横長、馬塚はほぼ正方形である。双床塚の玄室中央に石床が設置され、伝神徳王陵や西岳洞石室墳も同様の構造で新しい様相を示す。これらの、穹窿状天井で、両袖式の石室形態、玄室と羨道の間にも甬道をもち、四壁全面に漆喰を塗布した構造の石室は特異な型式であり、「双床塚型」と称することにした。

## ④ 忠孝里古墳群

忠孝里古墳群は、西川の西岸、玉女峰から派生する丘陵上に立地する。これまで12基の石室が発掘されている(有光1937, 尹武炳1968)。立地条件・石室構造・石枕・棺床の有無・出土土器から5群に分類した。つまりA群(1・2・3号墳)、B群(4・6号墳)、C群(5・10号墳)、D群(8・9号墳)、E群(7・11号墳)である。A・B・D群が片袖式で、C・E群が両袖式である。片袖はいずれも左片袖式に統一されている。一部で併行しながらも、基本的にはA群からE群への変遷が想定される。天井石が2枚の8号墳のようなものもあるが、穹窿状天井構造の石室である。とくに片袖式の穹窿状天井石室を「忠孝里型」と設定する。

## ⑤ 九政洞方形墳

墳丘の護石に十二支像を彫刻した石室墳のなかで、内部構造が知られる貴重な墳墓である。片袖式の平天井式である。四壁には整形した花崗岩の切石を用いる。玄門に唐居敷き構造の石扉が遺存する。袖側に格狭間彫刻の石床(屍床)を配する。なおその格狭間は、夫婦合葬像である「臘石製男女寝像」という石製品の台座の格狭間に類似することが指摘され、また棺を用いず、遺骸を直接安置することから、「棺台」という名称の使用を戒められている(小泉頭夫1986)。九政洞

方形墳の十二支像は8世紀後半に比定されている(姜友邦1979)。

## (2) 新羅横穴式石室墳をめぐる若干の問題

### 1 新羅横穴式石室の分類

新羅の横穴式石室墳の編年に関しては、近年曹永鉉1990・洪潛植1992らによって精緻な研究がなされている。ここでは崔秉鉉1988・92の論文のみをとりあげることとする。崔秉鉉は両論文において、新羅横穴式石室を、長方形石室(A)と方形石室(B)に大別し、右偏羨道長方形石室(A<sub>1</sub>式)・中央羨道長方形石室(A<sub>3</sub>式)、右偏羨道方形石室(B<sub>1</sub>式)・左偏羨道方形石室(B<sub>2</sub>式)、中央羨道方形石室(B<sub>3</sub>式)に分類し、次のような編年案を提示している。

表7 新羅土器と新羅横穴式石室の崔秉鉉編年

新羅土器段階	石室墳分期	古 墳 名	年 代
新羅前期様式	1 期	普門里夫婦塚婦墓(A <sub>1</sub> )	6 C前半
		東川里瓦塚(A <sub>1</sub> )	
		西岳里石枕塚(A <sub>3</sub> )	
新羅後期様式 1・2段階	2 期	西岳里石室墳(B <sub>3</sub> )	6 C中～6 C後半
		忠孝里3・2・1号墳(B <sub>2</sub> )	
3 段階	3 期	隍城洞古墳(B <sub>1</sub> ) 忠孝里6・7号墳(B <sub>2</sub> )	6 C末～7 C初
4 段階			
5 段階	4～5期	龍江洞古墳(B <sub>3</sub> )	7 C前半
		忠孝里4号墳(B <sub>2</sub> ), 7・10号墳(B <sub>3</sub> )	
6 段階	6 期	忠孝里9号墳(B <sub>2</sub> )	7 C中葉
		忠孝里5号墳(B <sub>3</sub> ), 忠孝里廃古墳(B <sub>3</sub> )	
	7 期	双床塚(B <sub>3</sub> )	7 C後半以後
		伝神徳王陵(B <sub>3</sub> ) 馬塚(B <sub>3</sub> ) 獐山土偶塚(B <sub>3</sub> )	
			9 C

崔秉鉉1987の新羅土器編年の方法論については、宮川禎一1988によって検証されているが、絶対年代については解釈がわかれている。獐山古墳の出土土器は相対的に後出し、石室ももっとも新しい段階であるなどの指摘は、石室の変遷を考えるうえで注目される。

石室変遷の指標については、曹永鉉1990で詳述されているが、次のような傾向があげられる。

- ・片袖式から両袖式に変化する傾向のあること。
- ・甬道が新たに形成され、閉塞施設(扉石・唐居敷構造・門柱石など)が発達する。
- ・石床が発達し、袖側ないし奥壁に接触して設置する段階から、中央に配置する傾向がある。
- ・石枕・石足座が発達する。

表8 新羅横穴式石室の分類

羨道平面形	天井	支室形態	壁体	甬道	竈	石床	屍床
片袖式(R)	穹窿状天井 (A) 平天井(F)	方形	割石積	無	無	割石積	無
片袖式(L)		長方形	切石積	有	有	切石積	石枕・石足座
両袖式(C)						台形	石障

- ・穹窿状天井は低平化する。
- ・壁体は割石積から切石積化する。

## 2 忠孝里型石室とその分布

忠孝里型石室は、於宿知述干墓のような石室の影響で成立したのであろう(東1987)。この類型の石室は七世紀前半以降に新羅の横穴式石室として普及したといえる。そしてまた6世紀後半以降の真興王の新羅領域の拡大と軌を一にして伝播したのが忠孝里型石室であったといえる。

忠孝里型石室は、慶州盆地以外の地域では、慶尚南道陝川郡三嘉古墳群、陝川郡苧浦里古墳群、忠清北道中原郡樓岩里2号墳(右片袖式)で確認されている。将来洛東江流域の加耶の故地でも、6世紀後半以降の時期ならば、忠孝里型石室はさらに確認されるにちがいない。

樓岩里2号墳の年代は6世紀後半以降で、新羅の真興王の領域支配にかかわって成立した墓制ととらえられている。1号墳の穹窿状天井式の石室は百濟熊津期における伝播と考えられたが、2号墳は、新羅が漢江流域に進出するなかで、伝播した墓制であろう。

新羅の忠孝里型石室は、高句麗における平壤型石室、百濟の陵山里型石室とともに、文字どおり三国時代の墓制(横穴式石室)の分布を形成したのであろう。

双床塚型石室についてはその系統関係が問題となる。穹窿状天井式は、高句麗の4～5世紀の石室に発達するのであるが、6世紀以降は平壤型石室にみられるように、平行・三角持送り式天井に変遷している。百濟の熊津時代に発達した宋山里型穹窿状天井の直接的な影響関係を想定するには、あまりにも時間的な隔りがある。そこで高句麗後期の石室平面(有甬道)との類似性を重視すると、平行三角持送り式天井は切石でこそ可能な構造であり、割石使用の場合では穹窿状天井となるのであろう。すでに7世紀代の高句麗では穹窿状天井式石室は衰退している。おそらく忠孝里型石室が発達したのが双床塚型石室であろう。双床塚型石室の上限は7世紀末頃で、むしろ8～9世紀代に発達する。

## 3 双床塚型石室とその分布

双床塚型石室では、壁面・天井の全面に漆喰が塗布されている。伝神徳王陵は幾何学的な彩色が施された壁画墳である。陰陽五行説にかかわる表現である。双床塚型石室は、前述のように双床塚・馬塚・牛塚・伝神徳王陵・西岳里石室墳というように類例は少ない。慶州では、もともと横穴式石室墳の実態が明らかでないが、すくなくとも5基以上の同一構造の石室が知られている。伝神徳王陵(「三陵」の1基)などの規模・構造などからみて、双床塚型石室は統一新羅期



における支配者層の墓であった可能性が強い。その分布地域は、慶州の邑南古墳群の路西洞古墳群の一角から、西岳洞・獐山古墳群、三陵古墳群というように、王京の西方から南方にあたる。王陵比定の問題もあるが、王陵が所在する地域に分布する。王族・支配者層の葬地であるのだろう。今後武烈王陵西方の西岳洞古墳群などには、双床塚タイプの石室が埋まっているのであろう。また統一新羅時代の王陵の構造は双床塚型に類したものであろう。

双床塚・馬塚・牛塚の位置関係は、王京と葬地との関係を考えるうえで看過しえない。新羅の坊里制は、七世紀の680年代に唐の都城制の影響のもとで施行されたと推定されるが、双床塚型石室はその以前にさかのぼりえないであろう。王京の西京極はその東側に存在したと考えられる。路西洞古墳群では、5世紀末から6世紀代になると金冠塚・金鈴塚・瑞鳳塚・壺杆塚など王陵ないしは王族の墓が造営されている。そのような墓群に双床塚・馬塚・牛塚のような横穴式石室墳が築造されたのである。

### (3) 小白山脈一帯の横穴式石室墳

小白山脈の竹嶺の東方、慶尚北道栄豊郡に2基の壁画墳が所在する。栄州於宿知述干墓と順興壁画墳である(秦弘燮1984・文化財研究所1986)。両古墳は、飛鳳山城からのびる二つの尾根上にそれぞれ立地する。数百mの至近の距離にある。於宿知述干墓の周辺では、他に古墳群が存在しないが、順興壁画墳の近辺には十数基の古墳群が分布する。2基の石室は横長方形の玄室に、一段高くなった右片袖式の羨道がつく。四壁には直方体の割石で積築され、各壁・天井石に漆喰が塗られ、壁画が描かれている。順興壁画墳は墨書から己亥年(579年)、於宿知述干墓は、石扉に刻された銘文によって乙卯年(595年)に築造されたと推定される(東1987)。銘文自体追刻や追記が可能で、寿陵の問題もあるが、築造・埋葬年代の一端を示すものと考えられる。順興は、小白山(標高1439m)から派生する山塊にあり、豊基をへて竹嶺まで十数kmの道のりである。高句麗と新羅との歴史的舞台であった(図版20)。

安東安幕洞古墳(任世権1989)は、順興から東南約35km、安東市街の北方に位置する。方形の玄室に左片袖式の羨道がつく構造である。羨道床面は玄室より約30cm高い。割石積みで、四壁を持ち、1枚の天井石で被覆されている。羨道床面で出土した新羅土器は、慶州西岳里古墳のものと類似し、7世紀前半頃に推定される。

小白山の南に、以上のような石室構造の類似する古墳が分布する。とくに3基の石室は、有段羨道という点において共通する。築造年代は、順興壁画墳→於宿墓→安幕洞古墳という時間差がみられるが、小白山脈の南麓一帯の慶尚北道北部地域に同一構造の石室が分布することは注目されよう。順興壁画墳を中心とした古墳群の築造時期が、壁画墳の成立以前に開始されたのか、その上限時期が、540年代の丹陽赤城碑をさかのぼりうるのかである。新羅慶州では、151号墳のように堅穴系横口式石室が存在するが、そうした有段羨道石室の系統関係が問題となる。

有段羨道石室は、漢江流域に分布する。ソウル中谷里甲・乙号墳(野守・神田1938)は、天井

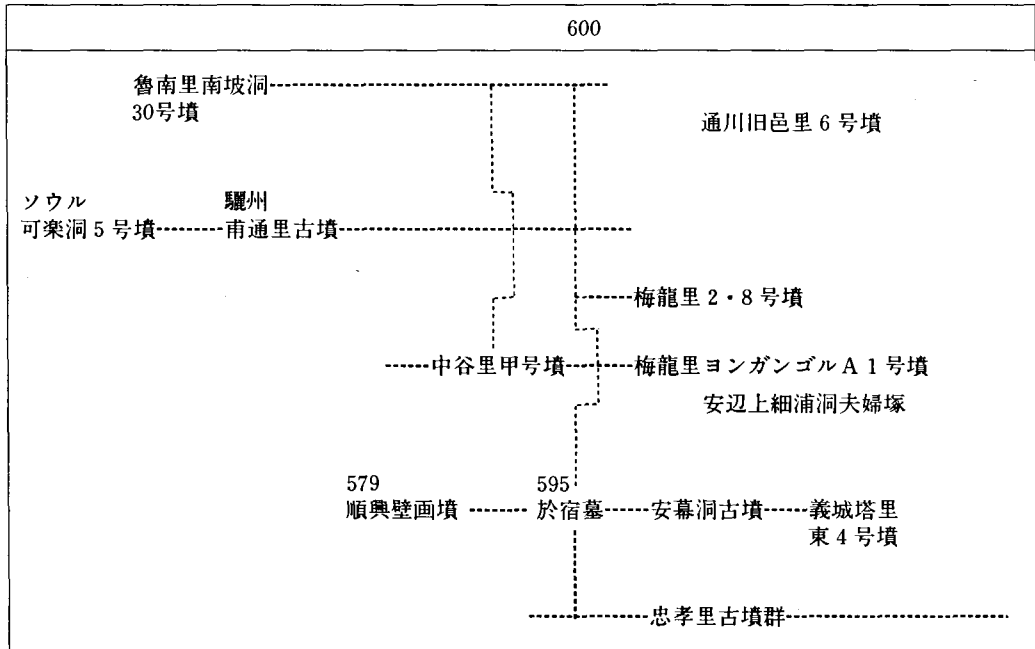


図24 有段羨道石室の系統関係

が水平となる有段羨道で、<sup>(6)</sup> 竪穴系横口式石室の範疇に属する。

梅龍里古墳群(崔永禧・金正基・宋基豪1988・1989)では、割石積みの玄室に細くて短い、有段羨道(片袖式)の石室が特徴的である(A1・A6・D1・E1・E2号墳)。各玄室に割石積みの棺床がつくられ、石枕が置かれる(B1・B2・B3・D2号墳)。天井構造はことごとく破壊しているため、明らかでないが、中谷里甲・乙号墳のような架構方式であったのであろう。同一地域にある梅龍里2・8号墳(野守・神田1938)は、両袖式横長の長方形玄室に羨道がとりつくが、やはり羨道床面が一段高くなった有段羨道である。割石積みの棺床があり、石枕も安置されている。

石枕は、6世紀初の高句麗の土浦里大塚で唯一出土している。真坡里古墳群では、木製枕の金銅透彫り飾金具が出土し、百済では武寧王陵の木製枕、忠清南道保寧郡九龍里古墳(安承周1977)で土製枕が出土している。埋葬における枕使用の風習は6世紀代にさかのぼる。梅龍里古墳群石室での石枕の出土率は高い。この古墳群の特殊性であるのかどうか定かでない。新羅石室墳の石枕は形態・材質の点から土浦里大塚のものと共通する。漢江流域の石枕・石床埋葬の風習は、新羅からの影響でとらえられている(金元龍1974)。梅龍里古墳群の位置する驪州郡は、6世紀後半には新羅の領域に属していた。新羅の支配は漢江流域に「新州」を設置するなど強力なものであった。日常容器・祭器である新羅土器に交代させるほどのものであった。そうした政治的支配体制を考慮すると、墓制も新羅との関係で把握すべきなのであろう。

於宿知述千墓の石室の系譜は、政治的關係からみても、泗泚城時代の百濟墓制とは直接関連し

ない。6世紀以降に熊津時代に発達した穹窿状天井式石室や持送り平天井式石室との関係、あるいは高句麗石室墳との関係が問題となろう。

穹窿状天井式石室が、公州を中心に忠清北道清州新鳳洞古墳群に確認される。現段階で於宿知述干墓系統の石室の祖型は明らかでないが、南漢江上流域の忠北地方が注目されよう。

順興壁画墳や於宿知述干墓を基準として、石室の変遷を想定すると、図版32のようになろう。

#### (4) 東海（東海岸）一帯（咸鏡道・江原道）の古墳群

江原道から咸鏡南道の海岸地域に石室墳が分布する（図版1・23）。この一帯の遺跡調査については、すでに『朝鮮古蹟図譜』（1920年）において江原道安辺郡上細浦洞古墳群などの調査報告が掲載されている。また咸鏡南道で磨雲嶺碑や黄草嶺碑の新羅真興王の巡狩碑が発見されたこともあり、新羅と高句麗の領域問題から注目されてきた（池内宏1929・今西龍1922）。1957年以来、江原道通川郡・高山郡、咸鏡南道北青郡の諸地域で一連の山城・古墳の調査がなされ、それらの古墳の構造や出土土器から新羅古墳であることがいち早く指摘された（梁翼龍1958）。咸鏡南道新浦市では渤海時代の建築址が発掘されている（金1990）。咸鏡道には、高句麗から渤海時代にかけて遺跡が分布するのである。そのいっぽう漢江流域の石室墳の再検討が、この東海岸一帯の石室墳もあわせておこなわれた（金元龍1974・姜仁求1981・東1987）。

次に、各古墳群の分布状況などを概略することにした。

##### ① 栗枝里古墳群（咸鏡南道利原郡）（文遺1960—2）

古墳群は、栗枝山城の西南約200m、山の稜線から谷にかけて分布する。約80基が確認されているが、大半が封土がなく、石室が露出している。石室は長方形、半地下式で、方向は南向きが多い。南側の中心部または一方に「羨門」施設（片袖式石室）がある。規模は、大形が長さ260cm・幅170cm・高さ100cmで、天井石4枚で覆う。小形は長さ220cm・幅110cm・高さ90cmで天井石は4枚であるという（図版20—15）。古墳群・山城の東北方向に磨雲嶺碑が発見されている。

##### ② 芝満里古墳群（咸鏡南道北青郡）（文遺1960—2）

芝満里村背後の山麓に約30基が分布する。古墳群の多くは封土がなく、石室の残骸が露出した状態である。発掘はされていないが、長方形の石室が多いという。古墳群の東南約1,200mには多灘台山城が位置する。

##### ③ 大門里古墳群（咸鏡南道洪原郡）（文遺1960—2）

栗原山城の西北約200mの低い山の南麓に約20基、中腹に約50基が立地する。その一古墳は長方形の玄室の短基中央に玄門が設けられている（図版20—17）。羨道の構造は不明である。

##### ④ 富民洞古墳群（咸鏡南道洪原郡）（文遺1960—2）

古墳群は、城嶺山城右手の山腹と山麓に分布する（図版20—10）。四つの谷間にそれぞれ、34基・51基・23基・100基とあわせて208基が群在する。咸興歴史博物館によって6基の古墳が発掘されたが、石室内から低脚高杯・短頸壺などの新羅土器が出土している。

⑤ 圭華峰古墳群 (咸鏡南道五老郡) (文遺1960—2)

五老村山城の北方約700mに、標高180mの圭華峰が立地する。峰の中腹から麓にかけて約30基の古墳が分布する。山城の北方約400mにあたる。1957年にその1基が発掘された。長さ220cm・幅100cm・高さ100cmの長方形玄室に羨道がつく形態である。実測図は未報告である。山城内で「其」字銘の新羅土器片が出土しているが、はたして「其」であるのか、検討を要するであろう。新羅の文字資料として貴重であり、その解明がまたれる。

⑥ 道蔵洞古墳群 (咸鏡南道五老郡) (文遺1960—2)

圭華峰古墳群に近接する道蔵洞で、長方形の単室墓が知られている (図版20—7)。同じ道蔵洞古墳群であろうが、『朝鮮古蹟図譜』3に「南塚」が報告されている。両袖式石室で、羨門で板石閉鎖されている。四壁は割石積みで、玄室・羨道天井部が水平で、4枚の天井石が架構されている。有段羨道である。

⑦ 多湖里古墳群 (咸鏡南道定平郡) (文遺1960—2)

鳳胎山城北方約300mの低丘陵に4基の古墳が確認されている (図版20—18)。発掘された古墳は、長方形玄室で持送り平天井式である。高杯・短頸壺などの新羅土器が出土している。

⑧ 旧邑里古墳群 (江原道通川郡) (考民1962—4)

古墳群は通川平野の北側に立地する。東側に8km行くと東海に至る。古墳群は1カ所に7～8基が群をなす。25基が確認されている (図版20—9・11・14・16)。1・5号石室は両袖式であるが、有段羨道式である。天井は水平で、玄室内に棺台を設ける。玄室・羨道の天井レベルが水平であり、竪穴系横口式石室に近似する構造である。短い羨道がつくことは明らかで、横穴式石室の範疇で理解される。6号墳は両袖式、有段羨道で、三角持送り式天井である。7号墳は片袖式、三角持送り式天井であるが、有段羨道であるか否かは不明である。

⑨ 高山里古墳群 (江原道高山郡) (考民1967—3)

高山里1号墳は長方形の石室で、割石積みの四壁を持ち送り、4枚の天井石で覆われる。高さが2mで、幅に比べてきわめて高いといえる。割石積みの棺床を備えている。羨道の有無については不明である (図版20—3)。

⑩ 龍城里古墳群 (江原道安辺郡) (文遺1958—4, 考民1967—3)

50～60基からなる古墳群で、7基が発掘された。1～5号石室は羨道や羨門のない構造で、竪穴式石室のようであるが、短壁に横口部のある石室と推定される (東1987)。新羅土器・在地的な土器とともに鉄刀子・鉄犁先・指輪などが副葬されていた。

龍城里25号墳は長方形の竪穴式石室である (図版20—2)。四壁とも割石積みである。石室内に棺床を設ける。51号墳は片袖で、持送り平天井式といえるが、壁面は垂直にちかい。奥壁が垂直である (図版20—5)。25号石室を拡大し、羨道をつけたものといえる。

⑪ 上細浦洞古墳群 (江原道安辺郡衛益面) (図譜3)

安辺郡の上細浦洞には、100基をこえる多数の古墳が分布する。『朝鮮古蹟図譜』3では「沃

(?) 沮時代」のものとして、山城とともに報告されている。丘陵上に立地し、いずれも封土をもつ。発掘された古墳は、夫婦塚・蓋杯塚・西塚の3基である。夫婦塚は、長方形玄室に有段羨道がつく、竪穴系横口式石室といえる。玄室に割石積みの棺床が築かれている。蓋杯塚も竪穴系横口式石室で、割石積みの棺床がみられる。西塚の短壁構造は不明であるが、蓋杯と同様である。

⑫ 咸鏡北道花台郡旌門里倉徳古墳群 (朝考1990—3)

花台郡は旧吉州郡・明州郡の地で、東海 (日本海) に流れる花台川の流域に位置する。旌門里の所在地から北3kmの丘陵地帯にあり、南北60m・東西160mの範囲に約40が分布する。石室墳と積石塚がある。倉徳4号墳は両袖式割石積み石室で、5号墳は片袖式の石室で、鈔帯が出土している。3号墳で石槨封土墳で、太環耳飾が出土している (図版20—12・13)。報告ではいずれも渤海時代の墓に位置づけているが、一部に高句麗時代にさかのぼるものもふくまれよう。なお花台郡一帯では、石室封土墳・石槨封土墳・積石塚・石槨墓など約600基の墓制・山城が分布するという。

⑬ 咸鏡北道清津市青岩区域富居里 (図鑑8)

高句麗末期から渤海時代にいたる500基以上からなる墳墓群である。両袖式横穴式石室とともに、胴張りの玄室が存在する。それらは高句麗時代にみられない渤海期の石室と考えられる。

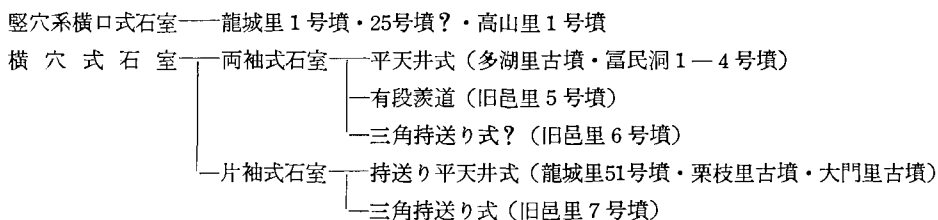
⑭ 咸鏡北道北青郡坪里 (図鑑8)

東海岸から内陸に入りこんだ河川の流域に分布する。1,000m四方に700基以上の墳墓が立地する。五十余基の古墳が発掘された。川原石を用いた横穴式石室墳や割石積みの石室が分布する。出土遺物については未報告である。両袖式・片袖式の石室が渤海時代になっても継続して築造されていることがわかる。唐代の墓制にみられない構造であり、咸鏡北道一帯における高句麗・渤海墓制のあり方を示している。

⑮ 江原道江陵市楓湖古墳群 (図譜3)

「濊 (?) 時代」として報告されている。江陵の楓湖の瀉湖に自然堤防・砂丘地帯に無数の古墳が立地する。「楓湖東北露出石槨」として報告された墳墓群では、小形の石槨 (石室) が多く分布する。6世紀代の新羅土器が多量に出土している。今日でも多数の石槨墓が遺存している。6世紀中葉、新羅の政治勢力はこの地にいたり、さらに北上し、咸鏡南道の地域に拡大したことをうらづける。またこの一帯では、原三国時代の住居址が発掘され、楽浪系統の土器も出土している。『魏書』東夷伝にみえる「濊」の地と考えられる。

以上のように、東海岸一帯に分布する墓制は、つぎのような構造に分類される。



これらの石室墳のなかで、三角持送り式天井という高句麗の伝統的な墓制に、竪穴系横口式石室、有段羨道の石室墳が混在する。古墳群の時期は、出土した新羅土器から6世紀中葉から7世紀にかけてであり、真興王の巡狩碑にみられる政治的情勢と符号する。竪穴系横口式石室墳が、高句麗的な石室でなく、新羅的要素のつよいものである(東1987)。

この一帯には、新羅土器の出土する山城が分布している。墓制・山城・土器というようにきわめて新羅的要素がつよくなるのである(東1987)。こうした考古学的資料は、新羅の真興王が建てた威鏡南道の磨雲嶺碑・黄草嶺碑の巡狩碑と不可分の関係にある。このような高句麗と新羅との関係は、新羅の勢力の及ぶ「境域」接触地域におこる現象である。文化伝播・文化接触・服属化・領域化といった政治的交通関係が存在した。なお東海岸の石室構造は、鴨緑江・禿魯江流域の魯南里古墳群などの石室と類似する。そこでは新羅との文化接触は不問にしえる。有段羨道石室の発生は多元的といえよう。

いっぽう好太王の碑文にみえる「吾れ躬ら巡りて略来せし所の韓と穢」の36地域から220戸の守墓人烟戸が徴発されている。この穢の地が威鏡南道から江原道の通川、さらに江陵一帯であったと推定される。今日この地域で5世紀代の高句麗の領域として征服された痕跡を示す考古学的資料はないが、今後の発掘調査に期待されよう。5世紀末となると、新羅特有の積石木槨墳の分布からみて、新羅は江陵の南の蔚珍・三陟地域まで勢力を拡大したと考えられる(東・田中1988)。蔚珍鳳坪里では、524年と推定されている新羅碑が発見された。真興王の巡狩碑の四半世紀前のことである。

ところで先に栄山江流域は、中国の史書で「慕韓」と表現され、同時代に実在した国と想定されたのであるが、そらした観点から「秦韓」も実在した地域とみななければならない。そこで5世紀代の慶尚北道蔚珍から小白山脈南麓にかけての地域が、新羅に服属していない段階(5世紀後半)の「秦韓」ではなかったかと想定されるのである(山尾幸久1989)。5世紀初めの広開土王の時代には、江陵地域(穢)が領域化され、その勢力は一時慶州地域にまで及んだといわれる。このことに関連し、5世紀の第2四半期から第3四半期にかけて、江陵から蔚珍にかけての東海岸一帯における領域支配のあり方も解明すべき問題の一つであろう。<sup>(5)</sup>

## おわりに

高句麗・百済・新羅・加耶の横穴式石室墳について論じてきた。とくに高句麗については、古墳群を網羅的にあつかった論考が少ないことから、基礎的資料を整理したうえで若干の問題にふれた。横穴式石室墳については、近年発掘が進み、研究成果が蓄積されつつあるが、高句麗・百済・加耶・新羅の石室墳を同一組上で論じることによって、諸国間の歴史的関係の一端にふれえたとおもう。本稿は、三国の横穴式石室墳の変遷過程を大筋でとらえることを主眼においている。石室の編年にあたって、石室構造の型式学的変化を重視せざるをえなかった。土器など遺物にも

とづく厳密な編年作業ではなく、石室の前後関係が多少逆転する場合も生じよう。しかしそこから帰納しえたいいくつかの論点はさほど変わることはないとおもう。もちろん今後より精緻な編年学的研究が必要であろう。また朝鮮半島において、横穴式石室墳分布の空白地帯がある。鴨緑江下流域・咸鏡北道・清川江流域・黄海南道・江原道の北部・西部、これらの諸地域における遺跡分布調査や発掘調査に期待される。

本稿の石室編年作業は、日本列島における初期横穴式石室墳の系譜関係、飛鳥時代における百濟石室墳の伝播などの問題にもふかくかかわっている。各時代の国際関係が石室の系統関係、伝播の問題に反映されていると考えられ、それらの問題のさらなる解明が必要であろう。

(1992年1月15日稿, 1992年10月30日補稿)

#### 註

- (1) 本稿の骨子は、東1987・1989にあるが、帝塚山大学考古学研究所東アジア部会(1988年12月)や檀原考古学研究所研究集会(1990年4月)で口頭発表したことがある。
- (2) 「集安の壁画墳とその変遷」の付図の変遷図と本文の記述に不一致がみられる。あらためて修正し、編年図を組みなおした。なお地名表の石室計測値は、本文の記載や図面から起こしたものであり、多少の変動がみられる。とくに縮尺図面については、極力誤謬のないようにつとめたつもりである。また石室の集成図は、各報告書・論文による。すべてを明記しえないが、ご了解を乞いたい。

なお百濟・加耶・新羅の古墳・古墳群の概要および参考文献については、『韓国の古代遺跡』1・2でふれている。

文献の略号は下記のとおりである。

図譜；朝鮮総督府編『朝鮮古蹟図譜』

図鑑；朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会『朝鮮遺跡遺物図鑑』

考民；『考古民俗』

考民論；『考古民俗論文集』

文遺；『文化遺産』

考資；『考古学資料集』

古調；『古蹟調査報告』

歴科；『歴史科学』

朝考；『朝鮮考古学研究』

- (3) 竪穴系横口式石室については、さまざまな概念規定がなされている。筆者は、その特性について次のように考えている(東1987)。
- ・羨道が短く、その床面が玄室床面より高いこと(有段羨道)。
  - ・玄室・羨道の天井石のレベルが水平であること(玄室・羨道水平天井)。
- (4) 尹煥1989は、天井架構と石室プランから、平天井(第Ⅰ類型)、穹窿状天井(第Ⅱ類型)、三角持ち送り式天井(第Ⅲ類型)、さらに羨道の付き方によって右袖式(A形)・両袖式(B形)・左袖式(C形)に分類する。筆者は、羨道の形態を、両袖式(C)・右片袖(R)・左片袖(L)式に分類し、羨道に段をもつものを有段式羨道(有段羨道)と称する。なお袖の呼称は、奥室側からみでの左右である。
- (5) 東海岸の墓制を概観したのであるが、咸鏡南道から江原道北部の石室墳と系統関係にあるのが、石川県能登の蝦夷穴古墳である。かって高句麗あるいは渤海墳墓との関係で論じられたこともあったが、出土した須恵器の年代は7世紀中葉である。その時期、東海岸一帯は、高句麗でもなく、渤海でもなく、新羅の領域に属していたのである。おそらく高句麗の遺民・集団が、新羅の政治的な関係で、何らかの契機で東海(日本海)を渡って能登に定着して築造した墓であったと推定されるのである。

(朝鮮民主主義人民共和国・大韓民国発行の文献については邦文化し、中華人民共和国については中国文のままで、簡体字を当用漢字に改めた)。

- 有光教一 1937『慶州忠孝里石室古墳調査報告』(『昭和7年度古蹟調査報告』2)  
—— 1937「土浦里第1号墳」「土浦里2号墳」(『昭和11年度古蹟調査報告』)  
—— 1979「扶余陵山里伝百済王陵・益山王陵」(『檀原考古学研究所論集』4, 吉川弘文館)
- 東 潮 1984「蛇行状鉄器考」(『檀原考古学研究所論集』7, 吉川弘文館)  
—— 1987「新羅・於宿述干壁画墳に関する一考察」(『東アジアの歴史と考古』, 同朋舎)
- 東 潮・田中俊明 1988『韓国の古代遺跡 新羅(慶州)篇』中央公論社
- 東 潮 1988 a 「高句麗文物に関する編年学的考察」(『檀原考古学研究所論集』10, 吉川弘文館)  
—— 1988 b 「集安の壁画墳とその変遷」(『好太王碑と集安の壁画古墳』, 木耳社)
- 東 潮・田中俊明 1989『韓国の古代遺跡 百済・伽耶篇』中央公論社
- 東 潮 1990「古代朝鮮における墳丘の問題」(『古代学研究』123)  
—— 1992「新羅・加耶の政治的領域をめぐる諸問題」(『東アジアの古代文化73』)
- 安承周 1975「百済古墳の研究」(『百済文化』7・8)  
—— 1977『保寧・九龍里百済古墳と出土遺物』(『百済文化』10)  
—— 1981『公州熊津洞古墳群発掘調査報告書』(『百済文化』14)
- 安承周・全栄来 1981「百済石室墳の研究」(『韓国考古学報』10・11, 韓国考古学研究会, ソウル)
- 安承周・李南爽 1988『論山六谷里百済古墳発掘調査報告書—1986年度発掘調査—』百済文化開発研究院  
—— 1990『公川南山里・松鶴里百済古墳発掘調査報告書—1987年度発掘調査—』公州大学校博物館・百済文化開発研究院  
—— 1991『舒川漆枝里百済古墳群発掘調査報告書—1988年度発掘調査—』公州大学校博物館・百済文化開発研究院
- 安ビョンチャン 1987「保山里及牛山里高句麗壁画古墳の年代について」(『朝鮮考古研究』1987—2)
- 伊藤秋男 1973「韓国慶州古墳群における石室墳の編年について—慶州皇南洞151号墳の研究—」(『古代文化』25—11)  
—— 1976「韓国慶尚北道善山古墳群(Ⅰ)—慶州における横穴式石室墳の発生とその特質について(予察)」(『南山大学人類学研究所紀要』5)
- 尹 煥 1987「漢江下流域における百済横穴式石室—可楽洞・芳萸洞石室墳を中心に—」(『古文化論叢』20中)
- 尹武炳・朴日薫 1968「慶州西岳里石室墳発掘報告」(『考古学』1)
- 尹武炳 1973「武寧王陵と宋山里6号墳塼築構造に対する研究」(『百済研究』5)  
—— 1989「三国時代の百済(忠清道)」(『韓国の考古学』, 講談社)
- 尹根一 1989『益山笠店里古墳発掘調査報告書』
- 梅原末治 1947『朝鮮古代の文化』
- 王承礼・韓淑華 1964「吉林輯安通溝第十二号高句麗墓」(『考古』1964—2)
- 岡内三眞 1980「百済武寧王陵と南朝墓の比較研究」(『百済研究』11)
- 岡崎 敬 1964「安岳3号墳(冬寿墓)の研究」(『史淵』93)
- 緒方 泉 1985「高句麗古墳群に関する一考察—中国集安県における発掘調査を中心に—」(『古代文化』37—3, 37—4)
- 小田富士雄 1980「横穴式石室の導入とその源流」(『東アジア世界における日本古代史講座』4, 学生社)
- 軽部慈恩 1933・36「公州に於ける百済古墳(1)~(8)」(『考古学雑誌』23—7~26—4)
- 神谷正弘ほか 1989「韓国各地の古墳踏査記録」(『古代研究』2)
- 亀田修一 1981「朝鮮半島南部における竪穴系横口式石室」(『城2号墳—宇土市上綱田町宇城所在2号墳調査報告』)
- 榎本亀次郎・野守健 1933『永和九年在銘塼出土古墳調査報告』(『昭和7年度古蹟調査報告』1)
- 韓錫正 1960「咸鏡南道の由来未詳の山城と古墳について」(『文化遺産』1960—2)
- 韓仁徳 1989「坪井里壁画古墳発掘報告」(『朝鮮考古研究』1989—2)  
—— 1989「月精里高句麗壁画古墳発掘報告」(『朝鮮考古研究』1989—4)
- 吉林省文物工作隊・集安県文物保管所 1981「吉林集安洞溝三室墓清理記」(『文物與考古』1983—1)
- 吉林省文物工作隊 1984「1976年集安洞溝高句麗墓清理」(『考古』1984—1)



- 吉林省博物館文物工作隊 1972「吉林集安兩座高句麗墓」(『考古』1977—2)
- 吉林省博物館 1964「吉林輯安五蓋墳四号和五号墓清理略記」(『考古』1964—2)
- 姜友邦 1983『新羅の十二支像』近藤出版社
- 金永培 1962「公州玉龍洞古墳出土の遺物」(『考古美術』3—6)
- 1965「公州百濟古墳様式の一例」(『美術資料』10)
- 金基雄 1976『百濟の古墳』学生社
- 金元龍 1960「高句麗壁画の起源に対する研究」(『震檀学報』21)
- 金元龍・任孝宰 1968『南海島嶼考古学』
- 金元龍 1974「百濟初期古墳に対する再考」(『歴史学報』62)
- 1981「春川郡芳洞里の高句麗式石室墳2基」(『考古美術』149)
- 金サボン 1986「高山洞20号壁画古墳について」(『朝鮮考古研究』1986—1)
- 1988「安鶴洞、魯山洞一帯の高句麗古墳発掘報告」(『朝鮮考古研究』1988—4)
- 金日成綜合大学考古学及民俗学講座 1973『大城山の高句麗遺跡』ピョンヤン
- 金日成綜合大学 1976『東明王陵とその付近の高句麗遺跡』ピョンヤン(呂南喆・金洪圭 1985『5世紀の高句麗文化』雄山閣)
- 吉林省文物志委会 1984『集安県文物志』
- 姜仁求 1977『百濟古墳研究』一志社, ソウル, 岡内三眞訳1984, 学生社)
- 1981「驪州甫通里の石室古墳一抔角藻井式石室墳の1例」(『韓沽肋博士停年紀念史学論叢』知識産業社, ソウル)
- 魏存成 1987「高句麗積石墓の類型和演變」(『考古学報』1987—3)
- 久貝健ほか 1989「韓国各地の古墳踏査記録」(『古代研究』2)
- 黑板勝美先生生誕百年記念会 1974『黑板勝美先生遺文』吉川弘文館
- 小泉頭夫 1986『朝鮮古代遺跡の遍歴—発掘調査三十年の回想—』六興出版
- 洪弼基・徐聲勲 1981「扶餘亭岩里古墳群」(『国立博物館古蹟調査報告』13)
- 洪弼基・安承周 1983「新基里古墳穹窿状石室墳の一例」(『百濟文化』15)
- 洪潁植 1992『嶺南地域の横口式、横穴式石室墓の研究』釜山大学校大学院文学硕士学位論文
- 小場恒吉 1937「土浦里第3号墳」「土浦里第6号墳」(『昭和11年度古蹟調査報告』)
- 小場恒吉・榎本亀次郎 1935『楽浪王光墓 貞柏里・南井里二古墳発掘調査報告』(『古蹟調査報告』2)
- 崔永禧・金正基・宋基豪 1988『驪州梅龍里ヨンガンゴル古墳群発掘報告書』(『翰林大学博物館研究叢書』2)
- 1989『驪州梅龍里ヨンガンゴル古墳群発掘報告書』(『翰林大学博物館研究叢書』3)
- 崔完奎 1990『全北地方錦江河口の百濟石室墳』(『李載燾博士還曆紀念論文集 韓国史学論叢』吉井秀夫訳 1992『古文化談叢』27)
- 崔秉鉉 1988「新羅石室墳の研究—慶州の横穴式石室墳を中心として—」(『崇実史学』5)
- 1992『新羅古墳研究』一志社, ソウル
- 蚕室地区遺蹟発掘調査団 1977「蚕室地区遺蹟発掘調査報告」(『韓国考古学報』3)
- 斎藤 忠 1934「屋根型天井を有する石室墳について」(『考古学雑誌』34—3)
- 1976「百濟武寧王陵を中心とする古墳群の編年の序列とその被葬者に関する一試考」(『朝鮮学報』81)
- 定森秀夫 1987「韓国慶尚北道高靈地域出土陶質土器の検討」(『東アジアの歴史と考古』上, 同朋舎)
- 朱栄憲 1961『高句麗壁画古墳編年に関する研究』ピョンヤン(永島暉臣慎訳1972『高句麗の壁画古墳』, 学生社)
- 1962「高句麗積石塚に関する研究」(『文化遺産』1962—2)
- 朱栄憲ほか 1981『徳興里高句麗壁画古墳』平壤
- 白石太一郎 1965「日本における横穴式石室の系譜」(『先史学研究』5)
- 秦弘燮 1984『栄州順興壁画古墳発掘調査報告』梨花女子大学校博物館
- 集安県文物志編写組 1984『集安県文物志』
- 集安県文物保管所 1984『集安県新発見的兩処高句麗墓群』(『博物館研究』1984—1)
- 辛占山 1992『桓仁米倉溝高句麗“將軍墓”』遼寧省文物研究所
- 車勇杰ほか 1991『中原樓岩里古墳群』(『文化財研究所遺蹟調査報告』12)

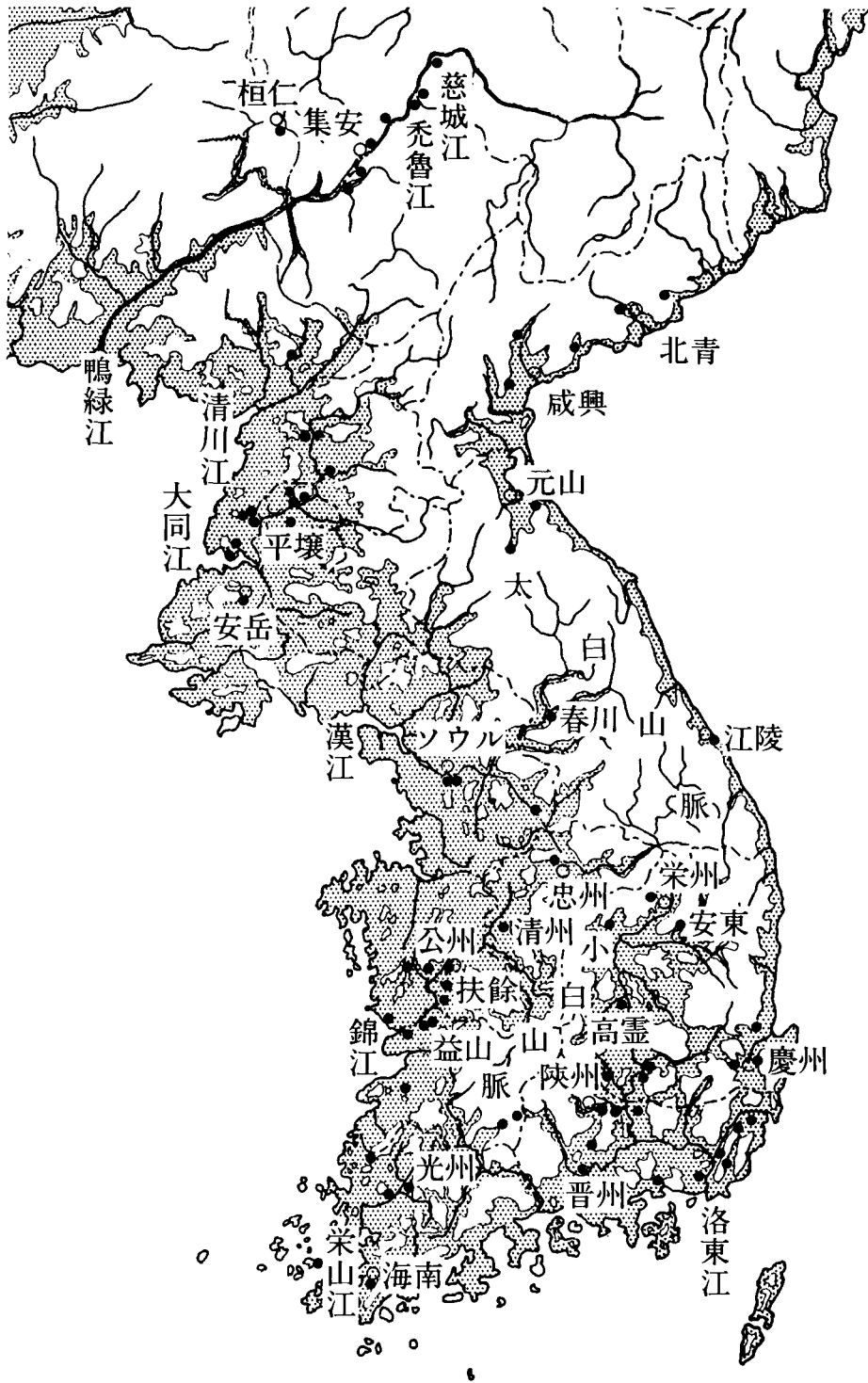
- 徐聲勳 1979「豆谷里百濟廢古墳」(『考古学』5・6)
- 徐聲勳・申光燮 1984「表井里百濟廢古墳調査」(『国立博物館古蹟調査報告』16)
- 成洛俊 1992「咸平礼德里新徳古墳緊急収拾調査略報」(『全国歴史学全国大会発表要旨』)
- 関野貞・谷井濟一・栗山俊一・小場垣吉・小川敬吉・田中十蔵・野守健 1929『高句麗時代之遺蹟図版上冊』(『古蹟調査特別報告』5)
- 1930『高句麗時代之遺蹟図版下冊』(『古蹟調査特別報告』5)
- 関野貞・谷井濟一・栗山俊一 1915A『朝鮮古蹟図譜』1
- 1915B『朝鮮古蹟図譜』2
- 1916『朝鮮古蹟図譜』3
- 関野貞 1917「平安南道大同郡順川郡及龍崗郡古蹟調査報告書」(『大正5年度古蹟調査報告』)
- 千寛宇 1989『古朝鮮史・三韓史研究』一潮閣, ソウル
- 全榮来・安承周 1981「百濟石室墳の研究」(『韓国考古学報』10・11)
- 全榮来 1974「鳳東屯山里百濟式石室墳」(『全北遺蹟調査報告』3)
- 1987「韓国 湖南の古墳文化」(『九州考古学』61, 緒方泉訳)
- 曹正裕・朱涵康 1962「吉林輯安榆林河流域高句麗古墓調査」(『考古』1962—11)
- 曹永鉉 1990『三国時代横穴式石室墳の系譜と編年研究—漢江以南地域を中心として』忠南大学校大学院  
碩士学位論文
- 孫仁杰 1984「集安上, 下活龍村高句麗古墓清理簡報」(『文物』1984—1)
- 武末純一 1991「百濟初期の古墳」(『土器からみた日韓交渉』学生社)
- 武田幸男 1989『高句麗史と東アジア』岩波書店
- 谷 豊信 1989「4, 5世紀の高句麗の瓦に関する若干の考察—墳墓発見の瓦を中心として—」(『東洋文化研究所紀要』108)
- 1990「平壤土城里発見の古式の高句麗瓦当について」(『東洋文化研究所紀要』112)
- 田村晃一 1984「高句麗の積石塚の年代と被葬者をめぐる問題について」(『青山史学』8)
- 1982「高句麗積石塚の構造と分類について」(『考古学雑誌』68—1)
- 1990「高句麗の積石塚」(『東北アジアの考古学〔天地〕』六興出版)
- 張雪岩 1988「集安两座高句麗封土墓」(『博物館研究』21)
- 趙書勤 1984「集安県老虎哨古墓」(『文物』1984—1)
- 陳大為 1960「桓仁県考古調査発掘簡報」(『考古』1960—1)
- 1981「桓仁高句麗積石墓の外形と内部結構」(『遼寧文物』1981—1)
- 1981「試論桓仁高句麗積石墓の類型, 年代及其演变」(『遼寧省考古, 博物館学会成立大会会刊』  
『遼寧省博物館學術論文集』1所収, 1985)
- 1989「遼寧境内高句麗遺跡」(『遼海文物学刊』1989—1)
- チャンピョンヒョプ 1965「黄海北道遂安郡高句麗古墳整理報告」(『考古民俗』1965—1)
- 金秉模 1977「芳蕘洞古墳群」(『考古学』4)
- 鄭燦永 1973「紀元4世紀までの高句麗墓制に関する研究」(『考古民俗論文集』5)
- 田疇農 1963「東明王陵付近の壁画古墳」(『考古学資料集』3, 呂南喆・金洪圭訳1985『5世紀の高句麗文化』所収)
- 張雪岩 1988「集安两座高句麗封土墓」(『博物館研究』21)
- 趙由典 1975「芳蕘洞遺蹟発掘報告」(『文化財』9)
- 1987「春城新梅里高句麗式石室墳一例」(『三佛金元龍教授停年退任紀念論叢』I)
- 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学及民俗学研究所 1958『安岳第3号墳発掘報告』(『遺跡発掘報告』  
3)
- 1960『安岳第1・2号墳発掘報告』(『遺跡発掘報告』4)
- 1958『大同江流域古墳発掘報告』(『考古学資料集』1)
- 1959『大同江及載寧江流域古墳発掘報告』(『考古学資料集』2)
- 1963『各地遺跡発掘報告』(『考古学資料集』3)
- 1964『大城山一帯の高句麗遺跡に関する報告』(『遺跡発掘報告』9)
- 朝鮮民主主義人民共和国朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会 1990『朝鮮遺跡遺物図鑑』4~6, ピョンヤン
- 1991『朝鮮遺跡遺物図鑑』8

- 朝鮮画報社出版部 1985『高句麗古墳壁画』朝鮮画報社  
 永島暉臣慎 1979「横穴式石室の源流を探る」(『日本と朝鮮の古代史』三省堂)  
 西谷 正 1980「百濟前期古墳の形成過程」(『百濟研究』13)  
 任世権 1989『安東安幕洞古墳』(『安東大学校博物館叢書』5)  
 野守健・樫本亀次郎 1937「晚達山麓高句麗古墳の調査(概要)」(『昭和12年度古蹟調査報告』)  
 野守健・神田惣蔵 1935『忠清南道公州宋山里古墳調査報告』(『昭和2年度古蹟調査報告』2)  
 藤田亮策 1940「通溝附近の古墳と高句麗の墓制」『池内博士還暦記念東洋史論叢』(『朝鮮考古学研究』  
 所収, 高桐書院)  
 ——— 1948『朝鮮考古学研究』, 高桐書院  
 文化財研究所 1986『順興邑内里壁画古墳』  
 方起東 1985「高句麗石墓の演進」(『博物館研究』1985—2)  
 ———1988「千秋塚, 太王陵, 將軍塚」(『好太王碑と高句麗遺跡』, 読売新聞社)  
 朴廣春 1988「韓・日竪穴系横口式石室に関する研究」(『考古歴史学志』4)  
 ———1990「伽耶・九州の竪穴系横口式石室の源流について」(『古代朝鮮と日本』古代史論4, 名著出版社)  
 林永珍 1990「咸平郡月溪里石溪古墳群—甕棺墓と石室墳との関係—」(『第14回韓国考古学全国大会発表要旨』)  
 ——— 1991「石室墳の受容過程」(『全南文化財』3, 光州)  
 松井忠春 1983「高句麗鳳城里壁画古墳とその築造年代に対する再検討」(『角田文衛博士古稀記念古代学論叢』)  
 森下浩行 1986「日本における横穴式石室の出現とその系譜—畿内型と九州型」(『古代学研究』111)  
 李イルナム 1986「雲龍里壁画古墳発掘報告」(『朝鮮考古研究』1986—2)  
 李淳鎮 1986「新しく発掘された五局里古墳について」(『朝鮮考古研究』1986—1)  
 ———1990「柒浪区域一帯の高句麗石室墳について」(『朝鮮考古研究』1990—4)  
 李チャンオン 1988「東岩里壁画古墳発掘報告」(『朝鮮考古研究』1988—2)  
 李殿福 1980「集安高句麗墓研究」(『考古学報』1980—2)  
 李南奭 1989「百濟時代石築墓の一考察—88年公州熊津洞調査報告」(『百濟文化』18・19)  
 李丙燾 1979『韓国古代史』金思燁訳1979, 六興出版  
 ———1980『韓国古代史研究』学生社  
 李隆助・車勇杰 1983『清州新鳳洞百濟古墳群発掘調査報告書—1982年度—』(『忠北大学校博物館調査報告』7)  
 柳嵐・張雪岩 1984「1976年集安洞溝高句麗清理」(『考古』1984—1)  
 梁翼龍 1958「安辺龍城里古墳発掘報告」(『文化遺産』1958—4)  
 ———1962「通川郡日邑里オウソゴル新羅古墳について」(『文化遺産』1962—4)  
 李栄文 1989『全南地方の考古学的研究Ⅰ』  
 ———1990『長城鈴泉里横穴式石室墳』  
 廬重国 1978「百濟王室の南遷と支配勢力の変遷」(『韓国史論』) 4  
 吉井秀夫 1991「朝鮮半島錦江下流域の三国時代墓制」(『史林』74—1)  
 柳沢一男 1982「竪穴系横口式石室再考」『森貞治郎博士古稀記念古文化論集』  
 山尾幸久 1989『古代の日朝関係』塙書房  
 ラミョンガク 1986「平壤市祥原郡一帯の高句麗古墳調査発掘報告」(『朝鮮考古研究』1986—3)

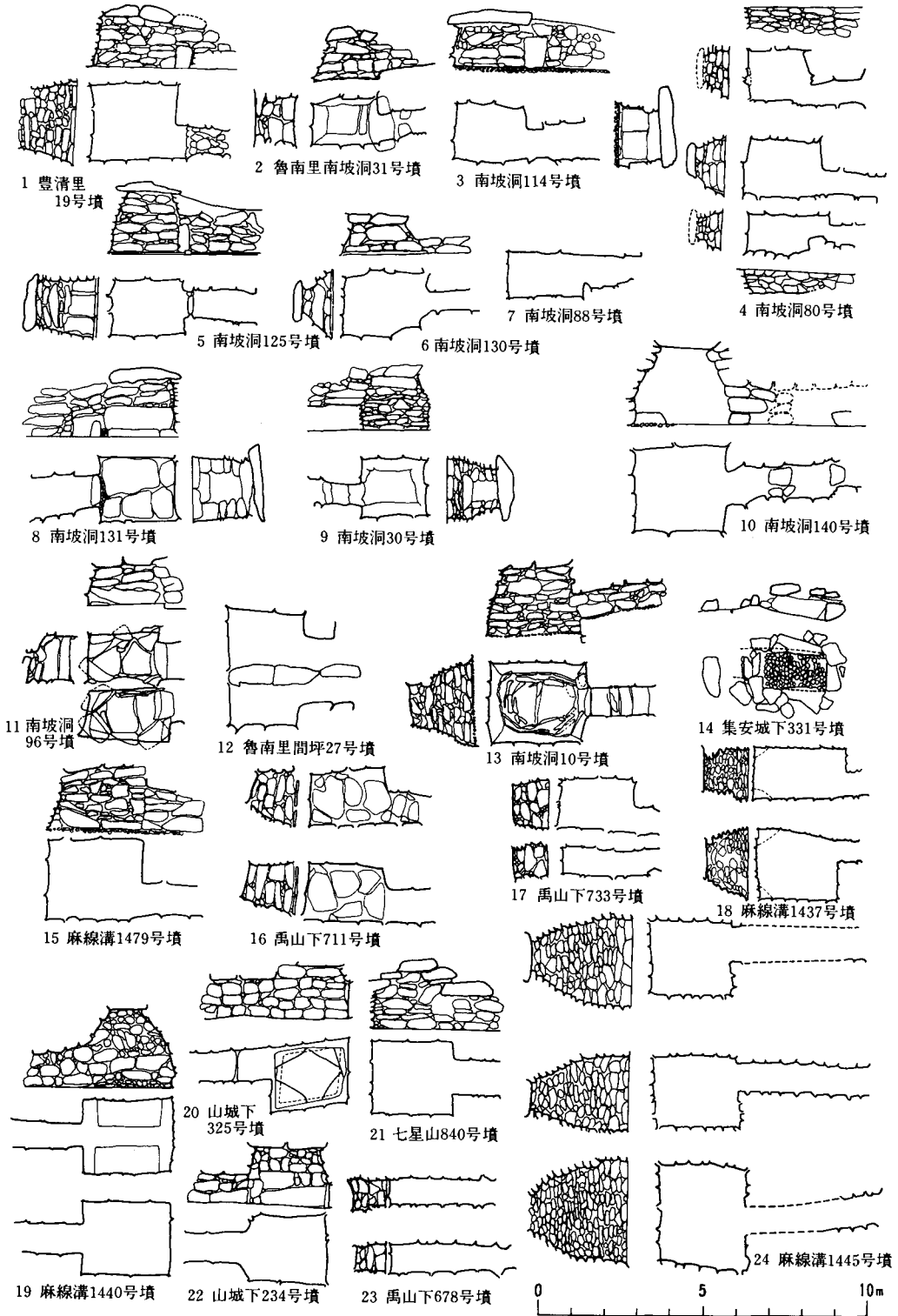
(徳島大学総合科学部 国立歴史民俗博物館客員教官)

表9 東海岸（咸鏡南道・江原道）一帯の石室墳

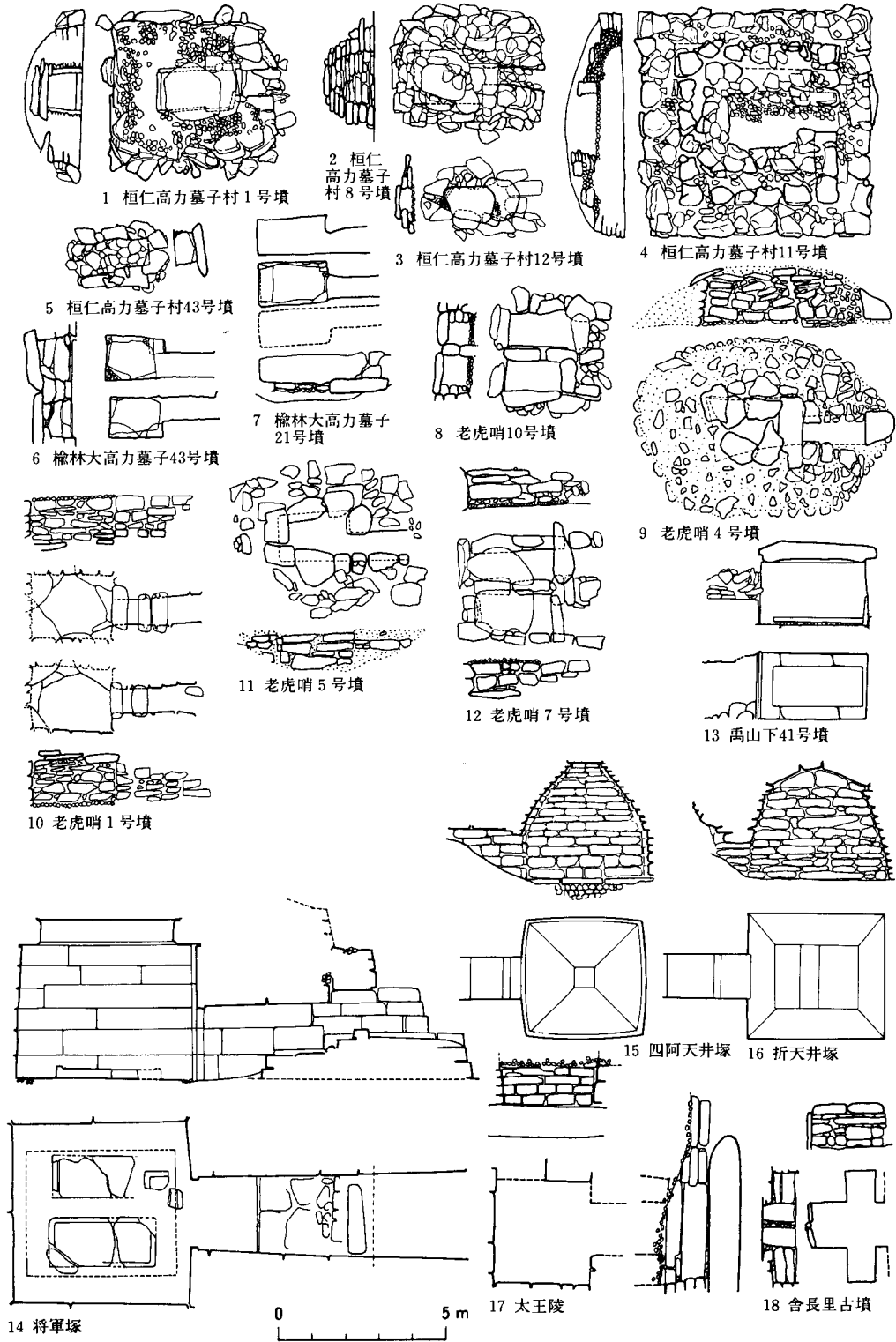
古墳	古墳名	基	所在地	類型	石室	玄室長	玄室幅	玄室高	壁高	天井幅	羨道長	羨道幅	羨道高	袖	方向	玄室幅/玄室長	天井幅/玄室幅	玄室幅/玄室高	棺床	棺長	棺幅	棺高
1	栗枝里古墳	80	咸鏡南道利原郡(谷昌里)			260	170	100														
2	栗枝里古墳		〃			220	110	90														
3	芝満里古墳	30	咸鏡南道北青郡芝満里			240	168	108			56	60										
4	大門里古墳群	70	咸鏡南道洪原郡龍原面(三成里)			250	120	90														
5	富民洞1-1号墳	208	咸鏡南道洪原郡富民洞			281	176	162			110			S								
6	1-3号墳		〃			200	135	110						S20°E								
7	1-4号墳		〃			246	154	155			100			S25°E								
8	1-5号墳		〃			256	142	95						S10°W								
9	3-1号墳		〃			185	100	93						S20°W								
10	3-2号墳		〃			250		110						S25°E								
11	道蔵洞古墳		咸鏡南道五老郡五老邑																			
12	奎華峰古墳群	30	〃			220	100	100														
13	多湖里古墳		咸鏡南道定平郡多湖里, 独山里	持送り 平天井		290	120	110						両袖								
14	龍城里1号墳		江原道安辺郡龍城里			384	154	160		102						40	66	96		237	154	32
15	2号墳		〃																			
16	3号墳		〃																			
17	4号墳		〃																			
18	5号墳		〃																			
19	25号墳		〃			408	133	193		93						25	70		割石横	244	133	31
20	51号墳		〃		445	311	215	156		178				片袖		69	83		割石横	237	178	59
21	上細浦洞夫婦塚		江原道安辺郡衛益面																			
22	蓋杯塚		〃																			
23	西塚		江原道安辺郡衛益面																			
24	高山里1号墳		江原道高山郡高山里			304	141	193		52						46	37					
25	旧邑里1号墳		江原道通川郡旧邑里		390	305	276	157		119	85	62	129	両袖		33	43			238	114	20
26	2号墳		〃																			
27	5号墳		〃			410	295	220	200	140	115	80	120	両袖		75	64			210	220	20
28	6号墳		〃			323	232	232	161		91	61	74	両袖		100				187	232	32
29	7号墳		〃	三角持送り		367	233	260	227		134	127		片袖		112				233	120	



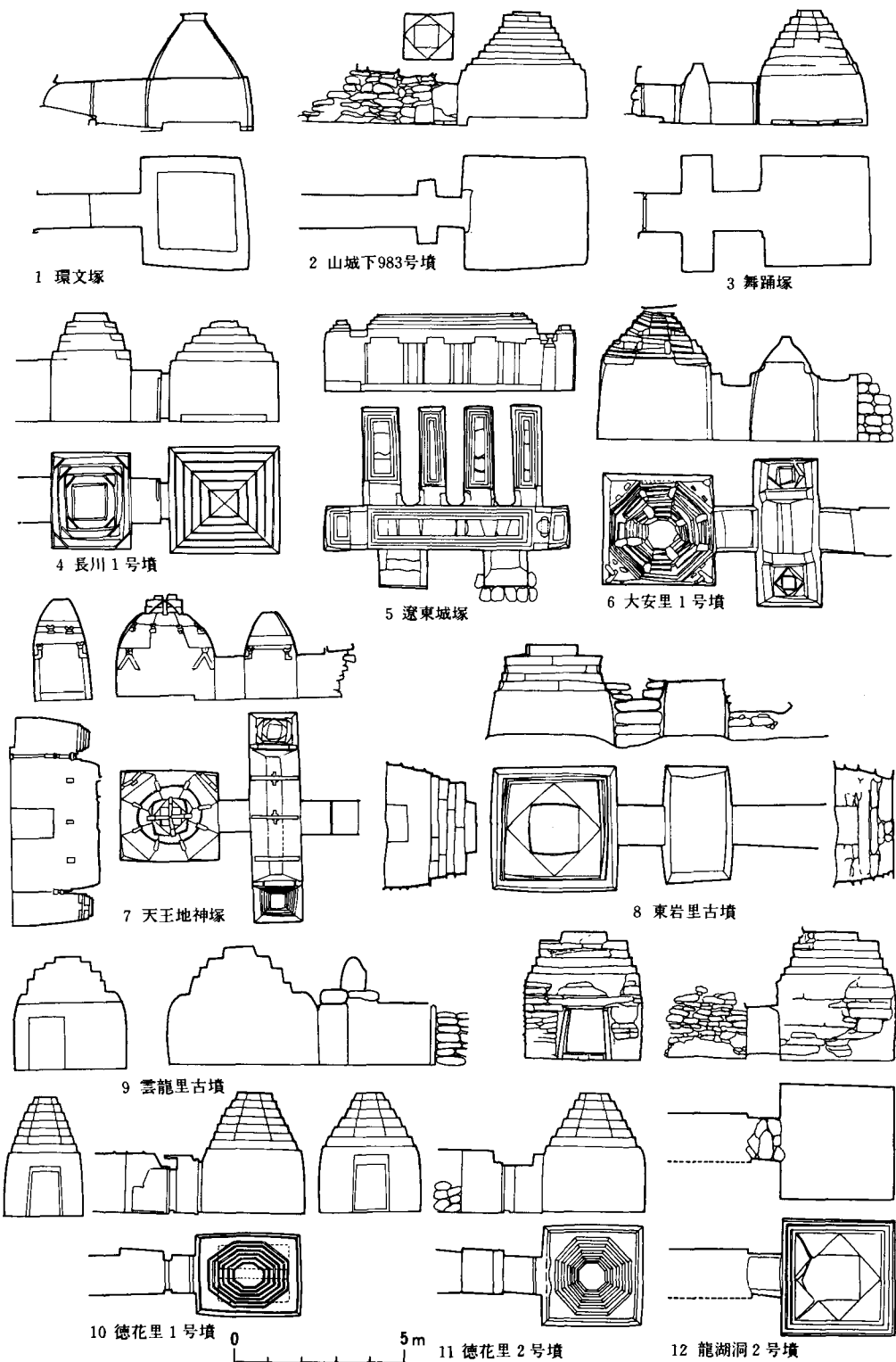
図版 1 朝鮮半島における横穴式石室墳の分布



図版2 高句麗の横穴式石室(1)

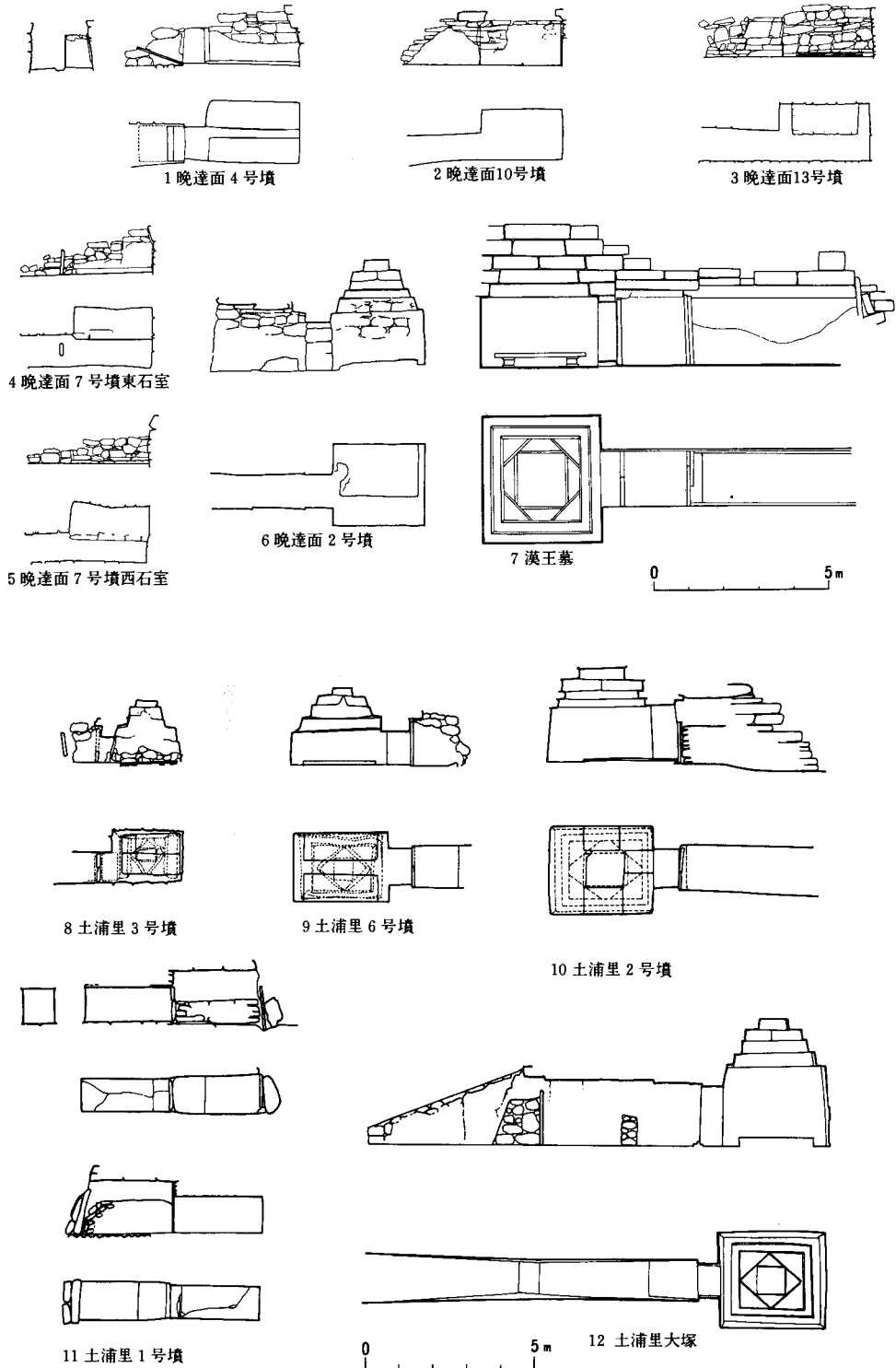


図版3 高句麗の横穴式石室(2)

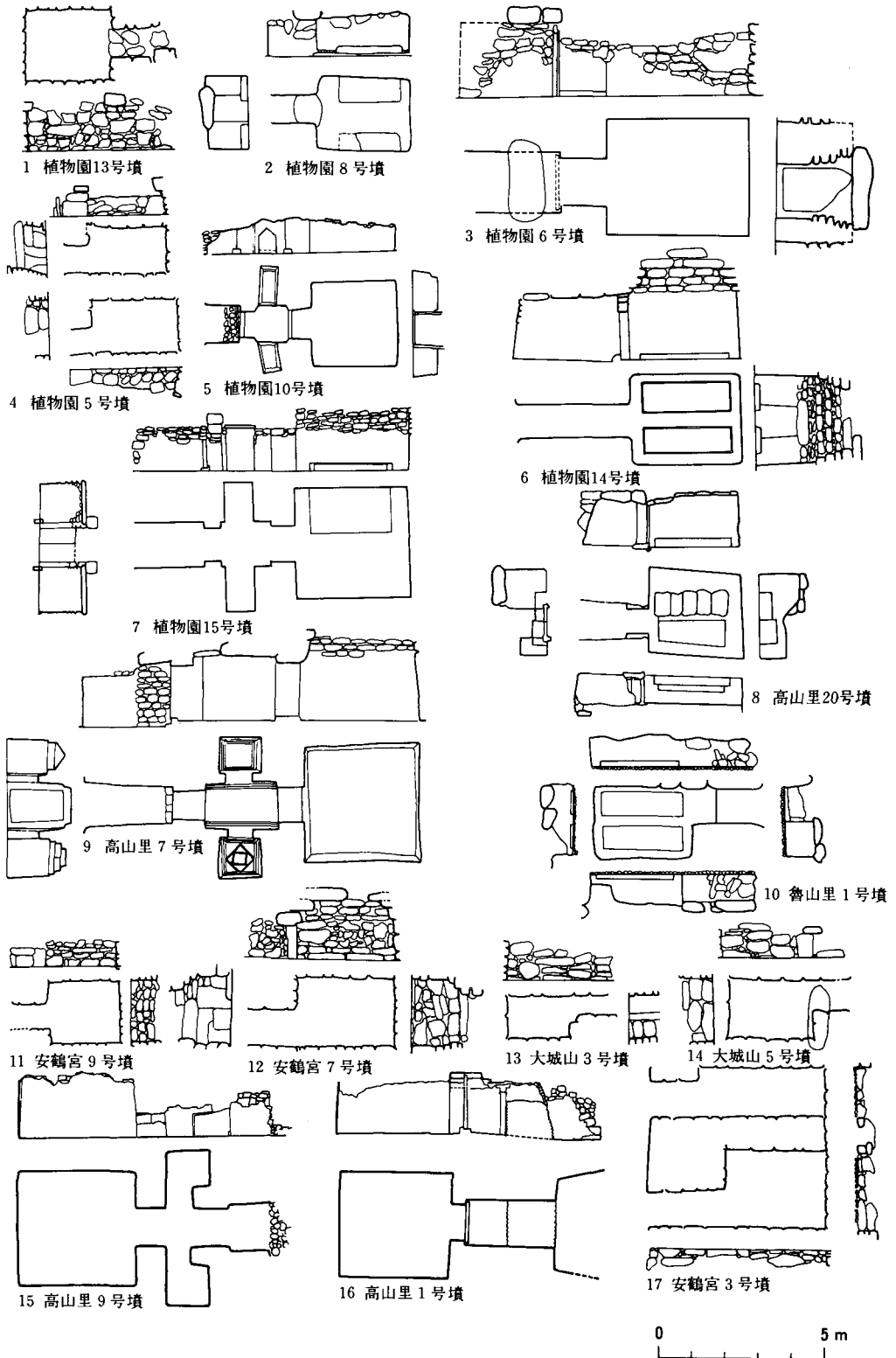


図版4 高句麗の横穴式石室(3)

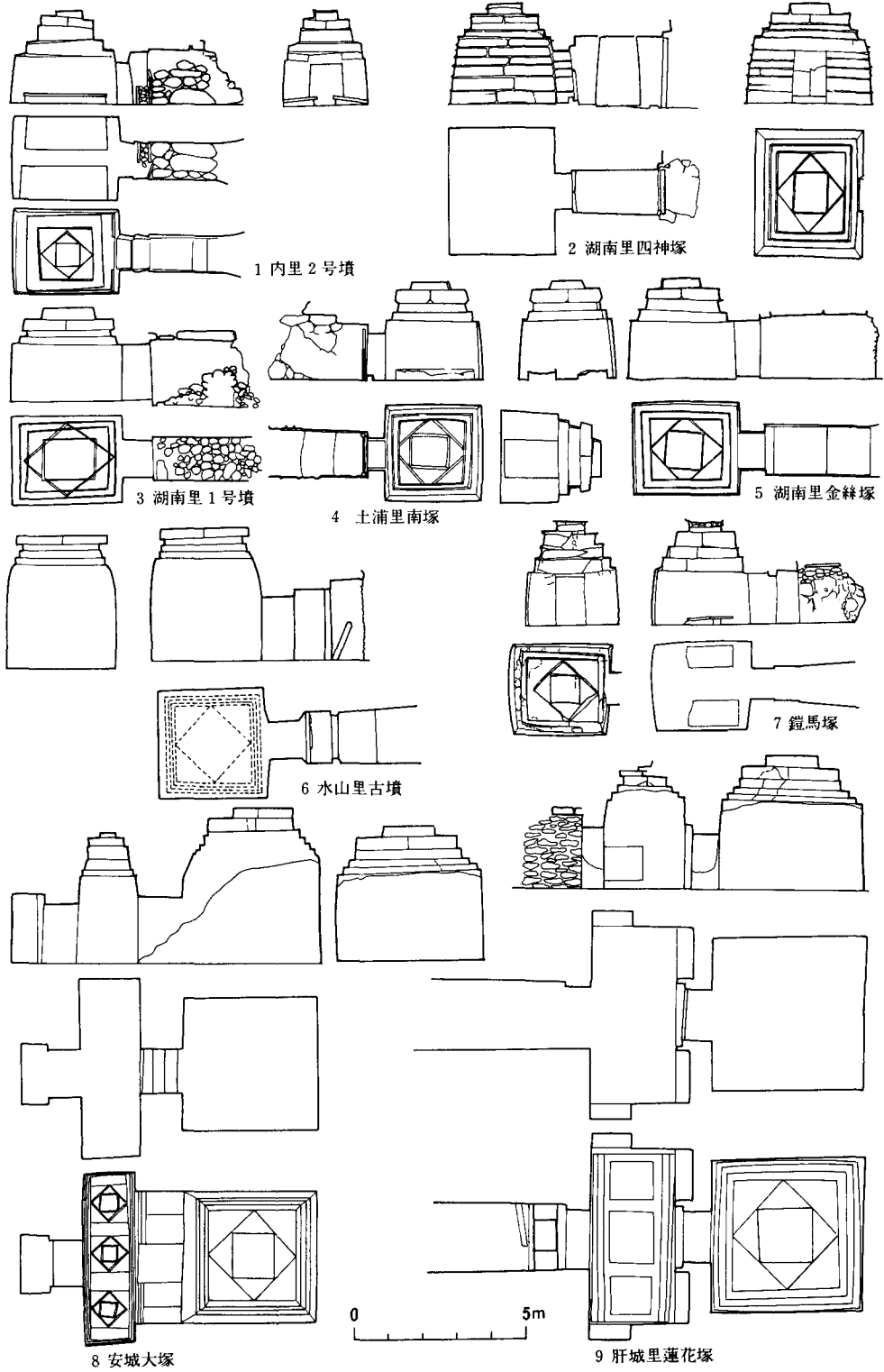




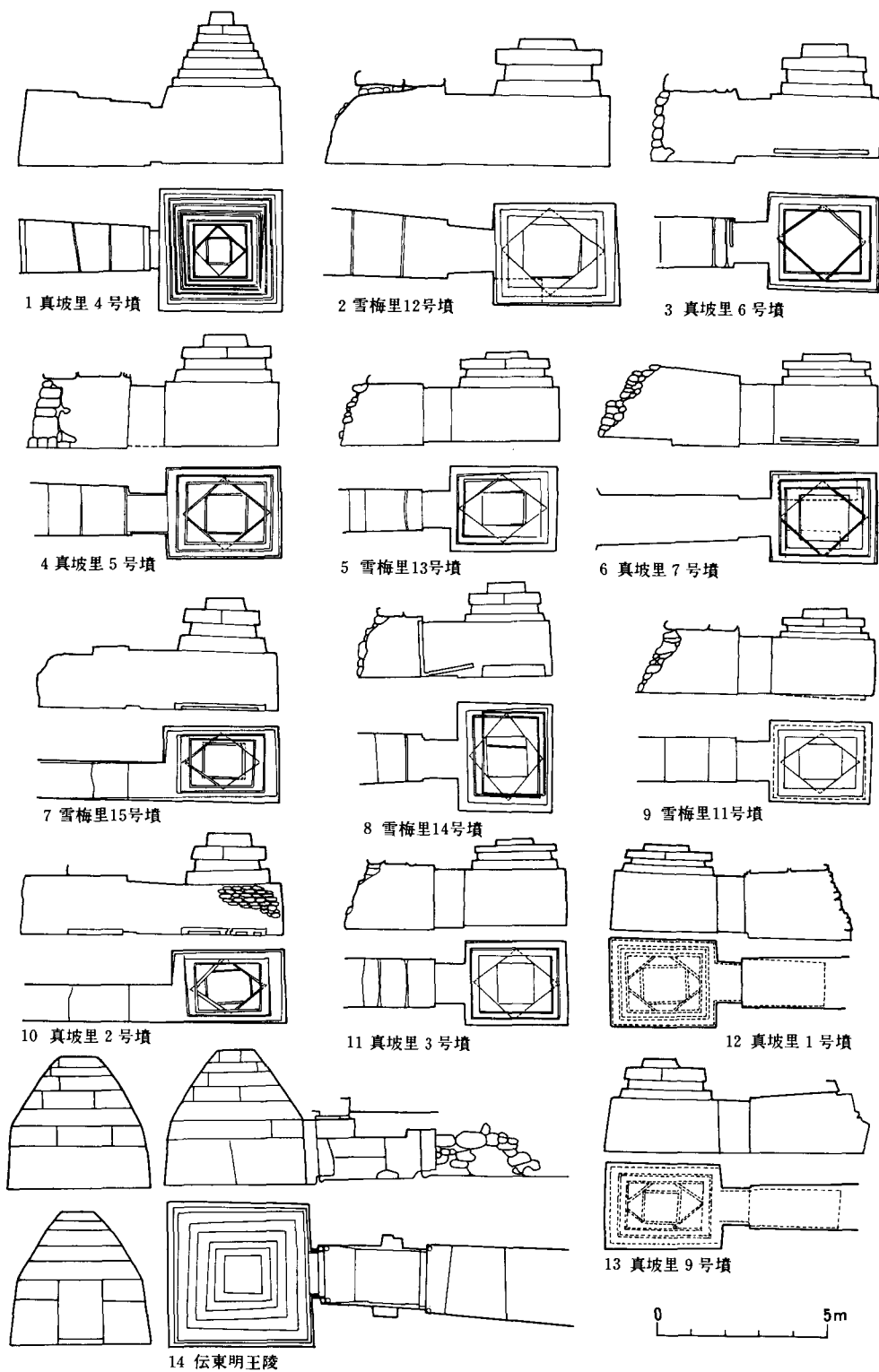
図版 5 高句麗の横穴式石室(4)



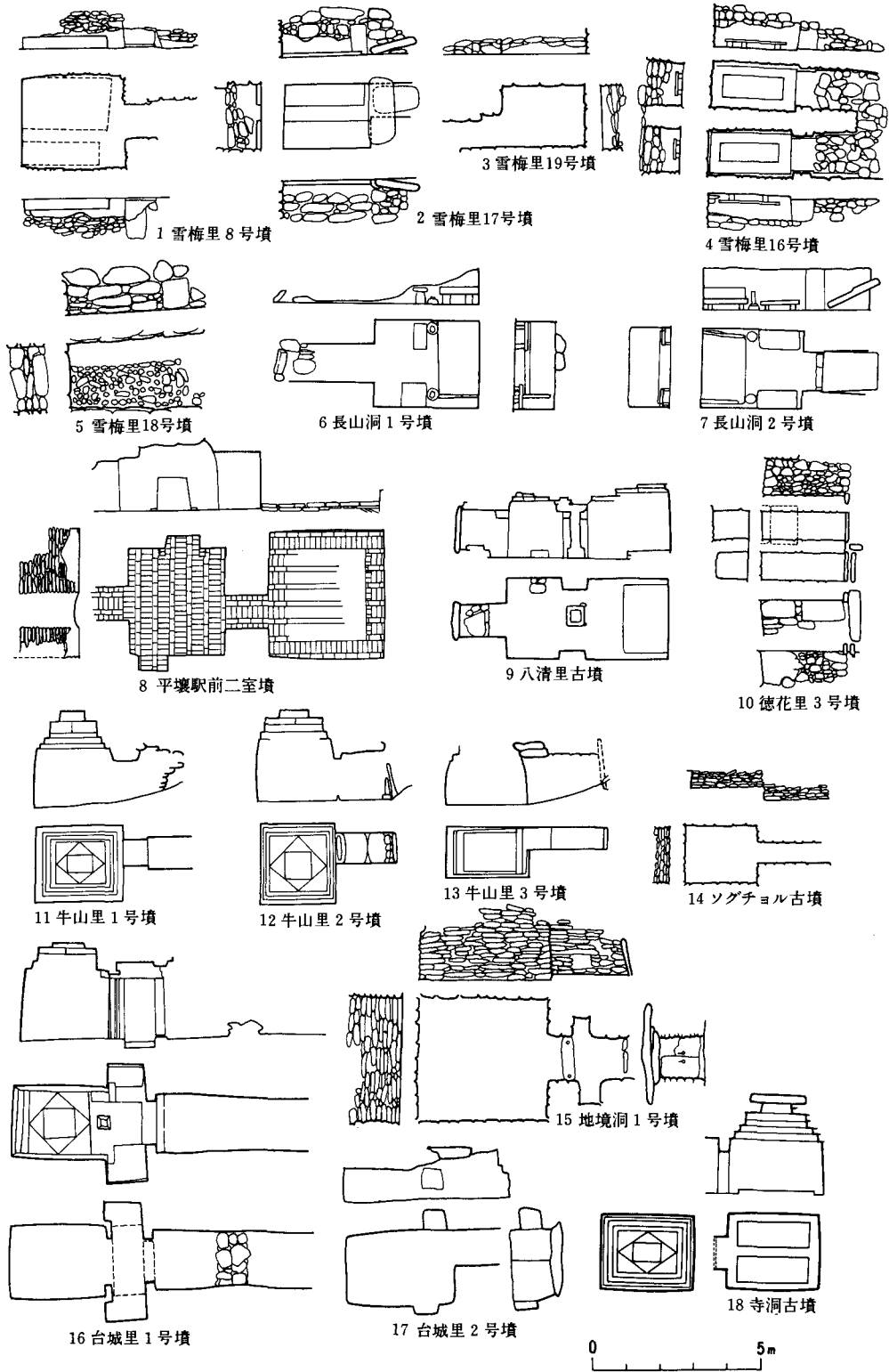
図版6 高句麗の横穴式石室(5)



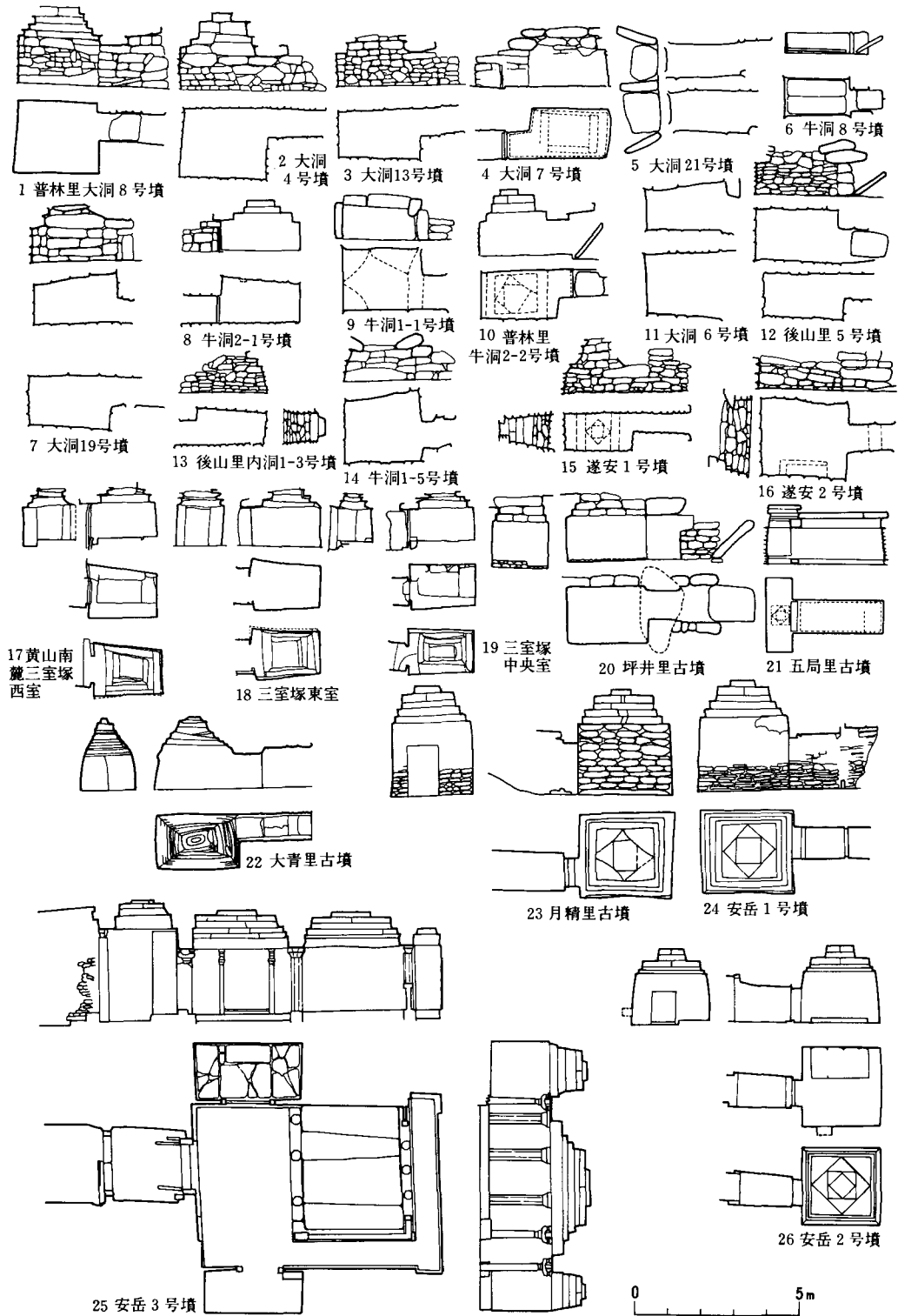
図版7 高句麗の横穴式石室(6)



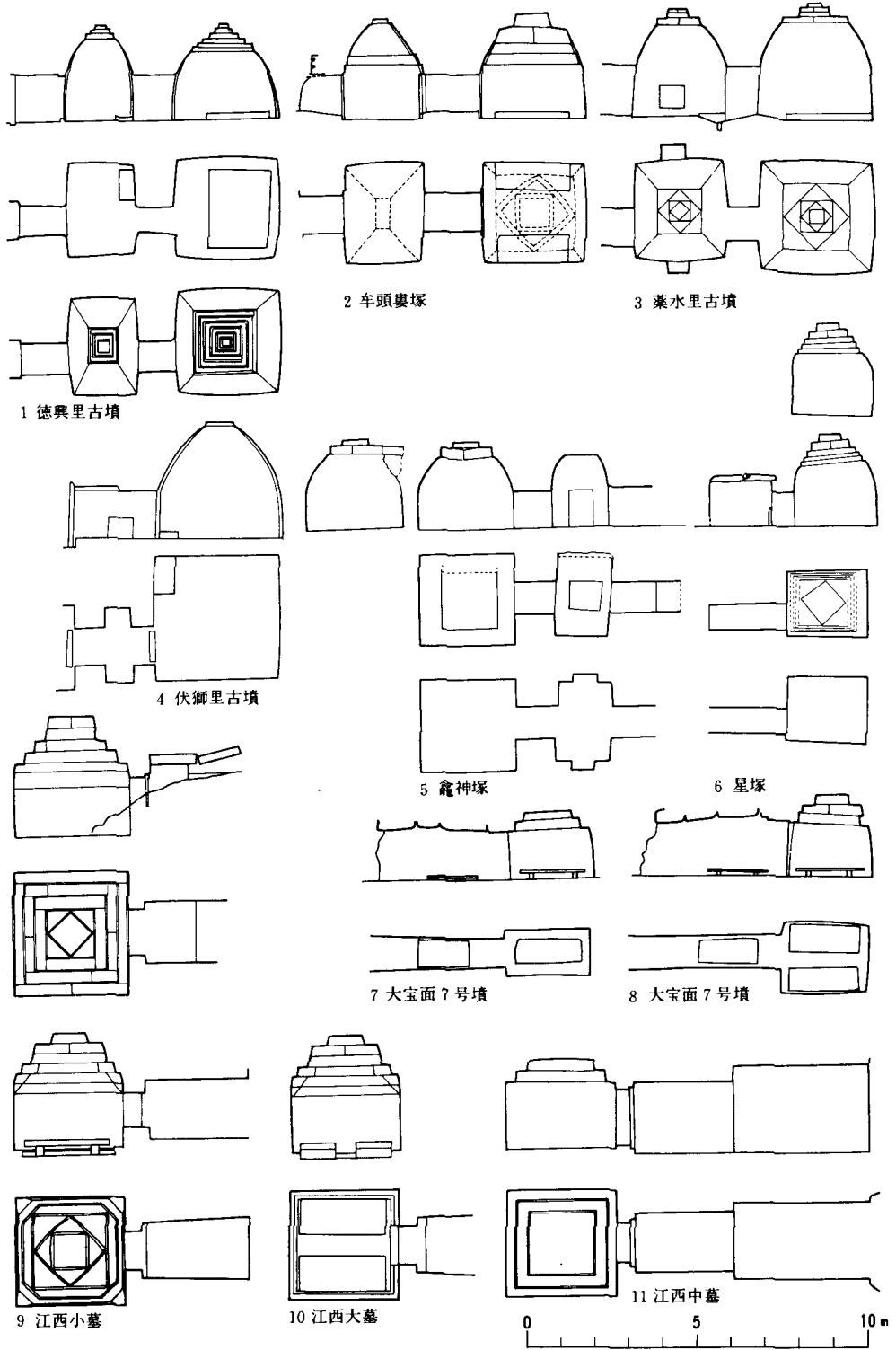
図版 8 高句麗の横穴式石室(7)



図版9 高句麗の横穴式石室(8)

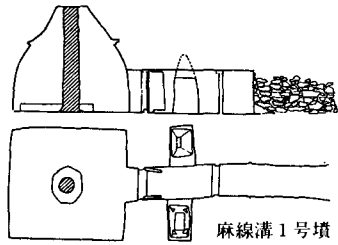


図版10 高句麗の横穴式石室(9)

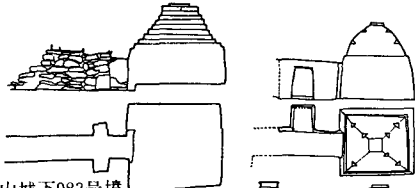


図版11 高句麗の横穴式石室(10)

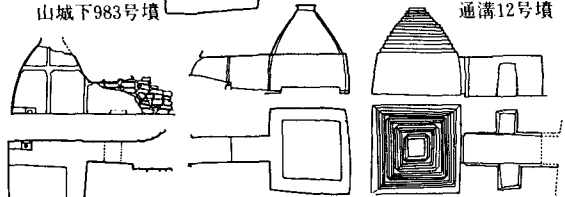
300



麻線溝1号墳

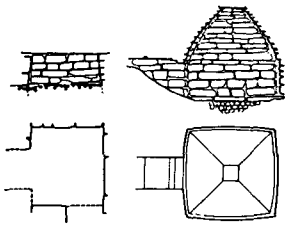


山城下983号墳



山城下1368号墳

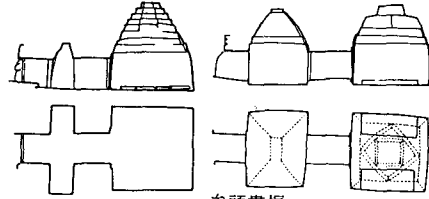
環文塚



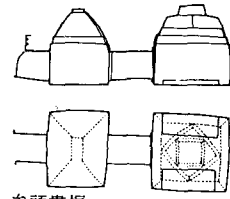
太王陵

四阿天井塚

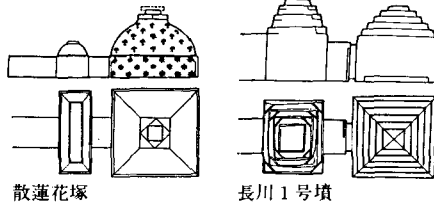
400



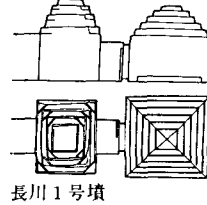
舞踊塚



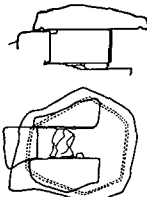
牛頭婁塚



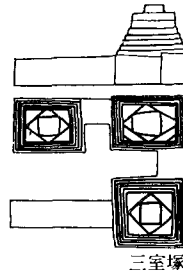
散蓮花塚



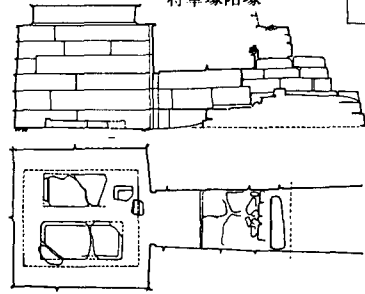
長川1号墳



將軍塚



三室塚

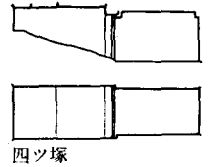


將軍塚

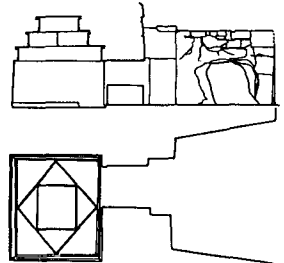


禹山下41号墳

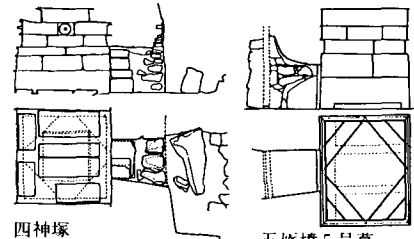
500



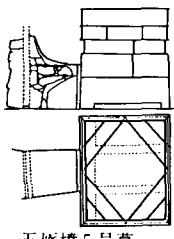
四ツ塚



五盛墳4号墓

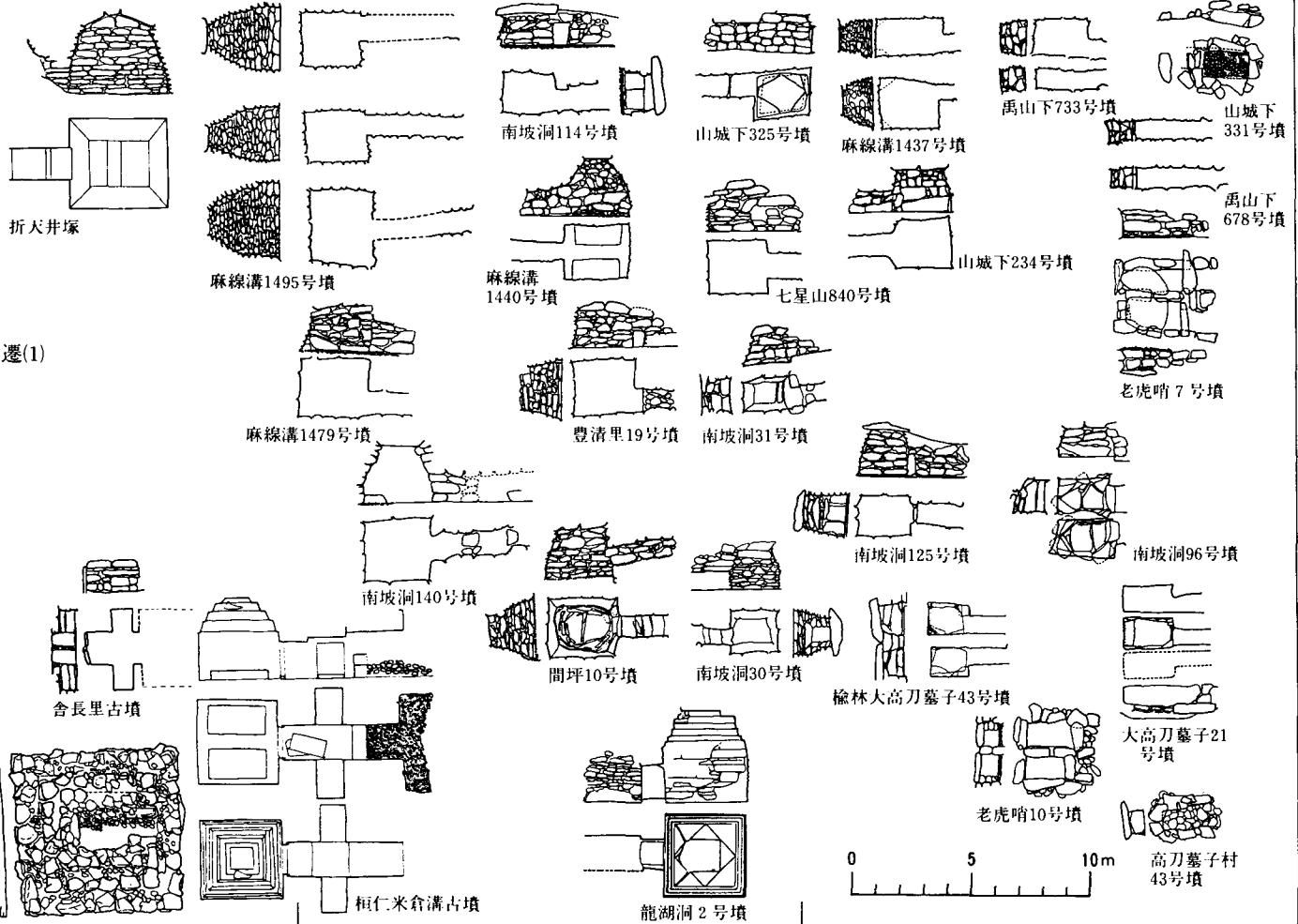


四神塚



五盛墳5号墓

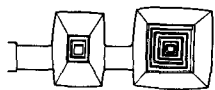
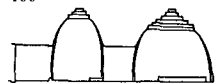




図版12  
高句麗石室墳の変遷(1)

400

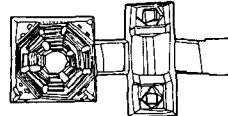
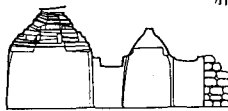
409



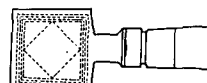
德興里古墳



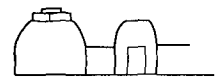
藥水里古墳



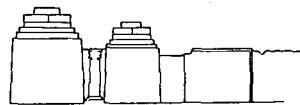
大安里1号墳



水山里古墳



龕神塚

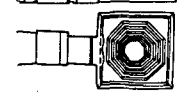
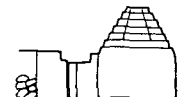
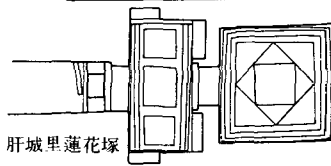


双楹塚

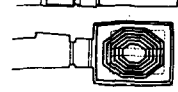
500



肝城里蓮花塚



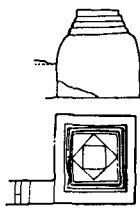
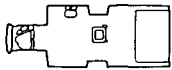
德花里2号墳



德花里1号墳



八清里古墳



梅山里四神塚



星塚

600



大洞4号墳



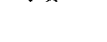
大洞13号墳



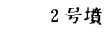
牛洞1-2号



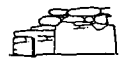
牛洞2-2号墳



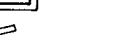
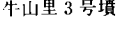
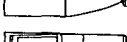
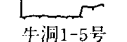
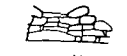
牛山里1号墳



牛山里2号墳



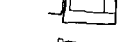
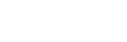
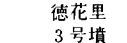
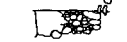
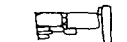
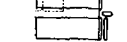
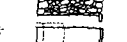
大洞7号墳



牛山里3号墳

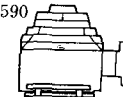


大洞21号墳

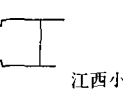
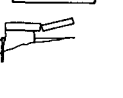
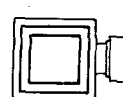
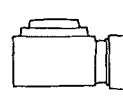


德花里3号墳

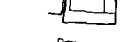
590



江西大墓



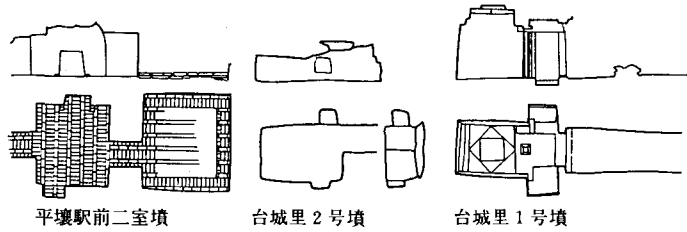
江西中墓



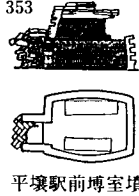
黃山南麓三室塚

400

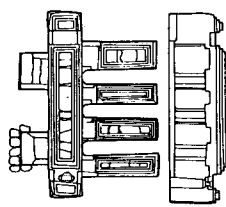
500



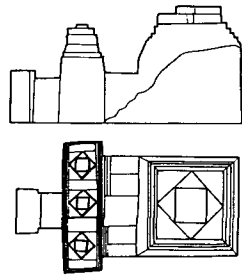
353



平壤駅前博室墳



遼東城塚

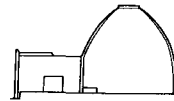


安城洞大塚

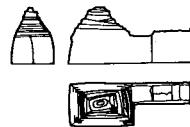
357



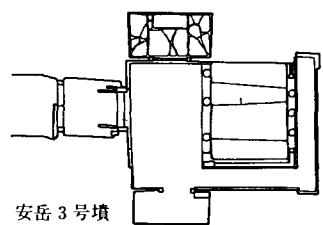
五局里古墳



伏獅里古墳

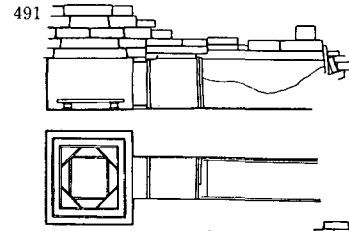
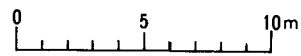


大青里

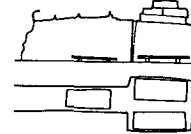


安岳3号墳

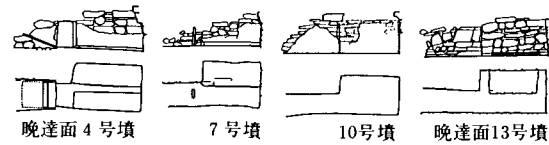
図版13  
高句麗石室墳の変遷(2)



漢王墓



大宝面7号墳

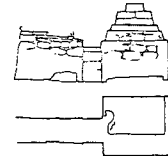


晚達面4号墳

7号墳

10号墳

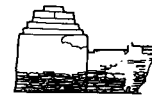
晚達面13号墳



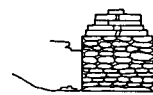
晚達面2号墳



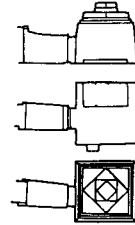
坪井里古墳



安岳1号墳

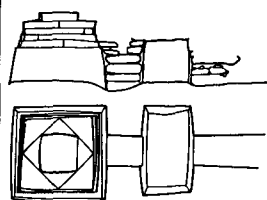


月精里古墳

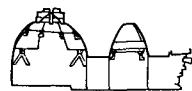


安岳2号墳

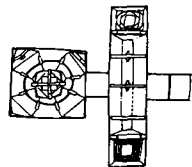
400



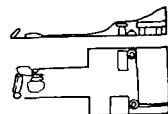
東岩里古墳



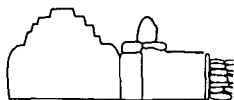
天王地神塚



長山洞1号墳



雲龍里古墳

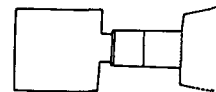


高山里9号墳

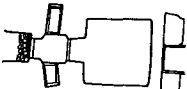
600



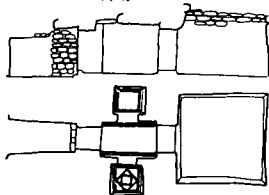
高山洞1号墳



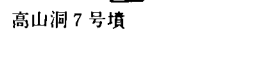
植物園10号墳



植物園8号墳



植物園13号墳



植物園14号墳

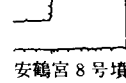
高山洞7号墳



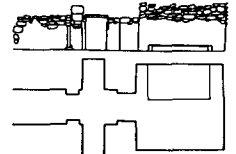
魯山里1号墳



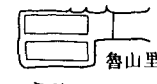
安鶴宮3号墳



安鶴宮8号墳



植物園15号墳



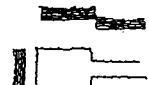
鏡馬塚



寺洞古墳



地境洞1号墳



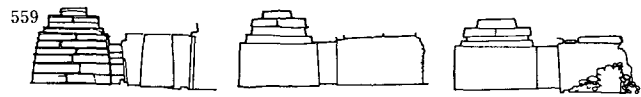
ソグチヨル古墳



遂安1号墳



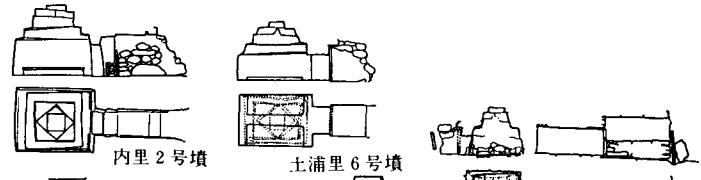
遂安2号墳



湖南里四神塚

金絲塚

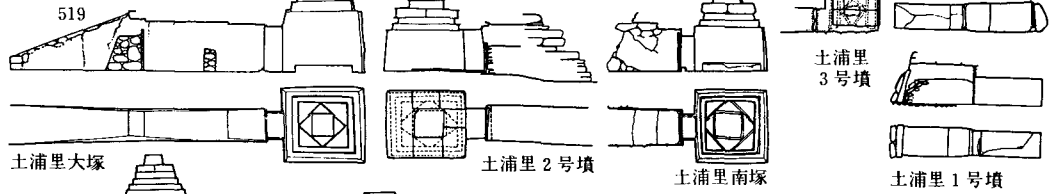
湖南里1号墳



内里2号墳

土浦里6号墳

土浦里3号墳

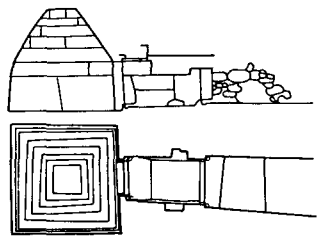


土浦里大塚

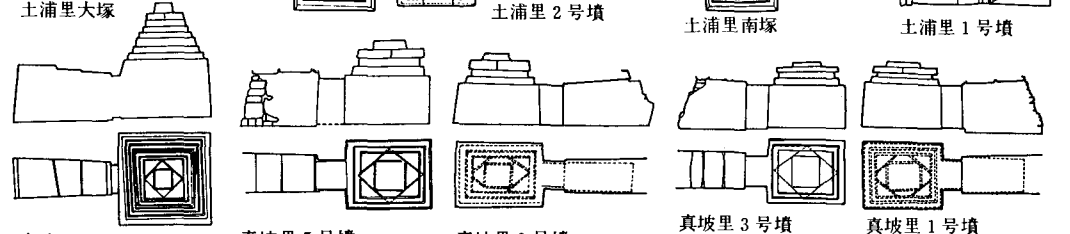
土浦里2号墳

土浦里南塚

土浦里1号墳



伝東明王陵



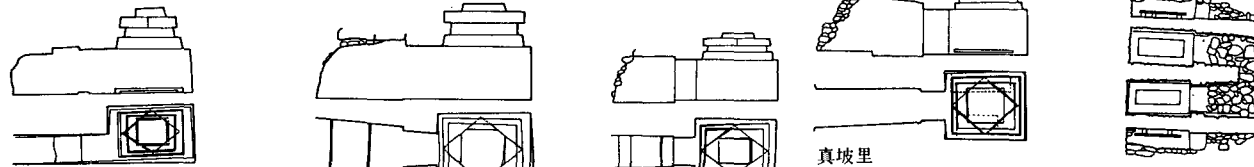
真坡里4号墳

真坡里5号墳

真坡里9号墳

真坡里3号墳

真坡里1号墳



雪梅里15号墳

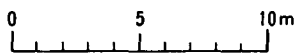
雪梅里12号墳

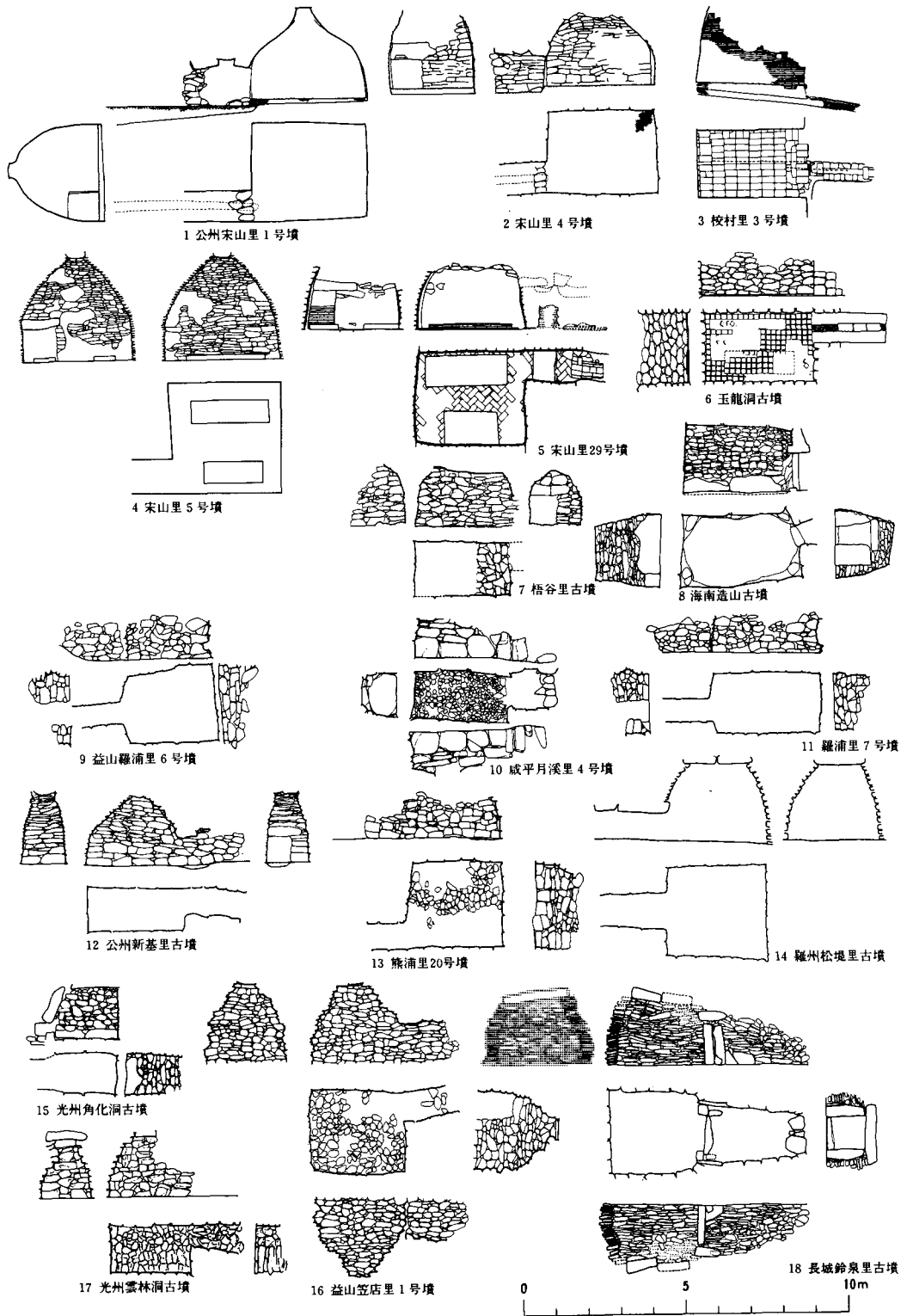
雪梅里13号墳

真坡里

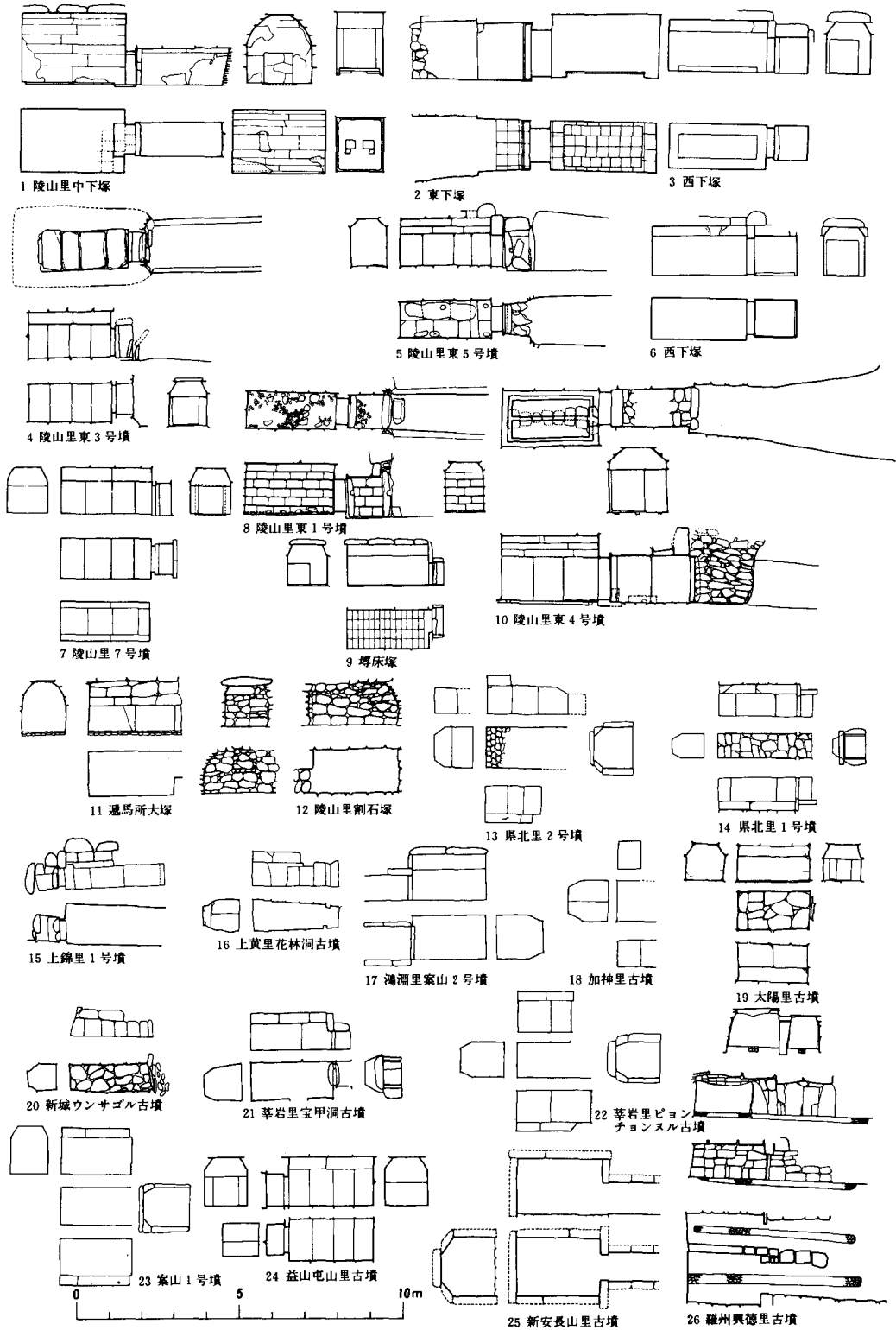
雪梅里16号墳

図版14  
高句麗石室墳の変遷(3)

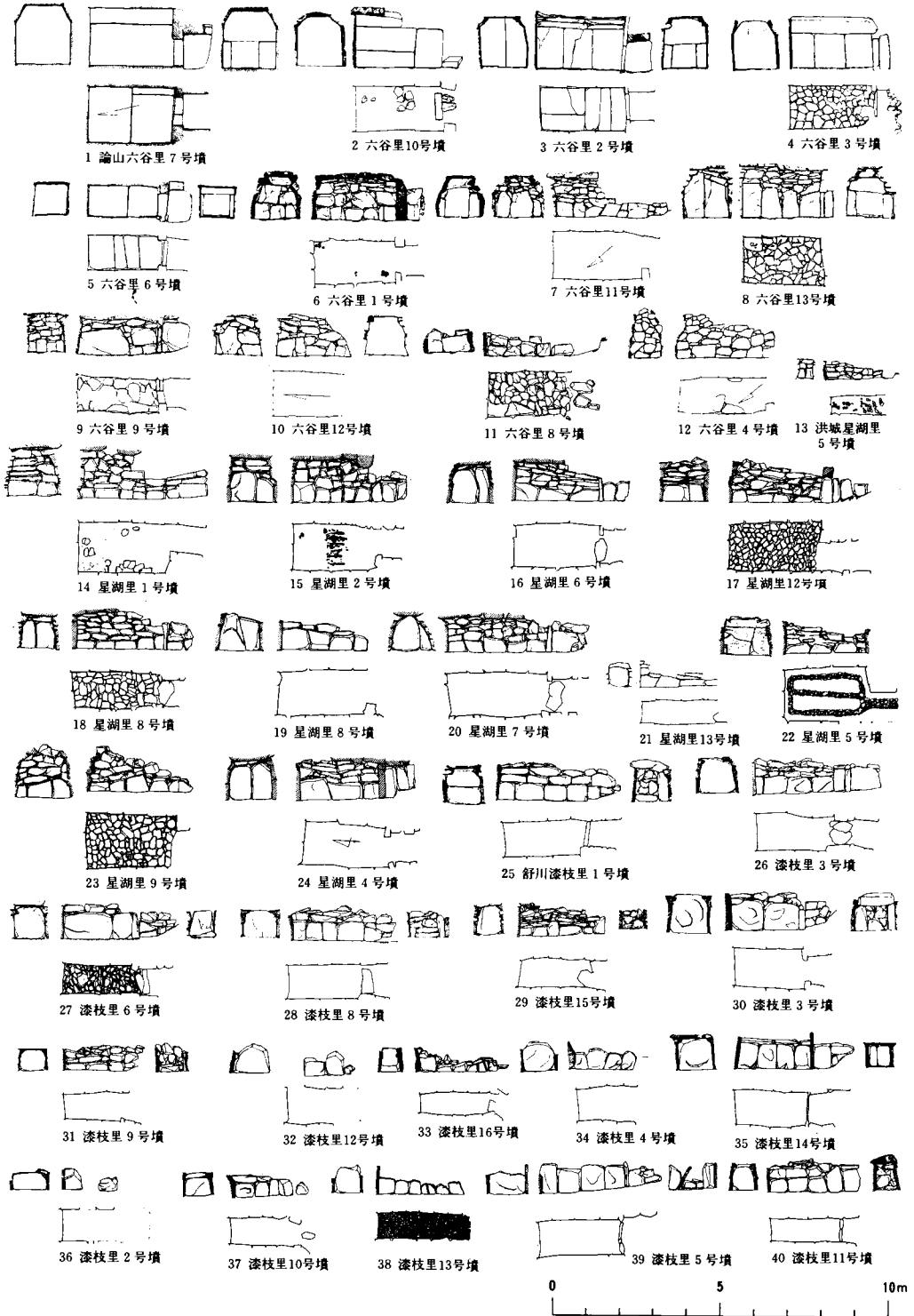




図版15 百濟の横穴式石室(1)

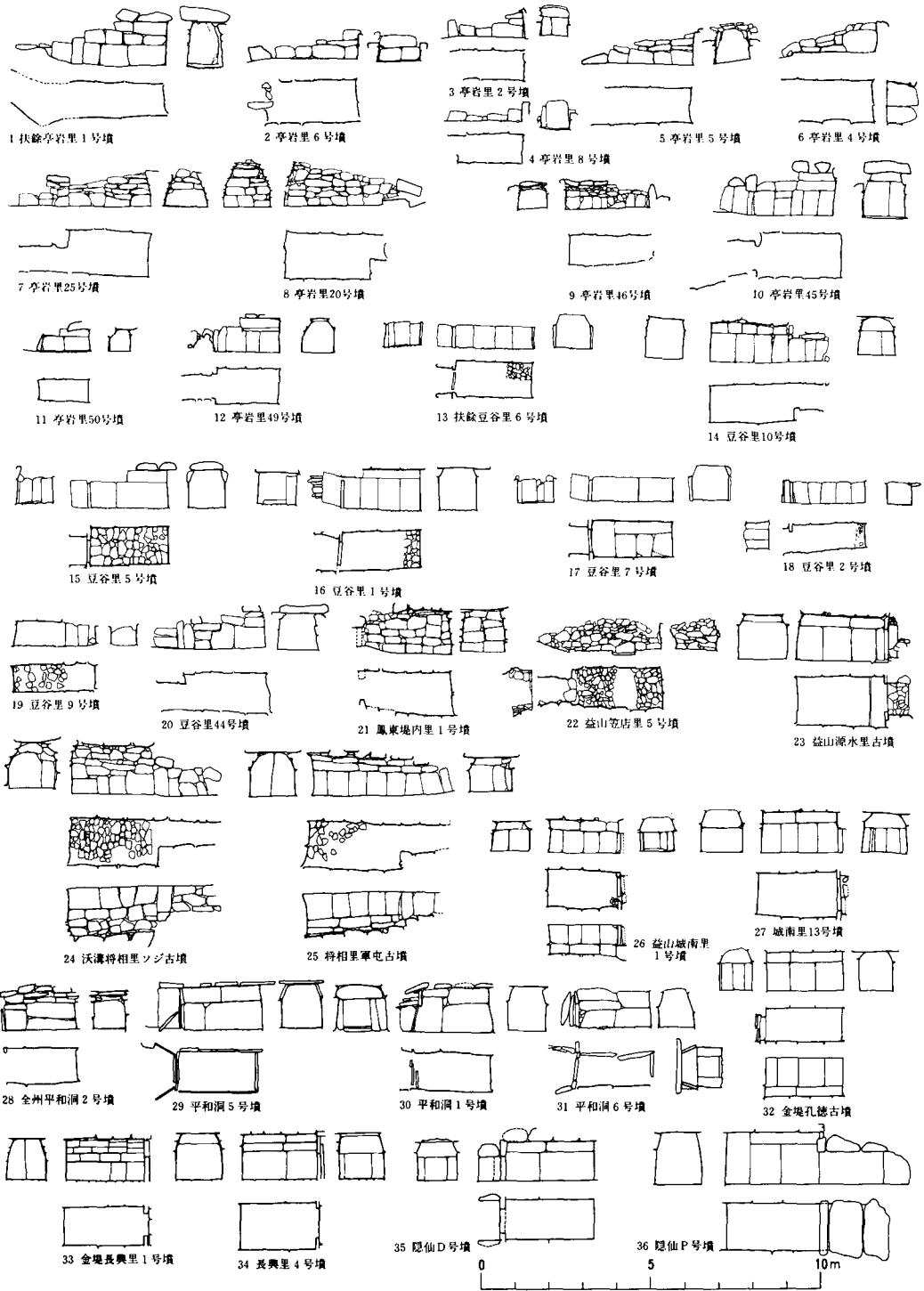


図版16 百濟の横穴式石室(2)

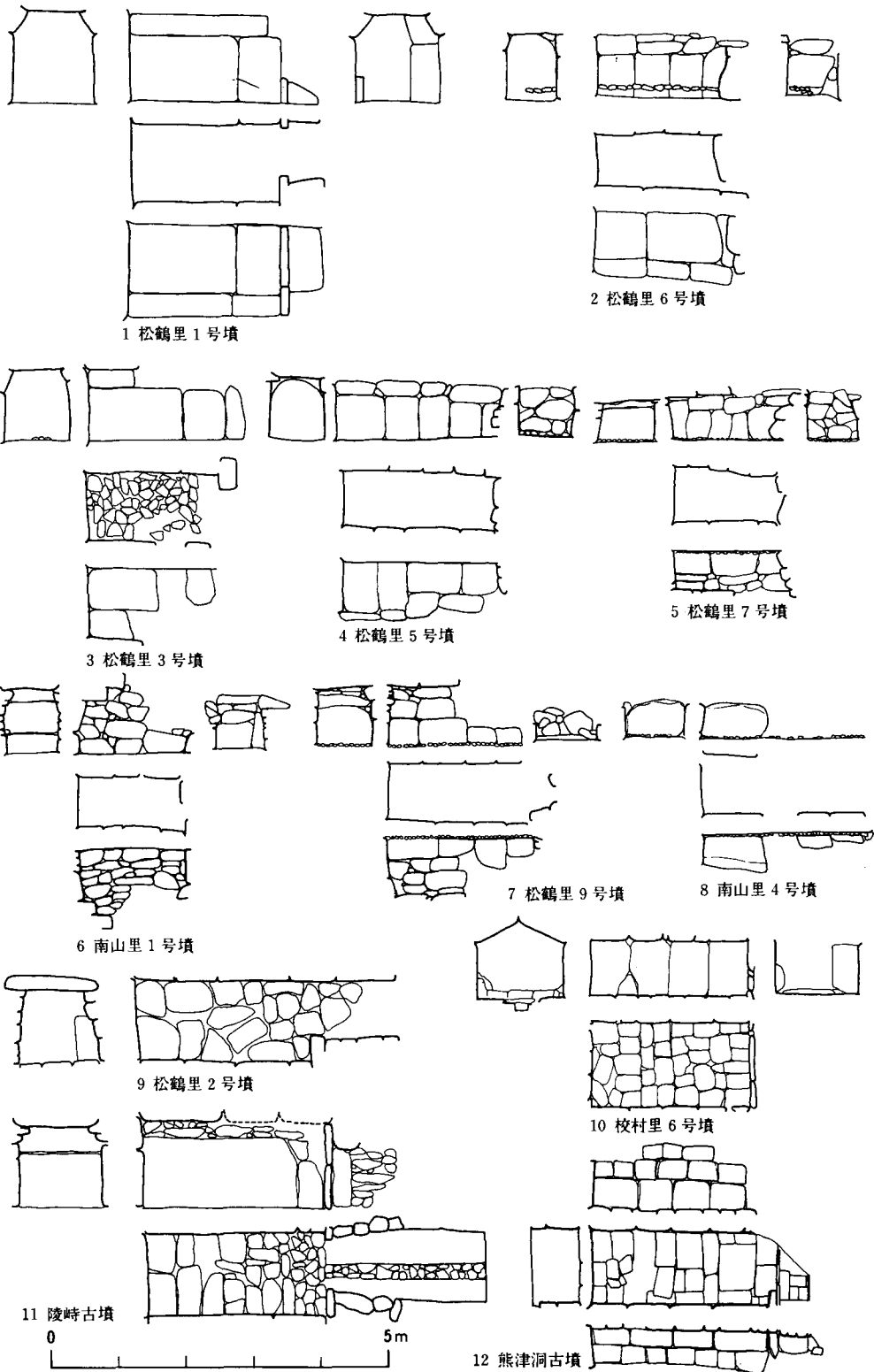


図版17 百済の横穴式石室(3)

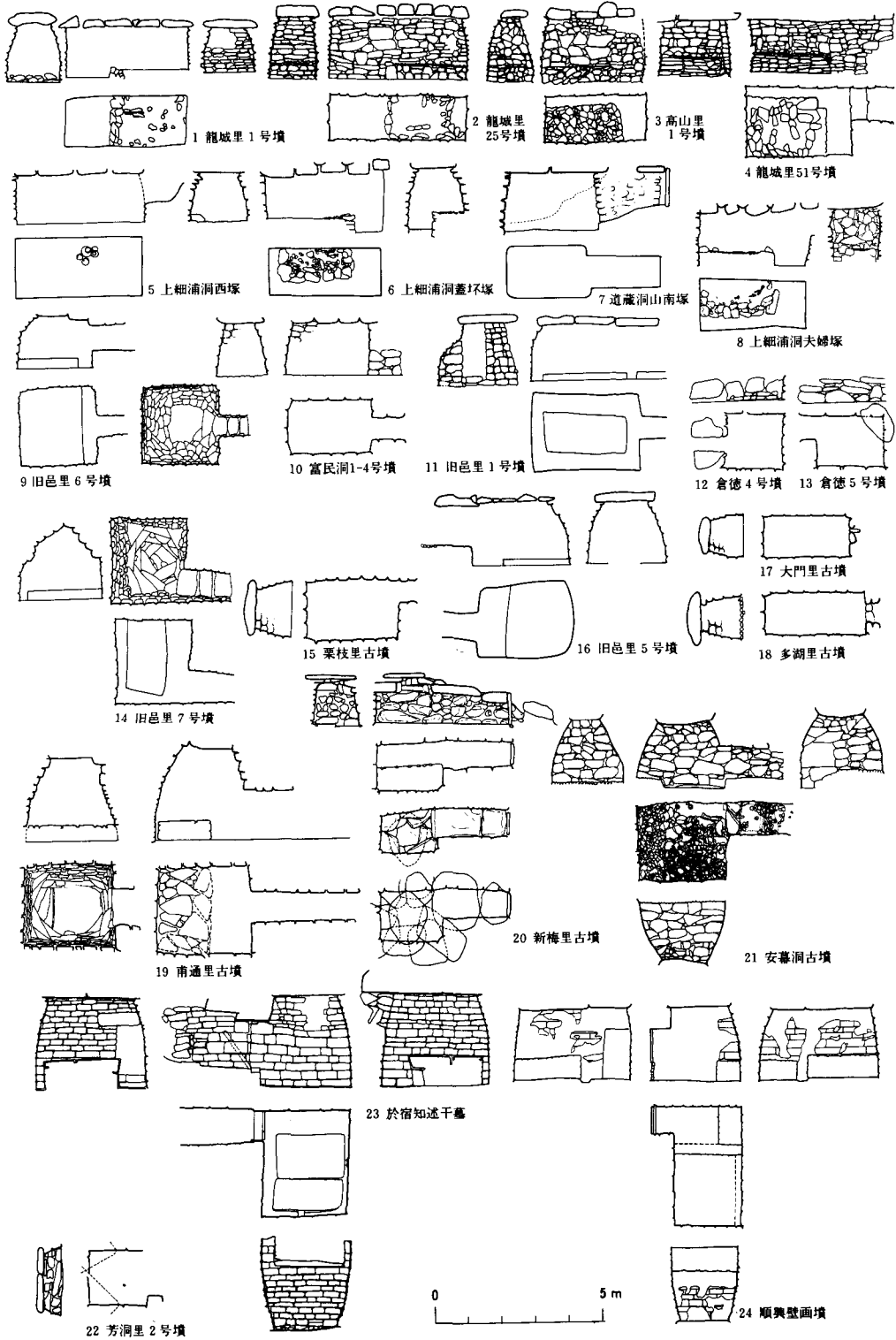




図版18 百濟の横穴式石室(4)



図版19 百済の横穴式石室(5)



図版20 東海岸・小白山脈一帯の横穴式石室

400



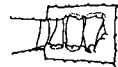
ピョンヤン南井里119号墳



ソウル可楽洞5号墳



可楽里2号墳



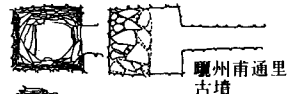
500



ソウル芳美洞1号墳



ソウル中谷里甲号墳



驪州南通里古墳

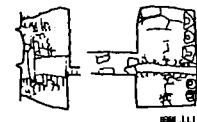


可楽洞3号墳

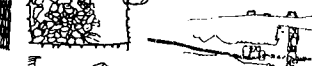
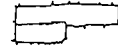
600



驪州梅龍里8号墳



春川新梅里古墳



中原樓岩1号墳



清州新鳳洞1号墳



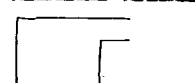
樓岩2号墳



宋山里5号墳

公州宋山里4号墳

宋山里3号墳



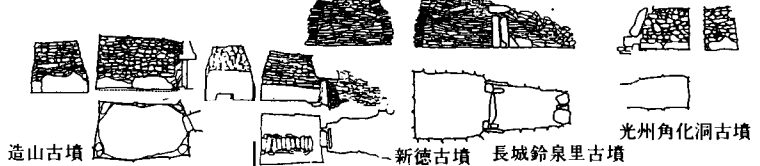


512 523

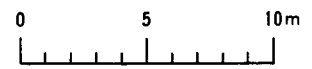
武寧王陵

宋山里6号墳

校村里3号墳



図版21  
百濟横穴式石室の変遷(1)



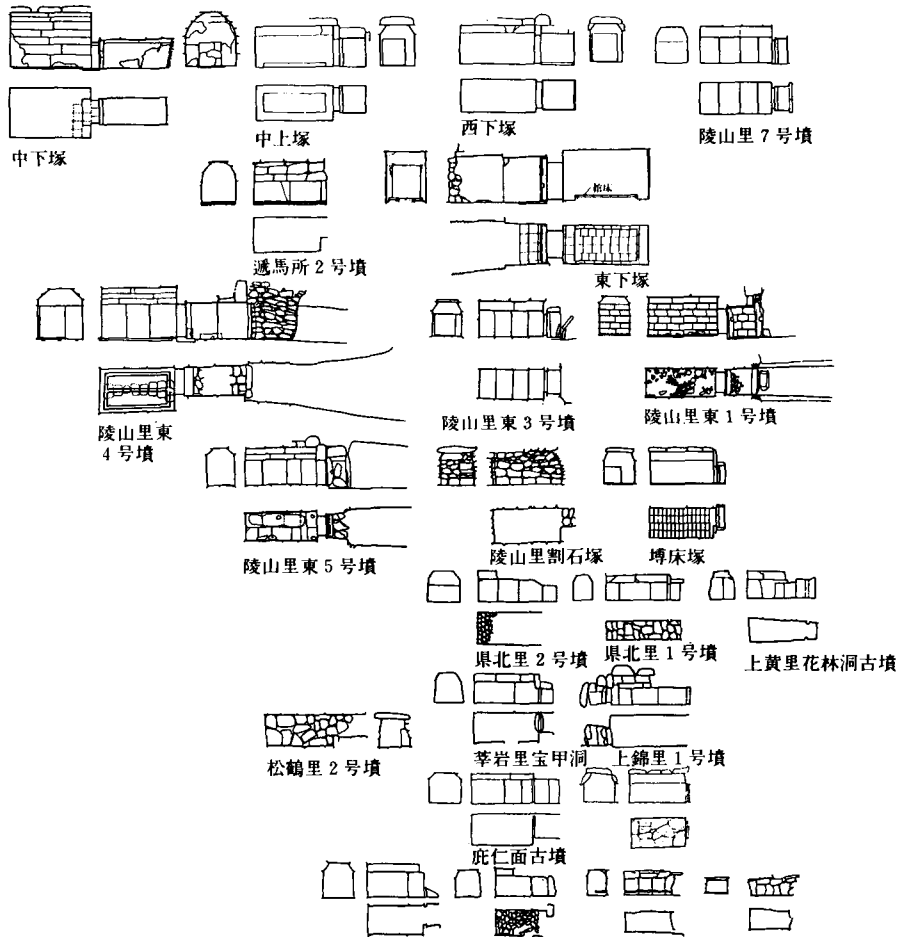
朝鮮三国時代における横穴式石室墳の出現と展開

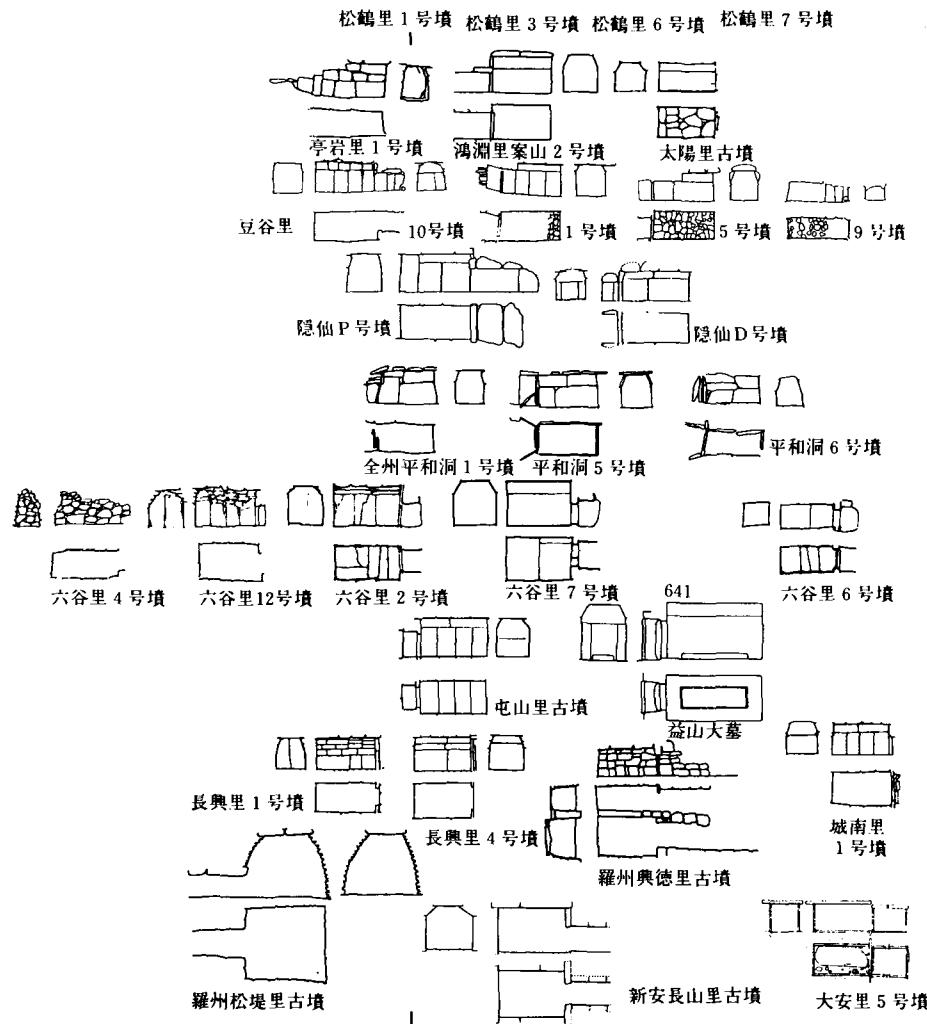
400

500

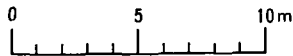
600

554





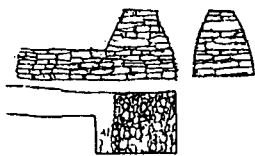
図版22  
百濟横穴式石室の変遷(2)



500

600

700

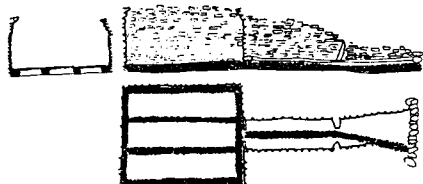


阿英·斗洛里 2号墳



高靈壁画墳

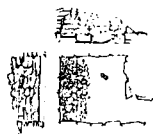
池山洞折天井塚



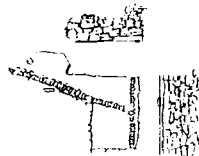
高靈古衙洞古墳



陝川·苧浦里  
D-1-1号墳



苧浦里 E9 号墳



苧浦里 E11 号墳



苧浦里  
E23 号墳



苧浦里  
E15 号墳



苧浦里 13 号墳

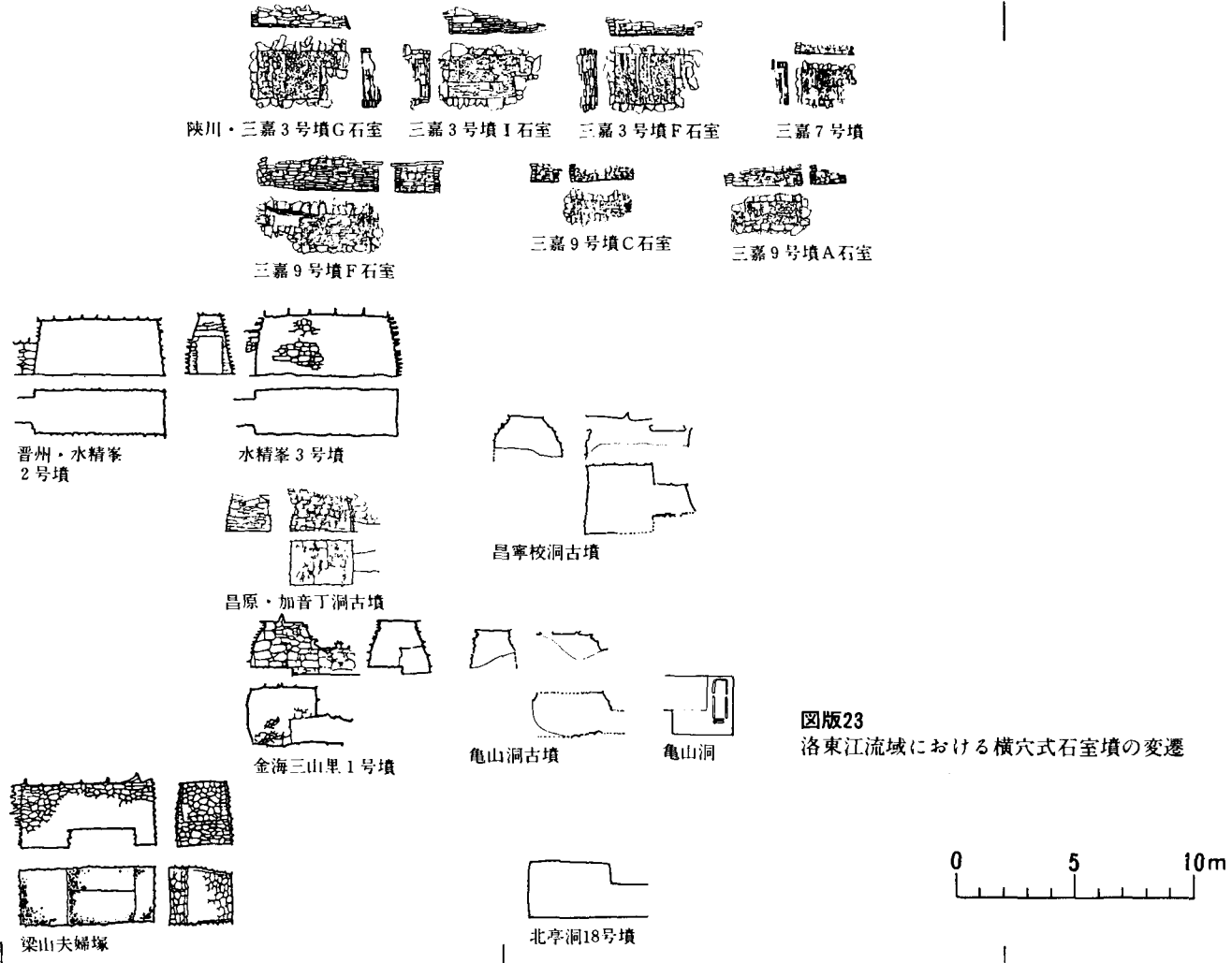


苧浦里 E 2 号墳

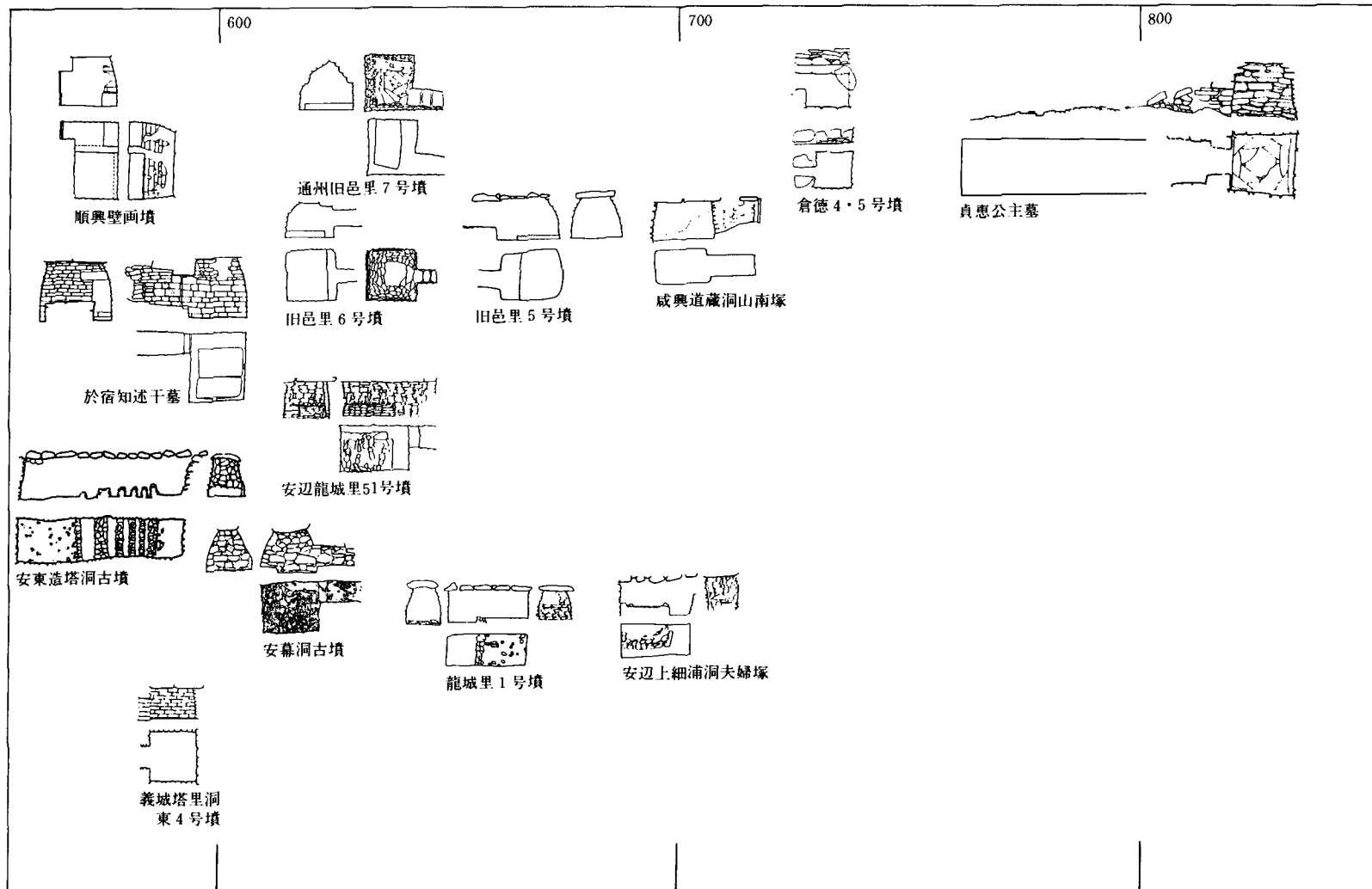


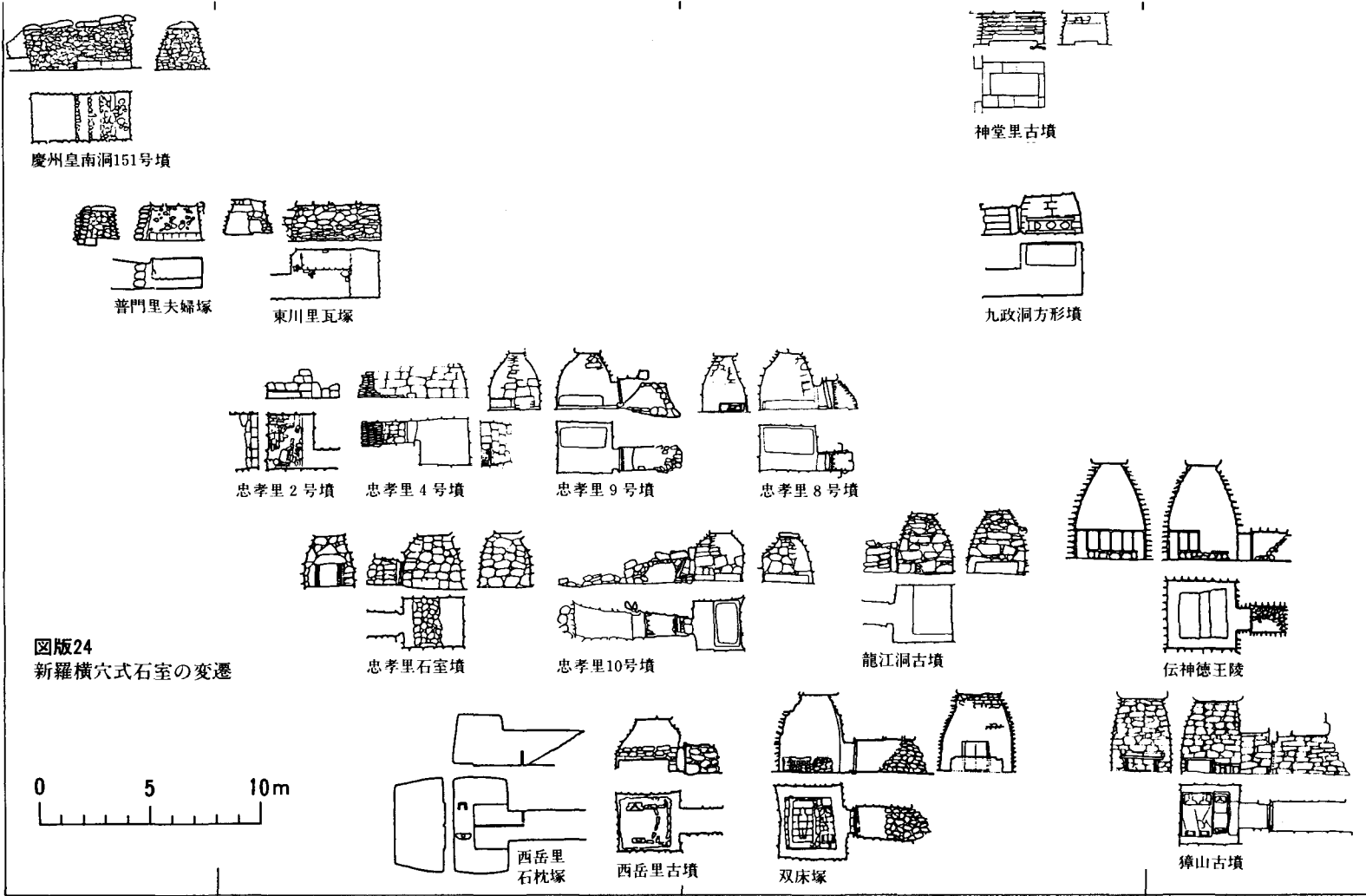
苧浦里 E 6 号墳





図版23 洛東江流域における横穴式石室墳の変遷





図版24  
新羅横穴式石室の変遷

付表1 高句麗古墳地名表

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長
1	將軍塚	○		吉林省集安市	両袖	686	534	534	475	
2	將軍塚陪塚	○			両袖		347	129	129	
3	太王陵	○			両袖		285	305		
4	西崗110号墳									
5	229号墳									
6	折天井塚	○			両袖	657	418	379	306	
7	四阿天井塚	○			両袖		341	341	345	
8	四つ塚4塚				無袖	714	321	168	190	
9	兄塚	○								
10	山城下234号墳				両袖					
11	331号墳				左片袖	254	188	120	62	
12	332号墳		○		両袖	697	326	318	326	100
13	325号墳				左片袖	464	224	188	157	
14	733号墳				左片袖 右片袖					
15	983号墳		○		両袖	721	374	343	313	73
16	1080号墳					525	315	310	295	51
17	1411号墳				両袖	524	336	202	272	
18	禹山下41号墳		○				315	200	232	
19	678号墳西室				無袖		400	90	96	
	東室				無袖		400	90	96	
20	711号墳西室				左片袖	394	240	114	154	
	東室				片袖	360	240	156	138	
21	733号墳西室				右片袖		310	80	110	
	東室				左片袖	316	230	160	110	
22	1897号墳南室				両袖	645	380	380	395	
	北室				両袖	530	340	280	340	
23	麻線溝1号墳		○		両袖		428	415	405	
24	705号墳西室						300	280	235	
	東室					535	270	230	230	
25	1437号墳西室				右片袖	354	280	150	136	
	東室				左片袖	325	250	190	120	
26	840号墳				両袖	376	236	210	173	
27	1440号墳北室				両袖	490	270	220	240	
	南室				両袖	470	270	210	280	
28	1445号墳西室				右片袖	430	230	160	132	
	中央室				右片袖	462	232	190	162	
	東室				両袖	450	240	156	123	
29	1479号墳				左片袖	450	280	240	180	
30	234号墳				両袖	420	240	190	170	
31	上活龍村4号墳				両袖	350	250	135	110	

甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 /玄室長	玄室高 /天井高
		平天井	152	239	223					100	
		平天井								37	
		平天井								107	
		穹窿状	239	124						91	
		平天井		125						100	59
		平天井	393	189						52	
			66	82	40					64	
95	166		217	108	177					98	42
			240	92	106					84	
83	128		347	93		70	132			92	47
						90	93	135			
104	128	平行 3 三角 2	210							98	
		平行 4	206	120	160					60	
										63	
										23	
										23	
			154	98	100					48	
			120	100	100					65	
		平天井								26	
		平天井	86	80	90					70	
		平行 10	265	104	150					100	53
		平行 1 三角 1	190	90	135					82	56
		穹窿状									
		三角 3 平行 2									
		三角 1	265	108	144					85	
		三角	74	60	100					54	
			75	64	100					54	
		三角	140	100	100					89	
		穹窿状	220	80	100					81	
		穹窿状	200	100	100					78	
		穹窿状	200	90	120					70	
		穹窿状	230	110	130					82	
			210	80	100					65	
			170	80	120					86	
			180	80	80					79	
			100	64	80					54	

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長
32	上活龍村 6号墳									
33	13号墳				左片袖	295	175	110	75	
34	14号墳				片袖					
35	角抵塚		○		両袖	424	324	316	328	132
36	舞踊塚		○		両袖	456	324	326	341	183
37	散蓮花塚		○		両袖	520	335	333	245	79
38	三室塚第1室		○		両袖	664	270	270	312	
	第2室				右片袖		212	289	309	99
	第3室				右片袖		48	3	329	103
39	通溝四神塚		○		両袖	554	366	370	333	211
40	環文塚		○		両袖	616	312	336	348	
41	牟頭婁塚		○		両袖	424	302	296	308	172
42	亀甲塚		○			402	275	269	317	
43	美人塚		○							
44	五盛墳 4号墳		○		両袖	530	368	420	364	188
45	5号墳		○		両袖	549	356	437	394	211
46	長川 1号墳		○		両袖	772	324	317	298	108
47	2号墳		○		両袖	599	360	350	332	
48	4号塚南室		○			375	265	235	300	
	北室		○			390	280		350	
49	通溝12号墳南室		○		両袖	718	348	353	348	
	北室				両袖	684	294	282	304	
50	万宝汀1368号墳		○		右片袖	654	320	244	282	
51	下解放31号墳		○							
52	老虎哨 1号墳東室				両袖	520	250	190	125	
	西室				両袖	510	250	190	125	
53	4号墳				左片袖	550	260	165	130	
54	5号墳				左片袖	380	210	135	100	
55	7号墳東室				無袖	345	220	110		
	西室				無袖	345	220	100	90	
56	10号墳東室				左片袖		175	100		
	西室				右片袖		125	80	60	
57	前屯 7号墳			遼寧省撫順市前屯						
58	9号墳									
59	10号墳									
60	13号墳					340	230	195	70	
61	15号墳									
62	16号墳						237	105	70	
63	17号墳									
64	18号墳						196	57	42	

甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 /玄室長	玄室高 /天井高
			120	60	65					63	
136	117	三角平行	100	84	88	96	324	172		98	
115	79		132	113	85	132	343	175		101	56
		平行6三角2	185	112	79					99	66
106			394	103	103	124	327	139		100	62
96										136	54
169	183	穹窿状	188							82	58
109	105	平行2三角2	304	100	152					101	54
			122	109	109	231	296	296	穹窿天井	108	
			127							98	53
175	175	平行1三角2	162							114	46
186			193	175	175					123	46
131	153	三角3平行1	102	134	180	232	281			98	40
			239	140	160	114	158	126		97	
						114	152	126			
		平行2三角5	110	115	150					89	
		平行4三角2	110	115	150						
		平行13小洩角	370	120	150	70	132	100		101	51
						90	93	135		96	43
			390	100		98	130	110			
		穹窿状	334							76	
		三角	270	75	100					76	
		三角	260	70	85					76	
		持送り天井	190	90	130					63	
			170	75	40					64	
			125	80	60						
			125	80	60					45	
										50	
			110	60						85	
										44	
										29	

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長
65	注渾木 1号墳			注渾木		340	220	124	70	
66	2号墳									
67	高力墓子村 1号墳	○		遼寧省桓仁県	右片袖	320	200	110	80	
68	8号墳	○			両袖	375	205	160	130	
69	11号墳	○			両袖	340	212	174	74	
70	13号墳北室	○			右片袖					
	南室	○			左片袖					
71	21号墳北室	○			右片袖	220	148	91	62	
	中央室	○			無袖	232	232	96	48	
	南室	○			無袖	262	262	80	64	
72	米倉溝古墳		○	桓仁県雅河郷	両袖		350	352	350	162
73	大高力墓子21号墳北室	○		吉林省楡林大高力墓子						
	中央室	○				347	198	118		
	南室	○				226	77	58		
74	31号墳北室	○			右片袖	320	160	125	80	
	南室	○			左片袖	322	170	133		
75	43号墳	○								
76	舎長里古墳	○		慈江道渭原郡	両袖					
77	深貴里 8号墳			時中郡深貴里		575	275	170	160	
78	10号墳						220	180	110	
79	14号墳				両袖		240	200	100	
							230	140	100	
80	42号墳				片袖	410	260	180		
81	53号墳				片袖	440	240	170		
82	54号墳				片袖	380	240	145	110	
83	81号墳	○			左片袖	235	160	110	80	
84	87号墳				片袖	280	170	120	100	
85	88号墳				片袖	330	240	120		
86	89号墳						220	70		
87	90号墳				片袖	420	220	120	70	
88	103号墳				両袖	310	210	150		
						285	180	150		
89	115号墳				右片袖?	320	220	130	100	
					左片袖	410	250	140	100	
90	141号墳				片袖	320	220	130	100	
91	142号墳				片袖	410	280	180		
92	149号墳				片袖	410	230	190	110	
93	150号墳	○			両袖	300	160	150	80	
94	151号墳									
95	152号墳						270	100	80	
96	153号墳				片袖	280	180	100	80	



甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 /玄室長	玄室高 /天井高
			120	74						56	
			120	80						55	
			170	60						78	
			128	74						82	
			130	58						59	
143	158	平行 4	252	146	194	160 158	117 116	134 134	南側室平天井 北側室平天井	101 60 67 60 75 78 78 34 99 62 82 83 61 69	57
		平天井	103	114		70	276			99	
		平天井	300	70	100					62	
		平天井								82	
		平天井	220	80	90					83	
			220	70	90					61	
			150	100	80					69	
		平天井	200	100	70						
		平天井	140	90	70					60	
		平天井	75	60	80					69	
		平天井	110	80						71	
		平天井	90	60						50	
		平天井								32	
			200	60	60					55	
			100	75	90					71	
			105	75	90					83	
		平天井	100	100	90					59	
		平天井	160	80	90					56	
			100	100	90					62	
			130	120						64	
		三角	180	80						83	
		三角	140	60	60						
		三角									
		平天井	100	60	70					56	

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長
97	深貴里154号墳				無袖	300	200	80	75	
98	155号墳				片袖	330	220	110	75	
99	156号墳				片袖	440	290	180	100	
100	157号墳				片袖	420	200	160		
101	190号墳				片袖	303	198	122		
102	南波洞30号墳			時中郡魯南里南波洞	両袖	370	200	164	164	
103	31号墳				左片袖	342	188	116	114	
104	80号墳北室				右片袖	330	180	108		
	中央室				左片袖	460	234	160		
	南室				左片袖	350	188	144		
105	88号墳				右片袖	400	226	134		
106	96号墳				両袖	288	200	124	106	
107	99号墳北室				左片袖	376	190	96		
	南室				右片袖	376	160	162	156	
108	114号墳				左片袖	440	210	162	124	
109	119号墳				左片袖	395	200	120	90	
110	125号墳				両袖	424	210	154	174	
111	127号墳北室				左片袖	410	180	100	90	
	南室				右片袖	410	180	100	104	
112	130号墳				両袖	390	240	180	70	
113	131号墳				両袖	420	218	184	170	
114	140号墳				両袖	645	260	230	220	
115	間坪10号墳			魯南里間坪	両袖	500	290	230	190	
116	27号墳北室				右片袖	368	200	114		
	南室				左片袖	310	220	150		
117	豊清里19号墳			時中郡豊清里	左片袖	400	238	220	150	
118	延山里1-1号墳						250	234		
119	1-2号墳北室				無袖	400	400	100		
	南室									
120	龍湖洞2号墳			平安北道雲山郡	両袖	569	336	333	371	91
121	天王地神塚		○	順川郡北倉里	両袖	466	314	283	321	100
122	東岩里古墳		○	順川郡東岩里	両袖	641	362	345	300	132
123	遼東城塚		○	順川郡龍鳳里						
124	高山洞1号墳		○	平壤市大聖区域高山洞	両袖	1020	338	338	153	45
125	6号墳					553	280	247		
126	7号墳(植物園9)		○		両袖	593	351	359	247	88
126	8号墳東石室				両袖	382	303	245	212	
	西石室					473	270	221		
127	9号墳		○		両袖	465	347	339	164	94
128	10号墳(植物園10)				両袖		310	312	120	69

甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 /玄室長	玄室高 /天井高
		平天井	100	80	70					40	
		平天井	110	85						50	
		平天井	150	100	90					62	
		平天井	220	110	100					80	
			105	51						62	
		平天井	170	60	80					54	67
		平天井	154	78						62	
			160	64						60	
			226	70						68	
			162	58						77	
			174	80						59	
		三角	88	104						62	
			186	68						51	
			216	90						101	
			230	100	96					77	
			195	80						60	
		平天井	214	78						73	
			230	76						56	
			230	60						56	
			150	50						75	
			202	90						84	
		穹窿状	385	94	100					88	
		三角	210	80	70					79	
			168	70						57	
			168	90						68	
		平天井	162	95	60					92	
125	139	三角平行	233	140						99	32
100	136	平行、平行三角	152	108	137	664	156	276		90	47
						156	104	258			
						156	124	253			
107	117	三角 3 平行 2	279	122	196	223	376	289	平天井	95	31
						125	735	138			
102	133		276	152	108					92	
			273		170					88	
106	152	平行 1 三角 2	242	106	179	218	133	194		102	
			79	121						81	
			203	109						82	
259			118	138			601			98	
91						95	108			101	

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長
129	高山洞20号墳		○							
130	大城山 3号墳				右片袖	314	178	118	112	
131	4号墳				右片袖	334	200	140	116	
132	5号墳				右片袖	360	248	170	104	
133	植物園 3号墳				両袖		223	222	51	
134	植物園5-1号墳				右片袖	308	223	162	86	
135	5-2号墳				両袖	314	234	135	121	
136	植物園 6号墳				両袖	443	253	185		
137	7号墳				両袖	460	250	232		
138	8号墳				両袖	458	298	233	125	
139	11号墳				右片袖	340	260	194	82	
140	12号墳				右片袖	356	268	118	86	
141	13号墳				両袖	453	253	209	147	
142	14号墳				両袖	573	274	224	153	
143	15号墳		○		両袖		320	320	184	73
144	16号墳				両袖	578	267	230	135	133
145	19号墳				右片袖	280	230	190	50	
146	安鶴洞 1号墳			大聖区域安鶴洞	片袖	465	240	170	28	
147	2号墳				両袖	465	240	240	85	
148	3号墳				右片袖	490	270	212	45	
149	7号墳		○		両袖	298	188	175	80	
150	9号墳		○		両袖	443	286	205	212	
151	鎧馬塚		○	三石区域魯山洞	両袖	61	303	258	294	69
152	魯山里 1号墳		○		右片袖		270	204	200	
153	2号墳		○		両袖	404	266	227	215	
154	平壤駅前壁画墳		○	外城区域蓮花洞	両袖	866	346	380		126
155	内里 1号墳		○	三石区域魯山里	両袖		292	292	330	
156	2号墳				両袖	678	306	250	267	46
157	土浦里大塚			三石区域長寿院洞	両袖	876	279	252	376	70
158	土浦里南塚				両袖	491	278	274	280	55
159	土浦里 1号墳西室 東室				無袖	539	262	94	109	
					無袖	700	261	94	106	
160	2号墳				両袖	652	302	256	260	
161	3号墳				右片袖	446	210	146	181	
162	6号墳				両袖	497	288	203	230	69
163	南京里 1号墳		○	勝湖区域		596	310	250	270	
164	2号墳						280	250		
165	湖南里四神塚		○	三石区域湖南里	両袖	630	318	364	315	53
166	湖南里金絲塚				両袖	684	307	267	319	70
167	湖南里 1号墳				両袖	702	317	259	270	99
168	長山洞 1号墳		○	西城区域長山洞	両袖	563	307	256		
169	2号墳		○		両袖	553	297	235		

甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 /玄室長	玄室高 /天井高
		平天井	136	52	102						66
		平天井	134	70	100						70
		平天井	112	86	70						69
				85	22						100
			85	58	50						73
			80	70	65						58
			190	90							73
			210	89							93
			160	93	84						78
			80	114	86						75
		平天井	88	98	70						44
			200	82	131						83
			299	83	163						82
136						137	126	128			100
139	143		178	98	141						86
			50	120	70						83
		平天井		190	40						71
			225	90	85						100
		平天井	220	93	47						79
			110	70							93
		平行三角	157	108	98						72
83	146		238	102	150						85
			230	110	13						76
			138	78							85
98						283	309				110
				129	191						100
105	121	平行 2 三角 2	326	105	155						82
88	171	平行三角	527	98	180						90
36	132	平行三角	158	127	247						99
			277	115	160						36
			439	119	160						36
			350	130							85
		平行 1 三角 2	236	88							70
107	97	平行 2 三角 2	140	127	137						70
			286	123	194						81
		平行 3 三角 3									89
106	151	平行 2 三角 2	259	136	203						114
111	156	平行 2 三角 2	307	148	191						87
108	150		286	123	194						82
			256	113	27						83
											79

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長	
170	晚達面 1号墳			勝湖区域晚達里							
171	2号墳						631	273	230	311	
172	3号墳										
173	4号墳					左片袖					
174	5号墳東室						330	241	148	35	
	西室							173	132	82	
175	6号墳										
176	7号墳西室					左片袖	350	221	164	142	
	東室					左片袖	393	223	174	135	
177	8号墳西室						299	244	167	73	
	東室						351	227	152	112	
178	9号墳						393	223	151	94	
179	10号墳					右片袖	433	224	141	158	
180	11号墳						221	170	146	64	
181	12号墳						429	253	168	108	
182	13号墳					右片袖	480	250	164	139	
183	14号墳						469	242	189	125	
184	15号墳							213	129	71	
185	16号墳					390	233	168	115		
186	17号墳					363	206	136	109		
187	18号墳										
188	伝東明王陵		○	力浦区域戊辰里	兩袖	1190	414	421		28	
189	1号墳(旧4)		○			兩袖	618	304	253	250	
190	2号墳					兩袖	540	290	234	242	
191	3号墳					兩袖	571	296	239	255	
192	4号墳					兩袖	733	350	355	430	
193	5号墳					兩袖	614	329	262	315	
194	6号墳					兩袖	617	326	267	320	
195	7号墳					兩袖	689	307	263	260	
196	8号墳					兩袖	448	328	257		
197	9号墳(旧1)		○			兩袖	627	340	350	343	47
198	10号墳				右片袖	420	290	157			
199	16号墳(東室)				右片袖	425	245	120			
	(西室)				兩袖	436	241	120			
200	雪梅里11号墳				兩袖	499	286	321	284		
201	12号墳				兩袖	639	325	257	330		
202	13号墳				兩袖	605	322	259	271		
203	14号墳				右片袖	614	324	208	285		
204	15号墳				右片袖	586	334	220	320		
205	17号墳				右片袖	297	192	161			
206	18号墳				兩袖		188	102			
207	19号墳				右片袖	381	260	184			

甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 /玄室長	玄室高 /天井高
			358	91	182					84	
			89	85						61 76	
			129	82						74	
			151	90						78	
			55	86						68	
			124	82						67	
			170	70						68	
			209	76						63	
			51	57						86	
			176	83						66	
			230	97						66	
			227	83						78	
			157	83						61	
			157	77						72	
			157	77						66	
140	183		740	226						102	66
			315	120						83	33
			250	130	179					81	34
			275	135	188					81	34
			383	145	198					101	46
			285	145	199					80	43
			291	141	192					82	46
			382	137	213					86	34
			120	124	66					78	
130	160	平行3三角1	240	176	200					103	43
			130	133	67					54	
			180	97						49	
			195	107						50	
			213	151						112	42
			314	160	227					79	45
			283	136	196					80	40
			290	111	172					64	50
			252	113	181					66	48
			105	44	96					84	
										54	
			121	90						71	

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長
208	寺洞古墳			寺洞区域	両袖	368	271	218	268	45
209	祥原 1号墳			祥原郡		340	210	200		
210	2号墳					380	260	210		
211	3号墳					400	250	200		
212	牛山里 1号墳			南浦市南浦区域牛山里	両袖	467	255	220	280	73
213	2号墳				両袖	414	230	230		
214	3号墳		○		右片袖	473	236	150		
215	普林里大洞 4号墳				右片袖	429	261	217	235	
216	6号墳				左片袖		290	152		
					片袖?		273	213		
217	7号墳				右片袖	400	247	155	177	
218	8号墳				両袖	446	253	220	232	
219	13号墳				右片袖	372	153	159		
220	19号墳				左片袖	303	148	169		
221	21号墳				右片袖	323	104			
					右片袖	268				
222	牛洞第1古墳群 4号墳				左片袖	319	194	138		
223	5号墳				両袖	332	212	105		
224	牛洞 8号墳				両袖	268	114	58		
225	牛洞第2古墳群 1号墳				右片袖	352	137	153		
226	2号墳				右片袖	386	148	197		
227	徳興里古墳		○	南浦区域徳興里	両袖	600	328	327	290	118
228	龍鳳里古墳									
229	梅山里四神塚(狩獵塚)		○		右片袖	663	317	341	364	97
230	大安里 1号墳		○	大安市恩徳洞	両袖	417	332	328	384	134
231	水山里古墳		○	大安市水山里	両袖	770	320	32	410	
232	薬水里古墳		○	大安市薬水里		582	342	314	350	100
233	台城里 1号墳		○	大安市台城里	両袖		290	221	281	13
234	2号墳		○		右片袖	471	319	219		
235	蓮花塚		○		両袖	787	447	447	407	74
236	江西大墓		○	大安市三暮里	両袖	687	319	311	351	53
237	江西中墓		○		両袖	1070	323	310	252	57
238	江西小墓				両袖	627	340	350	343	47
239	保山里 1号墳		○	大安市保山洞			250	220		
240	宝山里古墳		○	大安市						
241	双楹塚		○	南浦市龍岡部	両袖	746	291	307	379	80
242	龍岡大塚(安城洞大塚)		○	龍岡部	両袖	477	392	385	441	125
243	黄山南麓三室塚東室			龍岡部	両袖	253	210	156		
	西室				両袖	264	203			
	中央室				両袖	253	196			
244	内洞第1古墳群 3号墳			龍岡部	右片袖	268	110	123		
245	秋洞 5号墳				左片袖	362	157	132		



甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 / 玄室長	玄室高 / 天井高
88	120	平行 3 三角 2	52		127					80	
			130						95		
			120	100	40			81			
			150	80	45			80			
78		平行 3 三角 2	139	98					97	48	
			184	90	139			96	27		
		平行 1 三角 2	237	65			96	38			
			168	89	99			83			
		三角 平行						52			
								78			
			平行	153	81	107		63			
			三角 平行	193	87	123		87			
				219	81	104		104			
				155	68			114			
			125	105					71		
			120	84				50			
			154	61	58			51			
			215	81	78			112			
			238	82				133			
			154	102	143	202	297	285	100	30	
			249	87	128				108		
			85		136	192	439	242	99	62	
450	160	180				100	27				
98	152	平行 1 三角 3	140	110	148	266	284	322	平行 1 三角 3	92	
	132		176				106	351		76	26
149	167	平行 3 三角 2	152	104						69	
	266		510	345	216	191	219	100	34		
109	97	三三平1三角2	315	170	170				97	48	
114	162	平行 2	690	172	219				96	27	
130	160	平行 3 三角 1	240	176	200				96	38	
175	199	平行 3 三角 2	375	136	199					105	
	125		184	85	175	191	165	520	98	35	
			43	109					74		
			61								
			57								
			158	71					112		
			205	98					84		

番号	古墳	積石	壁画	所在地	石室袖	全長	玄室長	玄室幅	玄室高	甬道長
246	雲龍里古墳		○	平安南道平原郡雲龍里	兩袖	619	244	305	240	
247	麻永里古墳		○	温泉郡麻永里						
248	星塚		○	温泉分新寧里	右片袖	299	236	198	272	63
249	龕神塚		○	温泉郡新寧里	兩袖	517	275	259	259	113
250	八清里古墳		○	大同郡八清里		627	252	252	215	
251	德花里 1号墳		○	大同郡德花里	兩袖	620	309	250	354	87
252	2号墳		○		兩袖	622	300	300	349	114
253	3号墳				無袖	241	241	78	105	
254	大宝面 1号墳			大同郡大宝山里						
255	2号墳				兩袖	762	298	251	285	70
256	3号墳				兩袖	536	309	182		
257	4号墳					744	327	295	273	91
258	5号墳					741	324	265		97
259	7号墳東室				兩袖	636	251	192	251	
	西室				兩袖	575	242	135	197	
260	大宝山古墳		○							
261	加長里古墳		○	平安南道甌山郡						
262	漢王墓			平城市慶新里	兩袖	878	337	345	346	54
263	地境洞			平城市地境洞	兩袖					
264	大青里古墳			黄北道雲波郡	右片袖	467	248	166	218	68
265	遂安 1号墳			遂安郡	右片袖	376	207	114	158	
266	安岳 1号墳		○	安岳郡五局里	兩袖	514	288	255	355	150
267	2号墳		○		兩袖	712	344	342	327	46
268	3号墳		○		兩袖	1200	332	380	183	
269	伏獅里古墳		○	安岳郡伏獅里	兩袖	518	350	360	320	76
270	坪井里古墳		○	安岳郡坪井里	右片袖					
271	月精里古墳		○	安岳郡月精里	兩袖式	538	275	250	214	48

甬道幅	甬道高	玄室天井構造	羨道長	羨道幅	羨道高	前室長	前室幅	前室高	前室天井	玄室幅 /玄室長	玄室高 /天井高
			375	106	102					125	36
75	102	平行 3 三角 2		79	80					84	
93	105	三角 2	129	89	113	158	226			94	
			135	100	145	165	252	170		100	
113	166		224	134	174					81	47
121	136		208	133	183					100	44
										32	
106	155	平行 2 三角 2	394	133	170					84	
			227	152						59	
121	158	平行 3 三角 2	326	163						90	
108	173	平行 2 三角 2	339	158	212					82	
102	167	平行 1 三角 2	385	102	233					76	27
94	139	平行 2	333		148					56	37
										88	
151	162		487	151	216	200	151			102	45
83	103		219	83	120					67	39
			169	60						55	
97	164									103	33
115	147		322	152	174					99	33
						273	488	262			
111	138	穹窿状	168	97						103	
88	153		215	119	188					91	32

付表2 陵山里型石室地名表

古墳	陵山里型	古墳名	所在地	類型	石室	玄室長	玄室幅	玄室高	壁高	天井幅	天井高
1		陵山里1号墳(東下塚)	忠清南道扶餘郡扶餘邑	平	491	327	152	195	195		
2		2号墳(中下塚)	"	トンネル形	587	321	198	215			
3	1	3号墳(西下塚)	"	平斜	459	288	125	152	125	85	31
4	2	4号墳(東上塚)	"	平斜	452	325	199	211	162	119	49
5	3	5号墳(中上塚)	"	平斜	424	299	136	158	121	84	38
6	4	6号墳(西上塚)	"	平斜							
7	5	7号墳	"	平斜	341	279	125	142	85	84	41
8	6	8号墳	"	平斜							
9	7	東1号墳	"	平斜	425	268	115	155	130	79	3
10	8	東2号墳	"	平斜	400	275	112	155			
11	9	東3号墳	"	平斜	320	250	118	140	102	73	32
12	10	東4号墳	"	平斜	577	300	173	200	131	86	46
13	11	東5号墳	"	平斜	400	280	118	142	113	58	26
14	12	樽床塚	"	平斜	317	245	118	122	88	82	43
15	13	所在古墳	" 県内面	平斜							
16	14	切石墳	"	平斜							
17		割石塚	"	持送平	327	267	129	129	100	103	29
18	15	県北里1号墳	扶餘邑	平斜	235	194	75	98	69	43	30
19	16	2号墳	"	平斜		217	125	118	87	78	29
20	17	亭岩里1号墳	"	平斜	357	257	103	125	107	70	27
21	18	45号墳	"	平斜	421	243	132	132	100	82	39
22	19	上錦里2号墳	扶餘邑	平斜垂1	320	242	123	105	84	66	27
23	20	塩倉里古墳	"	平斜							
24	21	新城里古墳	窺岩面	平斜	240	232	76	89	60	41	35
25	22	亭岩里49号墳	" 場岩面	平斜	219	187	100	103	75	47	32
26	23	50号墳	"	平斜		144	65	65	45	35	18
27	24	豆谷里1号墳	林川面	平斜	283	224	109	121	93	87	27
28	25	2号墳	"	平斜		208	73	64	64		
29	26	5号墳	"	平斜	275	222	107	108	70	77	37
30		6号墳	"	平	273	226	103	98	67	53	34
31	27	7号墳	"	平斜	336	234	104	102	71	83	28
32		8号墳	"	平?							
33		9号墳	"	平							
34		10号墳	"	平	328	250	110	118	118	101	0
35	28	九岩里古墳	利仁面	平斜	378	258	120	120		77	
36	29	太陽里古墳	" 九龍面	平斜	258	222	119	114	75	77	46
37	30	上黄里古墳	場岩面	平斜	293	265	95	180	72		
38	31	鴻淵里案山1号墳	玉山面	平斜			120	150	115	78	32
39	32	案山2号墳	"	平斜	354	216	140	133	95	95	44
40	33	加神里古墳	林川面	平斜		134	123	134	100	74	34
41	34	荦岩里宝甲古墳	" 草村面	平斜	359	300	114	135	86	63	34
42	35	宝甲洞古墳	"	平斜			125	123	81	79	41

玄門長	玄門幅	玄門高	羨道長	羨道幅	羨道高	袖	玄室幅/玄室長	天井幅/玄室幅	天井高/玄室高	玄室幅/玄室高
			164	162	170	両袖	46	100	100	78
			266	107	116	両袖	62			92
25	86	109	128	112	120	両袖	43	66	20	82
25	100	122	102	108	111	両袖	61	60	23	94
25	92	101	100	108	111	両袖	45	62	24	86
13	79	85	49	98	98	両袖	45	67	29	88
40	79	95	112	100	119	両袖	41	72	15	74
			125	101			41			
13	83	83	51	87	98	両袖	47	61	23	84
37	100	126	240	120	143	右片袖	58	50	23	87
35	74	97	84	110	123	両袖	42	53	18	52
17	85	65	55	85	69	右片袖	48	69	35	97
			60	71	100	右片袖	48	80	22	100
10	65	63	40	75	66	両袖	39	57	31	77
							58	62	25	106
			100	81	80	両袖	40	68	22	82
21	71	71	157	115	85	両袖	54	62	30	100
			78	85		右片袖	51		26	
			8	68		両袖	33	54	39	85
32	68		53	70	55	無袖	53	47	31	97
	57					無袖	45	52	28	100
10	67	87	49	92	88	両袖	49	80	22	90
						右片袖	35			
12	64	64	41	80	71	両袖	48	72	34	99
10	67		37	74	73	両袖	46	73	35	105
11	64	59	91	58	71	両袖	44	79	27	102
	76	72	71	78	80	右片袖	44	92		93
					120		47	64		
8	65	67	8			両袖	54	68	40	104
			28	68		両袖	36			
			144	102	74	右片袖	65	65	21	80
							68	68	33	105
							81	69	25	79
11	63	57	59	79	57	右片袖	38	55	25	84
								63	33	102

古墳	陵山 里型	古墳名	所在地	類型	石室	玄室長	玄室幅	玄室高	壁高	天井幅	天井高
43	36	松鶴里1号墳	公州郡	平斜	320	234	130	130	90	70	31
44	37	陵峙古墳		平斜垂1		288	137				
45	38	松鶴里87-1号墳	灘川面	平斜	281	214	108	130	100	75	34
46		2号墳				260	130				
47	39	3号墳		平斜		196	100	100	72	69	34
48	40	4号墳		平斜垂1		215	82	88	50	46	30
49	41	5号墳		平斜垂1		220	82	84	65	59	25
50	42	6号墳		平斜垂1		228	80	80	72	67	15
51		7号墳		平		150	74	60	72		
52		9号墳		平		208	83	84	79	63	5
53		南山里1号墳	灘川面	竪穴式	246	160	72	96			
		2号墳		竪穴式		230	60	62			
54		3号墳		不明		250	92				
55		4号墳		不明		240	84				
56		星湖里1号墳	洪城郡結城面	持送平	357	265	140	132			
57		2号墳		持送平	320	240	140	128			
58	43	3号墳		平斜垂2	324	234	128	118			
59		4号墳		持送平		220	90	94			
60		5号墳		持送平		254	164	112			
61		6号墳		持送平	303	240	134	108			
62		7号墳		持送平	391	287	130	110			
63		8号墳		持送平	334	260	110	110			
64		9号墳		持送平		260	160	130			
65		10号墳		持送平		220	62	45			
66		11号墳		持送平		270	140	120			
67		12号墳		持送平	415	265	150	140			
68		13号墳		平		230	67	70			
69	44	庇仁面古墳	舒川郡	平斜	326	224	115	112	90	72	20
70	45	漆枝里3号墳	舒川郡	平斜垂1		208	114	111	80	70	36
71		六谷里1号墳	論山郡可也谷面	持送平	290	238	125	139	80	50	45
72	46	2号墳		平斜垂1	353	256	127	148	120	74	28
73	47	3号墳		平斜	293	242	128	140	100	86	41
74		4号墳		持送平							
75		5号墳		竪穴式							
76		6号墳		平	290	205	105	90	90	105	0
77	48	7号墳		平斜	341	240	165	170		106	46
78		8号墳		持送平							
79	49	9号墳		平斜垂2		225	95	120	90	65	49
80	50	10号墳		平斜	280	236	130	148	112	68	30
81	51	城南里1号墳	全羅北道益山郡	平斜	220	213	111	89	67	74	22
82	52	13号墳		平斜	241	231	123	126	82	87	44
83	53	源水里古墳	益山郡	平斜	338	257	141	133	101	105	32

玄門長	玄門幅	玄門高	羨道長	羨道幅	羨道高	袖	玄室幅/玄室長	天井幅/玄室幅	天井高/玄室高	玄室幅/玄室高
16	75	60	70	62	78	両袖	56	54	23	100
13	67	87	54	89		両袖	50	65	25	85
						両袖	50			
						両袖	50	73	32	100
						両袖	38	63	34	100
							37	73	30	98
						無袖	35	84	15	100
							49	83	100	123
			38				40	77	63	99
			92	78	70	両袖	53	64		106
			80	75	90	右片袖	58	70		109
			90	90	85	両袖	55	64	24	108
						無袖	41			96
						左片袖	65			146
			63	100	80	両袖	56	62		124
			104	96	82	両袖	45	78		118
			74	110	80	両袖	42	29		100
						左片袖	62	67		123
							28	103		138
							52			117
			150	80	140	左片袖	57			107
						無袖	58	94		96
8	84	86	94	90	92	片袖	51	63	18	103
20	58		62	74		両袖	55	61		
	73	75	68	88		90	両袖	53	40	
25	70	70	72	85		90	両袖	50	58	20
16			35			100	両袖		53	67
25	75	65	60	95	86	両袖	51	100		
26	79	79	75	100	95	両袖	69	64		
							69	64		
	70		55	85	90	右片袖	42	68		
34	102				37	両袖	55	52		
7	67	59		83		両袖	52	67	25	125
10	92	69		113		両袖	53	71	35	98
11	81	84	70	97		両袖	55	74	24	106

古墳	陵山 里型	古墳名	所在地	類型	石室	玄室長	玄室幅	玄室高	壁高	天井幅	天井高
84	54	将相里ソジ古墳	沃溝郡	平斜垂2	428	268	143	131	103	63	28
85	55	軍屯古墳	沃溝郡	平斜垂1	424	283	133	130	85	68	45
86		堤内里1号墳	鳳東郡	平	269	256	124	124	124	122	
87	56	2号墳		平斜							
88	57	平和洞1号墳	全州市	平斜	265	205	110	133			
89	58	3号墳		平斜垂1	404	178	100				
90	59	5号墳		平斜	290	230	120	132			
91	60	6号墳		平斜	256	206	104	110			
92	61	長興里1号墳	金堤郡	平斜		248	114	118			
93	62	4号墳		平斜		125	132	132			
94	63	孔德里古墳		平斜	243	228	100	118	87	67	31
95	64	屯山里古墳	完州郡鳳東邑	平斜	318	251	126	148	110	78	38
96	65	益山大墓	益山郡石旌里	平斜	474	380	178	227	169	124	58
97	66	益山小墓		平斜	390	320	130	170			
98	67	隱仙里A号墳	井邑永元面	平斜	272	224	100	119	94	80	25
99		B号墳		?		225	125				
100	68	C号墳		平斜		253	119	135	103	86	32
101	69	D号墳		平斜	334	260	116	113	71	96	42
102		E号墳		持送平	368	244	164	166	85	68	166
103		N号墳		持送平	408	273	190	163	95	110	163
104	70	P号墳		平斜垂1	473	270	133	147	89	96	58
105	71	H号墳		平斜垂2	253	240	141	99		92	
106	72	道昌里古墳	全羅南道新安郡長山島	平斜	420	258	178	167	130	82	37
107	73	漆枝里14号墳	舒川郡	平斜垂1	339	209	100	90	76	73	14
108	74	石溪3号古墳	咸平郡月溪里	平斜垂1	365	245	119	106			



玄門長	玄門幅	玄門高	羨道長	羨道幅	羨道高	袖	玄室幅/玄室長	天井幅/玄室幅	天井高/玄室高	玄室幅/玄室高
13	74	74	160	74	74	右片袖	53	44	21	109
	76	68	141	76	68	右片袖 両袖	47	51	35	102
15	69	80	60	115	133	両袖	67	63	26	85
			48	94	70	両袖				
			60	182	132	両袖				
			50	125	110	両袖				
			67	70	両袖					
			80	77	両袖					
15	76	86	52	91	108	両袖	50	62	26	85
25	102	151	69	125	166	両袖	47	70	26	78
12	74	84	36	100	84	両袖	45	80	21	84
						両袖				
14	68	71	54	116	71	両袖	67	41	49	41
			124	75	85	右片袖				
			135	90	右片袖					
22	13		181	133	89	両袖	49	72	39	90
			122		両袖					
10	64	64	87	96	両袖	49	73	22	107	
			120	100	75					両袖
			120	98	50		49	72		

Appearance and Development of Mounded Tombs with Corridor-style  
Stone Chambers in the Samguk Period in Korea

AZUMA Ushio

The author makes clear to some extent questions regarding political areas of Koguryō, Paekche, Silla, and Kaya, through an overview of the process of the establishment and the development of mounded tombs with corridor-style chambers in the four countries, from the aspects of time and area. As a basic undertaking, he arranges in chronological order the corridor-style stone chambers scattered throughout the Korean Peninsular, establishing the Pyongyang-style and Nungsanni-style stone chambers for Paekche, and the Chunghyongni-style stone chambers for Silla. Understanding of the structure of stone chambers and their distribution makes it clear that these stone chambers had a political character.

The Pyongyang-style stone chambers were standardized in structure and scale, from which the difference in the status and the class of the buried persons can be imagined. These are extensively distributed in the Kingdom of Koguryō, and are attributed to the ruling class (royal family and government officials). Through the chronological arrangement of Kofun and with consideration of the structure and scale of mounds, the layout of funeral lands, and posthumous names, the author compares stone chambers of the same period and identifies the mounded tombs of kings. In particular, he identifies the grave of Changsuwang as the Kan'ōbo Grave, and that of Yangwonwan as the Honamni Shishinzuka (Four-God Mound).

The author proves that the structural characteristics and distribution of the Songsanni-style and Nungsanni-style stone chambers in Paekche suggest the relationship of political areas in the country, and that they were connected with a system of rule, called the "Gobu Gohō System".

For the corridor-style stone chambers in Kaya, the author focuses on the questions of their spread and lineage, and supposes that they were introduced from Paekche in the Ungjin and Sabi Castle Periods. Results of recent excavations have made it clear that the corridor-style stone chambers first appeared in the early 6th century on the reaches of the Naktonggang River, where the stone chambers of this style developed in the latter 6th century onward, after the fall of Kaya.

The establishment of the corridor-style stone chambers in Silla meant the end of the traditional grave system with piles of stones and a timber compartment protecting the coffin. Changes in Silla's national system can be found behind this. The author also suggests that mounded tombs with corridor-style stone chambers, such as the Chunghyongni style, developed in the territory ruled by Silla after Chinungwang in the mid-6th century. The stone chambers of the Kings' mausolea in the Unified Silla Period are presumed to have had a vault-type ceiling. The author also takes a general view of the corridor-style stone chambers around the Sobek Mountains and Eastern Coast with regard to their relationship with Silla.